あの作品のif（R18）が見たい！

Recent

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【注意】

タイトル、あらすじを更新しました。

最新話にはタイトルの横にＮＥＷが付きます

お気に入りの作品のＲ１８なシーンを書きたい。

そんな衝動に任せて作った作品を順次置いていこうと思います。

取り敢えずそれぞれの章の説明は以下に。

～乙女ゲームの世界はモブに厳しい世界、でもない？（乙女ゲームの世界はモブに厳しい世界です）～

外道騎士リオンのそのあまり忠実じゃない相棒ルクシオン。

ルクシオンが調査中に見つけたとある映像資料が、リオンにもたらすのは混乱か、それとも祝福か？

クラリス先輩のあられのないシーンを貴方に。

様々なヒロインの様々なシチュエーションも追加予定です。

～性欲旺盛カンピオーネ！（カンピオーネ！）～

もし草薙護堂の性欲がもう少しだけ強かったら？

～ホグワーツ異聞録～

魔法の道具で齎される様々なハプニングがハリーを襲う！

～ＰＣ版鵺の陰陽師　敗北シーン集～

少年ジャンプで連載中の鵺の陰陽師。〝知らないギャルゲのコミカライズ〟という的確過ぎる例えと、水着回の素晴らしさに脳を焼かれた幻妖（作者）が、原作（捏造）のＰＣゲーム（Ｒ１８）の敗北シー

ンを再現しました。

目　次

乙女ゲー世界はモブに厳しい世界、でもない？
もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら①（クラリス先輩編）―――1
もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら②（クラリス先輩編）―――8
もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら③（クラリス先輩編）―――15
もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら④（クラリス先輩編）―――20
もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら⑤（クラリス先輩編）―――26
盗撮機能を悪用する人工知能①（ドロテア編）―――33
共和国完全勝利ルート（アンジェ競売編）―――41
共和国完全勝利ルート（ミレーヌ様競売編）―――49
共和国完全勝利ルート（ヘルトルーデ競売編）―――56
共和国完全勝利ルート（三美姫恥辱編）―――63
共和国完全勝利ルート（ヘルトルーデ妊娠編）―――72
共和国完全勝利ルート（クラリス落札編）―――88
もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら　番外編（クラリス先輩編）―――92
乙女ゲームの世界はモブに優しい？①（リビア＆アンジェ編）―――101
乙女ゲームの世界はモブに優しい？②（アンジェ＆リビア編）―――108

乙女ゲームの世界はモブに優しい③（アンジェ＆リビア編）
114
神聖王国大勝利ルート（ドロテア輪姦・純愛？）――121
神聖王国大勝利ルート②（ディアドリー屈辱編）――127
神聖王国大勝利ルート（ディアドリー処女喪失編）――132
神聖王国大勝利ルート（クラリスオナニー編　前編）――144
神聖王国大勝利ルート（クラリスオナニー編　後編）――149
ヘルトルーデの冒険（R―18版）　前編――154
ヘルトルーデの冒険（R―18版）中編――157
ヘルトルーデの冒険（R―18版）後編――165
メイドのお仕事？（ユメリア編）――178
王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル）――183
王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル編）②――192
王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル編）③――198
王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル編）④――202
王国敗北ルート　ヘルトルーデの恥辱①――209
王国敗北ルート　ヘルトルーデの恥辱②――215
性欲旺盛カンピオーネ！
もしも草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）――223
もしも草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）②
226
もし草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）③――231
もし草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）④――237
黒王子アレクがもう少し押しに弱かったら①――240
黒王子アレクがもう少し押しに弱かったら②――244

黒王子アレクがもう少し押しに弱かったら③ ―――― 250
ホグワーツ異聞録
ハリー・ポッターとブラックサンタ　前編（ハーマイオニー　ntr？） ―――― 253
ハリー・ポッターとブラックサンタ　後編（ハーマイオニーntr） ―――― 260
ＰＣ版鵺の陰陽師　敗北シーン集
特訓敗北①　メスガキＪＣ触手責め　序 ―――― 266
特訓敗北②　メスガキＪＣ触手責め　破 ―――― 271
特訓敗北③　メスガキＪＣ触手責め　Ｑ ―――― 276

乙女ゲー世界はモブに厳しい世界、でもない？もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら①（クラリス先輩編）

それは反乱騒動が沈静化して、正式に女子生徒達の奴隷所有が禁止されて暫く経った頃の事だった。

ルクシオンから相談がある、と夜中に俺の部屋に現れたルクシオンは言った。

「こちらは、解雇された奴隷から押収された映像資料です」

「映像資料？おいおい、こファンタジー世界にそんな機械的なもんが存在すんのか？」

初めは懐疑的だったが、ルクシオンが言うにはどうやら遺跡からの発掘品だったらしい。相応に希少なものなのだが、どうやら奴隷達の伝手で一部のグループに共有されていたらしい。

「で、何が問題なんだよ」

「はい、どうやらこの映像資料の中身は、奴隷を雇用していた貴族女性、特に学園女子達と奴隷とのＳＥＸ動画のようなのです」

…はい？

一瞬脳が拒否しかけた。何、つまりこの世界のいわばＡＶ動画ということか。

「おや、興味がおありで？」

「う、うるせぇ。文句あるか！俺だって男だ！そういうものに興味がないわけ無いだろう！」

そう言うとルクシオンの奴はこちらに聞こえるように

「だったらさっさとリビアとアンジェに手を出せばいいものを」

と言い出した。

うるせえ、それはそれだろ！

「それに、奴隷を囲んでたような奴らだろ～。顔も体も正直リビア達と比べものにならないし、キョーミでねーな。

流石に変な噂がたたない内に処分しとけよー」
そう言って話を終わらせようとしたところ…
「おや、そうなのですか。ではこのクラリスの動画も処分して」
「ちょっとまて！」
聞き捨てならない言葉を聞いた。
え、まじで!?あのクラリス先輩が!?
ちょっと不良っぽいけど元々は清楚系のお嬢様だったクラリス先輩がそんなビデオを!?
どうやら合意のもととかではなく、隠し撮りした映像を、脅したり売りさばいたりして儲けていたグループらしい。そしてクラリス先輩も知らないうちにそういう動画を撮られていた、と。
まだ出回る前に回収できたから良かったものの、下手すると大変なことになってたな。
「お手柄だなルクシオン、さっさとそれを処分し…」
「おや、ご覧にならないのですか？マスターの好みにかなり合う方ですし、映像を見るだけなら不貞にならないのでは？」

とんでもないことを言い出したルクシオンを叱りつける、つもりだったのに、気がついたら資料に手が伸びていた。
ルクシオンに、暫く誰も部屋に入れるなと厳命し、映像を再生する…

何処かの部屋。おそらくホテルの一室か。
大型ベットに、細身だが筋肉質の獣人と、バスローブ姿のクラリス先輩が座っている。
どうやら音声までは再生出来ないようだ。
画像もやや荒いが、髪を下ろした先輩はシャワーを浴びた後なのか髪がしっとりと濡れている。そして緊張している先輩の肩を抱いた獣人奴隷が、先輩に口づけする。初めは軽く触れるようなキスだったが、段々と激しく、ディープな物になっていく。

先輩の反応は初々しく、こんな行為に明らかに慣れていないようだ。だが、初めは苦しそうだった目は次第にトロンとした目になり、頬も上気し明らかに女の反応をしている。

正直、ここまで見るだけでも背徳感が凄まじいが、股間は正直だ。ズボンの中で痛いくらいに勃起している。

映像の中の先輩はついにバスローブをはだけた。細身に見えて、かなりボリュームのある胸が露わになる。その上に、綺麗なピンク色の乳首が乗っている。荒い画像だが、明らかに勃っているのがわかる。獣人が手慣れた手付きで先輩の胸を弄ぶ。獣人のゴツゴツした手で自在に形を変える胸、更に指先でいじられる、彼女の見た目通り清楚な乳首。音声は無いが、声が漏れたのだろう。先輩は口に手をやって恥ずかしそうにしている。

その反応に気を良くしたのか、獣人はとうとう先輩をベットに押し倒し、先輩のバスローブを剥ぎ取る。

先輩の体は、細身だが出るところは出ている。胸は十分巨乳で、若さのおかげか張りもあり、仰向けになっても形が崩れず上を向いている。

腰はくびれ無駄な贅肉のない腹に、かわいいへそが見える。

そしてカメラが徐々に彼女の、最も隠された部分を大きく映し出す。

先輩の股間は、その清楚な見た目に反して、濃い目の陰毛に覆われている。はみ出さないように処理はしているようだが、先輩の陰部から漏れた愛液でべっとりと濡れた黒黒とした陰毛は、彼女の陰唇から、おそらく肛門近くまでをしっかりと覆っている。

恥ずかしそうに股間を隠そうとする先輩の手は、獣人に掴まれ、頭の上でベットの柵に縛られてしまった。閉じようとするほっそりした、だが十分に脂の載った脚は、獣人の手によって大きく開かれる。

音声は無いが、恥ずかしがっているのだろう。顔を真っ赤にして何かを言っている。だが、獣人の顔が股間に近づき、獣人の舌が彼女の陰部を舐めると、彼女の腰が跳ねた。おそらくクリトリスを舐められたのだろうか。ガクガク震えるくびれた腰を掴まれ、股間を責められ

た先輩は、明らかに善がっていた。
唾を飲み込む。正直、あれだけ美人でプライドが高そうな先輩がクンニでヨガっているというだけで、射精しそうだ。知り合いの情事に罪悪感は覚えるが…。
おそらく舌でイかされたのだろう。脱力し、口からよだれが垂れている先輩に、獣人が口づけする。初めは嫌そうにしていた先輩も、少しすると自分から舌を絡めるような仕草をしている。
おもむろに獣人も服を脱ぎだす。
奴隷として見栄えを良くするためなのか、細身だが筋肉質の肉体。そして股間に見える、太く立派なイチモツ。
そのイチモツを、獣人はあろうことが先輩の顔に近づける。だが、顔を火照らせた先輩は、あろうことか嫌がるどころかそのイチモツに口づけした。
学園祭で俺やジルクを罵倒したり、事件が解決したとき俺に頭を下げて謝罪した、その口で。
先輩の美唇が、獣人のイチモツに触れる。初めは啄むようなキスだけだったが、獣人に何かを言われたのか舌を出して亀頭を舐め始めた。行為は次第にエスカレートし、亀頭からカリ、そして幹の部分を丁寧に舐めていく。
手は拘束されているので、舌を突き出すような、清楚な見た目の先輩からは想像できないような卑猥な顔つきで獣人の雄の象徴を舐めあげていく。
更には、大きく口を開けた先輩は、獣人が突き出したイチモツを口に咥えた。先輩には大きすぎるのか根本までは加えられないが、一度半ば以上まで口に収め、そこからカリまでを舐めあげていく。少なくともこのときはフェラの経験はまだあまりないのか、動きは単調だが、先輩の美唇が形を歪めながら獣人のイチモツを行ったり来たりするだけで、鼻血が出そうなほど卑猥だった。
どうやら我慢の限界が来たのか、獣人が先輩の頭を掴み、イチモツを先輩の口の奥までつき込む。先輩は目を丸くし苦しそうにしている。おそらく射精したのだろう。獣人の腰が震え、イチモツを先輩の

口から抜いた。先輩の唾液と、奴の出した精液がアーチを作る。
先輩の口には獣人の出した白濁液が溜まっている。先輩は苦しそうにしながらも一度口を閉じた。まさか…!?
音は聞こえないが、先輩の喉の動きから、おそらく出された精液を飲み込んだようだ。口を大きく開けた先輩の口に、白濁液は残っていなかった。
ここ辺りで我慢がきかなくなり、俺もイチモツをしごき始めた。
映像の中の清楚な先輩が、既に精飲をするほど調教されている事実だけで射精ものだった。
口から垂れた精液をそのままに、ついに獣人のイチモツが先輩の股間へ迫る。おそらく既に何度も抱かれているであろう先輩のオマンコは、だがそう言われなければ分からない位にぴっちりと閉じている。だがおそらくここまでの行為で大量に溢れた愛液で、濃い目の陰毛がびしょびしょに濡れて、土手高な彼女の肉土手に張り付いている。
獣人のイチモツが、先輩の女性器に宛てがわれる。そして何の抵抗もなく、先輩のオマンコは獣人のイチモツを受け入れる。

「おや、どうやらいいところたったようですね」
突然ルクシオンが話しかけてきて、心臓が止まるかと思った。こいつ、一番いいところで。
「実はマスターに朗報です。先程色々と映像資料を解析して、唇の動きや表情、更に私が集めた音声データを用いて、音声を再生可能になりました」
やはりこいつは最高の相棒だ！
早速、その機能を搭載して続きから再生する。
「く、やはりまだまだ狭いですね、お嬢様。だが、前戯とフェラでここまで濡れるとは、なかなか淫乱ですね」
「っ言わないで」
獣人の言葉に、クラリス先輩がか細く答える。
おい、この声、俺の声じゃねーか！

「サービスです。お好きでしょう?」
いや、確かに興奮するけど。というか出てけ!
「ん、うぅ」
「乳首が勃っていますよ。」
オマンコにイチモツを根本までは挿入された上で、コリコリと乳首を責められた声を漏らす先輩。必死に耐えているようだが、上気して、ピンク色になった肌と尖りきった乳首とクリトリスが、彼女の興奮を伝えている。
「そろそろ動きますよ!」
「あん、だめっ!」
十分先輩の腟内がほぐれたと判断したのだろう。先輩の腰を掴んだ獣人がピストンを開始する。
湿った肉がぶつかり合う音が聞こえる。先輩は必死に声を抑えようとしているようだが、むしろくぐもった喘ぎ声はこちらの興奮を誘う。更に、ピストンされるごとに揺れる豊かな胸が、より興奮を誘ったのだろうか。獣人が先輩の乳首を口に含む。
「あん!」
不意打ちだったのだろう。甲高い喘ぎ声をあげて先輩が善がる。
左右の乳首を交互に舐られ、更にオマンコも獣人の太く長い一物で子宮口まで蹂躙されている。
いつしか声を抑えることも忘れ甲高く喘ぐ先輩。その美脚は自然と獣人の逞しい腰に巻き付き、次第に自分から腰を振るようになる。
「く、お嬢様!もう射精しますよ!」
「いいわ、きて、ジルク!」
どうやらお嬢様、婚約者に抱かれるイメージプレイをしていたようだ。なかなか業が深いというか、傷が深いな。
「出して、中に出してジルク」
「ええ、出しますよ、お嬢様!」
獣人もラストスパートに入る。ピストンの回転数が上がり、結合部から白く泡立った愛液が洪水のように溢れてくる。先輩の美脚は獣人の腰に絡みつき、獣人のイチモツが根本まで先輩のオマンコに突き

込まれる。
「ん～～～!!」
先輩がイッたのだろう。先輩の腰が震える、先輩の白い喉がのけ反る。
少し遅れて獣人の腰も震える、結合部から、愛液とは異なる白濁液が溢れてくる。
「はぁ、はぁ、っあん!」
イチモツが先輩の膣内から抜き取られる。愛液でテカテカになった、半ば萎えたイチモツが抜かれると、ぱっくり開いた女陰と、そこから溢れてくる愛液と精液の混合液が映し出された。
「舐めろ」
絶頂した後の、半ば放心状態の先輩の顔の前に、半ば萎えたイチモツが突き出される。目をトロンとさせた先輩は、先程のように嫌がる素振りを見せず、自らの愛液と、獣人の精液で汚れたイチモツを、舌で清めていく。
幹の精液を舐めとり、更に亀頭をミルクを吸うように吸い上げ、残った精液を吸い取った先輩は、美味しそうにそれを飲み込んだ。
ここで映像は終わった。
俺もかなりの量のティッシュを消費してしまった。片付けどうしよう?
「因みに、映像はあと5本ほどありますが、どうしますか?」
…残りは明日にしよう。

もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら②（クラリス先輩編）

翌日夜、部屋を締め切り、用事があるからとリビアとアンジェに断り、準備を整えた俺は早速【上映会】を開始した。
「物好きな」
「うるせ、こっちは欲求不満なんだよ」
「リビアとアンジェが」
「それとこれはべーつー！」
煩い奴を黙らせ、映像を用意させる。
今回は初めから音声付きだ。
起動した映像に、部屋が映る。
前回と同様、どこかのホテルの一室。今回は学園の制服を着た先輩が入口近くに立っている。今の制服を着崩した不良じみた格好ではなく、清楚な貴族令嬢に相応しく、しっかりと着こなした格好だ。
だが顔はやや赤い。それに何やらモジモジとしているような…？
前回とは異なる獣人が先輩に話しかける。
「ではお嬢様、早速服を脱いで下さい。さっき言った通り、私は一切手をだましません」
「ええ、わかってるわ」
そう言って、先輩は徐ろに服を脱ぎだす。制服のブレザーをぬぎ、リボンを外す。一枚ずつ、まるでプレゼントの包装を剥がすように。
「流石は大貴族のお嬢様、立派なモノをお持ちだ」
「っ…」
制服のブラウスを押し上げる先輩の豊かな胸に、獣人の視線が引き寄せられる。ボタンを一つづつ外し、次第に先輩の谷間が露わになる。下着は流石お金持ちの貴族令嬢だけあり、高級そうなレース、色は青。
ブラウスを脱ぎ、上半身が青いブラ一枚になった先輩は、不安そうに腕で胸を隠そうとする。

「隠してはいけませんよ、お嬢様。さあ、次は下です」
「え、ええ。分かってるわよ」
正直、あのプライドの高そうなお嬢様がこんな風に命令に従順になってるだけでクるものがある。先輩の後ろに控えてニヤニヤしてたあいつ等(獣人たち)、いい趣味してやがる。もっとボコっておけばよかったぜ。
先輩がスカートのホックに手をかける。流石に恥ずかしそうに後ろを向く。獣人は何も言わない。
背中を向けスカートのホックを外した先輩は、スカートを足元に落とす。ブラとおそろいの青いレース生地のパンツに覆われた、むっちりしたおしりと、ほっそりした、それでいて下品にならない程度に脂の乗った美脚が露わになる。
「さあ、では前を向いて」
「…はい、ジルク」
…またイメージプレイしてたのか。いや、前回と時系列分からないけど、もしかしていつもやってるのか?
先輩のこじらせ具合に、むしろ興奮しつつ、正面を向いた先輩の下着姿を鑑賞する。
腕で胸と股間を隠そうとしているが、それが逆に卑猥に見えることに、画面の中の先輩は気がついていない。
「さあ、腕をどけて」
獣人の言葉で、胸と股間を隠していた腕をどける先輩。
生地の薄いレースのブラには、薄っすらと先輩の清楚なピンク色の乳首が浮き上がっている。こうして見られるだけで、興奮しているようだ。
そしてブラと同様、薄いレースのパンツの股間部分。先輩の清楚な見た目にそぐわない、黒々とした陰毛がレース越しに見える。青いレース生地に浮き上がる陰毛は、きちんと処理しているのかはみ出してはいないが、その分更に卑猥に見える。
「さあ、次は下着ですよ」
獣人もやや興奮を隠せないのか先輩を急かす。

先輩もその白い肌を羞恥でピンク色に染めながら、ブラのホックに手をかける。フロントホックのブラを外すと、下着の締め付けから開放された胸が露わになる。若さゆえか張りがあり、ブラの支えがなくても垂れてこない豊かな胸と、その頂上にツンと勃ったピンク色の乳首。

恥ずかしそうに隠そうとするが、獣人の命令を思い出したのか、隠さずに胸を張る先輩。プルンと揺れた胸を少し恥ずかしそうに曝け出した。

「さあでは、最後の一枚を」

唾を飲み込んだ先輩は覚悟を決めたように、パンツに手をかける。前かがみになり、その谷間を強調するような格好で、パンツを引き降ろす。遠目で見えにくいが、股間とレースの下着の間に、糸を引いているように見えた。

パンツを両脚から引き抜き、ついに生まれたばかりの姿になる先輩。モジモジと恥ずかしそうにしているが、命令のせいか恥ずかしいところを隠そうとはしない。

「相変わらず、いやらしい陰毛ですね」

「あ、貴方達が剃るなと言ったでしょう!」

「もともとほとんど手入れをしていなかったでしょう。寧ろ形を整えるように指摘して差し上げたじゃないですか」

どうやら先輩のアンダーヘアはかなり濃かったらしい。正直今の整えられた股間もいいが、清楚なお嬢様の手入れされていない密林も興奮するな…。

真赤になりながら反論する先輩に対して、獣人が次の命令を伝える。

「さあ、ではそこの壁に手をついて、腰をこちらに突き出して下さい」

「わ、わかったわよ」

命令に従い、壁に手をついて腰を突き出す先輩。正直、あの俺に厳しい眼を向けてきた先輩が、こんな格好をしていたことに、興奮を覚える。

腰を突き出した先輩の股間には、まだ触られてもいないのに汁が伝っている。
「興奮しているようですね、お嬢様。さあ、もっと脚を拡げて」
獣人の言葉に恥ずかしそうにしながら、従順に脚を広げる先輩。
カメラがアップになり、先輩の濃い陰毛われた陰唇と、もう一つの色素の沈着した不浄の穴。貴族として、いや女性として最も隠しておきたい部分を晒した先輩は、羞恥心でその白い肌をピンク色に染めている。
「さあ、広げて見せて下さい」
獣人の興奮を孕んだ無慈悲な命令が下る。
「はい、ジルク…っ」
左手を壁についたまま、右手で自らの女陰をくつろげる。黒々とした陰毛で覆われた女陰の中は、その卑猥な見た目に反して綺麗なピンク色だった。おそらく処女を失ってからそれほど時間はたっていないためだろう。色素の沈着も殆どない。
だが、その拡げられた雌穴からはとろりとした愛液が溢れ、先輩の太腿を伝っている。
「ふっくく、触られても無いのにそんなに涎を垂らすとは、なかなか淫乱ですねお嬢様。」
「し、仕方ないじゃない！こんな格好までさせられて焦らされるんだもの…」
獣人の煽りに、先輩が媚びたような声で反論する。
獣人の視線で感じているのか次第に溢れる愛液が増え、可愛らしいおしりの穴もヒクヒク動いている。
「尻穴が物欲しそうに動いていますよ」
「い、言わないで…！」
自覚はあるのだろう。力なく反論する先輩は羞恥で耳まで赤く染めている。
ここで獣人がようやく先輩に近づく。振り向いた先輩の目が期待に染まるのが見て取れた。
「あんんっ」

いきなり膣口に人差し指を挿れられ、たまらず喘ぐ先輩。膝がガクガク震え、愛液がポタポタと、床へと垂れる。更に愛液に塗れた指で、先輩の肛門の周囲を、解すかのように撫でる。
「キャ、そ、そこはダメ！」
「その割にはこの穴は嬉しそうにヒクヒクしていますよ。」
お尻の穴を弄ばれる先輩は、先程にも増して余裕のない表情で喘ぐ。足に力が入らないのか両手で壁に手を付き、足もさっきよりもガクガクと震えている。
「では、そろそろこれを入れましょうか。」
「は、早く、挿れて…」
獣人が徐ろに自らのイチモツを取り出す。隆々に勃起したイチモツを、先輩のドロドロに濡れた雌穴へ宛てがう。
二、三度焦らすように雌穴を責めた後、一気に根本までは挿入する。
「あっっん～～!!」
先輩の白いお尻と、獣人の褐色の腰が密着する。
先輩は甲高い喘ぎ声と共に背中をのけ反らせる。挿れられただけで軽くイッたのだろう。
獣人は腰を密着させたまま、先輩の凝りきった乳首を責める。
「あ、あん。やめて！わたしイッたばっかりて…っ！」
敏感になっている先輩の乳首を攻めながら、更に先輩のうなじから耳裏までを舌で舐めあげていく。
膣内を逞しい怒張に占拠されたまま、性感帯を徹底的に責められヨガり、膝を震わせながら結合部からポタポタと愛液を床に垂れ流すクラリス先輩。その姿は、学園で見た制服を着崩し、ジルクやアンジェを睨めつけ罵倒したプライドの高い先輩とも、服を脱ぐ前の、清楚な貴族令嬢とも違う、淫乱な雌の姿だった。
「ハァ、ハァっ、またイクぅ!!」
「ハハ、凄い締め付けだ。流石は少し前まで処女だっただけのことはあるな！」
先輩が再び背中をのけ反らせ、再び絶頂する。獣人の言葉も聞こえ

ていないのか、絶頂の余韻で力が入らないのか壁に体をあずけながら荒い息を漏らす。
壁に先輩の豊満な胸が押し当てられ、胸が潰れているのがなんとも卑猥で味わい深い。
「お嬢様、私はまだ満足していませんよ？」
「あ、待って！こ、こんな格好恥ずかしっ…！」
しかし休むまもなく、先輩は膣穴にイチモツを入れられたまま、絨毯の敷かれた床に四つん這いにさせられる。貴族女性として屈辱ともいえる格好で、その白くむっちりした尻を、手の跡がつくほど強く掴まれる。
「私もそろそろ我慢の限界なので、激しくしますよ」
「あ、あん！壊れちゃう！奥をコツコツしないでぇっ！」
湿った肉がぶつかり合う音をＢＧＭに、先輩が今、自分の膣内がどのように雄に蹂躙されているのかを実況する。あのプライドの高いクラリス先輩の口からこんな言葉が聞けただけで、リスクをおかしてこれを確保した甲斐があったというものだ。
クラリス先輩の綺麗な髪が汗で背中に張り付く。髪を振り乱しながら喘ぐ先輩はそれをきすることなく、ただひたすら自らの膣内を犯される快感に酔っている。
何度も絶頂させられたのだろう、獣人のイチモツが結合部から抜き差しされる度に、ドロリとした愛液が掻き出される。
「出しますよ、お嬢様！」
「出して！沢山、私の中に！子宮の中まで犯して!!」
普段の先輩の口からは絶対に出ない淫蕩な台詞を叫びながら、中出しの快楽にふける二人。獣人の腰が震え、結合部から愛液とは違う白濁液が溢れてくる。
腰を先輩の尻に密着させ、最後の一滴まで先輩の奥に出し切った獣人が、その半ば萎えたイチモツを引き抜く。
床にうつ伏せに突っ伏しながら、その尻だけは高く掲げた先輩の膣口からは、愛液と精液のミックスされた液体が、ドロリと漏れている。
その姿だけで、一度射精した俺の息子が再び勃ち上がるほど卑猥

だった。
…ルクシオンに動画を画像として切り抜けるか聞いておくか。
ぐったりした先輩は、獣人の手でベットへ仰向けに寝かされた。獣人は、先輩の愛液でベトベトになったイチモツを、彼女の口へ持っていく。
「さあ、舐めてください」
「んチュ、アム…ん」
脱力し、力の入っていない先輩は、億劫そうに口を開け、半萎えのイチモツを口に咥える。チュウチュウと、尿道内に残った精液を吸い取り、最後に苦労して飲み込んだ。
「っ、ご、ご馳走さまでした」
恥ずかしそうに先輩がいったところで、映像は終わった。
…さて続きは明日だな。

もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら③（クラリス先輩編）

連日夜中に映像資料を鑑賞していて、そろそろアンジェやリビアに怪しまれそうだが、段々この映像資料を観るのがクセになってきている。

「マスター、流石に3日目だとそろそろ言い訳が難しくなってきましたが。」

「う、うるさいぞ。まだ大丈夫、だと思う」

口うるさい相棒を追い出し、映像資料を起動する。

今回の先輩は既に裸だった。

以前の二本の映像とような優等生で清楚な見た目の先輩ではなく、ジルクを罵倒し、最近は俺と偶にお茶会もするちょっと不良っぽい見た目の先輩だ。

そんな先輩が全裸で跪きながら、ベットに腰掛けた獣人のイチモツをしゃぶっていた。

「随分と上達しましたね、お嬢様。初めての頃はこれを見るだけでも恥ずかしがっていたのに」

「うるさいわね、誰のせいだと思ってるのよ…！」

口調だけは俺のよく知る先輩だ。だが顔を赤らめ、口から涎を垂らしながらでは迫力は無いし、何より惨めさと卑猥さが目立つだけだ。

「くっくく、口で一度抜いてくれないと挿れてあげませんと言われたときのお嬢様の反応は今思い出しても興奮しますね。」

「っ!!」

「必死におねだりして、股をビショビショにしながら涙を流して私のイチモツを舐めるお嬢様を見られるとは」

あの獣人たち、やっぱりいい趣味してるな。

…ちゃんと〝処分〟したのか後でルクシオンに確認しとこう。

「ほら、休んでいては何時までたっても挿れてあげませんよ？

さあ、今日は口だけじゃなくてそのおっぱいも使ってください」
先輩の顔が屈辱に歪む。だが、股間をモジモジさせていることから、既にかなり欲求不満になっているのだろう。
性欲に負けて獣人の命令に従った。
先輩の胸はリビアやアンジェほどの爆乳ではないが、細身な見た目に反して十分巨乳と言える大きさだ。形も良く、張りもあり、乳首も綺麗なピンク色だ。
そんな理想のおっぱいが、獣人のエラの張った剛直を挟み込む。
先輩のおっぱいに挟まれてなお、亀頭部分がはみ出している獣人のイチモツ。その先端に先輩は唾液を垂らす。
そして左右から自らの乳房を手で挟み、むにむにと獣人のイチモツに刺激を与える。更にカウパー液と先輩の涎で濡れた亀頭を、先輩の赤い舌先が刺激する。
「おおっ、いいですよお嬢様。次はその胸でしごいてください。」
「はぅ、調子に乗って…！」
上目遣いで獣人を睨みつけてながら、けれど先輩の体は従順に獣人の言葉に従う。その張りのあるおっぱいで獣人のイチモツを挟みながら、獣人の亀頭を口に咥える。そして頭を上下に動かし、口と胸を使って獣人のイチモツをしごく。
「うおっ、出しますよ！お嬢様！」
「うん～！」
頭を押さえつけられ逃げられたくされた状態で、獣人の濃い精液を口の中に流し込まれる先輩。
先輩の頬がリスのように膨らむ。
「溢したら今日は挿れてあげませんよ？」
そうやって先輩を調教していったのだろう。イチモツを先輩の口から抜いた獣人は先輩の弱みに付け込み精飲を強制する。
屈辱的な命令をされながらも、既に股間をびょびょにし、足元の絨毯に水たまりを作っている先輩は欲求に耐えられず、目元に薄っすら涙を浮かべながら獣人を睨めつけ、口の中に溜まった獣人の精液を飲み込む。

先輩の白い喉が動き、先輩の口の中にあった精液が無くなっていく。何度か苦しそうにしながらも、口を開けた先輩の口腔内に、精液は残っていなかった。

「さあ、では上に乗ってください」

獣人はベットに横になり、先輩に跨るように要求する。

先輩も最早我慢がきかないのだろう。憎まれ口を叩くこともなく従順に命令に従っている。

まさかあの女王様じみた風格を持つ先輩があのときにはここまで調教されていたとは…。ジルクの謝罪を受け入れたとき、あの獣人達がニヤニヤしていた訳がよく分かった。

下からのアングルで見る先輩の体は極上だった。

細身だが豊かで張りのあるおっぱいと、興奮で充血しているピンク色の乳首。無駄な贅肉のないくびれた腰。見た目に反して濃い陰毛と、その黒々とした毛に覆われながらぴっちりと閉じた、一見処女のように見える女陰。だが本来隠すべきその乙女の花園は、ドロドロと蜜を垂流し、蹂躙されるのを心待ちにしているようだった。

膝立ちになった先輩は、一度射精してもその硬さを失わない獣人の怒張を掴み、自身の膣口へ導いてゆく。

まだ挿入されていないのに、先輩の女陰から溢れた汁が獣人の怒張の先端にポタポタと垂れている。

頬を上気させ熱い吐息を漏らしながら、先輩が慎重に腰を下ろしてゆく。亀頭の先端が先輩の入口にクチュリと口づけした所で、先輩がゴクリと唾を飲み込む。先輩は一気に腰を落とし、獣人のイチモツが先輩の膣内を子宮口まで一気に蹂躙する。

「はあぁぁンっっ！」

先輩が甲高い喘ぎ声を漏らして背中を仰け反らせる。

入れただけで絶頂したようだ。

プシャっ、と先輩の股間が潮をふく。

先輩は口から涎をたらし、ヒクヒクと腰を痙攣させる。自分の体重を支えていられないのだろう。前に倒れ込みそうになるが、獣人が先輩のくびれた腰を掴む。

「まだまだ私は満足していませんよ?」
そう言って先輩の膣口を下から突き上げる。
イッたばかりで体に力の入らない先輩はされるがまま、獣人の逞しい剛直に翻弄される。
先輩のサラサラした髪が突き上げに合わせて乱れ、張りのあるおっぱいがたぷたぷと上下に揺れる。
「や、やめっ!そんな激しくされたら私壊れちゃうっ!!」
「さっきからあれだけ物欲しそうにしていたのに、この程度でギブアップですか?」
先輩の懇願を無視して、獣人はより激しく先輩の膣口を蹂躙する。結合部からイチモツが引き抜かれ、亀頭が見えるギリギリの所で、再び一番奥までつきこまれる。先輩のナカから溢れた愛液が先輩の濃い陰毛をベトベトにぬらし、陰毛が先輩の肉土手にベッタリと張り付いている。引き抜かれるたびにめくれ上がる女陰は、彼女の興奮を反映して充血している。
自身を貫く剛直に翻弄され、何度も絶頂させられた先輩はついに獣人の胸の中へ倒れ込む。先輩の胸は獣人の逞しい胸で潰され、その刺激がより一層、彼女の体を火照らせる。
汗にまみれた先輩の体を抱きしめた獣人は、その指を彼女の尻へと、さらにその間に息づくもう一つの穴へと伸ばす。
「や、やめて!そこはちがっ!!」
カメラのアングルが切り替わり、ズッポリとイチモツを奥までくわえ込んだ先輩の女陰と、ヒクヒクと物欲しそうに収縮する色素の沈着した不浄の穴がアップで映る。
どちらの穴も先輩の愛液でベトベトに濡れている。結合部から愛液を掬い取った獣人の無骨な指が、彼女の最も隠すべき穴にその愛液を塗りこむ。
何とか逃れようと抵抗する先輩の動きは、獣人の腰使いによって膣を責められることであっさり粉砕される。ついに獣人の人差指が先輩のしり穴に挿入される。
「いやぁぁん!」

「おお、指先が入っただけなのにすごい締め付けですね。」
再び潮をふき、腰を震わせる先輩。白い肌はピンク色に染まり、汗が噴き出している。
「ではそろそろ、出させてもらいますよ！」
流石に余裕がなくなってきたのか、先輩の尻穴を弄びながら獣人が激しく先輩の膣内を責立てる。
もはや声ならない嬌声をあげて、悦楽に耽る先輩。その顔は俺のよく知る女王のような凛々しい雰囲気など女王微塵も感じられない、雄に征服され発情する雌の顔だった。
「中に出しますよ、お嬢様！」
「っっ～！」
最早答える余裕など無くし、ただ頷くことしか出来ない先輩の膣内に、獣人がそな欲望をぶち撒ける。
己の子宮内まで、獣人の吐き出した白濁液で犯された先輩は、その快感に最後に盛大に絶頂し、意識を手放した。

意識を失った先輩の膣口からイチモツを抜き出した獣人は、先輩を仰向けに横たえる。精液が溢れてくる膣口をアップで写したあと、疲れて眠ってしまった先輩の、年相応のあどけない寝顔をカメラが写す。
「馬鹿な女だ。今までの痴態がすべて記録されてると知ったら、どんな顔をするのやら。」
獣人が自らのイチモツで喘いでいた雇い主を揶揄し、イチモツをコーティングしている彼女の愛液と自らの精液を、先輩の綺麗な髪で拭き取った所で、映像は終わった。

正直、次のお茶会で先輩とあったとき、勃起を抑えられる自信が無くなっていた。

もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら④（クラリス先輩編）

今日もまた鑑賞会の為にルクシオンにアンジェとリビアを部屋に近づけないよう頼んだ。
「マスター、いくらなんでも大分怪しまれていますよ？」
「大丈夫だ。せめて残り二本をしっかり見ないと、お茶会でクラリス先輩を襲ってしまいそうなんだよ！」
今までの映像資料のせいで、俺の先輩を見る目がガラッと変わってしまった。あの強気なクラリス先輩があそこまで性的に調教されきっている。その事実のせいで先輩を見るだけでもアソコが勃ってしまいそうになる。
せめて残りのビデオを見てこの興奮を鎮めなければ、色々まずい。
「…逆効果の気もしますが？」
「いいから、さっさと起動しろ！」
ルクシオンが呆れたように、しかしテキパキと準備を整え映像資料を起動した。

何処かの部屋、やはりホテルだろうか。
優等生な見た目の先輩は、私服のお嬢様感の強い清楚なドレスを着て、獣人と口づけをしていた。
「どうやら映像資料としては一番古いものですね」
「お、つまりこの先輩がまだ処女なのか、興奮するな！」
「…マスター、流石に業が深すぎませんか？」
「バカ、お前これは男のロマンだ！」
「…」
ルクシオンが呆れ果てたのか最早ツッコミを入れなくなった。
まだキスにも慣れていないのだろう。獣人に舌を入れられ、目を白黒させながら逃れようとする先輩。そんな先輩の肩を掴んで逃げられないように抑え込む獣人。

「っケホ、いきなり何を！」
「おや、激しくて荒々しい男に抱かれたいとのご要望でしたが？」
唇を離した瞬間、先輩が抗議をするが、獣人はどこ吹く風。どころか先輩の要望通りだと堂々とのたまう。
「あなたが、初めては荒々しく奪ってほしいと要望を出したので期待に添えるようにと私のような引く手数多の人材が派遣されたのですよ？」
どうやらあいつ、かなりの人気者だったらしい。
事実、かなりのテクニシャンなのだろう。再び先輩の唇を奪った獣人は、今度はキスをしながら先輩の身体を弄る。
口の中を犯されながら、尻や胸を愛撫された先輩の目は、次第に厳しい物からトロンとした目に変化していく。頬も紅潮し明らかに快感に酔っているようだ。
「明らかに不自然ですね」
「なんだ、あの獣人がかなりヤリ手だからじゃないのか？」
まだ部屋にいたルクシオンが興奮している様子の先輩に疑問を呈した。
「おそらく何らかの薬物、いわゆる媚薬が使われていますね。おそらくキスのときにこっそり飲ませたのでしょう。
その意味ではなかなかの遣手ですね」
「おいおい、えげつないな…」
やはりあの獣人達には地獄を見せよう。クレアーレ辺りに準備させるか。
「おや、随分興奮していますねお嬢様。」
ぬけぬけと獣人が先輩をからかう。
「し、仕方ないでしょう！こんなの、初めてだもの…」
どうやら先輩は一服もられたことに気づいていないようだ。おそらく初めて他人から性的興奮を与えられて、正常な判断力を失っているのだろう。
「ではそろそろ服を脱ぎましょうか、お嬢様？」
「っそ、それは…？」

おそらく興奮よりも羞恥心が勝るのだろう。なかなか服を脱ごうとしない先輩に焦れたのか、獣人の手が先輩に声をかける
「お嬢様、そんなことで恥ずかしがっていては立派なレディとは言えませんよ？」
「だ、だって…」
徐ろに獣人が先輩の服に手をかけ、彼女の服をビリビリと音を立てて破いてゆく。
「キャーッ、なんてことするの！」
無理やり服を破かれ、強制的に白い下着姿にされた先輩は、両腕で必死に胸と股間を隠しながらその場にへたりこむ。
「おや、私は物欲しそうにしているお嬢様に協力しただけですよ？」
そう言って獣人は、その腕力に物を言わせて先輩を軽々と持ち上げると、部屋に置かれたキングサイズのベットへと移動する。
そして抵抗する先輩を軽々と抑え込み、部屋に用意してあった手錠を用いて彼女の両腕を万歳の格好でベットに固定する。
「や、やめなさい！」
「おやおや、我々を雇うような学園の女子生徒はよくこのようなプレイをしていますよ？今回はサービスです。お嬢様の初めてを思い出深いものにして差し上げますよ」
そう言って先輩の白くほっそりした両脚もまた拘束される。
ベットの上で？字に拘束された先輩は、その白い肌を赤く染めて羞恥に悶える。
なんとか逃れようと暴れるが非力な乙女の力では手錠は壊せない。むしろ暴れるたびに、初心な先輩によく似合う白く簡素なデザインの下着に包まれた彼女の豊かな胸が揺れて獣人の目を楽しませる。
また、同じく白い下着で包まれた彼女の下半身もまた、その卑猥な様子が獣人の嗜虐心を刺激する。
先程の愛撫で興奮した先輩のパンツは、汗以外の液体で既に濡れていた。白い下着が先輩の濡れた股間に張り付き、その下にある乙女の花園を隠す黒々とした陰毛が透けて見える。しかも暴れるたびに下着が徐々にくい込み、下着の脇からもっさりした陰毛が徐々にはみ出

していく。
「随分といやらしい陰毛ですね、お嬢様位の歳でこんなに濃い陰毛はそうそう見ませんよ？」
「な、イヤ！見ないで！」
卑猥な股間を視姦され、なんとか脚を閉じようとするが、その抵抗がますます股間のくい込みを助長する悪循環。
…清楚なお嬢様のパンツから、もっさりした陰毛がはみ出している絵だけで射精出来そうだ。
獣人も我慢が効かなくなってきたのか、ついに先輩の下着も破り捨てる。
未だ処女である先輩の全身が映し出される。
染み一つない白い肌は羞恥で赤く染まり、暴れたせいでしっとりと濡れている。万歳の姿勢で拘束されているためさらけ出された脇は、その股間と異なりきちんと処理しているのか無駄な毛は一切ない。
細身な身体に不釣り合いに豊かな胸の先には、ピンク色の乳首が彼女の興奮を反映して固く勃っている。暴れる先輩に合わせて、ブラの拘束から開放された胸がタプンタプンと揺れる様子がこちらの目を楽しませる。
余計な肉のないくびれた腰、そしてほっそりしながらもしっかりと脂の乗った太腿、その付け根にはもっさりとした茂みが、乙女の花園を隠すように生茂っている。
自慰もほとんどしていないであろう処女のクラリス先輩は、他人に見られることのなかったそこに無頓着だったのか、陰毛はほとんど手つかずで、今までの映像に比べてももっさりと濃く生茂っている。陰毛は恥丘から大陰唇までを覆い、更にその下の肛門の近くまでを覆い隠し、遠目からなら先輩のオマンコが完全に隠れてしまいそうな程だ。
濃く生え揃った陰毛を見られるのはかなりの羞恥心を煽られるのか、顔を赤くして必死に脚を閉じようとする先輩。そんな先輩の股間を、獣人の手が弄ぶ。
先輩の太く縮れた陰毛をクイクイと引っ張り、指に絡めたりしなが

ら、先輩の女陰から溢れた蜜を掬い取る。
「随分と濡れていますね。処女とは思えない淫らなアソコだ。」
「い、イヤ。そんなこと言わないで…」
指で膣の入口をいじられるだけで、彼女の膣口から蜜が溢れてくる。いつしか彼女の黒々とした茂みはベトベトになり、肉付きの良い肉土手に張り付く。
獣人の指が陰毛を掻き分け、既に充血した先輩のクリトリスに触れると、先輩の腰が、まるで電気ショックを受けたかのように跳び跳ねる。膣内から溢れる愛液の量が増え、陰毛が受け止めきれなかった汁気がベットに大きなシミを作る。
「ハァ、ハァァンッ！」
「処女とは思えない乱れぶりですが、やはりここは狭いですね」
獣人の指が、先輩のぴっちりと閉じた女陰の奥に息づく膣口に侵入する。流石に狭いのか指一本だけだが、異物感で先輩の息が乱れ、蜜のあふれる量が増えてゆく。
「さて、そろそろいいですか」
獣人も服を脱ぎ、その筋肉質な肉体と、静脈の浮いた立派なイチモツをさらけ出す。
「…っ！」
初めて見る雄の象徴に初心な先輩は目を逸らす。だが獣人は容赦なく先輩の鼻先にその巨根を突き出す。
「舐めてくだい」
「な、何を言っているの!?そんなことできるわけ…！」

先輩が顔を赤くしながら獣人の言葉を拒絶する。今までの蝶よ花よと育てられたお嬢様だ。知識はあってもフェラチオなど自分がするとは想像すらしなかったはずだ。
「では、今日はここまでとしますか？」
獣人はそう言って、全裸で火照った身体をもて余す先輩に背を向けた。

〜続く〜

もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら
⑤（クラリス先輩編）

発情した先輩に背を向け、服を着ようとする獣人。
その姿を見て、体の火照りを隠しきれない先輩は困惑する。
「まっ、待って！どういうこと!?」
「どうもなにも、どうやらお嬢様は私に抱かれるのが嫌なようですので。雇用主には逆らえませんからね。お嬢様の意志を尊重して、今日はここまでとしましょう。」
殊勝なことを言ってるが、顔がニヤついている。どうやら先輩を焦らして楽しんでいるようだ。
「そ、そんな…。」
「おや、どうしましたお嬢様。そんな物欲しそうな顔をして。」
「違うわよ。そ、それよりもこの拘束をはやく解きなさい！」
全裸で拘束された先輩は、獣人に命令する。
だが、その声色にはどこか物欲しそうな感情が混じっていた。
「承知しました。では、新しい服をお持ちしますので少しお待ち下さい。」
そう言って獣人は全裸の先輩を残して部屋を後にする。
「な!?せめてこの拘束を解きなさい！」
残された先輩が叫ぶ。だが獣人は戻ってこない。
媚薬の影響で発情し体を火照らせた　先輩が一人、ベットに拘束されたまま放置される。
先輩はなんとか拘束を自力で解こうと試みるが、両手足を拘束された彼女にできるのは虚しく体をくねらせることくらいだ。
汗ばんだ先輩が、？字に拘束された姿で体をくねらせる。その度に彼女の豊かでツンッと張った胸が弾む。
そして体を動かすほど、彼女に盛られた媚薬が効果を発揮し彼女を発情させてゆく。徐々に、先輩の顔が蕩け、先輩の股間の茂みが汗以外の液体で濡れて彼女の肉土手に張り付いてゆく。

「ハァハァ、っハァァンッ！」
先輩の口から艶めかしい喘ぎ声が漏れる。そしてもどかしそうに拘束された脚を悶えさせ、腰をくねらせる。
だが拘束されている彼女は、一人ではそれ以上のことはできない。発情し体をほてらせながらも、絶頂出来るような刺激を受けることが出来ない。
「だ、誰か早くわたしのここを…」
先輩が縋るような声を上げたタイミングを見計らったかのように、獣人が部屋に戻ってくる。
「お嬢様、お着替えの用意が出来ましたよ。…しかし、今のお嬢様ではまた服を台無しにしてしまいそうですね。」
「な…っ!?」
先輩の痴態をニヤニヤ眺めながら揶揄する獣人。
というかこいつ、タイミング的にこの映像資料用の機械で先輩を監視してやがったな。
獣人が服を脱ぎ、再びその逞しいイチモツを先輩の目の前に突きつける。
「さてお嬢様、これを舐めればお嬢様の今のお悩みを解決出来ますが、いかがいたしますか？」
「……これを舐めれば、私を満足させてくれるの？」
媚薬を盛られ、理性を快楽に焼かれた先輩がとうとう獣人の焦らしに屈する。
先輩が顔を火照らせながら、そして快楽に屈した悔しさに涙を浮かべながら獣人のイチモツに口づけする。
「うう、臭い。苦い…」
生まれて初めて舐める男のイチモツの味に目を白黒させる先輩。
そんな彼女に獣人が無慈悲に告げる。
「その程度では男を満足させることなんてできませんよ？
さあ、舌を出して」
「うう、うぅう～！」
その可憐な唇に獣人のエラの張った怒張を押し付けられ、無理やり

口をこじ開けられる先輩。そして先輩の赤い舌が、観念したように獣人のイチモツを舐める。
　ベロペロと、初めはアイスを舐めるような遠慮した舌使いだったが、いつまで経っても反応しない獣人に不安を覚えたのか、少しずつ舌の動きが激しくなってゆく。
　手足を拘束され自由の効かない先輩が必死に首を動かして、獣人のイチモツを根本から亀頭まで舐めあげる。獣人のイチモツは既に先輩の唾液でベトベトになっているが獣人が満足する様子がない。
「やはりまだまだですねお嬢様。これではいつまで経ってもお嬢様に挿れてあげられませんよ？」
「……じゃあどうすればいいの？」
「口で咥えて下さい。口全体でわたしのイチモツを愛撫するんです」
「…っ、わかったわ。」
　媚薬で脳を灼かれ、判断力の落ちた先輩はもはや逆らうことなく、その可憐な口に獣人のグロテスクなイチモツを迎え入れる。
　チュプチュプと、湿った音をたてながら先輩が獣人のイチモツを咥え込む。
　まだまだ技術も拙く単調な奉仕だが、清楚な見た目に加えて処女の先輩がフェラをしているというだけでかなり興奮する。
「そろそろいいでしょう。出しますよ！」
「ンんっ、んっーー！」
　獣人がイチモツを口から出そうとする先輩の頭を掴み、逃げられない先輩の口の中に射精する。
　口の中に大量の精液で汚された先輩はその汚濁を飲み込むことも出来ず、リスのように頬を膨らませる。獣人のイチモツが引き抜かれ、先輩がえづくように口に溜まった精液を吐き出す。
「うっ…、ゲホッゲホッ…！」
「口の周りも、綺麗な御髪まで汚してしまって、随分はしたないお嬢様ですね。汚さないようにしっかり飲んでもらわないと。」
「こ…、こんな不味いモノ飲めるわけないでしょう！」
　獣人の無慈悲な言葉に、口元から精液を垂らしたままの先輩が反論

する。
　屈辱で顔を赤くしながら、拘束を解いて自由になろうと暴れる先輩だが、口から精液を垂らし、更に零れた精液で首から胸元までを汚した惨めな姿では、雄の劣情を誘う結果にしかならない。
「さて、そろそろお待ちかねの処女喪失の時間ですよ？」
「…!!まっ待って!?」
　つい先程まで屈辱と怒りで暴れていた先輩の顔に、怯えと僅かな期待が混じる。
　ニヤニヤと笑う獣人が、つい先程射精したばかりのイチモツを再び猛らせ、その先端が先輩の濃い陰毛で覆われた乙女の花園に狙いを定める。
　濡れそぼった先輩の秘唇は、先輩の言葉とは裏腹に雄の象徴を受け入れる期待に震えている。
　そして獣人のイチモツが先輩の未使用の秘唇にその先端を挿し込んでゆく。
「くっ…、流石に狭いですね。」
「っ～～!!」

　そして少しずつだが確実に先輩の膣内を進んでいた獣人のイチモツが何かに阻まれるように止まった。
「っい、嫌…!」
「さあお嬢様、大人の階段を登るときですよ！」
　反射的に逃れようとする先輩の細い腰を掴み、獣人が腰を進めイチモツを先輩の秘められた花弁の奥底へと突きこむ。
「い、痛い！痛いい！ぬ、抜いて！お願い！」
「ふ、ふはは。口では嫌がっていますがお嬢様のココは私のイチモツを掴んで離しませんよ？」
　先輩と獣人の結合部から赤い血が流れ、ベットのシーツを汚している。
　獣人のイチモツが根本まで先輩の未使用だった乙女の花園に埋め込まれる。

「っ～～!!」
手足を拘束されたままの先輩は、破瓜の痛みに耐えるように唇を噛み締め、手足をピンッと張っている。
そして獣人はその逞しいイチモツを先輩の膣内になじませるかのように、奥深くに突き刺したまま動かない。
「流石は処女だっただけのことはある。凄い締付けてですよ、お嬢様。私のペニスが食いちぎられそうだ。」
「うぅ…。」
未開拓の先輩の処女穴を堪能する獣人の揶揄するような言葉に、先輩が眉を寄せるが、まだ言葉を発することが出来るほど痛みには慣れていないようだ。
そして獣人の無骨な手が、先輩の豊かな胸と、その先端で破瓜の痛みに震えるピンク色の乳首を弄ぶ。
先輩の若く張りのある胸が、獣人の手で捏ねられその形を歪め、勃起した乳首をくりくりと指でいじられる。
「う…、ぅうん…!」
「ふふ、だいぶ膣内もほぐれてきたようですね。」
胸を責められ、徐々に痛みで顰めていた先輩の顔もほぐれてゆく。そして結合部からは、破瓜の血以外なドロリとした愛液がこぼれ始め、シーツと先輩の濃い陰毛を汚してゆく。

「ハァ…、ハァ…。わたし、なんでこんな…」
「処女を失くしたばかりでここまで濡らすとは、やはりお嬢様はは淫乱なようですね。…そろそろ動きますよ?」
「ま、待って!まだ…!」
破瓜の痛みを、飲まされた媚薬の効果が上回り始めたタイミングで、獣人が腰を動かし始める。
始めはゆっくりと焦らすように、先輩の狭い膣内を往復させる。
始めは痛みで体を強張らせていた先輩だったが、媚薬で発情させられた上に胸をしつこく責められた影響で、徐々に自分から細くくびれた腰をくねらせ、獣人のイチモツを求める動きをし始める。

「お嬢様、腰が物欲しそうに動いていますよ？」
「…っ、そんなこと、…ないわ。」
先輩が悔しそうに顔を逸らすが、先輩の腰は獣人のイチモツを追いかけるように動いている。
先輩がそろそろ快楽に溺れ始めたと判断したのだろう。獣人の腰遣いが徐々に激しくなっていく。
ジュプジュプと濡れた音が鳴るたびに、先輩の狭い雌穴から蜜と破瓜の血がミックスされた混合液が掻き出される。そしてのたびに、先輩のくぐもった喘ぎ声が漏れ聞こえる。
「っん、はぁぁん!!」
そして耐えられなくなったのか、甲高い喘ぎ声と共に手足を拘束された先輩の体がのけぞり、痙攣する。
そしてプシュッ、と結合部から潮をふく。
「ふふふ、初体験でナカイキするとは、よほどこのペニスが気に入ったようですね。」
「い、いやぁ。も、もうこれ以上はおかしく、なるぅ。」
イッたばかりの先輩を、獣人はより激しく責め立てる。イチモツで先輩の膣内を激しくかきまわしながら、奥を突かれる度にプルンプルンと震える豊かで形の良い乳を揉みしだき、舌でその綺麗な乳首を舐めあげる。
「中に出しますよ、お嬢様！」
「だ、ダメ！ま、またイッちゃうー!!」
獣人のイチモツが先輩の一番奥まで突きこまれ、獣人の腰が震える。そして結合部から愛液と異なる白濁液が溢れる。
そして自らの未使用だった膣内と子宮を獣人の精液で満たされた先輩は、その快感に抗えず、その白い肌をピンクに染めて腰を震わせる。
「ハァ…、ハァ……。っん！」
中出しで再びイッた先輩の雌穴からイチモツが引き抜かれる。先程まで処女だった先輩のオマンコはパックリ開き、その膣内から破瓜の血と獣人の精液が混ざり、ピンク色になった液体が溢れる。

先輩のオマンコがヒクヒクと動きながら、その中から先輩の膣内を汚した白濁液が溢れてくる様子がアップで映し出された後、映像資料は終了した。

盗撮機能を悪用する人工知能①（ドロテア編）

　これはリオン達の3年目の新学期が始まった時期、やらかしたクレアーレがリオンとルクシオンにお仕置をされた後のお話…。

「クレアーレ、貴方は懲りるということを知らないのですか？」
「待ってルクシオン、これはマスターの為を思って！」
「わたしがマスターの実家を防衛するために設置したドローンを勝手に使用するのはまだしも、プライベートの映像を勝手に編集するのはどうかと思いますよ？」
「映像を保存すること自体は貴方も賛成したでしょう!?
　新人類の恋愛についてデータが欲しいからって私にも分析も頼んだのだし！」
「ええ、自分の浅はかさに今更ながらに目眩を覚えますがね」
「そこまで言う!?」
　何やら言い争っている2体の人工知能へ、彼らのマスターが声をかける。
「何言い争ってるんだお前ら。　まさかまたクレアーレがやらかしたのか？」
「ちょっとマスター、言いがかりよ！　今回はまだ何もしてないわよ！」
「語るに落ちますね、わたしが止めなければどうなっていたことやら」
「おいクレアーレ、お前学園では飽き足らず今度は俺の実家でも何かやらかしたんじゃないだろうな」
　不穏な気配を感じたリオンがクレアーレを問い詰める。
「……」
「ルクシオン？」
「実はマスターの実家に配備したドローンを使って、マスターの兄君と婚約者のドロテアを観察していたのですが…」
「ああ、ドロテアさんが結婚前に兄貴と同棲するために実家に来たん

だろう？　ジェナ以外とは上手くいってるってこないだ報告もしてたじゃないか。」
「…それなのですが、クレアーレが勝手にある映像を保存していたのです」
「ちょっ、ルクシオン！　勝手じゃないわ、あれはマスターの為に…」
「おい、映像ってなんのだ!?　…まさか!!」
「そのまさかです。　クレアーレは兄君とドロテア嬢の情事も映像として保存していたようです」
「お、お前流石にそれは…」
　過去、クレアーレはリオンの婚約者であるリビアとアンジェのあられもない写真を勝手に保存し、リオンに渡したことがある。
　その時は素直に喜んだリオンだが、今回は流石に少し引いた。
「で、でもマスター。貴方自分だけじゃなくて他人の情事動画も結構好きでしょ！　ほら、クラリスの動画とか！」
「ば、バカ！　アンジェ達に聞かれたらどうする！」
「…確かにドロテアもマスターの好みに当てはまるスタイルですが」
「でしょう！　しかも今回はあんな粗雑な隠しカメラと違ってこのわたしが角度や光加減にも拘ったのよ！　きっとマスターも気に入るわ！」
「いやまて、確かに好みのプロポーションなのは認めるが流石に身内の情事は…」
「おや、クラリスの動画は共和国にもちゃっかり持っていったのに、今更では？」
「ルクシオン、お前どっちの味方だ！」
「それにマスターには癒しが必要だってルクシオンも言ってたじゃない。　せっかくだからいいオカズになるわよ」
「いや、だがな…」
「仕方ないわねぇ…」
　クレアーレが呆れたようにカメラアイを明滅させ、ある画像を空中に投影する。

そこには、全裸でテーブルに手をつき後ろからニックスに貫かれて喘ぐドロテアの姿があった。
「こ、これは…」
「ねぇマスター、このシーンを動画でも見たくないかしら？」
「……ルクシオン、しばらくリビアとアンジェを近づけるなよ」
「…マスター、流石に人としてどうなんですか？」
「俺は外道騎士だからな！」
「さっすがマスターね！　任せて、ルクシオンに止められるまでに保存した動画の編集はもう終わっているわ！」
「はぁ…仕方ありません。リビアとアンジェにバレても庇いませんよ？」
「…バレなきゃいいんだよ」
ルクシオンが部屋から出ていく。どうやらリビア達を近づけないように見張るのだろう。
「クレアーレ、頼むぞ」
「任せなさい、マスター！　これでわたしのミスはチャラね！」
「いや、攻略対象を女にしたのは忘れないぞ」
「そんなぁ…」
残念なやり取りを重ねながらも、クレアーレは部屋の壁にリオンが期待する映像を映し出した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

バルトフェルド男爵家の屋敷内、ニックスの私室にて若い二人の男女が向き合っていた。
一人はこの部屋の主であり、男爵家の長男ニックス。
そしてもう一人、薄手のネグリジェにガウンを羽織っただけの姿の美女、ニックスの婚約者であるローズブレイド伯爵家の令嬢ドロテア。
二人はお互いに頬を染めながら抱き合い、口づけを交わしていた。
「あぁ…ニックス様ぁ」

「ドロテアさん、今日も…」
「ふふ、さん付けはいりませんよニックス様。　さあ、お脱ぎになってください。」
　ドロテアは優しくニックスに呼び方の訂正を求めたあと、彼の寝間着のスボンを優しく下ろす。そして膝立ちになり、興奮で大きなテントを張ったニックスの下半身に顔を近づける。
「スンスン、相変わらず逞しい匂いをですね」
「ど、ドロテア。　あんまり匂いを嗅がないでくれ…」
「あら、ニックス様だっていつもわたしの髪や胸元の匂いを堪能していらっしゃるでしょう？　私だってニックス様の匂いを堪能してもいいじゃないですか」
「い、いやそうだけど…」
　主導権を完全にドロテアに奪われているニックスは、早々に下着も脱がされ興奮で隆々に勃起した漢の象徴を彼女の目の前に曝け出した。
「ふふ、相変わらず逞しくですね」
「ドロテア、いつもみたいに頼むよ」
「はい、旦那様♡」
　興奮を隠しきれないのか潤んだ目をしたドロテアが、白く美しい右手で血管の浮かんだニックスのペニスに触れる。そして左手でサラサラした美しい金髪をかきあげ、愛しい婚約者のペニスに口に咥え込む。
「ちゅっ、あむんぅ…はぁぁ、おっきくて熱くて…もう……」
「ど、ドロテアの口の中も、熱くて…いい……」
　チュプチュプと卑猥な音をたてながらニックスのペニスを口で愛撫するドロテア。彼女の美しい唇はニックスのペニスが出し入れされる度に歪み、彼女の唾液と先走り液でニックスのペニスがコーティングされてゆく。
「ドロテア…も、もう出るぞ！」
「はぅぅぅんん!!」
　ニックスがドロテアの頭を掴み、そのペニスを彼女の喉奥まで突き

こむ。そしてドロテアも嫌がるどころかうっとりした表情でペニスを頬張り、婚約者の注ぎ込む熱い精液を口腔で受け止める。
　コクコクと、ドロテアがその白い喉を動かし口腔内に溜まった精液を飲み干してゆく。
「ぷはぁ…」
「すまないドロテア、また君の口に…」
「いいんですニックス様、ニックス様の子種汁はとっても美味しいですから♡」
「い、いやいくらなんでも…」
「わたしにとっては何よりのご馳走ですわ。　だから遠慮なく出して頂いていいんです」
　そう言って唇から少し垂れた精液を舐めとるドロテアの妖艶な舌の動きに、ニックスは喉を鳴らして唾を飲み込む。
「フフ、あんなに沢山わたしの口に出してくださったのにもうこんなに大きくしてくださるんですね」
「ドロテアが魅力的過ぎるんだ。　悪いがもう、我慢できないぞ」
「はい、旦那様…♡」

　そして水差しの水で口を清めたドロテアは羽織っていたガウンと薄い絹のネグリジェを脱ぎ去り、その抜群のプロポーションを愛しの婚約者へ見せつける。
　やや暗い部屋の照明に照らされた美しい伯爵令嬢の裸体を、血走った目で見つめるニックス。
　サラサラとした美しく腰まで伸びた金髪。まるでメロンのような大きさの豊満な胸は重力に負けてやや垂れていて、その頂上に存在を主張する薄桃色の乳首は充血し硬く勃起している。ほっそりとくびれた腰と可愛らしい臍。むっちりと下品になりすぎない程度に脂の乗った太腿。そしてその太腿の付け根のヴィーナスの丘は、髪と同じ黄金色の陰毛が彼女の最も恥ずかしい部分を隠している。
　ゴクリ、と喉を鳴らしたニックスは、将来の夫として彼女の裸体をこうして眺められることに、そしてこの極上の女体を好きに出来るこ

とを神に感謝しながら、妻となる女性へ命令する。
「後ろを向いて、その机に手をついてくれ」
「わかりましたわ、ニックス様ぁ…♡」
逆らうことなく命令に従って、将来の夫に背中を向けるドロテア。そしてニックスは彼女の後ろ姿に、再び目を奪われる。
剥き身の卵のように白く美しい尻が突き出され、ニックスの目の前に差し出される。彼女の長い脚の付け根は興奮で既に汁を垂らし、尻の間に息づく女性として最も隠すべき不浄の穴がヒクヒクと物欲しそうに収縮している。
そしてニックスは、ポタポタと愛液を垂れ流す彼女の雌穴の入り口を、人差し指で優しく撫でる。
それだけでドロテアの肢体は電流を流されたようにビクンと跳ね上がる。
「に、ニックス様ぁ…」
「もうドロドロになってるな。俺のを舐めただけでそんなに興奮したのか？」
「いじわるを言わないでください…は、はやくわたしのはしたない穴にお情けをぉ…」
フリフリと卑猥に尻を揺らし、婚約者のペニスをねだる清楚な見た目のお嬢様。彼女のおねだりで股間の分身を更に硬くしたニックスは、愛しい婚約者の魅惑の美尻を無骨な手でがっしりと掴む。瑞々しく張りのある尻肉がニックスの手の形に歪み、開かれた尻の谷間から色素の沈着した不浄の穴と濡れそぼり、周囲を飾る黄金色の恥毛がベットリと貼り付いたクレヴァスが顕になった。
「ドロテア、激しくいくぞ？」
「はい♡　ニックス様…っあぁぁぁ～ん!!」
ジュプリ、と濡れた音と共にニックスのペニスがドロテアの膣内へと突きこまれ、ドロテアが甲高い啼き声をあげる。
ビクン、と再び背中をのけ反らせたドロテアは結合部からポタポタと愛液を流しながら、愛しい男のペニスを受け入れただけで絶頂に達した。

「くっ……相変わらず凄い締め付けだな」
ドロテアの尻と己の腰を密着させたニックスは、婚約者の狭い雌穴の締め付けを堪能する。
ほんの数日前に処女を奪われた令嬢の雌穴は、処女を奪った雄のペニスを覚え直すようにピッタリと吸い付き、その愛しい剛直を歓迎するために愛液のシャワーを浴びせる。
「はぁぁ～ん、熱くて硬くて…わたしのナカ…」
「ドロテア、そろそろ動くぞ…？」
「はい♡　ニックス様専用のオ〇ンコを、お好きなだけおチ〇ポで掻き回してください…♡」
普段の彼女であれば、否、プライドの高い貴族令嬢では絶対に言わない卑猥な言葉で婚約者へおねだりをするドロテア。
あまりにも淫蕩なその姿に理性を焼き切られそうになりながら、彼女の細い腰を掴み、ゆっくりペニスを引き抜いて抜くニックス。エラの張った剛直が令嬢の狭い膣内を削り、大量の愛液が結合部から掻き出され、床に敷かれた絨毯にシミを作る。
そして亀頭が抜ける寸前まで引き抜かれたペニスを、ニックスは再び根本までドロテアのナカに突き入れる。
パァンと肉と肉のぶつかる音がひびき、そしてニックスはドロテアがあげる嬌声をＢＧＭに激しく腰をふる。
そしてバックの体勢ではその豊満な胸が強調され、ニックスがドロテアを責める度に重たげに揺れている。
「ぁ…やぁぁん…い、今胸を責められるのはぁぁんっ！」
「相変わらず、乳首が弱いんだなドロテア。」
「や…らめぇ…これ以上はおかひくぅぅ」
乳牛のように垂れた豊満な胸を、ニックスの無骨な手が揉みしだく。手の跡がつくほど荒々しく揉まれ、更にその乳首の先端をコリコリと指先で責められたお嬢様は、涎を垂らし、快楽でその長い髪を振り乱す。
その反応に気を良くしたニックスは更に激しく腰を前後させ、妻となるお嬢様の柔らかな尻に自らの腰を叩きつけ、彼女の雌穴の最深部

にある子宮口をこじ開ける。
「出すぞ、ドロテア！」
「はひぃぃぃぃん、だ…出して下さい！　沢山…わたひのナカにいぃぃ」
「っ!!」
ドビュドピュッッ!!!
ニックスがひときは力強く腰を叩きつけ、その剛直をドロテアの最奥まで叩き込み、ピッタリと腰を密着させた直後、熱い欲望の証がお嬢様の膣内に解き放たれた。
「っはぁぁぁ〜〜〜んっっ!!!」
「おぉぉっ、ドロテアっ!!」
自らの最奥に、大切な子袋の中に熱い子種汁を注ぎ込まれたドロテアはその日最高の絶頂をし、ニックスから更に子種汁を搾り取ろうと彼のペニスを締め付ける。
そしてその刺激のお陰で陰茎の中に残った精液の最後の一滴まで搾り取られる。
「はぁ…はぁ……ふふ、今日も沢山、お情けを頂けましたね」
「ドロテア…」
ペニスを引き抜かれ、ぽっかり空いた膣口からポタポタと愛液と精液の混合液を垂れ流しながら愛おしそうに下腹部を、その下にある婚約者の精液で満たされた子宮を擦るドロテア。
その妖艶な様子に三度勃起を復活させたニックスは…。
「まだまだ、夜はこれからだぞ？」
「はぁい♡　沢山わたしを愛してくださいね、旦那様♡」

ーーーーーーーーーーーーーー
「クレアーレ、続きは？」
「続きはまた今度よ。リビア達が来そうだから早く部屋を片付けましょ？」
続く…かも？

共和国完全勝利ルート（アンジェ競売編）

ホルファート王国はアルゼル共和国に戦争を挑み敗北した。
共和国にとっては無敗神話が更新されただけの話であったが、王国にとっては新たな英雄を殺され、莫大な賠償金を支払わされる悲惨な結末になってしまった…。

〜〜共和国某所　オークション会場〜〜
「お集まりの皆様、お待たせいたしました!!
それでは皆様、今回愚かにも我らが共和国に戦いを挑み惨めにも敗北したホルファート王国から賠償金の代わりとして納品された戦利品のオークションを開始させて頂きましょう!!」
壇上に立った視界が拡声の魔導具を用いて、広い会場にとあるオークションの開催を宣言する。
会場の雰囲気ははっきり言って異様だった。
何故なら、壇上に立つ司会も、そして会場に集まった参加者たちも皆、顔を隠す仮面をつけている。また男女比も9：1と異様に男性に偏り、一部の女性は首輪をされたり、フォーマルな場では下品とされるような卑猥な衣装を着せられ、男性に侍っている。

会場の中でもＶＩＰだけが通されるボックス席で豪奢なソファに腰掛けながら、一人の男が酒を飲んでいる。
「ひゃはははは！　ようやく始まったか、待ちくたびれたぜ！
おいお前らよーく見とけよ、馬鹿なお前らの為に戦って負けた王国が俺様達に差し出した哀れな女共が今から競りにかけられるぞ！」
不快な笑い声を上げながら酒を飲む男はピエール、六大貴族フェーベル家の次男であったが、戦争で活躍したことで正式次期当主となった男だった。
そして男が呼びかけた先には、手枷と足枷に猿轡までさせられ跪く5人の男達がいた。彼らこそ、王国が無謀にも戦争を起こすきっかけになった、王国の第一王子とその取り巻きたちの成れの果てだった。

「ぷっははは、言い返す気力もないか。おい馬鹿王子、目をそらすなよ。今からお前の元婚約者が競りにかけられるぞ！」
王子と呼ばれた男は血走った目でピエールを睨むが、すぐに取り巻きに蹴られ、そして無理矢理壇上に目を向けさせられた。

「さぁさぁ皆様ご注目！　1つ目の商品はこちらです！
なんとこの商品、王国では公爵家のご令嬢であり元は王子の婚約者でもあったとのこと！　さあこの高貴な美貌をご覧ください！」
そして壇上に、何故か厚手のローブを被り顔以外の肌を全て隠した美少女が現れる。
「さあ、自己紹介をしろ、惨めな敗戦国の献上品」
先程まで明るく話していた司会が、会場の人間全てを射殺さんばかりに睨みつける美少女に冷たく言い放つ。
「逆らおうとしても無駄だ。聖樹の力で刻印された奴隷紋には逆らえないぞ！」
「下衆が！　っくうぅ…」
気丈にも司会に食ってかかろうとした美少女は苦悶の声を上げその場に跪く。首に禍々しく輝く紋章が、逆らおうとした彼女に制裁を加えたのだ。
「おら、先がつかえてるんだ。さっさとしろ！」
「……アンジェリカ・ラファ・レッドグレイヴです」
よろよろと立ち上がり、名前を名乗る美少女。
彼女を含めた幾人かの高貴な女性たちが、賠償金を払いきれない王国が現物での納品として共和国に贈られた戦利品だった。
彼女達は奴隷として、王国から売られ、共和国に買われたのだ。
「愛想がないのは申し訳ありません！　で　す　か
!!　こんな生意気で高貴な美少女も、奴隷紋には逆らえません！
競り落とした暁には、ぜひとも好きに調教してくださいね！」

司会は場を盛り上げるために再び明るく話し出す。
「では競りの前に、おい、とっととそのローブを脱げ」

「っく…地獄に堕ちろ…」
唇を噛み締め、屈辱に顔を歪めながら、アンジェは自らの肌を隠していた布を床に落とした。
「「おおぉぉぉーーー」」
会場が大いに沸き立つ。
何故なら、これからセリにかけられる美少女の、その１７歳としては思えないほど見事に発育した肢体を隠している布が、紅いスリングショットの紐水着だけだったからだ。
ローブを脱いだアンジェは、羞恥に顔を赤くしながらも、奴隷紋の影響で肌を隠すこともできず、その場に立たされる。
彼女の爆乳とも言える大きさの胸は、その頂きのみを辛うじて水着の紐部分が覆っているのみで、魅惑的な谷間も下乳も全てさらされている。そして紐が食い込むＶラインは、わざと手入れをさせて貰えなかったのだろう。彼女の赤みがかった金髪と同じ色の陰毛が、その紐の両脇からはみ出している。
そして辛うじて乙女の花園を隠す紐は、彼女の股間を通って彼女の背中へ繋がっていた。
「さて、ではセリの準備を整えましょう」
「な、何をする！」
司会が手を振ると、魔法陣が現れ、そこから発生した蔦がアンジェの手足を拘束し、彼女を空中へと拘束する。
「や、やめてくれ！　こんな姿で人の前に…」
両腕を万歳の姿勢で拘束され、足を大きく開きその股間と水着からはみ出す陰毛を大々的に晒されたアンジェが涙を浮かべて懇願する。
だが彼女の受難は終わらない。
「さあ競売開始です。　では１０万ディアから！」
そして競売がスタートする。
１００万はあっという間に１０００万になり、アンジェが羞恥で泣き叫ぶ度に会場のボルテージが上がり、１億の大台が見えてくる。
「１億！　１億が出ました！　さあ他には…」
「２億だ!!」

競売を制したのは、ピエールの一声だった。
「2億！2億が出ました！　他にこれ以上の値段をつける方がいないため、元公爵令嬢アンジェリカの所有権はピエール様に決定しました!!!」

会場からは拍手と、嫉妬の声が湧き上がる。
ピエールはそんな喧騒を無視し、聖樹の力を使って空中に吊り下げられたまま晒し者にされているアンジェを、自分たちの待っているボックス席まで運ばせた。
「で、殿下…見ないでください……」
「すまない、アンジェリカ。すまない……」
惨めなアンジェの姿を見たユリウスが涙を流す。だが彼の同情はすぐに、ピエールの不快な声によって遮られる。
「ひゃはははは、おい馬鹿王子よーく見とけよ。今からお前の元婚約者の初物を俺様が奪ってやるからよぉ！」
「なっ…、きっさまぁ!!」
ピエールに殴りかかろうとしたユリウスたちだが、彼らは全員ピエールの取り巻きに制裁され地面に転がされる。
「殿下！」
「おいおい、他人の心配してていいのか～？」
「きゃっ、やっやめ…っ！」
ピエールがアンジェリカのスリングショットの水着の背中側を掴む。そしてグイグイとその紐を引っ張る。

「あひゃぁぁん!!」
「ひゃはははは、随分カワイイ声あげんじゃねえか！
会場で見られて感じてたのか？」
「ちっ違っ…はぁぁぁんっ」
引っ張られた紐が彼女の股間に食い込み、その度にアンジェの体に電撃のような快感を与える。
「それになんだこの胸はよぉ。お貴族様じゃなくて本当はウシだった

のか？」
「や…あぁ…あ〟めてっっ　……いっいっやっあっああ」
　水着を剥ぎ取られ、拘束から開放されたアンジェの爆乳は、プルンプルンと揺れる。そしてその爆乳を、彼女の落札者が揉みしだく。
「凄えな、指が完全に埋まっちまうぜ！　ははは、こりゃあ2億も出した甲斐があったな」
「ひ♡い…♡…ぃ♡♡♡〟や…！あ♡っあぁ！あ♡♡ぁぁぁぁあんん」
　執拗にアンジェの爆乳を揉みしだき、その頂で存在を主張する充血した乳首を責めるピエール。
　奴隷紋の効果で無理矢理性感を高められたアンジェには、その身勝手な愛撫ですら耐えられないほどの快感に置換されてしまう。
　ポタポタと愛液を垂らし喘ぐアンジェを執拗に責めていたエミールは、ふとあることを思いつく。
「おいお前らの、そこの馬鹿王子を地面に転がせ」
「は、はい。ピエールさん」
　取り巻きが従順に、ユリウスを地面に仰向けに転がす。ユリウスは抵抗しようとするが取り巻きに殴られてすぐに大人しくなった。
　そんな惨めなユリウスを、ピエールは聖樹の力で動けないように固定する。
「くっ…何をするつもりだ！」
「ひゃはははは、優しい俺様はこれからお前に特等席でいいものを見せてやるよ！
　おら奴隷女、そこの馬鹿王子の顔を跨げ」
「なっ…!!」
　あまりにも無体な命令に、アンジェは逆らおうとするが奴隷紋の力に抗えず、かつての婚約者の顔を跨ぎ、股間をユリウスの目の前に晒した。
「そのまま四つん這いになれ」
「……はい」
　もはや全てを諦めたように、なんの感情も感じられない声音で淡々

とピエールの命令に従うアンジェ。
両膝をユリウスの顔を挟むように立て、ユリウスの体に上下逆に覆いかぶさるような体勢になる。
ユリウスは自分の目の前にさらされた元婚約者の股間から目を逸らそうとするが、頭も蔦で無理矢理固定され、目を閉じようとしても蔦でこじ開けられる。
そしてユリウスの目の前に、元婚約者であり幼く頃から自分の隣りにいた美少女の最も秘すべき器官が晒される。
アンジェの肉土手は彼女の発育の良さを体現してこんもりと盛り上がっている。そしてその股間を飾る黄金色の陰毛は、わざと手入れをさせてもらえなかったためもっさりと彼女の恥ずかしい股間の谷間を覆い隠している。
未だ男を受け入れていないその割れ目は、本来ならばピッタリと閉じている筈だが、執拗に胸を責められたことで汁気をおび、彼女の膣口から溢れた愛液が陰毛を濡らし肉土手にべっとりと張り付いている。
健全な男子であれば獣欲を抱かずにはおれないその姿に、ユリウスもまた己の分身を硬く勃起させてしまう。
そしてアンジェもまた、目の前でペニスを勃起させる元婚約者を目の当たりにし、女として暗い充足感を得ていた。
(あの女に寝取られたわたしが、今更殿下をこんなに興奮させているとはな…惨めだ……)
彼女の思いとは裏腹に、かつての婚約者に見つめられることで彼女の女としての器官はより活性化し、愛液を分泌する。
ポタリと、ユリウスの顔にアンジェの恥ずかしい汁が滴り落ちる。
「ヒャハハハハ、こいつこんな状況で見られて興奮してやがるぞ！おい良かったな馬鹿王子、お前見ただけで女の股を濡らしてるぞ！」
パァンとアンジェの脂の乗った美尻をピエールが叩く。そうするとアンジェが悩ましい声を上げ、その衝撃でアンジェの爆乳がゆさゆさと揺れる。
「さーて、そろそろお待ちかねのち○ぽだぞ奴隷女。

しっかり味わえよ」
「まあぁあ…ぁぁあっ…！てぇぇ…ぇぇ…え」
アンジェのくびれた腰を掴んだピエールは、己の雄の象徴を奴隷女の雌穴へとあてがう。
「おい馬鹿王子、よーく見てろ。お前の元婚約者も、これから出品される王国の貴族の女達も、お前の母親も、全部俺様達のもんだ。目を見開いて現実を受け止めろよ？」
そしてピエールの、体格からすると不釣り合いなほど逞しい剛直が、アンジェの未だ誰も迎え入れたことのない乙女の秘密の園へと挿し込まれてゆく。
そしてプチプチと、何かを破る気配がした直後、ピエールが己のペニスをアンジェの最奥まで一気に押し込んだ。
「痛……、いぃ…ぃ」
「ヒャハハハハ、やったぞ！　これでこの王国の雌犬は俺の物だ！」
勝ち誇り、得意の絶頂に至ったピエールが叫ぶ。
そして処女を失った直後のアンジェに欠片も気を使うことなく、その腰を動かす。
「うぅ…、痛いぃ」
「うるせぇぞ奴隷女。しばらくすりゃあこなれてくるんだよ！」
パンパンと、アンジェの尻肉にピエールが己の腰を叩きつける。
そして奴隷紋の効果のお陰か、痛がっていたアンジェから、次第に喘ぎ声が聞こえはじめる。
結合部からは愛液と、破瓜の証である鮮血が溢れ、真下にいるユリウスの顔にポタリとかかる。
ユリウスは何もできない自分に悔しさを覚えながらも、目の前で元婚約者が処女を失う瞬間を目の当たりにして興奮してしまったら股間の分身を抑えられないと自覚する。
「ああ、流石処女だ。スゲェ締め付けだ。
おい奴隷女、俺様の精液を恵んでやる！　しっかりし受け止めろよ！」
「まっ待ってくれ！　な、中出しはやめ…はあぁぁぁん，!!」

ひときは強くペニスの先端で子宮口を小突かれたアンジェはついにその刺激で絶頂してしまう。そしてその絶頂と共に膣内に吐き出された、憎むべき男の精液が膣内を、そしてその絶頂と共に膣内に吐き出された、憎むべき男の精液が膣内を、そして本来なら愛する男との愛の結晶を育むための小袋を我が物顔で満たしていく。
「あ、あぁぁ…」
「ヒャハハハハ、いいなぁその惨めな顔。高い金払っただけのことなある。」
「殺してやる…」
「ひゃはは、おれの精液を股から垂れ流しながらだと全然怖くねぇな」
パァンと再び尻を叩かれ、己を支えていた股間の一物を抜き取られたアンジェは、無様にユリウスの上に倒れ込む。
そしてユリウスの顔面に、愛液とピエールに出された精液、そして破瓜の血でベトベトになったアンジェの股間が密着する。
「…!!!」
「きゃっで、殿下、今は駄目で…」
雄の本能に従って、アンジェの股間を舐めてしまったユリウスと、その反応に暗い優越感を覚え言葉とは裏腹に元婚約者の顔面に股間を擦りつけようとするアンジェ。
「おいおい、奴隷同士でイチャツイてんじゃねえよ!」
ピエールはアンジェの髪を掴んで立ち上がらせ、再び聖樹の力で空中に貼り付けにする。
「しっかし王国の人間は惨めだな。元婚約者が侵された上に、それを観てアソコを勃たせてんだからよ」
「くっ…」
怒りで顔を歪ませるユリウスを見ながら、ピエールは酒を飲む。
「さあて、次はどの雌を手に入れるかだな」

共和国完全勝利ルート（ミレーヌ様競売編）

ピエールがアンジェで愉しんでいた間も、競売は滞りなく進行していった。だが一人目のアンジェの時ほど盛り上がる戦利品は一人しか現れていなかった。

「なんだよ、期待外れだな」

ピエールはソファに腰掛けながらつまらなそうに呟く。

ピエールの膝の上で、後ろからピエールに貫かれて荒い息を漏らすアンジェはその身勝手な物言いに眉を顰めるが、それを不愉快に感じたピエールにクリトリスをつねられる。

「ぁひん!!」

「おい、腰の動きが止まってるぞ！　奴隷は奴隷らしく、御主人様のオナホになってろよ」

そうやってアンジェを苛めている間に、次の戦利品が紹介された。

「さてさて、いい感じに場も温まってきたところで本日の目玉商品をご紹介いたしましょう!!

なんと、愚かな王国の国王が娘の代わりに土下座をして差し出した、ホルファート王国の王妃、かつてレパルト連合王国の至宝と呼ばれた美女、ミレーヌ王妃です!!　おっと、今はもうただの牝奴隷なので〝元〟王妃ですね～」

会場からゲラゲラと下品な笑いが起きる。

「さーて、それでは登場して頂きましょう！」

司会が手を叩くと、アンジェと同じように顔以外の肌を隠すローブを身にまとったミレーヌ王妃が壇上に現れた。

「へぇ、馬鹿王子の母親だっていうからどんなババアが現るのかと思ったら見た目は随分と若いな」

アンジェの項を舐めながら壇上を眺めるエミールが感心したように呟く。エミールは独り言のつもりだったが、その言葉に返事をする者がいた。

「いいえ、見た目は少女のように見えますがあの女は今年で３７歳で

すよ。若く見えますが身体の方はなかなか熟れていそうですなぁ」
「なんだ、お前も来ていたのか」
　エミールの呟きに答えたのは、フェーベル家とも懇意にしている神聖王国の大使だった。
「随分とあの女に詳しいな」
「それはもう、憎き敵国の王妃でありかつては敵対国の王女でもありましたからなぁ。忌々しく思うと共に、我が祖国が連合王国を滅ぼした暁にはあの女を好きに出来ると若い頃は夢想したものです」
「ひゃはは、じゃあ今は多少夢が叶ったということか？」
「ええ、ただ既に少し散財してしまいましてね。そこでエミール様に力を貸してほしいのですよ」
　そう言って大使は隣に立たせた黒髪の美少女の尻を撫でる。
　黒髪の美少女は赤い瞳に憎しみを込めて大使を睨むが、首に刻印された奴隷紋の影響でそれ以上のことは出来ないようだった。
「お前の趣味は理解しかねるが、あの王妃とその奴隷だと好みが真逆じゃないか？」
　ピエールは黒髪の美少女、悪趣味な運営の趣向で猫耳と尻尾付のアナルプラグを挿入されたファンオース公爵家の元当主ヘルトルーデの薄い胸に目を向ける。
「ははは、経験を積むと偶には普段と違うものもつまみたくなるのが漢の性ですよ。それに小さい分、感度は抜群ですよ？」
　そう言って大使は、薄い胸で慎ましく存在を主張するヘルトルーデの乳首を摘む。
「ひ♡いいいゃ…！ん♡♡」
　先程まで気丈にピエールと大使を睨みつけていたヘルトルーデが情けない喘ぎ声を挙げてへたり込む。
　知人のあまりにも無惨な姿にアンジェは悲しみの表情を浮かべるが、彼女もまた牝奴隷として主人の膝の上で腰を振っているのだから、傍目にはどちらも惨めだろう。
「まあいいか、お前には借りがあるからな。　だが協力してやるからには俺様にもあの年増を使わせろよ？」

「勿論ですとも、何でしたらこの雌猫もおつけしますよ？」
「へぇいいな。そうだ、だったら…」
「…ほう、流石ピエール様はいい趣味をしていらっしゃる」
エミールの計画を聞いた大使はニヤリと笑い、同じく近くでそれを聞いたアンジェとヘルトルーデは顔を青ざめさせた。

おおおおお!!!
会場が喚起に包まれる。
壇上で新たな商品の説明を終えた司会が、ついにミレーヌの肌を隠していたローブを剥ぎ取ったのだ。
その傾国の美貌を隠すのは、乳首を覆うニップレスと、アンジェとは逆に綺麗にツルツルに剃り上げられた股間を覆う前張のみ。
屈辱と羞恥で、彼女のシミ一つない白い肌は赤く染まっている。
腰まで届く美しい白銀の髪、アンジェすら超える爆乳は年齢のせいかやや形が崩れ重力に負けて垂れているが、それがより、童顔の元王妃の色気を引き立てる。くびれた腰は子供を二人産んだとは思えない程細い。彼女の安産型の尻は年齢に比べて張りがあるが、こちらもやはり若い他の商品に比べ形が崩れている。
「さあ皆さん、童顔王妃の熟れた体を好きにするためにも奮ってご参加下さい！　では競りを盛り上げる為に、より趣向を凝らしましょうか！」
司会が指を鳴らすと、アンジェの時と同様に聖樹の蔦がミレーヌの手足を拘束し空中へと吊るし上げる。
「や、やめなさい！　こ、こんな格好を…」
両手を頭の上で組まされ、脚をM字に開かされたミレーヌはその形のやや崩れた爆乳と陰毛を全て刈り取られ、前貼りのみで隠された陰部を会場中に晒される。
「い、いやぁ…見ないでぇ…」
前張りで隠されていない、色素の沈着した肛門まで晒される羞恥に悶え涙を流す、ほんの一月前まで王国で最も高貴だった女性を、会場中の人間が視姦している。

「それでは１０万ディアからスタートです」
「１５！」「２０！」「５０!!」「１００!!」
アンジェと同じ値段で始められた競売は、彼女の時と同じかそれ以上の勢いで加速していく。
「８０００万が出ました！　おやおや皆様、やはり年増より若い子の方が気合が入りますかー？」
ドッと会場に笑いがおきる。
ミレーヌはその反応に羞恥と共に屈辱感を味わう。
「１億だ！」
会場がざわめき、その値段をつけた人物がエミールであることを知り諦めの色を浮かべる。
「１億２０００万！」
大使が声を張り上げる。既にピエールに心を折られていた他の参加者は諦め、ミレーヌの所有権は大使のものとなった。

「ひゃはは、近くで見るとなかなか美人なもんだな。王国の臆病な国王なんかにゃ勿体ねぇな！」
「ははは、やったぞ！　ついにあの生意気なミレーヌ王女の体を好きにできるのだ!!」
アンジェとヘルトルーデに竿をしゃぶらせながら高笑いするピエールと、ミレーヌの爆乳を揉みしだき歓喜の声を上げる神聖王国の大使。
「くっ、ミレーヌ様…」
「こんな奴に、この私が…」
「なんだぁ、躾がなってねぇなあこの雌豚共は」
ピエールが手に持った端末を操作すると、ヘルトルーデとアンジェの尻穴に埋め込まれた尻尾付のディルドーが振動し、二人の美少女を悶えさせる。
「やぁあ♡…！あ♡っんん♡…！」
「やあ……め……えって♡♡♡え！」
振動に合わせて、ディルドーに取り付けられた尻尾がまるで本物の

ようにフリフリと揺れ、二人の高貴な美少女の惨めさをより際立たせる。
「くっ…この下衆共…、絶対に許さないわ…！」
「ははは、胸を揉まれただけで喘いでいる雌が何を言っても惨めなだけですよ？　さて、そろそろ連合王国の至宝と呼ばれた元王妃の雌穴を堪能させていただきましょうか。
あんな愚王に嫁がなければ、我々が連合王国を蹂躙して貴様の処女も奪えたものを」
若干の悔しさと嫉妬を滲ませながら、大使がミレーヌを床に押し倒す。
ミレーヌの下品にならないギリギリの脂ののった美脚を無理矢理開かせ、前貼りを剥ぎ取る。
その秘処は、つい先程まで処女だったアンジェや、まだ未開通のヘルトルーデと比べ、ややビラビラがはみ出し、程良く使い込まれていることがわかる。
だが、本来なら彼女の股間を覆っているはずの髪と同じ白銀の陰毛は、競売の前に綺麗に刈り取られていた。成熟した美女の、子供を二度も産んだ女陰はしかし、まるで成熟前の童女のようにツルツルで、そのギャップがより大使の獣欲を煽る。
ゴクリと、まるで童貞の少年のように目を血走らせ唾を飲み込む大使の様子を、ミレーヌは全てを諦めた目で見つめる。
せめて心を殺し、これからおこる辱めから精神を守ろうとしていた。だが…。
「母上!!」
「王妃様！」
息子と、息子同然に思っていた息子の幼馴染の声で我に帰ってしまった。
「ゆ、ユリウス!?　ジルク!?　い、いや！　わたしのこんな姿を見ないでぇ!!」
ミレーヌは羞恥に身悶えし、己を汚そうとする敵対国の大使の剛直から何とか逃れようとする。

だが所詮女の細腕では成人男性の体を長時間抑えることは出来ない。
ピトッと大使のペニスの先端が、ミレーヌの無毛の股間に息づく既に濡れそぼった膣口へとあてがわれる。
そして一気に根本まで、その剛直をミレーヌの膣内へと突き入れた。

「あぁぁあ…ぁあ゛！あ……ぁ…あっ」
奴隷紋の影響を受けた体はただ膣内にペニスを入れられただけで絶頂させられる。
「おぉ…いい締め付けだ。経産婦とは思えない程の締め付けだな。」
「あ♡♡♡！あぁ♡！」
くびれた腰を掴み、乱暴に腰を振ってミレーヌの熟れた身体を蹂躙する大使。ミレーヌは久しぶりに体感する荒々しい責に、涎を垂らしながら善がってしまう。
「なんだ、随分と嬉しそうに俺のものを締め付けてくるじゃないか？欲求不満だったのか？」
「う、うぅ…。」
恥ずかしそうに顔をそらすミレーヌ。事実、冷え切った夫婦仲で、既に夫に抱かれなくなって10年以上、熟れた体を持て余していたミレーヌの体は、奴隷紋の影響もあるが、彼女の意に反してこの状況ひ歓び、夫以外のペニスを歓待する。
「さあ出すぞ！　しっかり受け取れ！」
「嫌、嫌ぁ～…!!」
口では嫌がりながらも彼女の雌穴は愛液を垂らし、新たな御主人様の肉棒をキュッと締め上げ、子種汁を絞りあげようと蠢動する。
大使の腰が震え、彼女の最奥にその欲望を解き放つ！
「ああ、熱い…熱いぃ……!!」
「はは、中出しされてイクとは淫乱な王妃様だな！」
腰を海老反りにし、美しい髪を振り乱し絶頂する元王妃。
そして最後の一滴まで彼女の膣内に注ぎ込んだ大使は満足そうに

その膣内から己の分身を引き抜いた。
「さて、ではピエール様、そろそろよろしいのでは？」
「ああ、そうしよう」
二人はニヤリと笑い、とある余興を3人の牝奴隷に提案した。

ーーー続くーーー

共和国完全勝利ルート（ヘルトルーデ競売編）

時は少し遡る。
ピエールがアンジェの処女を堪能していた頃、ミレーヌが競りにかけられる前にアンジェに次ぐ落札額を記録した商品がいた。
彼女の名はヘルトルーデ・セラ・ファンオース、元ファンオース公国、現在は王国に吸収された現ファンオース公爵家の女公爵だった少女だ。
彼女もまた王国の敗戦により、賠償金の代わりとして共和国に牝奴隷として売られたのだ…。

「さあ、いきなりピエール様が2億で元公爵令嬢を落札してしまいましたが、ご安心ください。　まだまだ魅力的な牝奴隷は数多く取り揃えておりますよぉ!!」
司会が明るく会場に語りかける。運営としては大金で奴隷が競り落とされるのはいいが、そのせいで競りが盛り上がらないのも問題なのだ。
「それでは次の商品ですがなんと、公爵令嬢に続いて次は元女公爵です。　まああの情けない王国にすら勝てずに吸収されたファンオース公国が名前を変えただけですが、かの国が我らが共和国に差し出したのは、若干17歳にして元公国を立て直す為に奔走していた女傑でございます。
まあ、我が国が彼女を差し出せば資金援助してやると言ったら家臣たちが勝手に彼女を縛り上げて差し出して来ましたがね」
ゲラゲラと会場が笑いに包まれる。
「さあ、人望はお察しですがその美貌は本物です！
おら、とっとと壇上にあがれ！」
そして壇上に、艶やかな黒髪をツインテールにした黒髪の美少女が、やはり頭以外を覆うローブを身に着けて現れる。
その怜悧な美貌は先程の屈辱的な紹介のせいか怒りで歪み、紅い瞳が司会を、そして自らを嘲笑う会場の人間たちを睨みつける。

「おっと、怖い目で睨みつけて来ますがご安心ください。　奴隷紋のお陰でこちらの命令には逆らえません。
では皆様、元女公爵の肢体をご覧ください！」
司会が自らを射殺さんばかりに睨みつけるヘルトルーデをせせら笑いながら、彼女の肌を隠すローブを剥ぎ取る。
ザワ　ザワ
だが、先程はアンジェの見事な肢体と卑猥な水着姿に歓声をあげた会場を、困惑と哀れみが覆っていた…。

壇上でローブを剥かれた美少女の肢体を包むのは、共和国では学校の水泳の授業の際に着用が義務付けられているスクール水着だった。
腰まで届く長い黒髪のツインテール、髪色とは真逆の透き通るような白い肌、小柄ながらほっそりとした長い手足。冒険者の末裔として鍛えているのだろう。その身体には無駄な贅肉はほとんどついていない。
だが、それだけであれば会場も困惑はしても憐れみはしなかっただろう。この会場に集まる紳士達ならば、高貴な美少女がスクール水着でその肢体を晒していることに興奮しないものなど特殊な性癖を持つごく一部をのぞいでいないからだ。
会場の憐れみの理由はただ一つ、スクール水着に隠された彼女の胸部だった。
〝へるとるーで〟と書かれた名札を胸元に着けて、会場中からの憐れみの視線に羞恥以上に激しい怒りを覚え、悔し涙すら浮かべながらその白い肌をピンクに染めて震えるヘルトルーデ。名札のついた胸元に、膨らみと呼べるものはほとんど無かった。辛うじて、名札が僅かに歪んでいるように見えなくもないが、それはおそらく彼女を哀れんだ一部の者たちの見た幻覚だろう。
「……えー、では皆様、競りを始めたいと思います」
本来ならばここで彼女の体を褒めるなり貶すなりして場を盛り上げるべき司会ですら、人として最後の良心を発揮し淡々と競りを開始

しようとする。
「屈辱よ…、まさか奴隷にされて慰み物にされる以前にここまで恥辱を味わうなんて…。　いっそ死んでしまおうかしら」
「あー、うん。　その奴隷紋は奴隷が勝手に自傷や自殺出来ないように行動を制限してるから無理だぞ。」
「そう……」
　流石の司会もあまりにも哀れなヘルトルーデに同情し本来なら話す必要のない説明までしてしまう。
　一応、ヘルトルーデの名誉の為に言うならば、もしも彼女がこの日の一番最初の商品として競りに出されていれば、会場はもっと盛り上がっただろう。だが、彼女より先にアンジェリカが競売にかけられてしまったことが、彼女の最大の受難だった。
　高貴な美貌と、同じ１７歳でありながら比べることすらおこがましく実った豊かな乳房と肉付きのいい男好きする肢体を目にした会場の人間が、美貌こそ遜色はないが肝心の胸が貧相過ぎるヘルトルーデを見て、がっかりしてしまいテンションが下がってしまうのも無理は無いだろう。
　憐れみの気持ちを抱きながら、せめてさっさと優しいご主人様に買われてくれと願いを込めて競売を開始しようとする司会に、メモが手渡される。
　そのメモは会場のオーナーと、その使い魔だというロストアイテムからのものだった。
　メモに記された命令を読んだ司会はニヤリと酷薄な笑みを浮かべる。そして胸の哀れなヘルトルーデがより高値で買われるように善意で行動を開始した。
「ちょっと、どうしたのよ？　さっさと競りを始めなさ…」
「会場の皆様、実は当会場のオーナーより特別演出のお許しが出ました。　つきましては、今回の商品であるヘルトルーデを用いて、ご来場の皆様にサービスをさせていただきます!!」
　そう言って司会が指を鳴らすと、壇上に現れた魔法陣から豪華な一人がけのソファが出現し、そこから放たれた聖樹の蔦がヘルトルーデ

を拘束する。
「な、何をするつもり!?」
先程のアンジェに対する辱めを思い出したヘルトルーデが怯え、拘束から逃れるために身をよじるが、少女の力では聖樹には抗えない。
腕を頭の上で拘束され、その細く長い脚をM字に開いた形でソファの腕おきに拘束される。
暴れたことでスクール水着の厚手の生地が彼女の股間に食い込み、生地の隙間から彼女の黒い陰毛が少しはみ出す。
そしてそんな少女の痴態は、空中に投影された巨大なスクリーンによって会場中に晒された。
胸の大きさこそ子供にも負けそうなヘルトルーデだが、尻や太ももはアンジェリカにも負けない程女性らしく発育している。
そして魅惑的な太腿の付け根に息づく女性器もまた年相応に発達していることがスクール水着の野暮ったく厚い生地からでも確認できると分かると、会場のボルテージも上がっていく。
「どうやら会場の皆様も、この水着の中身が気になっているご様子ですね～。　それではご期待に答えて、御開帳といきましょう！」
「や、やめなさい！　やめてぇ!!」
ヘルトルーデの必死の懇願も虚しく、彼女の体を守っていたスクール水着は司会の手にしたハサミによって切り刻まれ、無惨にも剥ぎ取られてしまった。
「う、うぅ…」
「これはこれは、胸に関してはわたしもかける言葉を見つけることができませんが、下の方は随分と女性らしいですね～」
手足を拘束され、生まれたばかりの姿を晒すヘルトルーデの肢体は、薄く辛うじて膨らみが確認できる胸を除けば、会場の視線を釘付けにするには十分すぎるほど魅力的だった。
特に、少し食い込んだだけではみ出していた彼女の黒い陰毛は、もっさりと彼女の女性器を覆い、彼女の女として最も秘すべき花園を隠している。
だが、陰毛の密生が自らの女性器を隠していること、そしてそれを

会場中に視姦されることなどヘルトルーデにとっては恥辱でしかない。
「さてでは皆様、これより元女公爵様の剃毛式をご覧に入れましょう!!」
　司会が手を叩くと、舞台袖からスタッフがシェービングクリームと刷毛、そしてカミソリを持って現れる。
「い、いや！　やめて、お願い！　お願いします!!」
「さっきまでの強気な顔はどこへ行ったんですか？　見苦しいですよ～」
　必死にこれから開始される恥辱の儀式から逃れようと暴れるヘルトルーデを見かねた司会が指を鳴らし、ソファから出現した聖樹の蔦がヘルトルーデの腰を拘束し、完全に身動きを封じる。
　そして彼女のこんもりと茂った濃い陰毛に、スタッフが手慣れた手付きでシェービングクリームを塗っていく。瞬く間に陰毛で覆われていたヘルトルーデの女性器は白い泡によって覆い隠される。だがヘルトルーデは、陰部を観衆の目から隠せたことに安堵することなどできず、これから行われるさらなる辱めに、顔を青ざめさせる。
　スタッフがついに、カミソリを構える。
「やめて、お願いだから…」
「暴れると大事なオマンコに傷がついてしまいますよ？
　大人しくしていれば、痛い思いはしませんよ？」
　司会がニヤニヤと、先程まで生意気な目つきをしていた美少女の青ざめた顔を堪能する。
　ゾリ…ゾリッ…とスタッフがカミソリを振るう度に、ヘルトルーデの乙女の花園を守る陰毛が削ぎ落されていく。そうやって少しづつ露わにされてゆく。
　そうやって、女性器の周りだけでなく、尻の谷間とその中の肛門の周りまで覆っていた濃い陰毛が全て刈り取られ、彼女の股間は一本の産毛も生えていない。その様相はまるで未だ初潮を知らない童女のようだった。
「そら、目をそらさずにしっかり見ろ」

司会が、目を閉じ変わり立てた自らの股間を見ようとしないヘルトルーデに命令を下す。奴隷紋の効果で彼女の目が無理矢理開かれ、彼女の無惨な股間を映し出す映像を目にしたヘルトルーデは、屈辱と惨めさに涙を流す。

ヘルトルーデの秘唇は年相応に発達している。ふっくらと肉が盛りだした肉土手と、その間に息づく小陰唇は、処女らしくピッタリと閉じている。奴隷紋の効果で見られたことで発情してしまっているのだろうか、クリトリスは勃起し無毛の股間で隠されることなく存在を主張する。

そしてその秘唇の下には、色素の沈着した不浄の穴がヒクヒクと物欲しそうに収縮している。

「殺してやる、お前たち全員、地獄に堕ちろ！」

「こんな惨めな姿でそんな強気な事を言えるのはなかなかですね～。どうやら股間の毛を剃った位ではまだ自分の立場が自覚できないようですねぇ」

そう言って司会が手を叩くと、再びスタッフがお盆にとあるものを持って現れる。

「では競売を始める前に、生意気なお嬢様にはお仕置を加えて差し上げましょう」

「な、何を!? い、痛い！ やめてーー!!」

「ははは、その割には嬉しそうに股間を濡らしていますよ?」

盆に載せられて司会に手渡されたのは、ネコミミのカチューシャと、尻尾が取り付けられたアナル用のディルドーだった。

美しい黒髪の上にネコミミを取り付けられ、更にまだ未使用のアナルに尻尾付のディルドーを挿入されたヘルトルーデは、屈辱とアナルに入れられたディルドーの圧迫感に頬を染め、息を荒くする、

「はぁ…あはぁんっ…」

「息が荒くなっていますよ? まさかお尻で感じているとは、とんだ淫乱ですね」

「だ、誰が!!」

瑞々しい白い肌をピンクにそめ、脂汗を流すヘルトルーデは、先程までとは異なり、怪しい魅力を醸し出している。
高貴な美貌とモデルのようなスラリとした手足、胸こそ哀れなほど小さいが、そのなだらかな丘の上で存在を主張する桜色の乳首、そして胸と異なりしっかりと肉がついた魅惑的な白い尻。
そんな彼女を猫耳と尻尾をつけられ屈辱に身を震わせる様子は、会場のボルテージを否応なく上げていく。
「さて仕上げといこう。
おい、このメモの通りに観客におねだりしろ。　拒否はできないぞ、これは命令だ」
「こ…のぉ……、いつか絶対に後悔させてやる…」
歯を食いしばり、抵抗しようとするが、奴隷紋の効果で逆らおうとするたびに激痛を与えられ、ついにヘルトルーデは屈服し屈辱的な台詞を口にする。
「か…会場の皆様…どうか早く、わたしを競り落として、この哀れな雌猫の処女オマ〇コの初めてを早く奪ってください……にゃん…」
おおおおおおおお!!
会場のボルテージは、先程のアンジェの競りと同等か、それを超えるほどの興奮に包まれる。
「さあ、それでは１０万から、競売スタートです!!!」
そして盛り上がった競りは、最終的に神聖王国の大使が８０００万でヘルトルーデを落札することになった。
そして彼はもう一人のお目当ての牝奴隷を確実に購入するために、落札したヘルトルーデを引き連れピエールの元へと向かった。

共和国完全勝利ルート（三美姫恥辱編）

滞りなく競売は終了し、王国から共和国へと献上された高貴な美女、美少女達はこれから牝奴隷として新たな人生を歩んでゆくことになる。

フェーベル家の屋敷でも、それは変わらない。

「ひゃはははは、いい眺めだな！

おい馬鹿王子共、目をそらさずにしっかり見ろ！　お前らが馬鹿みたいにこの国に来なければこいつらもこんな恥ずかしい目に合わずにすんだんだぜ？」

「全くですな。　まあ、王国の貴族など所詮思慮の浅い愚か者しかいません。　みてくださいピエール様、この男共は我々自慢の牝奴隷を見てアソコを膨らませていますよ？」

「ひゃはははは、無様だな。」

フェーベル家の次期当主と神聖王国の大使は、床に跪かされた５人の美形な男子達をあざ笑う。彼らは戦争の原因となった馬鹿な王子とその取り巻きである貴公子達だった。だが戦争に破れた彼らは、奴隷として二束三文でピエールに買われた。

そして彼らは主人に逆らうことができず、自分たちとも浅からぬ縁のある３人の美女、美少女の痴態を無理矢理見せられているのだ。

彼らの目の前には、空中の魔法陣から生えた蔦によって手足を拘束された３人の美しい裸体がある。

一人目はアンジェリカ・ラファ・レッドグレイヴ。赤みがかった金髪と赤い瞳に凛々しい顔立ちの美少女は、手足を空中で固定され、その爆乳と言えるほど豊満に実った、だが鍛えている為か一切垂れることなく張り詰めた乳房も、引き締まり無駄な贅肉のない腹部とくびれた腰も、同じく引き締まりながらも適度に脂の乗った太腿も、隠すことが許されず曝け出されている。

唯一彼女の肌を隠すのは股間に履かされた紅いＴバックのパンツ

だけだが、明らかに大きさの合っていないそれは彼女の成熟した女陰に食い込み、そのふっくらとした肉土手と、わざと手入れをすることを禁じられたせいでこんもりと生え揃った金色の恥毛がはみ出しているため、見方によっては裸よりも惨めな姿かもしれない。

二人目はミレーヌ・ラファ・ホルファート。美しく輝く白銀の髪は腰まで届き、馬鹿王子ことユリウスの母親とは思えないほど若々しい童顔の美女だ。彼女もまた手足を拘束されているが、姿はアンジェとは少々異なる。彼女のアンジェすら軽く超える爆乳は、若さ溢れるアンジェの瑞々しくハリのある乳房とは異なり、その大きさゆえに重力に負けてやや垂れていた。その豊か過ぎる乳房の頂に存在を主張する、経産婦とは思えない透き通るようなピンク色の乳首には、左右ともにピアスが通され、更にそのピアスに取り付けられた紐の先には鈴が取り付けられている。彼女が羞恥に悶え身じろぎするたびに爆乳がユサユサと揺れ、その動きに合わせて鈴がチリンチリンと鳴る。その度にミレーヌは恥ずかしさで顔を赤く染め、それだけで彼女を視姦している者たちの目と耳を楽しませる。そして彼女の股間はアンジェとは逆に陰毛を全て刈り取られ、童女のような姿を晒している。だが、つい数時間前まで処女だったアンジェと異なり、程々に使い込まれた彼女の女陰はやや色素が沈着し、清楚可憐な彼女の見た目に反して少しグロテスクな印象を与える。

3人目はヘルトルーデ・セラ・ファンオース。艶やかな黒髪をツインテールにした小生意気なツリ目の赤い瞳の美少女だ。彼女の印象は、他の二人とはかなり異なる。黒髪の映える白くシミ一つない肌と、スレンダーで長い手足。特に程々に脂ののった太腿から尻のラインは3人の美姫の中でも圧倒的だろう。そして美脚の付け根に広がる乙女の三角地帯は、本来であれば彼女の髪と同じ黒く濃い陰毛が最後の砦として守ってくれていた。

だがほんの数時間前、彼女が初潮を迎えてから生え揃い初め、同年代の中でも特別に濃いその繁みは、無惨にも刈り取られた。

そうして無毛になった彼女の股間には、遮るものの無くなった乙女の割れ目が慎ましやかに存在していた。彼女の女陰もまたアンジェ

と同様にふっくらと膨らんでいるが、まだ処女の彼女の小陰唇はピッタリと閉じている。…だが、そんな彼女を見つめる凌辱者達の目は好色な視線と共に憐れみと同情が混じっている。
何故なら、彼女には他の二人が持つ大事なものが存在していなかったからだ。
猫耳カチューシャを付けさせられ、アナルに尻尾付のデイルドーを挿入され羞恥と尻穴の刺激に身悶えするヘルトルーデ。だが、彼女がどんなに身じろぎしようと、彼女の胸がアンジェやミレーヌのように重量感たっぷりに揺れることは無い。何故なら彼女のなだらかな、乳首があるおかげで辛うじて膨らみだとわかる丘は、何があっても揺らぐことが無いからだ。
三者三様の魅惑的は肢体は、ただ眺めるだけでも男達を愉しませる。だが大金を支払って彼女達を手に入れた男達は、その程度のことで満足することは無い。
「ピエール様、ではそろそろ…」
「ああ、じゃあそろそろ余興を始めるとするか」
そう言ってピエールが指を鳴らすと、彼の忠実な家臣が小瓶を差し出す。差し出された小瓶をアンジェ達3人に見せつけるように掲げたピエールは、彼女達にゲームのルールを説明する。
「お前達3人に刻印されたその奴隷紋には、牝奴隷の妊娠を阻害する効果がある。長く奴隷を楽しむのに、妊娠するのは余計なリスクだからな」
その言葉を聞いた3人の目に、少しだけ希望と安堵が宿る。
「だが聖樹から抽出したこの薬を飲むと、逆に牝奴隷は排卵が誘発され、ほぼ100%妊娠する」
続く言葉を聞いた3人は、その意味を理解した瞬間、恐怖に怯えその身を震わせる。
「どうやら、よほど我々に孕まさせるのが嫌なようですなぁ」
「ひゃはははは、この怯えようゾクゾクするな。
だが安心しろ、慈悲深い俺様はわざわざ高い金を払ったお前達を妊娠させて価値を下げる気はない」

ニヤニヤと、3人の美姫の反応を楽しみながらピエールが話を続ける。
「だが反抗的なお前達を躾ける為に、俺様は涙を飲んでこの薬を使おうと思う。これから俺様が提案するゲームで負けた牝奴隷に薬を飲ませて、俺様の子供を産ませる事にする」
あまりにも身勝手で彼女達の女としての尊厳を無視した言動に、3人の美姫は殺意の籠もった視線をピエールへ送るが、ピエールはニヤニヤとその視線を楽しんでいる。
そして再び指を鳴らし、彼の取り巻きたちに命令する。
「おい、そこの情けなく股間を膨らましてる馬鹿王子を裸に？いて床に転がせ」
「な…!?　おい離せ、やめろ!!」
抵抗しようとして殴られ、来ていた粗末な服を全て破られたユリウスが、アンジェ達の目の前の床に仰向けに転がされ、更に身動きが取れないように聖樹の蔦で拘束される。
冒険者として鍛え上げたユリウスの引き締まった体に、僅かに嫉妬しながらピエールがルールを説明する。
「この馬鹿王子の母親には、今からこの馬鹿王子とセックスしてもらう。」
「なっ…!?　ふざけた事を言わないで！」
「き…貴様ぁ、俺はともかく母上になんということを！」
いきなり近親相姦をさせようとするピエールにミレーヌもユリウスも烈火の如く怒る。だがピエールはニタニタ笑って小瓶を見せつける。
「じゃあこの薬はババァに使うとするか。　年増だが十分そそる体してやがるからなぁ」
「ひっ…」
「ぐうう、おのれぇ…！」
望まぬ妊娠の恐怖に怯える母親を見て、ユリウスもまた怒りを抑えるしかなくなる。
「そんでもってそこの牛女と貧乳、お前らは俺と大使のチ〇コをしゃ

ぶれ」
「……わかった」
「……いつか絶対に後悔させてやる」
瞳に怒りを宿しながらも、妊娠の恐怖に抗えず命令に従うアンジェとヘルトルーデ。
「今から一番最初に男を射精させた奴には、褒美として一日自由を与えてやる。　金もやるし俺様に歯向かう以外は何をしても咎めないでおいてやる。
だが、最後まで男を満足させられなかった役立たずには罰としてこの薬を飲んだ上で、俺が直々に孕ませてやるよ」
それはあまりにも露骨なアメとムチだ。そもそもピエールが約束を守る保証は無い。それでも、妊娠の恐怖と自由という甘い誘惑に抗えず、まずはアンジェがピエールに媚を売る。
「ぴ、ピエール様。　どうか哀れな雌豚に貴方様の逞しいオ○ンチンを舐めさせて下さい」
「ひゃはは、いいだろう。　しっかりとその口でご奉仕しろよ？」
ソファにドカリと座り、大股を開いたピエールは、その痩せた体に不釣り合いに逞しく愛液に灼けて黒々とした逸物をアンジェに突きつける。
アンジェはまずはチロチロと赤い舌先でピエールの先走り液を舐めとる。次に舌でピエールの裏筋、そして睾丸を舐めあげ、パクりとピエールの睾丸を口に含む。
「おぉぉ!?　牛女、お前さっきまで処女だった癖にどこでそんなテクを…」
「わ、わたしは将来の王妃として幼い頃から教育されました…王太子を満足させるためにこのようなテクニックも幼い頃から学んだのです。　ど…どうですか？」
アンジェが上目遣いで媚を売るようにピエールに答える。
「ひゃはは、これは思った以上にいい買い物だったぜ」
アンジェの頭を撫で、ピエールが満足そうに笑う。

「ご…御主人様……ご奉仕させていただきます……にゃん」
恥辱に身を焼かれながら、プライドよりも妊娠の恐怖が勝ったヘルトルーデもまた、自らの主人へ精一杯の媚を売る。
そしてチロチロと、子猫がミルクを舐めるように大使の逸物の先端を濡らす先走り液を赤い舌が舐め取る。
その所作はアンジェと比べると拙く単調だが、プライドの高い彼女なら本来一生口にしない言葉と共に始められたご奉仕は、歴戦の大使をして合格点と言わざるをえない卑猥さだった。

早急に行動を開始した二人の美少女に対して、元王妃ミレーヌは苦戦していた。女として、そしてファンオース王国の元王妃として、敗戦したとしても敵国の人間に孕まされるなど最悪の屈辱であり国辱だ。だが、自らが腹を痛めて産んだ息子とセックスをして射精させなければならないなど、真っ当な倫理観を持つ彼女にとって理解の外だ。
だが早くしなければアンジェとヘルトルーデが男達を満足させてしまうかもしれない。だからミレーヌもまた覚悟を決める。
「は、母上…!?」
「ごめんなさい…ごめんなさい、ユリウス…」
白魚のような美しい手で、ユリウスの萎えかけた逸物をしごく。
いくら若々しく美しいとはいえ、自分の母親に手コキをされて勃起してしまったユリウスは自己嫌悪に陥る。いっそこのまま、ミレーヌに射精させられてしまえば、自らの尊厳の代わりに母を望まぬ妊娠から救えるのではないか、と思い始めた。
「おい馬鹿王子…」
だがそんなユリウスに、ピエールの側近が何事か耳打ちする。そして耳打ちの後から、ユリウスはただただ無言で母の痴態から目を逸らすだけになった。
ミレーヌはそのユリウスの様子にわずかに違和感を覚えるが、望まない妊娠の恐怖から逃れるため、その違和感をあえて無視する。
「ユリウス、立派になったわね…」

「……」
ユリウスの逸物を迎え入れるため、膝立ちで彼の腰を跨ぐミレーヌを、奴隷紋の効果で目を逸らすことができず無理矢理見せつけられる哀れな息子。
先端に鈴を付けられ動く度にチリンチリンと音を鳴らす規格外の大きさを誇る柔らかく豊満なバストと、経産婦とは思えないほどくびれた腰、そして無惨にも恥毛を刈り取られ童女のような無毛の股間に存在する、隠すものがないためはっきりと形のわかる成熟した女性器は、程よく使い込まれ、これから自らが産んだ息子の逸物を迎え入れる事に欲情し汁を垂らしている。
いかに母親とはいえ、健全な男であれば誰であってもむしゃぶりつきたくなる妖艶な肢体を下から覗き込む形になったユリウスは、その若い逸物を限界まで勃起させてしまう。
「おい見ろよ、あの馬鹿王子のやつ自分の母親の裸で勃たせてやがるぞ」
「王国の貴族は男も女も変態しかいないようですなぁ。母親の方も息子の体で濡らしているようですよ?」
アンジェとヘルトルーデに逸物をしゃぶらせながら、惨めな親子をあざ笑うピエール達。
そしてついに、ミレーヌはユリウスの若く逞しい逸物を自らの膣内に咥え込む。
「はあ……♡っん、っ!」
「ぐ…うぅ……」
ユリウスの逸物を自らの胎内へ咥え込んだミレーヌは甲高い喘ぎ声を上げて軽く絶頂してしまう。そしてユリウスは、ミレーヌのふんわりと包み込むような温かい膣内に自身のペニスを取り込まれ、更に絶頂による締め付けでしごきあげられ、思わず声を漏らす。
「はぁ…はぁ……、早くイッてユリウス。　さぁ、ママの中に沢山、貴方の熱いものを出して!」
「や…やめてください母上…これ以上は……!」
最早完全に吹っ切れたのか、ミレーヌはユリウスの鍛えられた腹筋

に手を付き、その安産型の尻をユリウスの腰に密着させ、腰をのの字にくねらせ、淫蕩に実の息子の子種を強請る。
王妃として王を満足させる為に鍛えられ、かつてはユリウスを孕む為に使った手管を、今回は妊娠しないためにその息子に使っている。
ユリウスの顔が快感と苦悶で歪む。ミレーヌの膣内はまるで別の生き物のように蠢動し、ユリウスの若いペニスを締め付け温かい愛液をまぶす。
結合部からは粘度の高い愛液が滴り、彼女の股間とユリウスの下腹部をベトベトに濡らしている。
ミレーヌが腰を動かすのに合わせて彼女の柔らかな爆乳もタプタプと動き、乳首から垂らされた鈴が場違いに涼やかな音を奏でる。
そのあまりに淫蕩な様相と、ユリウスの余裕のない声に危機感を覚えたアンジェは、ピエールの逸物を喉まで咥え込む。そして喉奥から唇まで全てを使ってピエールの剛直を締め付け、彼の射精を促す。
「ちっ、思った以上に上手いな。っうぉ、出すぞ！」
「っ～～～！」
そして3人の美姫の中で、アンジェが最も早く相手を、満足させ、その精液を口の中に受け止める。
「っ…く…」
「俺様の慈悲だ、零さず飲めよ？」
そしてアンジェは目を白黒させながらも、白い喉を鳴らしコクコクと口の中にぶち撒けられた粘ついた精液を一滴残らず飲み干した。
「あ♡ぁあぁ…っあ♡〝！あ……あ、ユリウスぅ…!!」
「すみません、母上……！」
そしてひときは甲高い喘ぎ声を上げて絶頂したミレーヌの締め付けに屈服し、ユリウスが母親の膣内に己の欲望をぶちまける。
「どうやら勝敗は決したようですなぁ」
「う…嘘よ……そんな…」
他の二人が相手を満足させ自分だけが目的を達せされなかったこ

と、そしてこれから自らに降り注ぐ不幸に絶望し、ヘルトルーデは放心する。
　そんなヘルトルーデの顔を愉快そうに眺めながらも、まだ満足していない大使は彼女の２つに束ねられた髪を一房掴む。
「口では満足させてもらえませんでしたからね。代わりにこちらを使わせてもらいますよ？」
「な…やめなさい！　け、汚らわしい！」
　ヘルトルーデの艶やかな髪を自らの逸物に巻き付けしごく大使を、ヘルトルーデが罵倒する。女の命とも言える髪をオナニーの道具にされる屈辱に顔を紅潮させ抵抗しようとするが、奴隷紋の効果で何もできない。
「流石元公爵、艶のあるいい髪ですな」
「殺す、殺してやる…」
「はは、まだそんな生意気な台詞が吐けるなら上々ですな」
　シコシコと、ヘルトルーデの美しい黒髪で逸物をしごきながら彼女の怒れる美貌を満足そうに眺めた大使は、おもむろに彼女の頭を掴む。
「ではそろそろその顔に出させてもらいますよ…！」
「きゃっ…っ～！」
　大使の一物から熱い精液が発射され、彼女の高貴な美貌を、そして艶やかな黒髪を白濁液で染めあげる。
「おいおい、これから抱く女がだいぶ汚れちまったぞ？」
「これは申し訳ありませんピエール様、少し休憩されますか？」
「ああ、そうするか。準備ができるまではこの牛女でも抱いておこう。おい、この貧乳女をしっかり洗っておけよ」
　部屋の隅に控えていたメイド達に命令を下したピエールは、アンジェを伴い部屋を出ていった。

共和国完全勝利ルート（ヘルトルーデ妊娠編）

頭から精液をかけられて汚れてしまったヘルトルーデを綺麗にする間、ピエールは自室でアンジェを組み敷き、彼女の豊満な肉体を堪能していた。

「あ♡！んん…♡…あぁあ♡♡ぁんん♡♡っ」

「どうしたあ？　さっきまで生意気な態度だっくせに、チ〇コ突っ込まれただけで善がりやがってよぉ!!」

「あん…♡だっ…だってピエール様の…凄く大きくてえ…♡」

高貴で凛々しい美貌のアンジェは、かつての彼女なら考えられないような蕩けた表情でピエールに媚を売り、自分から腰をくねらせる。

「そうかよ、だったらお望み通りたっぷり啼かせてやるぜ！」

「はい♡　ピエール様の逞しいオチ〇ポで、アンジェのはしたない奴隷マ〇コを躾けてくださいぃ♡」

アンジェの両足を掴み、所謂まんぐり返しの体勢でアンジェのドロドロに蕩けた膣口に自らの逸物を突き込むピエール。

アンジェは苦しい体勢に僅かに眉を顰めながらも、激しいピエールの責に喘ぎ声をあげ、必死にピエールに媚を売る。

プライドの高いアンジェがここまでピエールに屈服したのは、先程のゲームが原因だ。尊敬する王妃があそこまで惨めな惨状に晒され、自分と同格ともよべる立場の少女は遊び半分で望まぬ妊娠をさせられる。

そうなるくらいならいっそ、例え憎い相手に尻尾を振ってでも少しでもマシな立場になりたいと、聡明な彼女は早々に考えてしまったのだ。

少なくとも自分の体にピエールが満足している間は、わざわざ妊娠させるようなことはしないとアンジェは計算していた。

「しっかしデケえ胸と尻だなあ！　牛みてえだが、こんだけ淫乱なら豚か？　なあおいブヒブヒ鳴いて見ろよ雌豚がよお!!」

「ぶ…ブヒィ、アンジェはピエール様専用の雌豚ですブヒィ！」

「ひゃはははは、本当に鳴きやがった！　おら、ご褒美だ、たっぷり受

け取れよ!!」
「あああっ、熱いぃ…!! ピエール様のあっつい子種汁がアンジェの雌豚マ○コに沢山でてるのぉ!!」
腰を震わせ、ピエールがアンジェの中に大量の精液を吐き出す。
アンジェもまた己の胎内を満たす主人の熱い精液に陶然とし、ビクンビクンと腰を震わせ絶頂する。
「ふぅ…ったくこれから貧乳女を孕ませないといけねえのに、この雌豚に搾り取られそうだぜ。残念だったな馬鹿王子、お前の婚約者は俺のチ○コが大好きだってよ」
「……え?」
アンジェから逸物を引き抜いたピエールが背後を振り向き、いつの間にか部屋の隅に無言で立たされていたユリウス達に声をかける。奴隷紋の効果で声を出すことを許されず、ただアンジェの乱れる姿を見ることしかできなかったユリウス達5人は、信じられないものを見たという表情で愕然と股間から愛液とピエールに出された精液を垂れ流すアンジェを見つめている。
「で、殿下…それにお前達も……いつから?」
「お前がブヒブヒ言い出す前からいたぞ? ひゃはは、驚きすぎて物音一つたてられなかったみてえだなぁ!」
アンジェは当初は呆然と、そして次第に自分が女としてと最も見られたくない姿を元婚約者やその友人達に見られたことを理解し、その美貌が絶望に染まる。
「い…嫌ぁーーー!! み、見るな! 見ないでぇーー!!」
金切り声をあげたアンジェは必死に胸と股間を腕で隠し、震えながら体を丸め惨めな自分の姿を隠そうとする。
「おい雌豚、何勝手に体を隠してやがる。 豚は豚らしくブヒブヒ鳴いて股を開きやがれ」
「う…うぅ…ブヒィ…。ご、ごめんなさい、許してください…」
ピエールに髪を捕まれ、ユリウス達の前まで引きずられていく哀れな雌豚を、ユリウス達は助けることも許されずただ見ていることしか

出来ない。
　ピエールはユリウス達の前で四つん這いにさせられたアンジェの肉付きのいいデカ尻を平手でバチンと張る。
「いやだね、やっぱりお前もお仕置きが必要かあ？」
「ひ…ひぃ…ごめんなさいぃ…」
　涙を流してる謝るアンジェに気を良くしたピエールはニヤニヤ笑いながら彼女の尻を撫で、命令を下す。
「ひゃはは、だったら反省のためにも、お前は今からそこの馬鹿王子達のアソコを舐めろ。　」
「は…はい、わかりました」
「制限時間は俺様が貧乳女を孕ませるまでだ。それまでに５人ともイカせられなかったら、お前も孕ませるぞ？」
「うぅ…、はい」
「ただし、馬鹿王子共は俺様が貧乳女を孕ませるまでに全員イッちまったら罰を与える」
「……!!」
　顔を青ざめさせるユリウス達に気づかないふりをしたアンジェが、立ったまま動くことを許されていないユリウスのスボンを下ろし、元婚約者の痴態を見て既に硬く勃起した逸物を口に咥え込む。
　美味しそう尻を振ってに馬鹿王子の逸物を咥える牝奴隷を眺めながら、ピエールは手を叩きメイドを呼びつける。
「おい、そろそろ貧乳女の準備はできたか？」
「はい、もうお連れしますか？」
「とっとと連れてこい。　あの生意気な顔を早くヒィヒィ言わせてえ」
　程なくして、綺麗に清められ、その上で神聖王国の大使のプロデュースでおめかしされたヘルトルーデが部屋へ案内された。
「へえ、あの大使なかなかいい趣味してやがるな」
「絶対に許さない…いつか絶対に、お前達を切り刻んで鮫の餌にしてやる…」

切れ長の赤い瞳に殺意を湛えたヘルトルーデがピエールを睨みつける。
部屋に連れてこられたヘルトルーデは、先程までの格好から、より彼女の魅力を強調した姿に変わっていた。
艶やかな黒髪は綺麗に整えられ、再びツインテールに結ばれ、以前と同じように猫耳のカチューシャを取り付けられている。また尻穴にも、頭の猫耳とお揃いの尻尾のついたアナルディルドーが挿入されている。
その上で、彼女の白くスラリとした手足は、彼女の白い肌に映える肘までを覆う黒い長手袋と、同じく太腿までを覆う黒いロングソックスを履いている。また、長手袋の手の部分はは猫耳と尻尾に合わせて、肉球になっている。
そして彼女の細い首には革製の首輪が取り付けられ、彼女が奴隷であることを強調している。
薄くなだらかな胸も、陰毛を刈り尽くされた陰部も晒しながら、手足の肌を隠されたその姿は、彼女の高貴で小生意気な顔立ちと合わせて、倒錯的な色香を醸し出している。
「さてと、じゃあそろそろこいつに薬を飲ませろ」
「……絶対にいつか後悔させてやるわ」
ピエールを射殺さんばかりに睨みつけるヘルトルーデは、メイドから手渡された小瓶を飲み干す。
そして変化はすぐに現れた。
「っ……！　これは…っ!?」
「ああ、言い忘れてたがその薬は牝奴隷を確実に妊娠させるために、排卵させるだけじゃなくて、強制的に発情させるんだ。
まあ簡単に言えば、御主人様のチ〇コが欲しくて欲しくてたまらなくなるって訳だ」
「っ～～!!」
白い肌をピンクに染め脚をモジモジとさせながらも、赤に瞳に悔し涙を湛えてピエールを睨みつけるヘルトルーデ。ピエールはその姿をニヤニヤと眺めながら、ヘルトルーデを更にさらなる恥辱を与える

言葉を告げる。
「さてじゃあそのまま、かわいくおねだりしてもらおうか？
あの大使からちゃーんとおねだりの台詞も教えて貰ったんだろ？」
「なっ…誰がっ!!」
羞恥に顔を赤く染めピエールに逆らおうとするヘルトルーデにピエールが素っ気なく告げる。
「なんだよ逆らうのか？　別に今からお前を貧民街に放り込んでやってもいいんだぜ？」
「ひっ…や、やめて！　お願いします！」
強制的に排卵させられ発情した状態で、貧民街に放り込まれた自らの末路を想像したヘルトルーデが、顔を青ざめさせる。
「だったらとっととおねだりしろ。　俺様の子種を恵んでやるんだ。下手なおねだりしたら貧民街にぶち込んでやる」
「……コロシテヤル」
そしてヘルトルーデは羞恥に手足を震わせながら、神聖王国の大使に教えられたおねだりをピエールに披露する。
肉球を付けた両手を顔の横に掲げ、手首をあざとく折り曲げる。そして腰をくねらせ尻尾をフリフリと振る媚びたポーズで、ピエールに媚びた台詞を告げる。
「ご…ご主人様、どうかヘルトルーデのはしたない雌猫マ〇コの初めてを、その逞しいおチン〇ンで奪ってほしい…にゃん。　へ…ヘルトルーデが大事にとっておいた公爵家の跡継ぎ卵子に、ご主人様の濃い精液をぶっかけて、に…妊娠させてほしい……にゃん」
ヘルトルーデはその切れ長な赤い瞳から悔し涙を流しながら、媚びるような笑顔で必死にピエールにアピールする。
高貴でプライドの高い美少女の惨めで卑猥な姿をニヤニヤ嘲笑いながら眺めたピエールはその股間の逸物を力強く隆起させ、ヘルトルーデを褒める。
「ひゃはははは、いいぜえ。　お望み通りしっかりと孕ませてやるよ！　喜べ、お前の産んだ子供はちゃんと、ファンオース公爵家の跡取りにしてやるからよ！」

「う…うう……」
公国の跡取りとして、そして女としてこれ以上ないほどの恥辱を味わい、唇を血が出そうなほど噛み締めたヘルトルーデは、涙を流しながらピエールを睨みつける。それでも現実を受け入れ、ピエールに抱かれようも体の力を抜くが…。
「何してやがる、とっととベットに上がれ。　俺様の子種が欲しいんだったら、自分で跨って腰を振れよ」
「な…!?　そっそんなことできるわけ…」
「なんだあ？　さっきのおねだりは嘘だったのか？　じゃあやっぱり貧民街にぶち込むしかねえなぁ！」
ベットに仰向けに寝そべったピエールが、躊躇うヘルトルーデを脅す。
この男なら容赦なく自分をこの世の地獄へ送り込むと確信したヘルトルーデは、羞恥に身を灼かれながらベットへ登り、そのスラリとした美脚でピエールの腰を跨ぎ膝立ちになる。
「なんだよ、生意気な態度だったくせにもうそんなに濡らしてやがんのか」
「う、うるさいわね！　あ、あの薬のせいよ！」
ヘルトルーデの、胸の薄さを除けば十二分に艶めかしい肢体を下からのアングルで眺めたピエールが、彼女の無毛の割れ目から溢れた愛液が彼女の太腿を伝って黒のロングソックスまで濡らしているのを目敏く指摘する。
恥ずかしげに顔を逸らすヘルトルーデの態度に嗜虐心をくすぐられたピエールが、ヘルトルーデに新たな命令を下す。
「へえ、だったらご主人様がしっかり確認してやるよ。おい、もっとこっちによれ！」
「っ…、わかりました…」
もはやピエールの命令に逆らう気力が無くなったヘルトルーデは、素直に体をピエールの顔の上に移動させる。
ピエールの顔の上に、ヘルトルーデのピッタリと閉じた未使用の割れ目が晒される。胸のせいで幼く見られがちなヘルトルーデの女陰

は、同い年のアンジェと比較しても十分女性らしく成熟している。むしろ、本来ならアンジェより濃い陰毛で覆われていた事を思えば女性器の成熟具合ならヘルトルーデに軍配が上がるかもしれない。
　そんなヘルトルーデのピッタリと閉じた小陰唇からは、薬の影響で発情したことで、トロトロと愛液が流れ出している。しかも間近で他人に凝視されたせいか、小陰唇の合わせ目から充血したクリトリスが顔を出している。
「へえ、子供みたいな胸のせいでここももっと子供みたいかと思えば、なかなか通して色気のあるマ〇コじゃねえか」
「う…うぅ……見ないでよぉ…」
　自らの最も秘すべき場所を身勝手に品評され、ヘルトルーデは悔し涙を流しながら弱々しく抗議する。
　そんなヘルトルーデの様子を楽しみながら、ピエールはより彼女の体を味わう為に、彼女の体に手を伸ばす。
「そろそろこれはいらねえなあ」
「あひん…」
　ピエールがヘルトルーデの尻穴に突き刺さったままだったアナルディルドーを引き抜くと、ヘルトルーデが鼻にかかった喘ぎ声を漏らす。
「なんだ？　ケツの穴で感じてやがんのか？」
「だ…誰が！　…はうっ!!」
　思わず抗議の声をあげようとしたヘルトルーデは、ピエールに愛液で濡れそぼった秘処を舐められたことで抗議を中断され、再び情無く喘ぎ声をあげる。
　ジュルジュルと、恥ずかしい分泌液を啜られ、舌で膣口の入口を舐めあげられる。その刺激が新たな愛液の分泌を促進し、酸味と塩味が混じった粘性の高い液体がピエールの舌を楽しませる。
「ひゃはは、いいモン食ってきただけあって美味い愛液だ。　そこらの娼婦の臭いアソコと違って、匂いもいいな！」
　ヘルトルーデの白い尻を鷲掴みにして、ピエールはヘルトルーデの股間に顔を埋めながらその女性器の品評を行う。

「ひぃいんっ…し、舌…だめぇぇ…」
「じゅるっ…ちゅ……少しジョリジョリするな。さっき剃ったばっかりなのにもう毛が生えてきてるぞ？」
「い、言わないでぇ…」
味や匂いどころか、陰毛の生え具合まで言及されたヘルトルーデは、恥ずかしさのあまり顔覆っててしまう。
だがその程度では、ピエールの彼女への辱めは止まらない。
「きいいいっゃ、ひっんんんんっ！」
「ひゃはは、豆を噛まれただけでイッちまうとは、よっぽど溜め込んでたのかぁ？」
勃起したクリトリスを甘噛されたヘルトルーデは、腰を痙攣させ嬌声をあげて絶頂させられてしまった。プシャっと股間から潮を吹きピエールの顔を汚したヘルトルーデはもはや脚に力は入らず、前のめりに倒れ込んでしまう。
「おいおい、ご主人様の顔を汚した挙げ句、勝手に寝ようとするたあ、奴隷の自覚がないのか？」
ペシンと、白い肌に赤く跡がつくほど強くヘルトルーデの尻を叩いたピエールがヘルトルーデを咎める。
「ご、ごめんなさい…」
「まあいい。そらだいぶあそこも解れただろ？　早く俺様のモノを咥え込めよ」
「は、はい…ご主人様……」
ヘルトルーデの謝罪を鷹揚に受け入れると、ピエールがヘルトルーデに再び自分から挿入するよう促す。
抵抗する気概を完全に削がれたヘルトルーデはよろよろと立ち上がり、再び硬く勃起したピエールの剛直の上に膝立ちになった。
股間からは止めどなく愛液が溢れ、ポタポタと真下にそびえる自らの処女をこれから奪う肉柱を濡らしている。
「おら、とっとと腰を降ろせ」
「わ…わかってるわよ……腰が、震えて…」
脚に力が入らないのか、ヘルトルーデはグラグラと腰を揺らしなが

らも、片手でピエールの剛直を支え、ゆっくりと腰を降ろしてゆく。
クチュリと、ピエールのペニスの先端がヘルトルーデの膣口へ口づけする。一瞬ビクリと、怯えるた表情で腰を震わせたヘルトルーデだが、諦めたように表情を消し、淡々とピエールの剛直を今まで誰も受け入れたことのない自らの胎内へ導こうとする。
メリメリと、ピエールのエラの張ったペニスの先端が、ヘルトルーデの未開拓の狭い膣内をかき分けながら侵入していく。そして少し進むと、それ以上ペニスの侵入を防ぐ膜に到達した。
「っ……！」
「おっ、ちゃんと膜はあるみたいだな。　とっととぶち抜いてやってもいいが、それじゃあ面白くないな」
一思いに腰を下ろそうとしたヘルトルーデの腰を、ピエールが掴み阻止する。そしていやらしい笑みを浮かべながら、ヘルトルーデにさらなる恥辱の命令を下す。
「おい貧乳女、折角俺様が膜を破ってやるんだ。ちゃんとおねだりしろよ」
「なん…ですって……こ、この外道…！」
ただでさえ、本来なら将来を誓いあった相手に捧げるはずだった純潔をこんな惨めな形で失おうとしている上に、恥ずかしいおねだりをして奪って貰おうとするなど、プライドの高いヘルトルーデにとって耐え難い恥辱だ。
そしてそれがわかっているからこそ、彼女の心を完全に折るためにピエールは命令したのだ。
「とっととしろよ。別にいいんだぜ？　俺様はお前が俺の種で孕んでも、そこらの貧民の種で孕んでも？どっちにしろちゃんとお前の子供をファンオース家の後継者にしてやるからよ！」
「っ～!!」
例え家臣に売られたとしても、彼女にとってファンオース家は彼女自身のアイデンティティの根幹だ。憎い相手とはいえ共和国の名門貴族であるピエールの子供であればまだしも、誰ともわからない貧民の子供に大切な家を継がせるなどあってはならない。

２つに束ねた髪が逆立つほどの怒りに震えながらも、もはや選択する自由すら失った彼女は悔し涙で頬を濡らしながら、再びピエールへ媚びるための台詞を紡ぐ。
「ご…ご主人、どうかヘルトルーデが１７年間大切にとっておいた処女膜をこの逞しいおチン〇ンで貫いてほしい…にゃん。　め、雌猫ヘルトルーデは早くご主人のおチ〇チンで大人の女になりたい……にゃん」
最早、元女公爵としてのプライドを粉々に砕かれたヘルトルーデは羞恥に震えながら必死にピエールへ媚びたおねだりをする。
「いいぜ、はしたない雌猫を俺様のモノでしっかり大人にしてやるよ！」
「あ…っっっ…！痛っ…ひぃ゛！んん…っ♡っ゛」
メリメリと、ヘルトルーデの処女膜を破ったピエールの逸物はそのままヘルトルーデの狭い膣内をかき分け、その最奥の子宮口まで到達する。
ヘルトルーデは破瓜の痛みに背中をのけ反らせ、口をパクパクさせながら喘ぎ声を漏らす。
「はは、処女だけあってスゲえ締まり具合だ。　俺様としたことが入れただけでイッちまいそうだったぜ」
初めて男のモノを受け入れたヘルトルーデの膣肉は、自らの初めてを奪った雄の形を忘れないためだと言うように、ピッタリとピエールの剛直に吸い付き、その熱い剛直を締め上げる。
今までのヘルトルーデの生意気な態度と異なり、従順なヘルトルーデの膣内に気を良くしたピエールは、しっかりと彼女の胎内に自分のモノの形を覚えさせる為に、純潔を奪われた証の鮮血を流す彼女の膣口に、自らの逸物を根本まで突き込み、腰と腰を密着させる。
その動きに、排卵し自らをはらませる雄を心待ちにしていた媚肉は従順に反応し、自らの中を占拠する剛直を愛液のシャワーで歓迎し、射精を促す為にキュウキュウと締め上げる。
更に、排卵し受精の準備の整った彼女の子袋の入り口から、より粘度の高いとろりとした粘液が分泌され、ピエールのペニスの先端を刺

激する。
「はぁ…はぁぁ…っん！」
「ひゃはは、入れただけでもうイきそうになってやがるな。　ついさっきまで処女だったくせに淫乱だなおい」
「ち、違うのぉ…これは薬の…」
　ヘルトルーデは力なく抗議するが、子宮口を下から突き上げられ、狭い膣内をペニスで拡張される快感に逆らうことはできず、だらしなく涎を垂らして喘いでしまい、ついには脚に力が入らなくなりピエールの胸の中に倒れ込んでしまった。
「なんだよ、ご主人様の体が恋しいのか？」
「だ、誰があんたなんかの…ちゅううぅん!!?」
　生意気に口答えしようとするヘルトルーデの唇をピエールの唇が塞ぎ、舌がヘルトルーデの口腔内へ侵入する。無遠慮なピエールの舌がヘルトルーデの口腔内を舐め回し、ピエールは彼女の甘い唾液を味わう。
　無理矢理処女を奪った相手に、ファーストキスまで奪われたヘルトルーデは、もはや女としての尊厳を粉々に砕かれ、されるがままに口腔内を犯される。その刺激が、更に彼女の膣肉を活性化させ、より強くピエールのペニスを締め上げる。
「なんだ、キスされて感じてやがるのか？　すげえ締め付けだぜ？」
「う、うぅ…早く出してよぉ」
　この屈辱的な境遇を早く終わらせたいヘルトルーデが、ついに弱音を漏らす。だがその言葉を聞いたピエールは、彼女に同情するどころか、より彼女を責め立てる手立てを思いつく。
「そうだな、せっかくの貧乳女の初体験兼初妊娠だ。　もっと盛り上げねえとなあ！」
「も、もうやめてぇ…」
　泣きながら懇願するヘルトルーデの願いも虚しく、ピエールは新たな命令をヘルトルーデではなく、既にアンジェの口でイかされ、情無くペニスを曝け出したままのユリウスに告げる。
「おい馬鹿王子、とっととこっちに来い」

「な…何をするつもり…!?」
「安心しろ、忘れられない初体験にしてやるよ」
若干噛み合わない会話をしている二人の所に、話すことを禁じられたユリウスが、血走った目をして現れる。

一度アンジェの口で射精させられた彼の逸物は、ヘルトルーデの痴態を間近で見ることで再び硬さを取り戻している。

もしも許可がでれば、今すぐにでもヘルトルーデを犯しそうな雰囲気だ。
そんなユリウスを目の当たりにして、ピエールはヘルトルーデの白く柔らかな尻肉を両手で鷲掴みにし、尻肉を左右に広げる。
そうすることで、可愛らしくヒクヒクと収縮しているヘルトルーデの肛門をユリウスの目の前に晒したのだ。
「きゃーーー!! な、何するの!? 」
「おい馬鹿王子、命令だ。 この貧乳女のケツ穴を舐めろ」
「ひっ…!? ちょっと…待っ…っあひん!!」
命令が下るや否や、ユリウスはヘルトルーデの尻肉の間に顔を埋め、彼女の可愛らしく収縮する肛門を舐め始める。
「ひゃははは、よっぽど欲求不満なんだな。 犬みたいにがっついてやがる」
「や、やだ! やめて、この変態! クズ! あぁ…は♡〝!う♡ぅう〝っ!」
初めはユリウスを罵倒していたヘルトルーデも、ユリウスの舌で尻穴をえぐられる刺激に、次第に喘ぎ声を上げるようになる。
「おお、すげえ締りだな。やっぱり尻穴で感じてんじゃねえか」
「違……〝!う…♡…う!」
ヘルトルーデは頬をピンクに染め、無意識に自らの腰をピエールに擦り付けるように動かしながら、口では否定の言葉を紡ぐ。
その様子に満足感を感じながら、ピエールは最後の仕上げを行う。
「準備はできたな。じゃあそろそろ動くぞ?」

「ひっや、やめて。　い、今激しくされたら…っ!!」
尻穴を舐めていたユリウスを蹴り飛ばし、ペニスをヘルトルーデに入れたまま、体勢を入れ替え彼女を組み敷く。
正常位の体勢になったピエールは、ヘルトルーデの細い腰を掴み、自らの腰を激しく前後させる。
ジュプジュプと、結合部からは破瓜の血を洗い流す程の量の愛液が掻き出され、ベットのシーツをビショビショに汚していく。
ヘルトルーデは自らの中を往復し、未開拓の膣肉を荒々しく耕す逸物から与えられる刺激に、最早耐えられずその可憐な口から涎を垂らしながら艶のある喘ぎ声をあげ続ける。
「は♡ぁ〝うぅぅ…♡ぅ…うぅん♡ん…♡ん♡っ！」
そして無意識に、腕はピエールの背中に回され、スラリとした美脚もピエールの腰に絡みつく。
「はぁ…はぁ……もう…だめぇ…♡」
ビクンビクンと体を痙攣させ、激しく絶頂したヘルトルーデは、ピエールに縋り付くように強く抱きつく。
雄として、ヘルトルーデのその動きに充足感を覚えたピエールは、更に激しく腰を動かす。
「だ、だめぇ…、イったばっかりで敏感にぃぃ!!」
もはや見る影もなく快感を貪るヘルトルーデの蕩けきった膣肉の締め付けに、とうとうピエールの逸物も限界を迎える。
「出すぞ！　しっかり受け取って俺様の子供を孕めよ！」
「はいぃ、ご主人の精液、たっくさんヘルトルーデの中に出してくださいぃ!!」
最奥までペニスを突き入れたピエールに、ヘルトルーデは自分から体を密着させる。そしてピエールの体で押しつぶされたクリトリスと薄い胸の頂で硬く凝った乳首の刺激で、その日最高の絶頂を迎える。
ドピュッドピュッドピュッドピュ!!!
そしてヘルトルーデの膣肉の収縮に合わせて、ピエールの剛直から彼の濃厚な精液がヘルトルーデの子宮内へ注ぎ込まれる。

ピエールの剛直で膣口に栓をされたヘルトルーデの胎内に、彼女の卵子を求める大量の精子がばらまかれた。
「あぁ熱い、熱いぃ!!　こ、こんなに出されたらに…妊娠しちゃうのぉ!!」
「ああそうだ、早く俺様の子供を孕め！」
「は、はいぃ。　ヘルトルーデはご主人の子供を妊娠しますぅ!!」
快楽に脳を灼かれたヘルトルーデは、かつての彼女なら決して言わない台詞を繰り返し、胎内を満たす精液の感触に酔う。
そんな彼女の下腹部に変化がおきる。
「な…なに……？」
「おお、やっと妊娠したか。この紋章はな、聖樹から精製した薬で妊娠した牝奴隷の証だ！」
ヘルトルーデの下腹部、子宮の真上に浮かび上がる聖樹の紋章。それは彼女が妊娠したことを視覚的にも証明し、彼女が完全にピエールに屈服した証でもあった。
震える手で下腹部を撫でるヘルトルーデは、自分がもはや取り返しのつかないところまで来てしまったことを改めて自覚し、さめざめと涙を流す。
「ヘルトルーデ…」
ユリウス達５人のペニスをしゃぶり、彼らから精液を搾り取ったアンジェは、口から垂れた精液を拭うことも忘れて、あまりにも悲惨な彼女の姿に同情の視線を送る。
無毛の股間から破瓜の血とピエールに大量に中出しされた精液を溢れさせ、下腹部に妊娠の証として紋章を刻まれたヘルトルーデは、もはや体を隠す気力も無くし、涙でその美貌を濡らし続ける。
「さーて、流石にヤり過ぎて疲れたぜ。おい、こいつらをきっちりきれいにしておけよ。それにこの貧乳女は俺様の子供を孕んだんだ。丁寧に扱えよ。」
メイドに命令を下したピエールは、満足げに部屋を後にした。
部屋には、自分達の境遇を嘆く美少女達の啜り泣きだけが響き続けた……。

――――――――――――――――――――――――――――――
「……なんだこれ」
「あらおはようマスター、よく眠れたかしら？」
クレアーレが開発した睡眠導入薬、副作用として現実のような夢を見るその薬の改良に成功したと告げられたリオンは、彼女に言いくるめられその薬の効果を再び体感することになった。しかも効果を確認するためと頭にヘッドギア型の機械まで取り付けられて。
「どうだった？　あの薬を改良して、その頭の機械と組み合わせることでマスターの性癖に合わせた夢を見れるようにしたのよ！」
「…そうか、俺がピエールになってたのは？」
「だってマスター、自分が女の子抱くのと同じくらい知り合いの女の子が他人に抱かれてるの見るのが好きでしょ？　せっかくだから一粒で２度美味しい設定にしてみたわ！」
リオンは先程まで見ていた夢を思い出す。アンジェやヘルトルーデの肌の感触や匂いまで鮮明に思い出すことができた。
だが……。
「クレアーレ、お前は凄い。正直見直した。」
「でしょでしょ！　これでアーレちゃんの件はチャラに…」
「だが!!　これはなんだ!!」
リオンは自分のパジャマの股間部分を指差す。そこは眠っている間に大量に出されたリオンの精子でガビガビになっていた。
「………不可抗力よ」
「巫山戯んなーーー!!!」
その日、リオンの怒りの咆哮が学生寮に響き渡った。

ちなみに、その後もリオンは何度かこの薬を利用することになる。

更に余談だが、数年後の王宮で黒髪の側室に猫耳を着けてもらおう

と土下座で懇願する若い国王の姿が家臣に目撃されることになる事を、リオンはまだ知らない。

共和国完全勝利ルート　完

共和国完全勝利ルート（クラリス落札編）

アルゼル共和国がホルファート王国から差し出された貴族女性達の中で、アンジェやミレーヌのように処女であったり、王妃として大きな付加価値のある戦利品達は、六大貴族等の大貴族や富豪たちの集うオークションで落札された。

だが、王国の貴族女性、特に中小貴族の令嬢達は日常から専属使用人を侍らせ、下半身事情に関してかなり奔放だった為、商品価値が低いということで貴族向けではなく、娼館やそこまで裕福でない貴族達向けのオークションに出品された。

その中には王国の王子や高位貴族のを誑かしたという噂の悪女や、王国の英雄という触れ込みだったが六大貴族の跡取り達に殺された外道騎士の姉もいたが、体が貧相だったり性格が酷すぎたりと、あまり高値はつかなかった。

だがそんな中で、ほぼ唯一最大手のオークションに匹敵する値のついた商品がいた。

ーーー共和国某所　娼館向けオークション会場ーーー

壇上に立つ司会が、その場に集った観客達に謝罪する。

「えー、先程は大変失礼致しました。前評判ではかの王国の王子を含む5人の男を誑かした稀代の美少女という触れ込みだったのですが、まさかあのように貧そ…失礼、慎ましやかな身体つきとは知らず皆様を騙すような宣伝をしてしまいました」

司会が深々と頭を下げる。この場に集った観客はいずれも共和国の歓楽街で娼館を運営する経営者なので、あまり品がなく騒ぐことはないが、場の空気はあまり良くない。

そんな白けた雰囲気を払拭するため、司会は出品の順番を入れ替え、次に目玉商品を観衆に告げる。

そしてその商品をより高値で落札してもらえるよう、準備も整えさせた。

「それでは皆様、次の商品を紹介させて頂く前に、我が共和国に王国の

専属使用人組合から献上された素晴らしいロストアイテムの効果をご覧いただきましょう！」
司会が〝パチン〟と指を鳴らすと、壇上に巨大なスクリーンが現れる。そしてそのスクリーンに、共和国が王国で手に入れたロストアイテムの効果により、そのロストアイテムが記録していた映像データが投影された。
『あぁぁんっ…♡　もっと、もっと激しくしてぇ…っ♡』
スクリーンの中で、清楚な顔立ちのオレンジ色の髪の美少女が腰を振っている。
上半身は高貴な貴族令嬢らしく高価なドレスを纏いながら、下半身は下着すら剥ぎ取られその清楚な顔に見合わない濃い陰毛を晒し、本来ならその下に隠されているはずの秘裂に獣人の極太のペニスを咥え込んでいる。
スクリーンの中で彼女は顔を快楽で赤く染め、涎を垂らしながら、逞しい獣人の上に跨り、結合部から愛液を飛び散らせながら淫らにその括れた腰をくねらせ、獣人のペニスを貪る。
その映像に、先程まで白けていた観衆は目を剥き、これから出品される映像の中の美少女に期待を募らせた。
「それではご紹介致しましょう！　アトリー子爵家ご令嬢でありながら、獣人の専属使用人に調教され情けない映像を撮影された、クラリス・フィア・アトリー嬢です」
己の痴態が映され続けているスクリーンの下に、映像と同じ服、こちらはキチンと下半身にスカートを纏ったクラリスが現れる。
かつてリオンと出会った頃はやさぐれ、不良染みた格好をしていた彼女はしかし、オークションの担当者達によってかつて身持ちを崩す前のような清楚な雰囲気の衣装を着せられ、髪や化粧もその頃の姿に近づくよう整えられた。
自分の黒歴史が大勢の目に晒される恥辱に震えながらも、奴隷紋の効果により現時点の主人であるオークションの司会に逆らえず、過去のような清楚な姿と表情を保って観客へ微笑む。
「か…会場の皆様、クラリス・フィア・アトリーです」

そしてスカートを摘み、厳しく躾けられた貴族令嬢に相応しく優雅に一礼する。
そんな彼女の後ろで、大画面のスクリーンの場面が切り替わる。
『お、お願いします…、どうか私の淫らなオマ〇コに、貴方の太くて逞しいおチ〇ポを挿れて下さい♡』
全裸のクラリスが天蓋付きのベットの上で、その白く長い脚をM字に開き、濃い陰毛で覆われた陰唇を、自らの白い指で開いている。処女のようにピッタリと閉じていた秘裂が開かれ、既に愛液でしっとりと濡れたサーモンピンクの膣肉が晒される。
『おやおやお嬢様、まだ触られてもいないのにオマ〇コがドロドロに蕩けていますよ?』
『し、仕方ないでしょう!? もう我慢出来ないの、早くぅ!!』
媚びるような笑顔で、ヒクヒクと肛門を収縮させながら淫らにおねだりをするお嬢様の姿に、観客達が目を血走らせる。
羞恥と屈辱で気を失いそうになりながら、クラリスはそれでも忠実に、司会から事前に渡された台本通りの台詞を口にする。
「皆様、私はこの様に貴族令嬢で有りながら獣人様の逞しいおチ〇ポに負けて惨めにおねだりするメス犬です」
クラリスは悔し涙を流しながら、それでも口元だけはかってのように微笑を浮かべ、己の尊厳を破壊する台詞を続ける。
「お…オマ〇コもお尻の穴も調教済みの淫らなメス犬で御座いますが、私をお買い上げの御主人様には誠心誠意お仕えさせて頂きます。ですからどうか…この惨めなメス犬を競り落として、私の淫らな雌穴にお情けを下さい…」
そしてクラリスは再びスカートを摘む。だが先程のように挨拶をするために僅かにスカートを広げるのではなく、よりその手を上へと挙げてゆく。
ガーターベルトに吊り下げられた清楚な白いニーハイソックスが顕になり、更にその上の、ソックスに負けないほど白くムッチリと脂の乗った太腿が姿を顕す。
観衆達はゴクリと唾を飲み込む。

そしてクラリスの手は止まらず、スカートを更にたくし上げ、ついにその美脚の付け根を衆目に晒す。
パンツを履かず、敢えて手入れをさせてもらえなかったもっさりと生い茂る黒い陰毛を、そしてその陰毛に隠されたまるで処女のようにピッタリと閉じた陰唇が、ギラギラと血走った目をした観衆達へ晒された。
そのタイミングで、司会が宣言する。
「それでは皆様、１０万から競売スタートです!!」

そして娼館主達の壮絶な競り合いの末、クラリスは１５００万ディアというこのオークションの最高値で落札され、先に落札されていたマリエやジェナと共に娼館で高級娼婦として働く事となった。

もしもあの世界に盗撮機能のある機械が存在したら

番外編（クラリス先輩編）

神聖王国で、ローランドの隠し子という屈辱的な噂を必死に否定するため走り回り疲弊し切ったリオンは、癒やしを求めて再び、クラリスと獣人達の情事が記録された映像資料を見ようとしていた。

「マスターも飽きませんね」

「うるせー、こんなに苦労してるんだ。偶には癒やしが欲しいんだよ！」

「リビア達に頼めばいくらでも…」

「それとこれとは話が違うんだよ！」

そう言ってルクシオンに、リビア達が部屋に来ないか見張らせたリオンは、映像資料を鑑賞しようとするが…。

「ふあぁ、流石に疲れて…眠……」

何が記録されているのか確認しないまま、リオンの意識が遠のいていく……。

―――――――――――――――――――――――――

アトリー家の所有する飛行船の一室、アトリー家の令嬢であるクラリスに割り当てられた豪華な船室で、クラリスは自らの服装を確認していた。

白いワンピースとお揃いのやや大きめの帽子をかぶり、髪も丁寧に整える。見た目はバカンス中の清楚なお嬢様のようだ。

姿見の前で服に乱れがないか何度も確認し、これから会う相手との会話を想像しながら頬を緩ませるクラリスの耳に、部屋をノックする音が届く。

…その音を聞いたクラリスは、辛そうに眉を顰める。

「開いているわ」

その声音は、極力感情を廃した硬いものだった。

「失礼します」
扉を開けて入ってきたのは、スラリとした長身の使用人だった。
だが、使用人の目には主に対する敬意はなく、獲物を狙う肉食獣のようなギラついた光が宿っている。
「公爵様に会うために随分とおめかししたようですね」
「…貴方には関係ないことよ」
帽子を帽子立てに置いたクラリスは彼に背を向け、素っ気なく答える。
「ククク、大方どうやって公爵をその体で籠絡しようか考えていたのでしょう？」
「う…うるさいわよ。　用が無いならとっとと出ていきなさ…っ!?」
使用人の言葉に思わず振り返ったクラリスは、いつの間にか背後に迫っていた使用人に無理矢理唇を奪われる。
「っんん～っ!!」
はじめは使用人を引き剥がそうと抵抗していたクラリスだが、口の中に侵入した使用人の舌に口腔内を蹂躙され、次第にその強気な目がトロンと蕩け始める。
そしてあろうことか、自ら舌を絡め乱暴に自分の口の中を暴れまわる使用人の舌を歓迎し、彼の唾液を飲み下す。
そして二人の唇が離れる頃には、クラリスの顔は熱に浮かされたように上気し、その唇からは涎が垂れていた。
「ふふ、素直じゃありませんね」
「っ…！誰がっ！」
嘲笑うような使用人の態度に、正気に戻ったクラリスが怒りを顕にした目で睨みつける。
だが使用人はニヤニヤ笑いながら、耳につけた自らのイヤリングに触れる。すると先程まで人間の見た目だった使用人の頭に耳が生え、顔つきも精悍なものに変わる。
「欲求不満なのでしょう？　こうして専属使用人だった私達を呼び戻す位に」
「そ、それは貴方達があんな映像を…っ！」

講義しようとしたクラリスの唇を、普通の人間に変装していたかつての専属使用人である獣人に再び自らの唇で塞ぐ。
そしてその長い舌でクラリスの口腔内を蹂躙しながら、今度はクラリスの清楚なワンピースの胸元をそのゴツゴツした手で弄る。
「っん、や…やめっ！」
「もう乳首が勃ってきていますよ？　キスだけでもう発情するとは随分と淫乱になりましたね」
「っ～～～!!」
獣人の舌使いに陶然としながらも、自らの胸を弄る獣人に抵抗しようとしたクラリスは、その豊かな胸の頂で固く凝った乳首を摘まれ、声にならない声をあげ、膝をガクガクと震わせる。
そして獣人が離れると、クラリスはクタリと床に座り込む。
ハァハァと荒い息を吐き項垂れるクラリスの目前に、エラが張り静脈の浮いた獣人の剛直が突き出される。
「さあ、いつものように舐めてください」
「……わかったわ」
悔しそうに上目遣いに獣人を睨んだクラリスは、しかし口調と目つきとは裏腹に、手慣れた手付きで獣人の剛直を掴み、その先端にキスをする。
チロチロと、クラリスの赤い舌が獣人のペニスの先端を這い先走り液を舐め取る。そしてクラリスの白く透き通るような左手が、獣人の睾丸を優しくマッサージし、彼女の舌が獣人のペニスの裏筋を舐め上げる。
そして更に硬さの増したペニスの幹を、クラリスの右手が掴む。左手は睾丸をマッサージしたまま、自らの涎で濡れたペニスをクラリスは右手で扱く。
先程までクラリスの痴態を嘲笑っていた獣人がその手管に思わず腰を震わせ、ゴクリと唾を飲み込む。
その様子に少しだけ溜飲を下げたクラリスが怪しく唇を吊り上げ、そしてその美唇が、獣人のペニスの先端を飲み込む。そして獣人の平均より遥かに長く太い剛直を半ばまで飲み込んだクラリスは、頬を窄

めながらゆっくりと唇からペニスを抜き取ってゆく。その過程で彼女の舌は獣人の逸物の裏筋や亀頭、そして鈴口を舐めあげ刺激する。そして唇からペニスが抜けるギリギリのところで、再びペニスを今度は根本まで咥え込む。

ちゅぷちゅぷと卑猥な音を響かせながら、何度もクラリスの頭が獣人の腰の前で前後し、彼女の美唇が獣人のペニスを唾液でコーティングしてゆく。

「お…おぉ…初めての頃に比べると随分…上達しましたね、お嬢様」

「……煩いわね、さっさとイきなさい」

上目遣いに獣人を睨めつけながら、更に彼女の頭は速度を上げて前後運動を繰り返す。そして獣人のペニスが更に一回り大きくなったところで、彼女の頭を獣人が強く掴み、彼女の美貌を自らの腰に押し付けるようにして、ペニスを彼女の口の奥まで突き込む。

「出しますよ、お嬢様っ!!」

「っ〜〜〜!!!」

ドピュッドピュッと獣人の逸物から大量の精液が放たれ、クラリスの口の中を満たしてゆく。クラリスは頬を膨らませ、その大量の精液をすべて口の中で受け止めた。

獣人がペニスを抜き取ると、クラリスは口の中に溜まった精液を零さないようにしながら、その口をてで塞ぐ。そしてコクコクと、苦しそうにしながらも喉を鳴らしてその決して美味ではない、雄の欲望の証を飲み干す。

「…相変わらず酷い味。苦いし臭いし、ネバネバして飲み込み辛いわね」

「その割には全て飲み干したではないですか」

「…だって零したら服が汚れるもの」

「ああ、折角おめかしして公爵にお会いするつもりでしたからね。でも公爵も、まさか貴方がここまで淫乱だとは夢にも思わないでしょうね」

「っ…黙って!」

ハンカチで唇を拭ったクラリスが立ち上がり獣人を睨みつける。

「も、もう満足したでしょう!?　早く部屋から出ていきなさい！」
「ほお、いいのですか？」
「何が言いたいの…？」
「いえ、お嬢様こそ公爵に合う前に一度発散しておかなければ、こんなに濡らしているところを公爵に見られたら幻滅されるのでは」
「きゃあぁぉぁ!!　何を!!?」
　獣人がいきなりクラリスのワンピースのスカートをたくし上げ、彼女のスカートの中、スラリとした白くそれでいて脂ののった太ももの付け根を外気に晒す。
　彼女の股間を覆う、清楚な服装にマッチしたシンプルな白いパンツは先程の獣人の愛撫とフェラチオでぐっしょりと濡れて肌に張り付き、その下にある黒い陰毛で覆われた女陰が透けて見える程だった。
　クラリスはすぐにスカートを抑え、獣人から距離をとる。
　羞恥で耳まで赤くしたクラリスが獣人を睨みつけるが、獣人はニヤニヤ笑いながら彼女に近づいてゆく。
「さあお嬢様、服を汚したくないのならもうそんな服は脱いでしまいましょう。可愛くおねだりできたら、お嬢様が大好きなこの自慢の逸物で天国を見せて差し上げますよ？」
「くぅ……わかった…わよ…」
　クラリスは悔しそうに唇を噛む。だが発情した体で密かに想いを寄せる男の前にでる勇気はなく、獣人の思惑通り、自らの服に手をかける。
　シュルシュルと、クラリスが衣擦れの音と共に清楚なワンピースを脱ぎ捨てる。そしてその豊かな胸を覆う白いブラジャーも、ビショビショになって最早下着の意味を成さなくなったパンツも脱ぎ去り、一糸纏わぬ姿を晒した。
　そして壁に手を付き、その白くシミひとつないむっちりとした尻を獣人に向ける。そして足を軽く広げ、黒く濃い陰毛で覆われた膣口と、その上でヒクヒクと物欲しそうに収縮する色素の沈着した不浄の穴を獣人の目前に晒した。

「お…お願いします。どうかわたしのこの淫乱な穴を、貴方の逞しいモノでいっぱいにして…ください……」
羞恥心と屈辱に震え、白い肌をピンクに染めながらクラリスは獣人に、自らの処女を奪いここまで自分を淫乱に調教した男に懇願する。
かつてはピッタリと閉じていたその割れ目は、度重なる調教で形が崩れ、ピンク色だった膣内も少し色素が沈着している。そして膣内からはトロリとした愛液がとめどなく溢れ出し、陰毛がベッタリと彼女のふっくらと肉のついた肉土手に張り付き、彼女の清楚な見た目に反した淫猥さを際立たせている。

「ふっふふ、そこまで言われたら仕方がないですね。ではっ!!」
「きっ!・ゃ♡っ、っひ…いっ♡ん…っ!」
クラリスの魅惑的な尻を鷲掴みにし、獣人はその剛直をクラリスのドロドロに蕩けた膣内に根本まで一気に突きこむ。獣人の逞しい逸物は度重なる調教でも狭いままのクラリスの膣内を掻き分け、先端が子宮口に押し付けられる。
その乱暴な雄の侵入に、クラリスは絶頂しその細い腰を仰け反らせる。膣肉が収縮し、自らの膣内に侵入した雄の象徴を締め付け、熱い愛液のシャワーを浴びせ歓迎する。
「挿れただけでイッてしまうとは、やはり欲求不満だったようですね。それとも、このペニスがよほどお気に入りですかお嬢様?」
「い…言わない…でぇ……
大きすぎて…ぇ、も…もう…っ」
「ええ、ええ分かっていますよ。もっと激しくですね」
「ま、まっ…ひぃ♡いう…ぅっっっ!!」
獣人は絶頂しヒクヒクと腰を震わせるクラリスの懇願を無視して、ペニスをギリギリまで引き抜いた後、再び根本まで押し込む。
エラの張った剛直で膣壁を削られ、再び子宮口を激しくノックされたクラリスははしたない喘ぎ声を上げて膣から大量の愛液を垂れ流す。
そして獣人は腰を何度も往復させ、クラリスの調教済みの淫乱な膣

内をその剛直で躾け直す。
「や♡ぁ…あ…ああ〝んん♡っ〝っ」
パンパンと獣人の腰とクラリスのハリのある尻肉がぶつかる度に、クラリスは悩ましい喘ぎ声をあげる。そして肉と肉がぶつかる衝撃で、重力に従って垂れ下がるクラリスの豊満な乳房がユサユサと揺れ、獣人の目を愉しませる。
「ここも物欲しそうにしていますね」
「きぃゃひぃ♡ぃっ!!」
獣人がピストンを中断し、腰を密着させてクラリスを後ろから抱きしめる。そしてそのゴツゴツした手でクラリスの瑞々しく豊かな胸をグニグニと揉みしだき、指先で固く凝ったピンク色の乳首を弾く。
発情し敏感になったクラリスは、その刺激だけで再び絶頂し、プシュっと結合部から潮を吹いた。
「あ…あぁぁぁんっっ!!」
「っとととと、危うくこっちまで出そうになるとは、さすがはお嬢様ですね」
強い締め付けで危うく射精しそうになった獣人は、ニヤリと笑うとクラリスの乳首を責めながら今度は彼女の耳の裏を舐め始める。
膣内、胸、耳裏と性感帯を3箇所同時に責められたクラリスは、最早恥じらいも忘れて涎を垂らしながら喘ぎ声をあげる。
「ではそろそろ出しますよ、お嬢様っ!!」
「あぁぁんっ、出して!! 中に沢山っ、お願い!!」
ラストスパートで激しく腰を振る獣人に、後ろを振り返ったクラリスが蕩けた瞳で懇願する。
完全に雌の顔になったクラリスの顎を掴み、彼女の唇を奪いその甘い唾液を吸い上げた獣人は、最後に力強くクラリスの尻に腰を叩きつけ、ペニスの先端を彼女の子宮口に密着させる。
「っ射精(で)る!!」
ドピュドピュドピュッ!!!
ピッタリと子宮口に密着した鈴口から発射された獣人の特濃の精液が、クラリスの子宮口を越えて彼女の子宮の中を満たす。

たっぷりと子宮の中に精液を注がれたクラリスは最後は声にならない喘ぎ声を上げてその日最高の絶頂を経験し、よだれを垂らしながら蕩けた雌の顔をしながら体を震わせる。
そして獣人が半ば萎えたペニスを彼女の膣内から抜き去ると、支えを失ったクラリスは尻を上げた屈辱的な姿で床に崩折れる。
パックリと開いた彼女の膣内からは、彼女の愛液と獣人の精液の混合液がトロリと流れ出していた。
その姿を映像を精密に記録するロストアイテムで撮影しながら、獣人は嘲笑う。
「ふふっ、こんな姿を公爵に見られたら幻滅されるでしょうね」
「う…うぅ……」
涙を流し、だが体に力が入らず恥ずかしい姿を隠すことも出来ないクラリスは悔しげな声を漏らしながら意識を失った…。

ーーーーーーーーー
「っは!?!!」
目を覚ましたリオンは慌てて映像資料を確認する。
そこには机から落下し、最早再生出来ない位に壊れてしまった映像資料があった。
「や、やべ…寝ぼけて壊しちまった!?」
「マスター…」
「ってルクシオン、いたんだったらむざむざ壊すなよ!」
「マスターが寝ぼけて机から払い除けたのでしょう。いくら私が優秀でもマスターの突拍子のない行動はどうにもできません」
「お、お前なあ!」
嫌味な相棒の言葉に言い返そうとするリオンだが、目を覚ます直前の記憶が気になりルクシオンに問いかける。
「…なあルクシオン、この映像資料って2年前のクラリス先輩の動画だよな?」
「当たり前でしょう。それにマスターはその動画を何度も見ているで

しょう？」
「そう…だよな…」
「…？」
　ルクシオンは主の不審な様子に疑念を抱きながらも、テキパキと壊れた映像資料を回収する。
「ではわたしはこれで。マスター、明日も早いのですからそろそろ寝てください」
「…ああ、そうさせてもらうぜ」
　リオンは頭を振って疑念を打ち消す。
　まさか先日会ったクラリス先輩が、未だに獣人の調教を受けているなどあり得ない…と。

乙女ゲームの世界はモブに優しい？①（リビア＆アンジェ編）

「ちゅ…ちゅぅ…んっ…ふふ、リオンさんのここ、すっごく大きくなってますよ？」
「はぁ…はぁ…ん…ちゅぅ…ああ、さっき出したばかりなのにもうこんなになるとは…」
目の前で二人の美少女が競うように俺、本来ならただのモブキャラだったはずの〝リオン・フォウ・バルトフェルド〟の逸物を舐めている。
本来なら決して起こるはずのないその極楽のような光景と、下半身の蕩けるような快感に脳を灼かれながら俺は思った
（どうしてこんなことになったんだろう…）

時は少し遡る。

――――――――――――
――――――――
―――――

修学旅行からの帰路、ファンオース公国の襲撃を受けた俺たちは、色々あってファンオース公国の英雄〝黒騎士〟を倒し、ついでに襲撃してきた奴らの飛行船と鎧を根こそぎ奪うことになった。
「はぁ…疲れた」
戦後処理、というか最後にルクシオンが派手に魔物を殲滅したのを誤魔化すのに神経を使ったせいで疲れた。さっさと部屋で寝よう。
とにかく早く部屋で休みたい俺を何故か邪魔する掃除用ロボを押しのけて、何故か膨らんでいたベットの布団を剥ぎ取った俺の目の前に、天国が広がっていた。
「な…あ、アンジェ…リビ…!?」

俺の目の前で、二人の下着姿の美少女が無防備に眠っている。
一人はアンジェリカ。レッドグレイヴ公爵家のお嬢様でこの乙女ゲーム世界の悪役令嬢だ。
もう一人はオリヴィア。この乙女ゲーム世界の主人公である亜麻色の髪をした優しい性格の美少女だ。
「な、なんで二人が俺の部屋に…？」
「どうやらマスターの帰りを待っていたようですよ？
待っている間に疲労で眠ってしまったようですが」
俺の疑問に相棒である人工知能〝ルクシオン〟が、いつも通りの平坦な口調で答える。
「いやそれはともかくなんで下着姿なんだよ!!?」
「知らないのですか？制服を着たまま寝るとシワができるんですよ？シワが」
…この人工知能、やっぱり肝心なところでポンコツなんじゃなかろうか？
因みに、こんなやり取りをしながらも俺は目線を二人の下着姿から離せないでいた。
考えても見て欲しい。前世の記憶があるとはいえ今の俺は１０代半ばの健全な男子だ。しかも普段は殆ど無い女性に縁がない平凡なモブだ。
そんな俺の目の前に下着姿の美少女がいるんだ。しかも二人共、俺の好みにどストライクな巨乳な美少女なんだ。
アンジェは普段は結い上げている長い金髪が解け、寝顔も相まって普段より幼く見える。いつもの厳しく凛々しい雰囲気のギャップで物凄く可愛く見える。その上、身につけている大人びた赤い下着がズレて、その豊満な胸が零れそうになっていて、そのギリギリ感が俺の視線を引き付ける。
そしてアンジェと寄り添うように、安心した顔で眠るリビア。彼女の胸もアンジェに負けず劣らず豊かで、彼女の清楚な白い下着から覗くその深い谷間は、普段の優しく優等生な雰囲気のリビアから想像で

きないくらい色気があり、こちらからも目が離せない。
どれくらい時間が経っただろうか。１０分以上かもしれないし、ほんの数秒だったかもしれないし。ともかく、時間すら忘れて二人の寝姿に見入っていた俺に、野暮な人工知能が声をかける。
「襲わないのですか？」
「待てルクシオン、なんでそうなる⁉」
「マスターの血走った目は完全に性犯罪者のそれです。それに下半身に血流も集まっていますし、準備万端では？」
「ふざけんな、誰が性犯罪者だ!!」
「大丈夫です。二人共始めは驚くかもしれませんが受け入れてくれますよ」
ルクシオンがとんでもないことを言い始めた。確かに、いくら親しいとはいえ年頃の少女の下着姿をマジマジと見つめるなんて完全に変質者だ。いや、だがこの先一生拝めないかもしれない天国を今この目に焼き付けなければ…！
俺とルクシオンの会話がきっかけだったのだろう。スヤスヤと眠っていた二人が目覚まし、二人の姿をじっと見ていた俺と目があってしまう。
「……」
「「……」」
「……えーっと、ゴメンナサイ」
暫く無言で見つめ合った俺達だったが、最初に俺の心が折れて二人に土下座した。
（殺される…二人は許してくれるかもしれないけどアンジェパパに殺される…）
俺はガタガタと震えながら只管二人が自分の愚行を許して、それを他人に、特にアンジェパパに話さないことを神に祈った。
「え、えーっと…リオンさん、顔を上げてください」
「そうだぞリオン、確かにその…下着姿を見られたのは恥ずかしいが、恩人のお前にそんな風に土下座されたくはない」
二人が優しい言葉をかけてくれる。だが駄目だ。ここで二人の厚

意に甘えたらきっと後でアンジェパパに地獄に落される！
「情けないマスターですね。さっきまであんなに凝視していたのに…」
「うるせえ、仕方無いだろ!?
俺だって男だ、あんな綺麗な二人の姿なんて二度と拝めないかもしれないんだぞ!?」
「綺麗…ですか」
「二度と拝めない…？」
俺の不用意な発言に二人が反応する。まずい、怒らせたか!?
床に額を擦り付けたまま耳をすませると、何やらリビアとアンジェが話し合っている。
「アンジェ…リオンさんまた…」
「ああ、このままだと」
「だったら…」
「ああ…」
小声なのではっきりと聞き取れなかったが、何やらすごく真剣に話し合っているようだ。そしてどうやら話が纏まったのか、二人の視線が俺に向くのを感じた。
「リオンさん、私とアンジェから一つだけ言いたいことがあります」
「…はい」
リビアがいつになく真剣な声で語りかけてくる。ああ、きっと俺に失望して、絶縁されるのかな。そして俺はアンジェパパに…。
「リオン、いいかよく聴け。聞き逃したり、勘違いしないようはっきりと言うからな」
「…はい」
アンジェがいつになく厳しい視線で俺を見ているのが感じられる。駄目だ、怖くて顔が上げられない…。
ああ神様、贅沢は言いません。次に俺が転生したら巨乳で優しくて胸の大きい奥さんとささやかだけど幸せな生活が送れる世界がいいです…。
「リオンさん…」

「リオン…」
二人が次の言葉を発しようとして言い淀む。何だ、一体どんなお説教が…!?
そして二人は呼吸を整え、同時に言葉を発した。
「「愛しています」」
二人が同時に発言した言葉が俺の耳に届く。そっか、二人共俺のことを愛して…愛…!!!?
「そ、それって一体!?」
「言葉通りの意味に決まっているだろう」
「私もアンジェも、リオンさんのことが好きです。愛しています」
ガバっと顔を上げた俺の目に、顔を真っ赤にしてそれでも俺を愛していると繰り返し伝えてくれる二人の美少女がいた。
二人共、ベットに腰掛けルクシオンが用意したバスローブを纏っているけど、その赤くなった顔の可愛さと、さっきまでの下着姿を思い出したせいで、また股間の愚息に血液が集まる。
「だから…」
「へ…？　え……!?」
立ち上がったリビアとアンジェが土下座状態の俺を立ち上がらせ、ベットに座らせる。
「言っても分からないだろうお前に、今から私達の体を使って思い知らせてやることにした」
「な…ちょっ……!?」
そして以外と腕力が強い二人にされるがまま、俺は服を剥ぎ取られる。
ろくな抵抗もできないまま、俺は硬く勃起した逸物を、羞恥と興奮で顔を赤くしたリビア達の眼前に曝け出した。
パサリ、と二人はバスローブを脱ぎ、再び下着姿になる。
リビアとアンジェの、雰囲気こそ真逆だが、どちらも俺の好みどストライクの豊満な肢体が俺の眼の前で跪く。ベットに腰掛けた俺からだと、二人の瑞々しいバストが生み出す深い谷間が丸見えで、それを見ただけで愚息の先端から我慢汁が溢れてしまう。

アンジェが、そんな俺の愚息の先端に、その赤く艶のある唇で口づけした。
「っっ……!!?」
「ふふ、これだけでそんなに反応するとは、嬉しいが先が思い遣られるぞ？
さあリビア、お前も…」
「は…はい、アンジェ。あ…あム…っ」
ビクンと腰を震わせた俺に気を良くしたアンジェがリビアに促す。性経験に乏しいリビアは恥ずかしがりながらも、アンジェと同じようにその可愛らしい桜色の唇で俺のグロテスクな愚息の先端にキスをしてくれた。
正直これだけで射精しそうだが、男のプライドとしてそんな情けないことは出来ないと歯を食いしばって耐える。
「よしリビア、まずは私が手本を見せるから同じようにやってみてくれ」
「はい！　リオンさんを満足させるためにも、しっかり学ばせて貰いますね！」
そしてここから、俺の愚息を用いたアンジェによるリビアへの教育が始まった。初めは舌でペロペロと俺の愚息の先端を舐めた。初めは恥ずかしがっていたリビアも、なれるとその舌で俺の愚息の先端から溢れてくる汁を綺麗に舐め取ってくれる位になった。
次にアンジェは俺の愚息の幹を根本から雁首まで舌で舐め上げた。そして片手で俺の睾丸を弄び、もう片方の手で幹を扱き、手で弄っているのとは逆の睾丸をその美しい口に含む。幹だけでなく睾丸にまで満遍なく唾液を塗りつけた。そしてリビアもまた、見よう見まねながら俺の股間の愚息に同じようにご奉仕してくれる。
その後も俺はある意味体のよい教材だったのかも知れない。
そして止めに、アンジェ達二人はその妖しく濡れた舌で同時に俺の愚息を舐め回し、その瑞々しい唇で交互に俺の愚息の先端を咥え込んだ。
そしてついに俺の必死の忍耐にも限界がくる。

「っく…ご、ゴメン二人共!!」
ドピュドピュドピュドピュッッ!!!
俺の愚息の先端から大量の精液が飛び出し、二人の綺麗な顔に降り注ぐ。その濃さと量は俺の興奮を反映して今までにないものだった。
「ハァハァ…これがリオンさんの…」
「こ…こらリビア、私の顔まで舐めっ…」
そして射精し終わって萎えかけた俺の愚息を清めるようにアンジェとリビアの舌が精液を求めてうごめき、それだけでなく互いの顔にかかった精液をお互いに舐め合う。
「……（ゴクリ）」
その天国もかくやという光景に、俺の股間の愚息は再び力を取り戻す。
「ふふ、リオンさんのここまた大きくなりましたね」
「リオン、今夜はたっぷりとお前に私達がどれだけお前の事を愛しているか、教えこんでやるからな」
そして話は冒頭の光景に繋がる…。

乙女ゲームの世界はモブに優しい？②（アンジェ＆リビア編）

一度大量に射精したはずなのに、俺の逸物はむしろ射精前よりも隆々と勃起している。
大量に放出された精液は全てアンジェとリビアに舐め取られ、二人は俺の精液を満足気に飲み干した。
「リオンさん、今日は私達がリオンさんを沢山満足させてあげますね」
「ああ、今回は私達が全部してやるから、お前はそれに身を委ねればいい。
ということで、ルクシオン」
「承知しました」
「へ…？　お、おいルクシオン!?」
突然のアンジェの指示に、何故か俺の相棒のはずのルクシオンが反応する。え、何で!?
俺の周りに警備ロボが集まり俺の手足を拘束する。まさか、これって…。
「おいやめろ、や…やめてー!!」
俺は情けない悲鳴をあげながらベットに手足を拘束される。
あれ、普通逆では!?
「ご要望の通り、肝心なところでマスターが逃げ出さないように拘束しました。部屋も閉め切って朝まで邪魔が入らないようにしておくので、どうぞごゆっくり」
「ああ、ご苦労だったな」
「ありがとう、ルク君」
「てめえ裏切りやがったなルクシオン!!」
「裏切る？　私は常にマスターの為になる行動しかしていませんよ？」
「どこがだ!!?」
ベットに拘束するのが俺の為になるとかどういうことだよ!?

「ヘタレなマスターの為に涙を呑んで、こうしてお膳立てしたのです。マスターのことですから肝心な時に逃げ出す確率が高いですからね。
無理矢理にでも既成事実を作れば、腹をくくるでしょう？」
「…このポンコツ」
俺はどうにか拘束を逃れて裏切り者のＡＩに制裁を加えようとするが、思った以上にしっかり拘束されてて逃げられない。
「観念しろリオン。それにルクシオンに提案したのは私だ。
不満なら、私の体にぶつければいいだろう？」
「あ…アンジェ!?」
そんな俺の視界を、アンジェが遮った。
先程まで、リビアと共に俺の逸物を舐めていたアンジェは、顔にこびりついた俺の精液を綺麗に拭き取り、更にその魅力的な肢体を覆っていた赤い下着を脱ぎ捨て、仰向けにベットに拘束された俺に覆いかぶさってきたのだ。
アンジェの整った美貌が俺の眼の前に近づく。互いの吐息がかかるほどの至近距離で、アンジェは獰猛な笑みを浮かべる。
「ちゅ…んちゅ…ちゅぅん…」
「っ！…あ…ちゅっ…ん!!」
そしてその綺麗な赤い唇を俺の唇に重ねる。舌を入れられ、濃厚なキスを交わす。それだけで、俺は脳髄が蕩けるような快感を感じてしまう。
「ぷはぁ……ふふ、可愛い奴だなお前は」
「あ、アンジェ……」
唇を離すと唾液の糸が伸び、それをぺろりと舐めるとアンジュは再び俺の上に跨り、騎乗位の体勢を取る。
何も纏っていないアンジェの肢体が目の前に曝される。普段は結い上げている金髪を解いた彼女は、普段の大人びた雰囲気よりも少し幼く見える。だがそのたわわに実った乳房や余計な贅肉がない腰回り、それでいて女性的な丸みを十分に備えた尻から太腿の艶やかなラインは、彼女の体が女として十二分に成熟している事を証明している。

そしてアンジェの魅惑的な両脚の付け根、濃い目の金色の陰毛に覆われた彼女の、まだ誰の侵入も許していない割れ目は、これから俺に行う行為を期待してダラダラと愛液を零している。
「っ……！」
「ふふ、リオンさん、目が血走ってますよ？」
「ああ、流石にそんなふうに見つめられると恥ずかしいが、お前になら…全部見せてもいいんだぞ？」
リビアがアンジェの身体を目を見開いて見つめる俺を揶揄し、アンジェは頬を染めながら、その白い指で自分の、ピッチリと閉じた割れ目を開く。
「フフ…どうだリオン？　これからお前のモノが入る穴だぞ…？
当然未使用だ。これがお前専用になるんだぞ？」
アンジェが広げた割れ目の奥は充血しサーモンピンクに染まり、その奥からは先程よりも更に多くの愛液が滴り、真下にある俺の逸物を濡らす。
そしてゆっくりと、アンジェの腰が俺の逸物へ向けて降りてゆく。
「リオン…私の初めてを、お前にくれてやる。だから、絶対にお前から離れないぞ？」
「あ…アンジェ…っ!!」
クチュリと、俺の亀頭とアンジェの膣口が触れ合う。それだけで俺は情けない声を上げてしまいそうになり、必死に耐える。
「リオンさん、かわいい…」
「わ、ま…まてリビア…それはっ!!」
俺の逸物とアンジェの秘部を頬を上気させながら見つめていたリビアが、俺の乳首を舐め始める。リビアのピンク色の舌で敏感な部分を舐められた俺は情けない声をあげる。
そしてより硬く屹立した俺の逸物が、ついにアンジェの膣内に飲み込まれる。
「っ…!!」
「ああ、入ってくる。リオンの熱いモノが、私にっ！」
ゆっくりと、アンジェの狭い肉穴を掻き分けながら俺の肉棒が進ん

でゆく。そして俺の分身が中程まで埋まった時、先端が壁に阻まれ動きが止まる。
「アンジェ…いいのか？」
「ああ…お前だから、いいんだ」
今にも暴発しそうになる分身を理性を総動員して抑え込み、アンジェに問いかける。そうして帰ってきたのは、嬉しそうに微笑み俺を受け入れてくれるアンジェの返答だった。
そしてアンジェは、止まっていた腰を再びゆっくりと下ろしてゆく。
プチプチと、俺の分身の先端が何かを引き裂くような感触がしたかと思うと、一気にアンジェが腰を下ろし、俺の逸物は根本まで、アンジェの膣内に飲み込まれた。
「アッ…い痛っっ～!!」
「あ、アンジェ!?」
リビアが心配そうな声を上げる。
アンジェは瞳に涙を浮かべながら、体を強張らせる。アンジェと俺の結合部からは赤い鮮血が流れ、白いシーツに赤いシミを作る。
「大…丈夫…だ。それに、これはリオンに初めてを捧げられた記念だ。きっと一生、私はこの痛みを忘れない」
そう言ってアンジェは気丈に微笑む。
「アンジェ……」
「動くぞ……」
「え……あ……っ!!」
アンジェはゆっくり体を起こし、そして上下運動を開始する。
「あっ……あぁっ!!　んっ！　んぅぅ！　ふぅんっ！　あん！　あぁぁぁぁぁぁぁぁんっ!!!!」
最初はぎこちなかったアンジェの動きは段々とスムーズになってゆき、アンジェの口から漏れる声に甘い響きが含まれるようになってくる。
「あ、ああんっ…、リオン、リオン!!」
俺の上で激しく踊るように腰を振るアンジュの顔は既に快楽に染

まっており、その表情からは処女を失った時の苦痛の色は既に消えている。
俺はというと、初めての女体の感触と、眼の前で淫らに揺れる豊満な乳房、そしてアンジェの肉穴に締め付けられる快感に、完全に思考を蕩けさせていた。
「アンジェ……俺もう……っ!!」
「リオン……いいぞっ、中に、私の子宮の中に……お前の子種を注いでくれっ!!」
アンジェはラストスパートをかけるかのように、一心不乱に腰を振り続ける。彼女のGスポットを擦り上げられる度に、俺の分身の根元にある玉袋がキュッと収縮し、精液を吐き出したいと訴えかける。
「あ、ああ……出る……っ!!」
「来て……来てくれっ!! 全部、全部受け止めるから……っ!!」
アンジェの膣内がギュウッと締まり、俺は限界を迎える。
「うっ……ぐぅっ!!」
「あああああ、出てる……リオンの……温かい……っ!!」
アンジェの最奥で、俺は果てた。ビュルルルっと勢いよく放たれた俺の白濁液はアンジェの膣を満たし、収まりきらなかった分は接合部の間から溢れ出す。
「あ、はは……いっぱい出たな……嬉しいぞ」
アンジェは嬉しそうに笑う。その顔はとても幸せそうだ。
アンジェはうっとりと、大量に中出しされた己の下腹部を擦る。その胎内では、俺の分身が未だに硬く勃起しその存在を主張している。
だがアンジェは、名残惜しそうに俺の逸物を引き抜く。
コポリと、アンジェの膣口から破瓜の血と俺の愛液が混ざったピンク色の混合液が溢れ、俺が彼女の処女を奪ったのだと言うことを如実に意識させる。
「アンジェ…大丈夫ですか?」
「ああ、初めは痛かったが…途中からは気にならなかったな」
「そうですか…じゃあ…」
「ああ、次はお前の番だぞ」

「…はい」

そしてアンジェに促され、今度はリビアが俺の体に覆いかぶさって来た。

乙女ゲームの世界はモブに優しい③（アンジェ＆リビア編）

白い下着を脱ぎ捨て生まれたままの姿になったリビアが俺の体に覆いかぶさる。
そしてリビアの綺麗な顔が俺の顔に近づいてきて、その瑞々しい唇が俺の唇と重なる。
「ちゅ…ふぅん…ちゅぱ…うぅん…っはう」
初めは啄むような、互いの唇を重ねるだけのキスだったが、次第に互いの舌を絡め、お互いの唾液を交換する深いキスへと移行してゆく。
そして息が続かなくなった俺達はどちらからともなく唇を離す。互いの唇から、ツツッと唾液の糸が伸びる。
「はぁはぁ…り、リビア…頼みがある」
「なんですか、リオンさん？」
コテンと可愛らしく小首をかしげるリビアに俺は情けなく懇願する。
「お、お願いだ、この拘束を解いてくれ！」
「おい、リオン…」
「うーん、リオンさんの頼みは聞いてあげたいですが…」
アンジェが眉を顰め、リビアも困ったように苦笑しアンジェを振り返る。
俺ってそこまで信用無いの…？
「頼む！　初体験なのに手足を縛られたままとかいくらなんでも情けなさすぎる！
アンジェやリビアと繋がれるのは嬉しいし幸せだ！
だけど俺は、自分の手でアンジェとリビアの身体を堪能したいんだ!!!」
最早恥も外聞もなく、ひたすら自らの欲望をさらけ出す。
もう既に一生分の恥を晒してるんだ。今更この程度どうというこ

とはない！
「アンジェ、リオンさんはこう言っていますが…？」
「嘘は無さそうだな…」
流石の二人も俺の発言に困惑する。よし、もう一押しだ！
「俺も二人のことは好きだ！愛してる!!
何があっても二人共離さないし、絶対に幸せにする！
だからせめて、初体験はもっとお互い気持ちいいものにさせてくれ!!」
「そ…そうか…そうか……」
「エへへ…」
二人が満更でも無さそうに頬を染める。く…本心とはいえ流石に俺も恥ずかしい…。
「お二人共」
「うわ…っとルクシオンか、どうした？」
「きゃ…る、ルク君…どうしたの？」
『俺も二人のことは好きだ！愛してる!!
何があっても二人共離さないし、絶対に幸せにする！
だからせめて、初体験はもっとお互い気持ちいいものにさせてくれ!!』
「「!!!」」
それは紛れもなく俺の声だった。
「マスターの言葉はこの様に一言一句完璧に保存しました。
いくらヘタレなマスターといえど、責任感は強いので決して二人を裏切ることはありませんよ」
あいつにご主人様に対する敬意は無いのか!?
「うーーん…わかりました。アンジェ…？」
「ああ、ルクシオン頼む」
リビアがアンジェに目配せし、アンジェもまた納得した様子でルクシオンに指示を出す。
「かしこまりました」
ルクシオンが恭しく返答し、俺の手足の拘束が解かれる。

……あいつのマスター、本当に俺であってるよな？
「リオンさん、すみませんでした。無理矢理拘束なんてして…」
「すまない、興奮しすぎてお前のことを考えていなかった…」
「あー、いやいいっていいって。
悪いのはそこの裏切り者だ…」
俺は据わった目でルクシオンを睨むが、あいつは〝ごゆっくり〟という言葉を残して部屋から去っていった。
まあいい。さて、手足が自由になったことだし。
「それでそのお…リオンさん？」
「なあリオン、何だか目が怖いんだが…」
「二人共、特にリビア…いいんだな？」
俺の言葉の意図を察したリビアは、覚悟を決めた目で俺を見つめ、首を縦に振る。
「リオンさん、不束者ですがどうか…きゃああ!!」
最早理性の糸が切れた俺は、リビアをベットへ押し倒した。
「り、リオンさん…！」
「リオン！」
「アンジェ、お前も後でまた可愛がってやる！
だから今は…」
俺は目の前で揺れる、重力に負けて少し形の崩れた、だが若さ故に垂れることなくツンと上を向いているリビアの豊満なおっぱいを両手で揉みしだく。
つきたてのお餅のように柔らかく、それでいてハリのある感触に、俺の股間の分身に血が集まってゆく。我慢できず、俺はリビアの乳房の先端で硬く充血したピンク色の乳首に甘噛する。
「ひぅぅんっ…り、リオンさぁん…」
ビクン、と電撃が奔ったかのようにリビアの肢体が跳ねる。
「なんだリビア、胸が弱いのか？」
「うぅ…リオンさんがいやらしくいじるからですよぉ」
リビアが拗ねたように俺を睨んでくる。かわいい…。
もう一度リビアの唇を奪う。今度は初めから舌を入れて、リビアの

甘い唾液を啜る。
リビアも初めはその綺麗な瞳を見開いて驚いていたが、次第に目をとろんとさせ、俺の舌を受け入れて俺の送り込んだ唾液を嚥下する。
「ふあぁ…リオンさん…」
「リビア…脚、開くぞ？」
「あ…っ」
リビアは体の力を抜いて、俺にされるがままそのむっちりと脂ののった脚を開く。アンジェの鍛えられ引き締まった太腿と比べると柔らかく、肌も手に吸い付くように柔らかいその脚の付け根に、リビアの最も大切な部分がしっとりと濡れて息づいている。
アンジェと比べると毛の薄いリビアの割れ目は、処女らしくピッチリと閉じている。だが俺とのキスや胸への愛撫で興奮したためか、割れ目からは愛液が溢れ、リビアの薄い陰毛がふっくらとした外陰唇に張り付いている。
「リオンさん…あんまり、見ないでください…恥ずかしいです…」
「リビア…綺麗だ」
恥ずかしがるリビアに俺が素直な感想を漏らすと、リビアはただでさえ赤かった顔を更に明らめ手で顔を覆ってしまう。だが耳まで赤く染まっている為、あまり意味は無さそうだ。
俺はリビアの愛液があふれる元に指を這わせる。クチュクチュとリビアの秘孔の入口を指で弄ると、それだけでドロリとした熱い愛液が溢れ、俺の指に絡まる。
リビアは両手を口に当て、必死にはしたない声が漏れない様にしている。
俺は人差し指をリビアの秘孔へ埋め込んでゆく。リビアの狭い膣穴は、異物を排除しようと俺の指を強く締め付ける。
「リビア、力を抜いて？」
「は…はい」
リビアが呼吸を整え、緊張を解くと先程まで狭くて進めなかった人差し指がゆっくりとリビアの膣肉を掻き分けながら奥へ進んでゆく。
そして指の先が膜のような物へと触れる。

「り、リオンさん…そこはッ！」
「リビア…」
　リビアの大切な処女を指で奪うようなことは俺も本意では無いのでゆっくりと人差し指を抜く。そして愛液でベトベトに濡れた指を舐め取る。
「リオンさん！　き、汚いですよ！」
「リビアの体に汚いところなんてないさ。それに、凄く美味しいぞ？」
「そ、そんなことないですよぉ…」
　リビアは恥ずかしがっているが、酸味と塩味が混ざった独特の風味は、これがリビアの最も恥ずかしい部分から溢れてきた物と考えるとそれだけで美味しく感じる。
　そして俺は、限界の近い自らの分身をリビアの膣口へと宛てがう。
「リビア、行くぞ？」
「……はい♡　どうぞリオンさん、私の初めても、貰ってください」
　リビアもまた先程のアンジェと同じように、両手で自らの秘処をくつろげる。そして俺は、愛液を湛えるその狭い肉穴に、己の分身を埋め込んでゆく。
「ああ…リオンさんのが、私のナカに…」
「っ～、指で入れたときも思ったけど凄い締め付けだ…」
　思わず射精してしまいそうになるのを必死で抑え込む。
　そして亀頭の先端が、リビアがこの歳まで守り続けてきた純潔の証に触れる。
「っ…リビア！」
「はい、リオンさん…」
　俺はリビアのくびれた腰を掴み、一気にリビアを貫いた。
「あっ……んぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!!!!」
　リビアの処女膜を突き破り、俺の分身の根元がリビアの股間と密着する。
　破瓜の血が流れ出る。リビアが大切に守ってきたという証拠に感動すら覚える。
「リビア、大丈夫か？」

「は、はぃ……少し痛かったですけど、それよりも幸せです……」
涙を浮かべながらも笑みを作るリビアの表情に、俺は堪らずキスをする。
「リオンさん、私も動いていいですか……？　もう我慢できないんです」
「わかった。俺も、動くよ」
俺が答えると同時に、リビアがその大きな尻を上下に動かし始める。
「り、リビア!?」
「はぁっ……リオンさん、気持ち良いですか？」
「あ、あぁ……」
普段の清楚で大人しい彼女とは全く違うその淫蕩な様が、エロくて可愛い。
「嬉しい……んっ……ああんっ……」
最初はぎこちなく動いていたリビアだが、次第にコツを掴んだのか、徐々に動きが激しくなってゆく。
「はぅ……あんっ……あんっ……あんっ……」
「はっ……はっ……はっ……はっ……」
俺とリビアはお互いを求め合うように激しく交わった。
そしてついにその時が訪れる。
「リオンさん、イキそうなんですね？　出して下さい！　私のナカにいっぱい！」
「り、リビア……！」
ドピュッドピューー!!　ビュルルルルーッ!!!!
俺は遂に限界を迎え、リビアの膣内に大量の精を放った。
「はぁ……はぁ……リオンさんの熱い……こんなに一杯……」
リビアが幸せそうに下腹部を撫でる。それは先程のアンジェの仕草と重なって見えて、そのことが二人の絆を示しているようで微笑ましかった。
俺は、大量の精液を放ち、半ば萎えかけた自分の分身をリビアの膣内から引き抜く。

リビアの膣口からは、破瓜の血と俺の精液がこぼれ落ち、否が応でも俺がこの美少女の処女を奪ったのだと示してくれる。そしてそのことに、雄としての充足感を感じる。
汗だくになり、息を切らすリビアの姿に再び股間に血液が集中する。
「リオン、お前…」
「リオンさん…凄いです」
再び屹立した俺の逸物を二人の美少女が見つめている。
「二人共覚悟しろよ？　今日は寝かせないからな？」
俺はニヤリと笑うと、今度は先程処女を奪ったばかりのアンジェに、再び逸物を突き刺した。

この日、明方俺とアンジェ、リビアは交わり続けた。

そして、その部屋の様子を覗いていた黒髪の少女に、俺達は誰も気づいていなかった…。

神聖王国大勝利ルート（ドロテア輪姦・純愛？）

『バルトファルド領陥落』

このニュースは王国中を駆け巡った。王国最強の騎士は空賊に扮した神聖王国軍の攻撃で敗死し、彼の故郷は焼き払われた。

また、当日バルトファルド領を訪れていたレッドグレイヴ家、アトリー家、そしてローズブレイド家の令嬢は安否不明と各家に報告された…。

ーーーーーーーーーーー

バルトファルド領を襲撃した神聖王国の飛行戦艦。

その一室では、今回の襲撃を成功させた兵士たちの慰安のため、とあるイベントが行われていた。

「は♡あぁ♡ああっっ…っ！あああ…ぁ…っ！んっっ〝」

「オラオラ、あとがつっかえてんぞ！」

「ギャハハハ、ウブな顔して処女だったクセにもう男のチ〇ポで気持ちよさそうにしてやがるぜ！」

部屋の中心で、天井から吊り下げられた鎖に両手を拘束され、着ていた服を全て剥ぎ取られた金髪碧眼の美女、ローズブレイド家の長女ドロテア・フォウ・ローズブレイドは後ろから神聖王国の兵士の逸物でその秘処を貫かれていた。

「お姉様…」

「酷い…」

「くっ…」

その様子を、こちらはまだ何も手出しされないまま、檻の中で見ていることしかできない彼女の妹であるディアドリーやクラリス、アンジェリカ。

「んん〝ーー!!!」

そしてこちらは手足を拘束され、猿轡まで噛まされた状態で、無理矢理一部始終を鑑賞させられているバルトファルド家の長男ニックス。

「あ♡っあっ…ぁ♡んんんっん〝っっ」
「ギャハハ、またイッたぜこの女！」
兵士が腰を動かす度に、彼女のサラサラした長い金髪がハラリとゆらめき、彼女の豊満な乳房がユサユサと揺れて周囲の男たちの劣情を煽る。
「うおぉぉ、搾り取られるぜぇ！」
「や、やめて！　ま、また中にだされたらぁぁんっ♡」
ドロテアを犯していた兵士の腰が震え、彼女の高貴な雌穴にその下賤な遺伝子のスープをたっぷりと流し込む。
自らの子宮を、本来なら彼女に触れることすら出来ないような下賤な男の精液で満たされたドロテアはその屈辱と背徳的な刺激に興奮し、再び絶頂してしまった。
「い、いやあ♡あ♡…ああ…あ〝ああ…♡ぁ…あ」
ビクンと腰を震わせ、そのくびれた腰を仰け反らせて絶頂する彼女の股間からは、男の精液だけでなく彼女の膣内から掻き出された大量の愛液が溢れている。
「ふぅ、これで２０回目の絶頂だな。
制限時間までにあと３０回イッたら、次はお前の妹の番だぞ？」
「う、うぅぅ…。ごめんなさいニックス様…ディアドリー…」
拘束された彼女の足元には、彼女の愛液と、何度も膣内出しされ彼女の股間から溢れた精液が水たまりを作っている。
そして再び、別の兵士にその細い腰を掴まれたドロテアは、既にドロドロに蕩けた膣穴に、再び兵士の逞しい逸物を迎え入れた。
「い……い…♡……いっや！あぁ♡あ！」
「うお、もうガバガバかと思ったら凄えいい締りじゃねえか！」
兵士は、つい先程まで処女だったドロテアの膣肉の締りを堪能しながら、腰を密着させ彼女の脂の乗った尻肉の感触も楽しむ。そして重たげに揺れる乳肉を揉みしだき、彼女の熟れた肉体を余すことなく堪能し、再び彼女の子宮へ向けて精を放った。
彼だけで、ドロテアは５回も絶頂させられてしまった。

神聖王国に捕らえられたドロテア達は、彼女を助けに来て返り討ちにあったニックス達を救うため、彼らのリーダーであるガビノの提示した〝ゲーム〟に参加することとなった。誰か一人でもクリアすれば、捕まっている彼女たちの飛行船の乗組員やニックス達を無事に開放するという希望に縋って。

一番目のゲームは〝我慢対決〟。一定時間の間にドロテアが５０回絶頂しなければ勝てるという条件だった。

そしてドロテアは裸に剥かれ、その肉感的な肢体を天井から吊るされた鎖に拘束された。しかも卑劣な事にガビノは彼女に媚薬を投与した。

抗議するドロテア達の言葉を無視し、発情した彼女の処女を奪い、いきなり絶頂させたガビノは、彼女の未使用の膣内に大量に射精した後、部下に彼女を順番に犯させたのだった。

「い、いやァァァ!!」

「はーい、これで５０回目だな！

残念だけどお前の負けだな、お嬢様！」

「あ、あぁぁぁぁ…」

拘束を解かれ、床に放り出されたドロテアは、その綺麗な金髪を床に溢れた愛液と精液で汚しながら、さめざめと涙を流す。

そんな彼女を見て何かを思いついたガビノは、彼女を引き摺ってニックスが捕らえられた檻の前まで連れてくる。

「ククク、まだ媚薬の効果は残っているだろう？

私からの慈悲だ。そこの役立たずの逸物で我慢していろ」

「っ…!?」

そして檻の扉を開けたガビノは、ドロテアをニックスの檻へと放り込む。

「きゃっ…っごめんなさいニックス様！」

「っん〟ーーっ!!!」

手足を拘束されていたニックスに覆いかぶさるように、裸のドロテ

アが倒れ込む。
「ぁ…ハァ…ハァ…」
「ん〝ー!!」
媚薬によって無理矢理性感を開発されたドロテアは、本能に導かれて仄かに想いを寄せる男の体に、その豊満な肢体を擦り付ける。
「ああ…ニックス様ぁ…」
「ん〝っーー」
チュパチュパと、猿轡を噛まされたニックスの口を吸うドロテア。それだけでは我慢できず、彼女は頭の位置を徐々にニックスの下半身へ移してゆく。
「ごめんなさいニックス様…でもわたくし、もう…」
「っっ…〜!?」
無理矢理ニックスのズボンを脱がせたドロテアは、ドロテアが犯されている場面を見せられ既に硬く勃起したニックスの逸物を、彼女の瑞々しい唇が咥え込む。
「はむ…ん…ちゅぱ…はぅん…っ」
ドロテアがよだれを垂らしながらニックスの逸物を一心にむしゃぶる。そしてニックスの表情が徐々に厳しくなってゆく。そしてニックスの逸物がドロテアの口の中で一際大きく膨らむ。
「っ〜〜!!」
「きゃっ!!」
ニックスの逸物から白濁液が迸り、彼女の口腔とその美顔に欲望の証が降り注ぐ。
ドロテアは陶然としながら、その熱い精液を受け止める。そして口の中の精液も、顔にこびりついた残りも全て飲み干しした。
ニックスの体に跨ったドロテアは、その括れた腰も、豊かで張りのある乳房もニックスに曝し、射精したにも関わらず未だに勃起し続けているニックスの逸物を、自らの愛液と大量に膣内射精された精液を零す膣口へと導いてゆく。
「ごめんなさい、ニックス様。汚れてしまった私の子宮に、貴方のお情けを下さい…」

「っん〝ん〝〜!!」
既に何人もの男の逸物を迎え入れ、柔らかく解されたドロテアの初々しい膣肉が、ニックスの逞しい逸物をゆっくりと飲み込んでゆく。
そしてドロテアの脂の乗った尻がニックスの太腿に密着し、ニックスの逸物は根本まで彼女の膣内に収まった。
「あ、あぁぁぁんっ♡　硬くて…熱くて…うぅんんっ♡」
ビクン、とドロテアの腰が震える。ニックスの逸物の先端で子宮を叩かれたドロテアはそれだけで軽く絶頂する。
ニックスの腹に手をついたドロテアは、本能に従って腰をくねらせ、ニックスの逸物を自らの膣肉で締付け、愛液を垂れ流してより深く彼の逸物を迎え入れる。
「は……ぁっ…ぁっ!あぁあ〝っはっ…♡♡っぁぁ…ぁ♡っ〝んんん…♡っ」
そして一際甲高い喘ぎ声とともに、股間から潮を吹いて絶頂した。背中をのけ反らせ、その豊満な乳房を強調するように揺らす。
それと時を同じくしてニックスも白目を向きながらドロテアの膣内に人生で最大の快感と共に大量の精液を吐き出した。
「ああ…熱い…あつい……」
汗まみれになったドロテアは幸せそうに、ニックスの胸の中に倒れ込んだ。

ーーーーーーー
「…ま、ニックス様…?」
「っは!?」
自室のベットで、愛する婚約者の呼びかけで目覚めたニックスは、自らの状態を確認する。
手足は拘束されていないし、猿轡もされていない。
そして腕の中には、愛しい婚約者が自分を心配そうに見つめている。
「すまん、どうやら変な夢を見たみたいだ」

「そうですか…とてもうなされていましたよ？」
「あ…ああ、酷い夢だった…」
まさか腕の中の婚約者が犯されている夢だなどと言えないニックスが言葉を濁す。
「そうなんですね…でもニックス様、その…とっても元気になっていますよ？」
「あー、その…生理現象というかなんというか…」
夢の影響か、ニックスの逸物はガチガチに勃起していた。
「ふふ、昨日の晩あんなに私を可愛がって下さったのに、まだ足りなかったんですね？」
「い、いやそういうわけじゃ…」
いくら婚約者とはいえ女性に朝起ちを見られる気恥ずかしさに混乱するニックスに、ドロテアは優しく微笑む。
「ニックス様、まだ時間はありますよ。どうぞ、貴方専用のこの雌穴を、どうぞお使いください♡」
「っ…ドロテア!!」
ニックスは婚約者の誘導に逆らえず、その逸物をドロテアの、昨夜自らが大量に注ぎ込んだ精液をこぼす膣口に蓋をするように、その逸物を突き込んだ。

後日、ドロテアがニックスやバルドファルド家の面々に妊娠を報告するのは、また別の物語。

ーーーーーーー
「ふふ、改良した睡眠薬の効果は絶大ね！
精力増強作用まで加えるなんて、流石は私だわ！」
ルクシオンの密告により、勝手にニックスに例の睡眠薬を飲ませたクレアーレがリオンにお仕置きされるまであと15分。

神聖王国大勝利ルート②（ディアドリー屈辱編）

バルトファルド領を壊滅させた神聖王国の飛行戦艦の大部屋で行われているイベントは、第二幕へ移ろうとしていた。
「さあ、早く檻から出ろ」
「くっ…離しなさい！」
神聖王国に捕虜にされた令嬢達の一人、ディアドリー・フォウ・ローズブレイドが神聖王国の兵士によって檻から引きずり出される。
彼女はその美しい顔を憤怒に染めて、周囲の兵士達を睨みつける。
「よくもお姉様を…」
彼女は、先程まで神聖王国の兵士達に凌辱されていた金髪碧眼の美女、ドロテアの妹であり、彼女と同じ青色の瞳と、姉とは異なり豪奢な巻き毛にした金髪を有する迫力のある美少女だった。
そんな彼女に睨まれながらも、神聖王国の兵士達はニヤニヤと下卑た笑みを浮かべたままだ。
彼らのボスである神聖王国の貴族、カビノが彼らを代表してディアドリーを皮肉る。
「おやおや、貴方のお姉様ならそちらでお楽しみ中ですよ？」
「っ…」
ディアドリーは悔しそうに、全裸で美しい金髪を振り乱しながら喘ぐ姉と、彼女に跨がられてその逸物を貪られている滅ぼされたバルトファルド領の跡取り息子を見る。
「それに彼女は捕虜になった他の方々を護るために身体を張ったのですよ？　何をそんなに怒っているのです？」
「ひ…卑怯な真似をしておいてその言い草は！」
「おやおや、勝負の内容を了承したのは彼女ですよ？
それに媚薬を使わないとは一言も言っていなかったではありませんか」
「このっ…!!」
怒りに任せてガビノに平手打ちしようとするディアドリーを周囲の兵士達が抑え込む。

「おやおや恐ろしい。まだ逆らう元気があるとは。
これはお仕置きが必要ですねぇ…」
「な…何を、っきゃあああああ!!!」
周囲の兵士がディアドリーの着ていたドレスを剥ぎ取ってゆく。
彼女の着ていた高価なドレスは兵士達の無遠慮な手によって引き裂かれ、あっという間に彼女の体を包むのは、彼女の性格を反映するような情熱的な赤い下着と、太腿までを覆うロングソックスだけになる。
「い…いやぁぁ!!」
いつも自信満々で強気な彼女が、まるで気弱な少女のような声をあげ、必死に胸と股間を腕で隠すようにして蹲る。
「はははは!先程までの強気な態度はどこへ行ったのですかぁ?」
「う…うぅ」
いかに普段強気でいるとはいえ、まだ男を知らない乙女であるディアドリーにとって、多数の男に囲まれて服を剥ぎ取られるのは恐怖そのものだ。その美貌に怯えた色を浮かべ、それでもガビノを睨みつける。
その様子に嗜虐心を刺激されたガビノは、ディアドリーにさらなる命令を下す。
「さあ立ちなさい。さっさと立たないと、捕虜の首を一人づつ刎ねますよ?」
「なっ…くぅぅ」
女性としての恥じらいと、貴族として自らの庇護下にある人々を守る矜持。一瞬だけ葛藤したディアドリーだが、プライドの高い彼女は、自らを守るために戦ってくれた兵士や船員達を守るために、恥じらいを捨てた。
ディアドリーは立ち上がり、堂々と赤いブラジャーに包まれた豊満な胸を張る。
「さ…さぁ、これでよろしくて?」
顔を赤らめ、声を震わせながらも彼女はその豊かな胸を張ってガビノに対峙する。だが悪辣な侵略者は、そんな彼女の矜持を叩き潰すべ

く次の命令を下す。
「おや、まだ服が残っていますよ？
　貴方達は敗者なのですから敗者らしく、全ての服を脱いで勝者に従いなさい」
「なっ!?」
　ディアドリーが驚愕の声を上げてガビノを見つめるが、彼はニヤニヤ笑いながらも命令を撤回することはなかった。
「どうしますか？また兵士達に服を剥ぎ取られて、情けない悲鳴を上げますか？」
「この外道…」
「ふはははは！　外道騎士なら我々が討ち取りましたよ？
　さあさあ、早くそのはしたない下着を脱ぎなさい！」
　ガビノが笑いながらディアドリーに催促する。ジリ、と周囲の兵士達もディアドリーに詰め寄ってゆく。
「わ…わかりました…」
　ディアドリーは血走った目で自分の肢体を見つめる兵士達に怯えながら、震える手で自らの体を守る最後の砦を脱ぎ去ってゆく。
　彼女はまず、彼女の豊満な胸を覆うブラジャーを脱ぐ。その巨峰の頂点を隠すように片手で胸を隠し、パサリとブラジャーを床に落とした。
　すると近くにいた兵士が即座にまだ彼女の体温の残っているその赤いブラジャーを奪う。
「なっやめなさい!!」
　ディアドリーが顔を赤らめ抗議するが、その兵士は手に入れた戦利品をマジマジと見つめたり匂いを嗅いだり、好き放題に扱いはじめる。自らの肌を包んでいた下着をそのように扱われたディアドリーは背筋が震えるほどの羞恥と嫌悪感を覚える。
「なにをしているんです？　さっさと下も脱ぎなさい」
　だがガビノから無慈悲な催促を受け、羞恥と屈辱にその美貌を歪めながらも、ディアドリーは命令に従い自分の肌を覆う唯一の布地に手をかける。

「「おおお」」
兵士達から軽いどよめきがおこる。パンツを脱ぐために前屈みになり、胸を隠すための手を離したディアドリーの、その豊かな胸の先端がついに彼らの眼前に晒されたからだ。
前屈みになり、その大きさを更に強調された2つのメロンのような大きさの肉果実。その先端には、派手な見た目の彼女からすると以外なほど透き通ったピンク色の乳首がその存在を主張している。
ディアドリーは目を伏せ、周囲の視線を無視してただ無心に下着を脱ぎ去った。
そして、取られないように握りしめたパンツは、屈強な兵士達に無惨に奪い去られた。
「きゃあああ!!」
「おい見ろよ、エッロいパンツだな!!」
「ああ、貴族のお嬢様のクセにこんなパンツ履いてやがるのか！」
「いやいや、王国の雌共は淫乱だからな。いつでも男を誘惑できるようにエロい下着を履いてんだろうよ」
「違いねぇ！　それによく見ろよ、この下着ちょっと濡れてるぞ？
」
「ギャハハハ、まじかよ。見られて感じてたのか？
やっぱり王国の女どもは変態だな！」
自らの下着を弄ばれ、好き勝手批評される屈辱に体を震わせながら、ディアドリーは両腕で必死にその豊かな乳房と股間の陰りを隠そうとする。
だが無慈悲なガビノの宣告が彼女を追い詰める。
「何度言わせるつもりです？　捕虜の分際で肌を隠そうとするなど、我々に対する反逆と受け取りますよ？」
「……いつか殺してやりますわ」
観念したディアドリーは、万感の殺意を乗せた目線をガビノに送りながら、自らの体を隠していた腕を下ろす。
「ほお、なかなかどうしてそそる体ではないですか」
ガビノが感嘆の声をあげる。

ディアドリーのシミ一つない白い肌は羞恥でピンク色に染まっている。姉ほどではないが十分に巨乳と呼んで差し支えない豊満な乳房は、若さのおかげか垂れることなくツンと正面に突き出している。そして彼女の股間には、薄っすらと金色の恥毛が生えているが、色が薄いため遠目には無毛にも見える。

迫力のある美少女であるディアドリーだが、まだ処女である彼女の股間は清楚な乙女のようにピッチリと閉じ、薄い陰毛と合わせて彼女の成熟した肢体と比べると幼く見える。そしてそれがガビノと、周囲の兵士達の獣欲を煽る。

舌舐めずりをしたガビノが、ついにディアドリーに今回の〝勝負〟のお題を告げる。

「貴方のお題は〝開放対決〟です」

「開…放？　一体どういうことですの？」

一体何を〝開放〟するのか。意味が分からずディアドリーが問い返す。

それに対してガビノは豪華な一人がけのソファに座りふんぞり返りながら詳細を告げる。

「なに、簡単に言えば先程の貴方のお姉様の勝負の逆です。

貴方には制限時間までに、貴方のその未熟なオマ〇コで私を含めた一定人数を射精させれば勝ち。逆に制限時間までにその人数の精子をそのオマ〇コに受け止められなければ負けです」

「なっ……！」

それは性経験の乏しいディアドリーにとって、死刑にも等しい過酷な条件だった。

神聖王国大勝利ルート（ディアドリー処女喪失編）

全裸に剥かれ、紺色のハイソックスだけを身に纏ったディアドリーは、ガビノの言った言葉に驚愕し、その美しく整った顔を青くし硬直した。

固まったまま動かないディアドリーに向けて、ソファでふんぞり返るガビノが催促する。

「どうしたんです？　固まったままでは制限時間が少なくなっていくだけですよ？」

「っ…！」

ディアドリーは羞恥と悔しさに顔を歪めるが、そもそも処女の彼女には、一般的な性知識はあれど自分から男性の性器を求めるなど想像の埒外であり、そもそもどうすればいいのかが分からないのだ。

ガビノはそんな彼女の様子を察し、いやらしく顔を歪める。

「おやおや、王国の令嬢は皆専属の使用人とセックス三昧の淫乱揃いと聞いていましたが、随分と初な反応ですね」

「ば…馬鹿にしないでください！　わ、わたくしはあんな者達とは違いますわ！」

「ほう、つまり貴方の放蕩な態度は嘘で本当は処女だと？」

「っ…そ、そうです…わ」

ディアドリーは羞恥で顔を赤く染めながら答える。

ガビノは満足そうにその様子を見ながら、おもむろにスボンを脱ぎ、下半身を露出する。

「ひっ…な、何を！」

「ご安心下さい、無理矢理貴方を襲うつもりはありませんよ？

清楚で清らかな乙女である貴方の為に、せっかくですからこの私が性技を指導して差し上げようというだけです」

ニヤニヤとディアドリーの態度を皮肉りながら、ガビノはソファに座ったまま、その逞しい逸物を隆々と勃起させる。

ディアドリーは屈辱に身を震わせるが、今の自分は何も言い返す事が出来ないことを自覚し反論もできず唇を噛む。

「さあ、まずはこちらに来なさい」
「……わかりました」
ディアドリーは悔しそうに、だが逆らうことなくガビノに近づいてゆく。
視線だけで他人を殺められそうな程に厳しい視線を向ける全裸の美少女の魅惑的な肢体を舐め回すように眺めながら、彼女のプライドをズタズタにするための命令を下す。
「ではこのソファの手すりに足を乗せて、上に上がりなさい」
「なっ……！」
ガビノは、自らが座るソファの手摺に脚を乗せるよう命令した。そんなことをすれば、何も身に着けていない彼女の秘処は、殺してやりたいほど憎い男の眼の前にさらされてしまうと、ディアドリーは怒りの目線を向ける。
だがガビノはその視線を涼しげに受け止め、より具体的な命令を下す。
「まずは右足を載せなさい。おや、なんですその反抗的な眼は？
別に構いませんよ？貴方が逆らえば、貴方の乗っていた船の乗組員の首を順番に刎ねるだけですので」
「…この外道」
「ハハハ、外道騎士なら死にましたよ？」
ディアドリーはその蒼色の瞳に悔し涙を浮かべながらも、命令に従い自らのスラリとした右足をガビノの座るソファの手すりに乗せる。
自然と彼女の脚は大きく開かれ、彼女の処女らしくピッチリと閉じた割れ目もまたそれに合わせて綻び、くすみのないピンク色の膣肉を憎い相手の眼前に晒す。
「ほお、綺麗なものですね。処女というのは間違いないようだ」
「う、うぅ…」
自らの最も大切な部分を視姦される屈辱に震えながら、ディアドリーは歯を食いしばって悔し涙を流すことを堪える。
「バランスが取りにくくて辛いでしょう？
さあ、私の肩に掴まりなさい」

「っ…」
ディアドリーは悔しそうにガビノを睨みながらも、従順に指示に従う。
「さあ左足もここへ」
「わかり…ました……」
ディアドリーは両足を手すりの上に置き、大きく股を開く姿勢になる。
ガビノの肩を掴み、両足をがに股に開いてソファの手すりに乗った無様な姿。前屈みで尻を突き出し、豊かに実った乳房が重力に引かれその大きさを強調している。
「フッ、中々可愛いポーズだ」
「っ……！」
ディアドリーは羞恥と屈辱にその端正な顔を歪める。
羞恥と無理な体勢で手すりに乗せた足を震わせ、その振動が彼女の胸に伝わり、フルフルと彼女の豊乳が柔らかそうに震える。
周囲の兵士達はその卑猥な姿を涎を垂らしそうな顔で見つめている。中には後から、彼女の開かれた脚の付け根で綻ぶ処女の割れ目と、色素の沈着した彼女の不浄の穴を食い入るように見つめる者までいる。
ディアドリーは自らの胸や股間に向けられる視線を敏感に感じ取り、羞恥と屈辱でその白い裸身をピンク色に染める。それが更に周囲の兵士達の獣欲を煽り、彼女の肢体へ向けられる視線が粘ついたものになってゆく。
「も、もういいでしょう!? は、早く貴方のモノを挿れなさい!!」
向けられる視線に耐えられなくなったディアドリーは、憎い相手に恥を捨てて懇願する。
だが、ここで彼女のプライドを完全にへし折り屈服させるつもりのガビのは、ディアドリーに更なる試練を与える。
「いやいやいや、処女の貴方は知らないかもしれませんが、濡れてないのに挿入するのは双方にとって痛いだけのものになってしまうのですよ?

ですからちゃんと濡さなければ、貴方のここに挿れてあげるわけにはいきませんねぇ」
「きゃひん!? やっ…ぬ、濡らす…!?」
ガビノは自らの目前に晒された、大股開きになったお陰で少し綻んだ処女の縦筋を指で撫でる。そこは未だ殆ど濡れていなかった。
「おやおや、箱入りお嬢様はオナニーもしたことがないのですか？」
「っ…そんなことは！…で、でもこんな格好で…」
ディアドリーとて年頃の娘として、夜中にムズムズとした身体を慰めたことはある。だが、こんなあり得ない状況で股を、濡らせるほど、彼女の常識は歪んでいなかった。
派手な見た目でウブな反応を返すディアドリーに下衆な満足感を覚えながら、ガビノはニヤニヤ笑い、彼女の突き出した豊乳の裾野を柔らかく触る。
「仕方ありませんね、処女のお嬢様が初体験でも痛くならないよう、しっかりと気持よくしてさしあげましょう」
「やぁっん…、な…なにを!?」
ディアドリーのハリのある巨乳がガビノの手でやんわりと揉みしだかれる。硬さの残る彼女の乳房は、ガビノの指を押し返すほどの弾力があり、凌辱者を喜ばせる。
「これはなかなか…お姉様より大きさは劣りますが、もみ心地は甲乙付け難いですね」
「ひぅ…くっ…このぉ…はぁん！」
姉と乳の大きさや柔らかさを比較されるという屈辱にディアドリーが悔しげにガビノを睨む。だが次第に彼女の吐息に艶が混じり、ディアドリーは必死にそれを耐える。
ガビノは気を良くして少しづつ乳を揉む力を強く、激しいものにしてゆく。
「ふふ、我慢は体に毒ですよ？」
「くっ…ふぅっ…んっ…そ、そんなことっ…ひぅ!?」
抗議しようとしたディアドリーの言葉は、ガビノが彼女の桜色の乳首を弾いたことで中断され、ディアドリーはビクンとその肢体を強張

らせる。
「おや、乳首が勃って来ましたね。」
「ち、違うわ！　こ、これは……」
「フッ、どうやら気持ちよかったみたいですね？　ではもっと激しく行きましょうか」
「あっ……ちょ、ちょっと待って……やめなさ……ぃあん!?」
　ガビノはディアドリーの制止を無視して、その固く尖った両の乳首を人差し指と親指で摘まみ、コリッコリッと捻る。
「あ……あ……あああ!!　やっ……はあ……あ！」
「フッ、どうしました？　随分良さそうですが」
「あ、あ、あ……あああ!!」
　乳首から伝わる今までに感じたことのない快感に、ディアドリーは思わず背を仰け反らせる。今までオナニーで乳首に触れたことはあったが、今回のように腰に電流が走るような感覚は無かった。
「ま…まさかまた媚薬で…？」
「心外ですねぇ、私はただ貴方のこの無駄に育った胸を揉んであげているだけですよ？貴方がはしたなく喘ぎ声をあげているのは、単に貴方が淫乱だからでは？」
「そんな…そん、あひぃぃんっ!!?」
　首を振って否定しようとしたディアドリーは、乳首を甘噛されて情けない喘ぎ声を漏らす。
「う…うぅ…はぁ、はぁ…」
「ふふ、少しは湿り気が出てきましたか？」
　好き勝手に胸を弄られ、初物の身体に性感を呼び覚まされたディアドリーは、荒い息を吐き白い肌から汗が吹き出す。
　処女の甘酸っぱい体臭と彼女のつけた香水の芳香の混ざった芳しい匂いが、ガビノと、そして周囲でディアドリーが悶える様子を鑑賞している兵士達に届く。
　ディアドリーの処女の縦筋は、胸を弄られ続けたことで汁気を帯び始め、乳首を甘噛される頃にはその真下で屹立するガビノの逸物を濡らすほど、愛液を滴らせるに至っていた。

ガビノはいやらしくニヤニヤ笑い、ディアドリーの脂の乗った尻を撫でる。
「そろそろ良いでしょう。さあ、この無駄に大きく育った尻を下ろして、私のモノを咥え込みなさい」
「くっ…うぅ……」
ディアドリーは悔し涙を流しながらも、従順にその白い尻をゆっくりとおろし、真下で待ち構えているガビノの剛直と、本来なら愛する人に捧げるはずの乙女の蜜壺の入口を密着させた。
己の秘処に侵入しようとする熱い先端に怯えるように、ディアドリーの腰がビクンと震える。
「おやおやおや、そんなことでは制限時間までに全員を射精させることなどできませんよ」
「ひっ…い、いやぁ…」
ディアドリーは普段の強気な態度が崩れ、怯えた表情で涙を流す。
だがガビノは欠片も同情心を抱くことなく冷たく言い放つ。
「別に構いませんよ？　貴方が勝負を放棄するなら貴方のかわりに他のご令嬢を犯させましょう。そして捕虜にとった船員達も全員処刑します」
「な!?　や…やめなさい！」
「では早く腰を下ろしなさい。早くしないと、そこで怯えているご令嬢達を代わりに犯しますよ？」
「…わかり、ました」
ディアドリーがチラリと自らも捕まっていた檻をみる。その中では、クラリスやアンジェリカ、リビア達が悲しそうな、そして怯えた目で自分達を見つめている。
年長者として、そして誇り高い貴族として、彼女たちを守らなければと決意を新たにしたディアドリーは、決意を込めた顔でガビノを見返す。
「例え身体を汚されても、私の誇りは汚させません。あなた達の汚らわしい欲望は、この私が全て受け止めて見せますわ！」
脚をがに股に開き、尻を突き出した無様な姿で、それでも表情と言

葉だけは堂々と言い放ち、一気に己の腰をガビノの腰に密着させた。
「ひぃぃぃんっっ、い…痛いィィィ!!!」
「おっと、ハハハ、立派な決意ですが随分と情けない顔をしたしていますよ！」
結合部から破瓜の血を流し、蒼い瞳から大粒の涙を流して処女を失い大人の女になった痛みに叫ぶ、高貴な少女。
身体を引き裂かれるような痛みに、思わず己の下にあったガビノの体に縋り付く。
処女を失ったばかりの瑞々しい美少女に抱きつかれたガビノは、彼女の甘酸っぱい汗の香りや、丁寧に手入れされた巻き毛の感触を楽しみながら、がっしりと彼女の尻を掴む。
「おお、凄い締付けだ。ククク、貴方のお姉様は包み込むような柔らかさでしたが、貴方の膣肉は吸い付くような締り具合ですね」
「い…痛いぃ…ぬ、抜いてぇ」
先程の誇り高い決意は砕け、ディアドリーは情けなくガビノに懇願する。だが、自らの胸板で豪奢な美少女の豊乳が押しつぶされる感覚を楽しむガビノは、その願いが聞こえないかのように振る舞い、彼女の狭い蜜壺の品評を継続する。
「それになかなかの濡れ具合ですね。薬も使っていないのにこれ程とは、やはり相当な淫乱のようですねぇ」
「ひっ…あひぃぃ!!」
ガビノがディアドリーの安産型の大きな尻を叩く。その刺激をディアドリーはいやらしくも快楽へと変換し、膣肉がより締まり、彼女の膣内を占拠する剛直の形や熱さを、より一層強く彼女に刻み込む。
「フフッ、私に抱きつくのもいいですが、それだけでは男を射精させることなど永遠にできませんよ？」
「な…あぁぁんっ!!」
「そらそら、早く腰を振りなさい」
ガビノが何度も何度も、ディアドリーの尻を叩く。彼女の白い尻が赤く染まり、痛々しさと共にその白い尻の魅力を際立たせる。

「う…うぅ…」
ディアドリーはその美しい顔を涙で濡らしながら、ゆっくりと密着させていた腰を上げてゆく。根本までディアドリーの膣内に埋め込まれていたガビノの剛直の幹が姿を表してゆく。破瓜の血と、彼女の愛液でコーティングされた剛直は、ディアドリーの膣肉を卑猥にめくり上げながら先端ギリギリまで引き抜かれる。
そして剛直が抜けるギリギリで、ディアドリーが再び腰を下ろす。
「あ♡あっぁっ…ああっあ♡♡♡…〝んん…♡っっっ！」
己の膣肉を、熱く太い肉棒が掻き分け子宮口を小突く感触に、ついにディアドリーは艶やかな声を上げる。
誇り高い少女は、徹底的に誇りを折られたことで最早性感を耐える気力を無くし、ただ己を貫く肉棒の与える快感に没頭する。
「いいい…い〝っ！いいいい♡い♡♡いいの♡……っおぉ♡…♡おおおお♡お！」
「ハハハハハ!! 先程までの決意は何処に行ったのです!?
口では誇りだのなんだの言っても、貴方達王国貴族は一皮剥けば淫乱な雌犬なんですよ!!」
「いやぁぁ♡言わないでぇ♡♡」
ディアドリーは誇り高い貴族の顔をかなぐり捨て、美しい金色の巻き毛を振り乱し、その嫋やかな腰をくねらせ快楽を貪る。
その姿は最早、一匹の淫乱な雌犬でしか無かった。
結合部からはドロリとした愛液が掻き出され、破瓜の血を洗い流してゆく。
彼女の腰が上下するたびに、その口からは艶やかな喘ぎ声が上がり、その肢体からはムワッとした発情臭が周囲にばら撒かれる。
「クッ、流石に限界ですね…出しますよ!!」
「ひぃぃんっ！ だ、出してぇ、わたくしのはしたない雌犬マ〇コに、貴方様の逞しいお汁を、沢山下さいぃぃ!!」
常の彼女なら口が裂けても言わない言葉を発しながら、ディアドリーはガビノへ自らの腰を密着させ、グリグリと己のクリトリスをすり潰すように腰を擦り付ける。

そのあまりに淫蕩な腰使いに、ついにガビノの逸物が限界を迎える。
「っ…!!出しますよ!!」
「イ♡イイ♡ッイィイくぅ♡ぅ…♡♡ううう…♡」
ガビノが思わずディアドリーの腰を掴み、己の剛直の先端を彼女の子宮口へと密着させる。
その刺激に、最早性感への耐性を捨てたディアドリーは盛大に絶頂する。
そして彼女の狭い膣内で膨れ上がったガビノの剛直から、濃厚な精液が彼女の最も大切な、本来なら愛する男との子供を育む為の部屋へと注がれてゆく。
「ふぁああああんんっっ!!!　あついいいいいいいいい!!!」
その熱い奔流に、ディアドリーはガビノの身体にしがみつきながら絶叫する。
やがて長い射精を終えた後、ガビノはディアドリーの膣内から剛直を引き抜く。
「……あ……あぁ……♡」
長時間にわたって膣内を占領していた剛直が抜かれたことで、栓を失った彼女の膣穴からは破瓜の血と混じりピンク色になった混合液が溢れ出す。
「あ…あぁぁ……」
「おやおや情けない、たった一回で気絶してしまうとは。
これでは勝負になりませんでしたね」
処女を失ったばかりでいきなり絶頂させられ、膣内に無遠慮に中出しされたディアドリーは、己の身体に刻まれた現実から逃げるように、意識を手放した。
「おいお前達、この女を好きにしていいぞ」
ガビノは己の体にしなだれかかる美少女を床に打ち捨て、血走った目で彼女の肢体を視姦している部下達に許可を出す。
意識を失った彼女に兵士たちが殺到し、あっという間に彼女の膣も口も、そして肛門すら肉棒を突き込まれる。胸は揉みしだかれ、彼女

の自慢だった金色の巻き毛を己の逸物に巻き付け自慰を行う者すら出始める。
その様子を満足気に眺めた指揮官が、ニヤニヤした目で次の犠牲者を選ぶために、檻へと目を向けた。

ーーーーーーーーー
(どうしてこうなった……)
リオンの兄、バルトファルド男爵家の長男ニックスは混乱していた。
妻であるドロテアの妊娠が発覚し、家の中はお祭り騒ぎで、彼女の妹である豪華な巻き毛の美少女、ディアドリーも祝に現れた。
妻と共に、彼女をもてなす為に夜に酒を飲んだことは覚えている。妻のドロテアは胎内の子供を気遣ってお酒は飲まなかったが、自分は妻と彼女の妹に促されるまま酒を飲んだ。
(一体何故…?)
奇妙な夢、自分が捕えたはずの連合王国の軍人として妻の妹を犯すという、妊娠した妻に対する裏切りとも言える夢から覚めたと思ったら、夢で見た美少女が自分の上でその腰を振っていた。
「あぁぁぁんっ♡♡すっすごいぃ…こんな、こんなに熱くて、太くてぇぇ♡」
「フフ、そうでしょうディアドー、私の旦那様は強くて優しいだけじゃなくて、こっちも凄いのよ?」
眠っている間に勃った己の逸物を咥え込み、破瓜の血を結合部から流しているにも関わらず、ディアドリーはその高貴な顔をはしたなく快楽に染め上げ激しく腰を振る。
「ド…ドロテア!? す、すまない!これは浮気とかでは!!」
「ふふ、大丈夫ですわ旦那様。私が妊娠してしまって、旦那様には我慢をさせてしまっていましたもの。でももう大丈夫です、私がこの子を産んでまた旦那様の欲望を受け止められるようになるまでは、妹が私のかわりに旦那様の性欲を受け止めてくれますわ」
「い、いやいやいやちょっと待って!!?」

慌てたように言い訳するニックスに、ドロテアが優しい笑顔で事情を説明するが、ニックスの常識的な脳はその説明の理解を半ば拒否している。
「と、というか本人の意志は!?」
「あら、妹なら喜んでいますよ？　この子もこの子で男の理想が高かったのですが、ニックス様なら初物を捧げるだけの価値があると前から言っていましたし、こうして喜んでいますよ？」
「そ、そうだけど、また妊娠させちゃったら！」
「まあ、妹まで妊娠させてくださるのですか!?　それならばきっと父も喜びますね。バルトフォルド家と強い縁を結んで、旦那様の逞しい血がローズブレイド家に入るのですもの」
　色々とズレすぎた会話に目眩がしそうになるが、下半身に与えられる刺激に、現実に引き戻される。
「ま…まってくれ！　し、締付けが良すぎて…で、出る!!」
「ああァァンっ出して下さい、私のナカに沢山、お姉様を妊娠させた濃厚なお汁を、タップリ出してぇ!!」
　そしてディアドリーの、処女を失ったばかりの狭い膣内で膨れ上がったニックスの肉棒の先端から、彼女の姉を孕ませた濃厚な精液が放たれ、ディアドリーの子宮を満たしてゆく。
「ふぁあああんんっっ!!!　あついいいいいいいいいい!!!」
　夢の中と同じように、中出しされ絶頂したディアドリーは、その瑞々しい肢体をのけ反らせ、涎を垂らしながらビクンと身体を震わせる。
　そして力を失った彼女の肢体がニックスに覆いかぶさる。
「あらあら、ディアドリーったら。私の旦那様の身体がよっぽど気に入ったのね」
「…スゥスゥ」
　ニックスに覆いかぶさったディアドリーは、その膣内に半ば萎えた義兄の逸物を挿入されたまま、あどけない顔で寝息を立て始めた。
「ど…ドロテア？」
「フフ、ニックス様はまだ足りないのでしょう？大丈夫ですから、どう

ぞこの子の身体を堪能してくださいまし♡」
「ッ…わかった、それと責任はきちんと取るからな」
力の抜けたディアドリーの腰を掴みながら、ニックスは愛する妻に告げる。
「ええ♡末永く私達を愛してくださいね、旦那様♡」

半年後、兄が妻だけでなくその妹も妊ませたという情報に、弟が頭を抱えることになるが、それはまた別のお話。

神聖王国大勝利ルート（クラリスオナニー編　前編）

神聖王国の指揮官であるガビノが提案した勝負に、ドロテアとディアドリーの姉妹は無様に敗北した。
そしてガビノは、次の犠牲者として宮廷貴族アトリー家の令嬢、クラリスを選んだ。

「ああ…っ♡♡…っはあ…っ！ん♡♡ん♡っ♡…」
部屋の中に、艶のある喘ぎ声が響く。
部屋の中心に設置された台の上で、全裸に剥かれM字に開脚したたクラリスは、濃い陰毛に覆われた膣口に極太のディルドーを埋め込まれ、自らの手でその濡れそぼった膣内をかき回す。
「いいっ…くう…♡…♡♡…♡っ〝！うっう♡♡うっ」
ビクン、とクラリスの腰が震え、根本までディルドーを咥え込んだ膣口から愛液が吹き出す。
「これで5回目ですか…随分と慣れていますねえ」
「…ハァ……ハァ…っ」
ニヤニヤと嘲るように笑うガビノから目をそらし、クラリスは再びディルドーで己の膣口をかき回し始めた。

経験済みの彼女に課せられた勝負は〝絶頂対決〟。制限時間以内に定められた回数絶頂すれば、彼女の勝利だ。
「ハァ…ハァ…っあぁぁんっ!!」
かつて、高位の貴族令嬢でありながら、婚約破棄されたショックから専属使用人を雇い、彼らと乱交を繰り広げた彼女は、元婚約者だったジルクの謝罪後は使用人を解雇し、夜遊をすることも無くなった。
だが、一月足らずとはいえその道のプロの専属使用人達に開発された若い身体は、頻繁に火照りをおぼえ、その度に彼女は一人だけでそれを鎮火してきた。
故にこの勝負は、比較的彼女に優位…ではあった。
だが、底意地の悪い凌辱者達は、彼女達に安易な勝利を許さない。

『ああ…もっと、もっと強くシて!! ジルクゥゥ♡♡』
彼女の頭上に投影された映像、旧文明の遺産によって映し出されたホロスクリーンの中で、クラリスが獣人の使用人に後から貫かれて喘いでいる。
「いやぁしかし、清楚な顔をして随分とおイタをしていたみたいですなぁ」
「くっ…うぅっはぁん…」
映像の中では、今の少しやさぐれた雰囲気の彼女ではなく、清楚なお嬢様な見た目の過去のクラリスが、制服のスカートをたくし上げられ、清楚な白いパンツをずらされただけの姿で後背位で犯されている。
その倒錯した淫蕩な姿に、周囲で鑑賞している兵達の中には興奮して自分の逸物を扱いている者もいるほどだった。
ガビノは蔑むような、それでいて呆れが混じった目でクラリスを見る。そしてクラリスは悔しそうに目を逸らし、ひたすら自慰に没頭する。

外道騎士を殺したガビノ達は、彼が所有していたロストアイテムを回収した。その際に、外道騎士がかつて専属使用人達から没収した、王国の貴族令嬢と専属使用人との性交の記録映像もまた、彼らの手に渡っていたのだ。
その中には、今部屋の中心で無様にオナニー姿を晒している美少女の映像もあり、それがクラリスを襲う屈辱的な状況へと繋がった。
投影されていた映像が切り替わる。
『ハムッ…はぷぅぅんっ…じゅぷ…っぅん!』
『ハハハ、随分上手になりましたねお嬢様!』
投影された映像の中では、既に全裸のクラリスが獣人の上に跨り、その股間に獣人の逸物を咥え込みながら、別の獣人の逸物をその可憐な唇で咥え、はしたなく唾液を垂らしながら扱き上げていた。
「ククク、ウブな見た目で随分と仕込まれたがようですね?」
「っ…はひぃぃっ!!」

クラリスは耳を塞ぎたくなるような己の卑猥な声を聞きながら、再び絶頂し、綺麗に磨き上げられた台に水たまりが出来るほどの愛液を零す。
「ハァ…ハァ……」
「おやおやおや、もうギブアップですか？」
「ッ…そ、そんなわけっ！」
ガビノが煽ると、クラリスは絶頂したあとの気怠げな余韻に浸る余裕も無く、再び極太のディルドーで己の膣内をかき回す。
だが、既に刺激に慣れてしまった膣肉は、最早その程度の刺激では満足せず、熾火のようなむず痒い感覚だけが彼女を苛む。
快楽に蕩けた頭で、それでも彼女は必死に絶頂を得ようと藻掻く。
「随分必死ですねえ…まあ、ああはなりたくありませんか」
ガビノはクラリスから視線を外し、部屋の隅に憐れみの目線を向ける。
そこでは、先程の勝負に敗北したディアドリーが、処女を失ったばかりの膣口だけでなく、その可憐な唇や本来なら性交に使用しないはずの肛門にまで兵士の逸物を咥え込まされ、自慢の金色の巻き毛を兵士のペニスに巻きつけられ性の捌け口にされていた。
始めは気絶していた彼女は、肛門の処女を奪われる痛みで目を覚まし、激しい性交で再び気絶し、更に刺激で目を覚ますという、悪夢の無限ループを味わっている。
最早彼女の目にかつての覇気は無く、そこには輪姦を受けて正気を失いかけた哀れな少女の姿しか無かった。
ガビノはクラリスに視線を戻し、必死に快楽を得ようとしている彼女に悪意ある助け舟を出す。
「もうそんなモノでは満足出来ないでしょう？　ほら、映像の中の貴方のように、別の場所も弄ればよいではないですか」
「な…それは…」
ガビノが空中へ投影された画像を顎でしゃくる。
『い、嫌！　そこは違うぅ!!』
『いつも指を挿れられて気持ちよさそうにしているじゃないですか。

大丈夫、お嬢様ならばすぐに気持よくなりますよ』
映像の中では、獣人の上に倒れ込んだクラリスが、その逞しい逸物を膣内に挿入されたまま、脂の乗った白い尻をゴツゴツした獣人の手で割り広げられていた。
カメラのアングルが切り替わり、後から覗くような角度で撮影されたその映像には、根本まで獣人の逸物を咥え込み限界まで拡張された剛毛に覆われた卑猥な膣肉と、対象的に清楚に窄まったままの色素の沈着した肛門が映し出されていた。
ヒクヒクと物欲しそうに収縮するその穴に、先程までクラリス先輩が舐めていたもう一人の獣人の逸物が近づいてゆく。
『嫌…や、やめて…お願い…』
『ご安心下さい、もう何度も指で解されていますから、すぐに慣れますよ』
映像の中でクラリスが涙を浮かべながら懇願する。だがニヤニヤ笑う獣人たちは、その姿にむしろ逸物を一層膨らませる。
そして獣人の逸物の先端が、クラリスの肛門に押し当てられる。
暴れるクラリスを、彼女の膣内に挿入している獣人が彼女の子宮口を小突くことで大人しくさせる。情けなく喘ぎ抵抗出来なくなった彼女の肛門が、獣人の太い逸物を迎え入れてゆく。
『痛ッ…だ、ダメぇぇ!!』
『ッ…流石に初物だけあって締め付けが強いですな…』
『ハハハ、こっちも、後ろの穴に挿れられたら締まりが良くなったぞ!』
クラリスの悲痛な叫びを聞きながら、二人の獣人は彼女の雌穴の締りを品評している。
そして暫くすると、彼らの予想通りクラリスの口から甘い喘ぎ声が漏れ始める。
『は、あぁん…な、なんでぇっ…』
『やはり淫乱ですねお嬢様』
『前と後を二本差しにされて愛液をダラダラ垂れ流すとは、相当な好き物ですね』

肛門に初めて男を迎え入れたクラリスは、既にその若い肢体を開発されていた御陰か、彼女の意志とは裏腹に直ぐに順応し、２つの穴で快楽を貪り始めた。
そしていつしか、獣人たちの腰使いに合わせて自ら腰を振り、淫らな喘ぎ声を上げながら何度も絶頂させられ、２つの穴に大量の精子を流し込まれた。

「っ……」
「ほうら、あんな風に、後ろの穴も弄ればよいではありませんか」
クラリスは、自らが後ろの処女を失った瞬間を強制的に鑑賞させられ、あまりの羞恥と屈辱に言葉を失う。
そんな彼女に、ガビノはもう一本の極太のディアドリーを差し出す。
「さあ、早くしなければ制限時間が無くなりますよ？」
「……わかり、ました」
クラリスはチラリと、輪姦を受けているディアドリーに視線を向けた後、覚悟を決めた目でディルドーを受け取った。

神聖王国大勝利ルート（クラリスオナニー編　後編）

二本目のディルドーを手渡されたクラリスは、膝立ちになり両手でディルドーを握る。

そしてそのディルドーを、まるで愛しの恋人の逸物に奉仕するような丁寧さで唾液を垂らしながら舐めあげてゆく。

「ジュルっ…ちゅう…ふぅん…、ちゅう…」

かつて獣人に仕込まれたが舌技を、血の通わない玩具に向けて行使する。しかもかつての己の恥ずべき過去を再生されながら、見ず知らずの男達に己の恥態を余すところなく鑑賞されている。

「ハァ…ハァ…じゅぷ…はぁんっ…」

その恥辱を意識するだけで、極太のディルドーに占拠された雌穴が疼き、ポタポタと愛液を垂れ流し彼女の白い太腿を伝って台を汚してゆく。

「っ…あああぁぁんンっ♡♡!!」

そして彼女は、ディルドーに対する口腔奉仕だけで絶頂を迎え、潮を吹いてしまう。

「ククク、どうやら獣人達に相当開発されたようですね。まさかディルドーを舐めるだけでイくとは、想像を超えた淫乱ですよ？」

ニヤニヤと己の痴態を嘲るガビノを無視し、力が入らず最早膝立ちを維持できなくなったクラリスは、顔を己の愛液で汚れた台に擦付け、尻を高く掲げた無様な姿を晒しながら、両手で構えたディルドーを、己の、本来ならば排泄に用いるだけのはずの穴へと構える。

クラリスは、後輩たちや自分を守るために戦った兵士や船員達を護る為に、そして自分より前に勝負に敗北した少女が負った責め苦から逃れるために、快楽に茹だった思考で最善と考える手段を実行する。

「ああ〝〝〝っあ〝…ぁぁ♡ぁあっん…っ！」

クラリスの清楚に窄まっていた肛門に、男性器を模した器具が埋没してゆく。丁寧にまぶされた唾液により滑りの良くなったディル

ドーが、極太のその先端を歓迎するかのように拡張し、抵抗なく受け入れてゆく。
「すげぇ…」
「あんな綺麗なお嬢様がケツ穴まで調教されてるのかよ…」
そのあまりに淫靡で最早現実感が無い様子に、兵士達は興奮を超えて呆然と眺めている。
「あ〝…ぁ……ぁぁ〝あ〝〝あっ♡っんんん♡んっん!!」
そして極太のディルドーを肛門でも根本まで咥え込んだクラリスが、白い尻を震わせ愛液を撒き散らしながら絶頂する。
そして絶頂した直後にも関わらず、あろうことか彼女は自らの手で二本のディルドーを掴み、己のドロドロに蕩けた膣肉と、同じく柔らかく解れた腸内をかき回す。
「だめぇ、止まらない…!手が止まらないのぉ!!」
淫らに腰をくねらせ、はしたない声を上げながら己の２つの孔をかき回し愛液をまき散らす高貴なお嬢様の姿に、もはや周囲の兵士達はあ然としながら、その痴態を見つめ続ける。
『もっと!!もっと強くシて!!前も後ろも、もっとかき回してぇ♡♡』
画面の中で、膣口とアナルを二本差しにされたクラリスがその整った顔を快楽に染めながら叫んでいる。
その声が聞こえたのか、それとも彼女自身の淫らな本性故なのか、クラリスは己の２つの雌穴をかき回す速度を加速させる。
『「あっ…っ〝…あぁ…♡ぁ…っひぃぃぃぃ〝いっ……ぃぃ♡…ぃ！いぃ♡いっ……!!!!」』
台の上と画面の中のクラリスが同時に甲高い喘ぎ声を上げ、腰を仰け反らせて絶頂する。
そして力尽きたクラリスは、二本のディルドーを挿入したまま、台の上へと突っ伏す。
「ハァ…ハァ…」
「クッククク、おめでとおございます。見事に制限時間内に約束の回数をこなされましたね！」
パチパチとガビノがクラリスへと称賛の拍手を送る。

絶頂の余韻に引かれながら、クラリスは気怠げにガビノを振り返る。
「これで…ハァ…もう、船員達や…アンジェリカ達に…危害は…加え…無いのよね？」
クラリスが蕩けた、だが僅かに勝ち誇った光の籠もった目をガビノへ向ける。
ガビノはその目に応えるようにニッコリと微笑む。
「ええ、勿論ですとも。捕虜になった船員は全員開放しましょう」
そして服を脱ぎ捨てながらクラリスへ近づいてゆく。
「な、待ちなさい！　私はあなた達に勝ったのよ!?」
「ええ、おめでとうございます。ですが、勝負に勝ってもあなた達を開放するとは言った覚えがありませんねえ」
「な…ひぅぅ!!」
ガビノがクラリスの膣内とアナルに挿入されていたディルドーを引き抜く。そしてポッカリと空いた拡張された膣穴に己の肉棒を挿入する。
「い、嫌ァァァ!!!」
「ハハハ！どんなガバマンかと思えばなかなかどうして吸い付く様ないい締まりではないですか!!」
ガビノが高笑いしながら腰を振る。
「や、やめろ!!離せ!!」
「嫌！離して!!助けて、リオンさっ…きゃあァァァ!!」
檻の中に入れられていた外道騎士リオンの婚約者、アンジェとリビアもまた、クラリスの痴態を見せられ興奮した兵士達に引きずり出され、その豊満な肢体を包む衣服を剥ぎ取られ、まだ未使用の雌穴に無理矢理挿入され泣き叫ぶ。
「許さない…あんっ…絶対に…許さな、ひぅぅんん!!」
怨嗟の言葉すら憎い相手の腰使いで遮られたクラリスは、涙を流しながら彼女が守ろうとした少女たちと共に兵士達の慰み者としてその高貴な肢体を弄ばれることになった…。

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー
ーーーー
「な、なあドロテア？　本当に大丈夫なんだよ…な？」
　ニックスは己の隣でニコニコ笑っている、お腹を大きく膨らませた愛する妻に再度問いかける。
「大丈夫ですニックス様。彼女は一見すると反抗的な態度を取っていますが、一皮剥けばあんな風に淫らに乱れる淫乱な方です」
「そうですわ、ですからお義兄様の逞しい物で慰めて差し上げるのが、むしろ本人の為です」
　彼の問いかけに、ドロテアと、その隣で同じくお腹を大きくした巻き毛の美少女、ドロテアの妹であるディアドリーも太鼓判を押す。
「ん〝んーー!!ん〝ーー!!!」
　彼らの目の前には、ギャグボールを噛まされ、裸の身体を亀甲縛りで拘束された美少女、クラリスがその股間の二つの孔にディルドーを挿入され、剛毛に覆われた秘処から愛液を垂れ流しながら、殺意の籠もった目線を彼らに向けている。
「大丈夫です旦那様。クレアーレさんが提供してくださったこの映像資料があれば彼女は逆らえません」
「それにお義兄様、私達を妊娠させてからずっと我慢なされていたのでしょう？良い機会ですから発散しなければ、お体に悪いですわよ？」
　ニックスは彼が妊娠させた美人姉妹に背中を押され、熱に浮かされた様にフラフラと、拘束されたクラリスへと近づいてゆく。
「フフ…良かった。クラリスはニックス様のお眼鏡に叶ったようね？」
「ええ、そうですわね。お義兄様、女性経験の殆どがお姉様と私だったお陰で生半可な女性だと満足出来なくなっていましたもの」
「クラリスなら歳も家柄もバッチリですものね。ぜひ囲って、一緒に旦那様を満足させてあげましょう？」
　ローズブレイド家の姉妹は、愛する夫の為ならどんなことでもす

る。本来なら夫の性欲は自分達で受け止めるためなのだが、想像以上に絶倫だった彼の性欲は、二人だけでは到底受け止められず、しかも妊娠してしまった為、まともに発散させることすらままならなくなっていたのだ。

だからこそ、彼女達はクラリスに目をつけた。そして折よく、彼女達の動向を見守り、サポートを行っていたクレアーレからクラリスの弱点を提供され、彼女達によるクラリス側室化作戦が実行されたのだ。

「あっ…っ、…あぁ…♡ぁ…っひぃいいいい、いっ……いい♡…い！いい♡いっ…!!!」

クラリスの蕩けきった膣肉に、ニックスの剛直が埋め込まれてゆく。性感を開発されながら、その若い性欲をもて余し続けてきたクラリスの膣肉は、久しぶりの熱い肉棒に歓喜し、溜まり溜まった快感がクラリスの全身を駆け巡る。

「羨ましい、私も早く旦那様に可愛がって貰いたいわ…」

「お姉様、出産までは控えるようにとお医者様にも釘をさされていますわよ？」

夫への慕情と、僅かな嫉妬を込めた視線をクラリスに送るドロテアをディアドリーが嗜める。

「子供が生まれた、今度は四人で楽しみましょう？」

「ええ、そうしましょう」

二人が楽しそうに微笑む先で、クラリスは何度も、彼の想い人の兄の肉棒で絶頂を迎えさせられ、たっぷりとその子宮に精液を注がれていた。

ヘルトルーデの冒険（R―18版）　前編

「どうしてこんなに広いのよ!!」
　リオンの所有するロストアイテムである飛行舟パルトナーの船内に、ヘルトルーデの叫び声が響く。
　聖女に認定されたマリエの宝探しに同行したヘルトルーデは、彼女の母国ファンオース公国の艦隊とモンスター軍団をたった一隻で壊滅させた、〝外道騎士〟リオンの所有するパルトナーの情報を手に入れるため、一人で船内を探索していた。
　だが、全長７００メートルの巨船なのに何故か殆ど乗組員を必要としないパルトナー内は、マリエや彼女の取り巻き達が乗っているにも関わらず、探索中に誰ともすれ違わないほど人口密度が低く、ヘルトルーデは薄暗い船内を、心細さを押し殺しながら進んでいた。
　長く艶やかな黒髪をツインテールに纏めたヘルトルーデは、この無駄に広く、まるで幽霊船のように人の気配のない船内を歩く内に、次第に不安になってきた。
「もしかして、本当に幽霊船だったり…しないわよね？」
　不安と寂しさでポツリと独り言を呟く。
　人質として、殆ど祖国からも見捨てられたも同然に一人で王国へ留め置かれている彼女は、普段こそ気丈に振る舞っているが、実際は緊張でかなり精神的に疲弊している。
　そこにパルトナー内での探索で不安の寂しさを強調され、あるき続けた事で疲労も蓄積した彼女は、常の彼女なら決して漏らさない弱音を吐く。
「疲れた…もう、休みたいな…」
　ポツリと彼女の口から漏れたその言葉は、本来なら誰にも聞かれる事なく消えてゆく筈だった。
　だが幸運な、いやもしかしたら不幸な事に、その言葉を聞いている者、いや物があった。
「……」
　不安そうにキョロキョロと周囲を見渡すヘルトルーデは、光学迷彩

で姿を隠した、リオンの相棒である人工知能〝ルクシオン〟に気付くことなく、バルトナーの廊下を歩み去って行った。
彼女の姿が遠ざかり、姿が見えなくなるのを確認してから、ルクシオンは呟いた。
「フム…ちょうどいいかもしれませんね」

――――

「ひっ!?」
船内を歩き回り疲れ果てたヘルトルーデが、自室へ戻るために振り返ると、自分の後ろに丸っこい金属の塊らしき何かが浮いていた。
手のようなものの付いたそれは、リオンから〝作業用ロボット〟と呼ばれる、船内の雑用をこなすルクシオンが製造したロボットだ。
だがそのような知識の無いヘルトルーデに取っては、見慣れない不気味な存在でしかない。
普段なら、まだ不気味だがわざわざ近寄らなければ問題ない存在だと思えたが、疲れ切り不安と恐怖で参っている彼女には、〝作業ロボット〟がより恐ろしい存在に感じられた。
ヘルトルーデがあとずさると、ロボットが腕を伸ばしてきて…。
『ピピピッ』
聞き慣れない音を出してきた事で、ヘルトルーデの恐怖心が限界に達した。
「来ないでぇぇぇ!!!」
涙目になり、疲れた足で全力疾走を開始したヘルトルーデは最早自分が何処を走っているのかも分からないまま、ひたすら走り回り、そして足をもつれさせ転んでしまった。
「うぅ…痛い…」
なんとか起き上がろうと顔を上げた彼女の眼の前には、先程と同じように中に浮かぶ〝作業ロボット〟が佇んでいた。
『ピピピッ』
「ぴぅ…」
電子音（聞き慣れない音）を発して手を伸ばす〝作業ロボット〟に対する恐怖と、走り回って止めを刺された疲労感から、ヘルトルーデは意識を手放し

た。

作業ロボットは気絶した彼女を優しく抱き上げ、休ませるために一番近い船室、パルトナー内のリオンの私室へと運び込んだ。

そして作業ロボットは仲間を呼び、シワにならないようヘルトルーデの上着を脱がせると、下着姿のヘルトルーデをベットへ横たえ、綺麗に布団をかけて去っていった。

それは部屋の主が到着する、３０分ほどほど前の出来事だった。

ヘルトルーデの冒険（R―18版）中編

「あ～無駄に疲れた…」
マリエや五馬鹿共の相手に疲れたリオンは、さっさと自室で休むためにパルトナーの船内を歩いていた。
「そもそもなんで俺がマリエ（あのバカ女）の為に船を出さないといけねぇんだよ」
リオンは憤懣遣る方無い様子でブツブツとマリエに対する不満を口にする。
何故か聖女親衛隊の隊長に就任させられたリオンは、マリエ（聖女）のワガママ（宝探し）に巻き込まれてパルトナーでマリエと五馬鹿を含む取り巻き達を運ぶ羽目になった。
全力で拒否したかったのだが、アンジェとリビアも乗り気になってしまったため、仕方なく付き合うことになったのだ。
「ハァ…アンジェもリビアも冒険の準備に夢中で俺の相手をしてくれないし」
アンジェとリビアという二人の美少女と結ばれ、旅先でもムフフな展開を期待していたリオンは、冒険に備えて早く休みたいという二人の意志を尊重して、一人寂しく部屋で休むことにしたのだ。
リオンは自室のドアを開け、部屋へと入る。
「ん…？」
協会から支給されたナイトコートを脱いで部屋に控えていた作業ロボットに渡し、ベットへ倒れ込もうとしたリオンは違和感を覚えて静止する。
作業ロボットのお陰でいつも綺麗に整えられているベットの毛布が、何故か盛り上がっている。
「アンジェかリビアか…？」
リオンはかつて、二人の美少女に半ば襲われる形で結ばれた日のことを思い出す。
「…俺のベットに隠れてるってことはそういうことでいいんだよな？
何だよ、サプライズで俺のところに来てくれてたのか？」
リオンはあの時の二人のあられもない姿を思い出し、興奮と期待に

喉を鳴らして唾を飲み込み布団に手をかける。
「反応が無いってことは眠っちまってるのか？
…まあそれはそれで可愛いからいいか？」
期待に逸る自身の高揚を抑えながら、中にいるであろう恋人を起こさないように、優しく布団をはぐ。
「……え？」
だが、布団の中から現れたのはアンジェの豪奢な金髪でも、リビアの綺麗な亜麻色の髪でもなかった。
現れたのは、艶やかな黒髪をツインテールに纏め、普段の凛々しく小生意気な態度からは想像出来ないあどけない姿でスヤスヤと眠っているヘルトルーデだった。
インナーのみを身に着け、フカフカのベットで穏やかに眠る様子からは、ほんの少し前にモンスター軍団を率いてリオン達を殺そうとした恐ろしい公国の公女の様には見えない。
「……なんで？」
想像していなかった状況に、リオンはフリーズする。
そんなリオンの後ろに、彼のあまり忠実ではない相棒が姿を現す。
「船内の探索中に迷子になって疲れ果てていたようですので、作業ロボット達が一番近いマスターの自室で保護したようですね」
「いやなんで俺の部屋なんだよ」
「一応彼女は賓客扱いですので。これがマリエやその取り巻きなら倉庫に放り込んだのですが」
「あー、そりゃそうか…ってちょっと待て！」
だったら仕方ないか？と一瞬納得しかけたリオンだが、即座にツッコミをいれる。
「だったらなんで下着姿なんだよ!!」
「愚問ですねマスター。彼女の着ていたマジックコートは高級品です。そのままベットに寝たらシワになってしまいますよ。シワに」
何故だが異常に熱の籠もったルクシオンの言葉に後退りながらも、リオンも反駁する。
「そ、それは分かったけどだったらわざわざ俺のベットに寝かせなく

てもいいだろ？」
「…？　おや、マスターならここまでお膳立てすればベットに飛び込んでヘルトルーデを襲うと思ったのですが？」
「おい待て、なんでそうなる!?」
　かなり失礼な事を言ってくる相棒に、リオンな目を剥いて反論する。
「おやおや、アンジェとリビアの時は結局二人同時に抱いていたではないですか」
「あれば不可抗力だろ!?」
「お愉しみだったのでは？」
「それはそうだけど！」
　割と最低な事を言っているリオンに呆れ混じりの視線を送りながら、ルクシオンは自分の分析結果を伝える。
「今のマスターは欲求不満でしょう？　ですのでマスターが手を出しても大丈夫でアンジェ達にも文句が言えない女性として、彼女をこうして部屋に誘い込んだのですが？」
「欲求不満て、いやそうだが…というかヘルトルーデさんに手を出すのマズいだろ!?」
「そんなことはありませんよ？」
　ルクシオンが〝何いってんだコイツ〟という態度でリオンに説明する。
「マスターは公国の艦隊を殲滅してヘルトルーデを捕虜にした。つまり彼女はマスターの戦利品です。そして戦場で手に入れた女性を手籠めにするのは勝者の特権ですよ？」
「いつの時代の話だよ!?」
「この世界の常識なのですが？」
　リオンのツッコミは華麗に受け流される。
「彼女の扱いにしても、預かりこそ王国にありますが本来の所有権はマスターです。上手く言いくるめられて所在が曖昧にされていますが、一言言ってくだされば証拠も揃えられますよ？」
「…いや、とりあえずヘルトルーデさんの身元に関する権利があるの

は理解できたからいい」
　まくし立てるルクシオンにリオンは後退る。
「というかルクシオン、お前は肝心なことを忘れてるぞ」
「肝心なこと？」
「ルクシオン…確かに俺は今欲求不満だ。それは認めてやる」
「やけに素直ですね？」
「うるせぇ。兎に角だ、確かに眼の前に美少女がいて、合法的に抱いても良いなら襲いかかりたくもなる。
だが!!」
「だが？」
「ルクシオン、俺は…巨乳好きだ!!」
「……」
「残念だがヘルトルーデさんには胸が無い!!」

　リオンの魂の叫びに、ルクシオンは無言になる。
　因みにリオンは気付いていないが、ベットの上でヘルトルーデがピクリと動いた気配がしたが、直ぐにまた寝息を立て始める。
「おや、私の観察結果ではマスターは胸だけでなく尻や太腿も同じ位に好きだと思っていましたが？」
「…確かに好きだが」
「う…んっ…」
「!?」
　その時、ヘルトルーデが寝返りをうつ。布団を剥がれて寒かったのだろう。布団を抱きかかえちょうどお尻を突き出すような体勢になる。
「どうやら、目を覚ましてはいないようですね」
「そ、そうだな」
「…マスター、目がお尻に釘付けですよ？」
「ぬぐっ！」
　リオンの視線は、胸と異なり発育の良くムッチリと脂ののった太腿とその付け根の尻のラインに釘付けだった。インナーに包まれたへ

ルトルーデの尻は、リオンが想像した以上に魅力的で、無意識に視線が誘導されてしまったのだ。
「マスター、アンジェとリビアは既に休んでいます」
「…何が言いたい？」
「明日の朝まで誰も入って来ませんよ？」
「ルクシオン……明日の朝まで誰も入れるなよ」
「承知しました」
ルクシオンに命令を下したリオンは、満を持してヘルトルーデのインナーに手を伸ばす。
ゆっくりと、眠っているヘルトルーデを起こさないように、下半身を覆っているインナーを脱がせてゆく。
「…黒か」
スラリとした白い太腿に映える、精緻な刺繍の施された黒いパンツが、ヘルトルーデの最も大切な部分を守っている。
次にリオンは、ヘルトルーデの上半身を覆うインナーも慎重に脱がせてゆく。
「こっちも黒だが…まあ、うん」
「マスター…」
パンツとお揃いの高級そうなブラジャーに包まれた、そもそもブラが必要なのか疑問符が浮かぶ薄い胸に憐れみの視線を向けたリオンは、人として最後の良心を発揮して何も言わずに視線を胸から逸らす。
「…さてと」
下着姿に？かれながら、未だに目を覚まさないヘルトルーデの姿をリオンは満足げに眺める。
艶やかな黒髪をツインテールに纏め、怜悧に整った美貌の美少女があどけない表情で眠っている。胸こそ憐れなほど薄いが、モデルのようにスラリとした長い手足と透き通るような白い肌。だが不健康なものではなく、肌は瑞々しくハリがあり特に太腿からくびれた腰のラインはアンジェやリビアと比較しても勝るとも劣らないほど魅力的だ。

リオンの手がヘルトルーデの白い太腿に伸びる。さわさわと、吸い付くような太腿の感触を楽しむ。
「っ…ぅん」
「とっとと、まだ起こさないようにしないとな」
くすぐったさを感じたのか、ヘルトルーデの口から艶のある声が漏れる。だが、疲れ切って眠っている彼女は未だに目を覚まさない。
ついにリオンの手が、ヘルトルーデの下半身を覆う最後の一枚に伸びる。
〝ゴクリ〟とリオンが生唾を飲み込む。
リオンの指がヘルトルーデの腰にかかったパンツの布へかかる。そしてゆっくりと、彼女のパンツが足元へと降りてゆき、ついにヘルトルーデの最も隠された部分がついにリオンの目前に晒される。
「うわ…エッロ…」
リオンが目にした光景は、彼の想像を遥かに超えた卑猥さだった。
リオンの目がヘルトルーデのスラリとした美脚の付け根に釘付けになる。彼女の下腹部は、黒々と艶光する陰毛が生い茂っていた。
乙女らしくピッタリと閉じた縦筋と、同世代のリビアやアンジェと比較しても十二分に成熟しふっくらと肉づいた大陰唇の下まで生い茂り、ヘルトルーデの最も恥ずかしい部分を覆い隠している。
「意外ですね。もっと綺麗に整えているものだと思っていましたが」
「そうだな…」
ルクシオンの呟きに、リオンはヘルトルーデの股間から血走った目をそらさないまま応える。
ヘルトルーデの名誉のために書いておくと、普段身の回りの事を殆ど専属の侍女に任せていた。当然デリケートな部分の処理も任せていたのだが、身一つで王国の捕虜になった彼女は、信頼できる侍女とも切り離され、当然デリケートな部分を整えることもできなくなっていたのだ。
「これじゃあよく見えないよな」
リオンはヘルトルーデのびっしりと生い茂った陰毛をかき分け、ピッタリと閉じた乙女の縦筋を左右に開く。

「おぉ…」
リオンの手で開かれたまだ未使用の狭穴は、色素の沈着もない綺麗なピンク色をしていた。殆ど湿り気の帯びていないソコをよく見るために顔を近づけたリオンの鼻腔を、ムワりとした卑猥な薫りがくすぐる。
「これは…想像以上にエロいな」
冷たく整った美貌を有するヘルトルーデの最も秘された部分だけは、だらしなく陰毛が生い茂っている。胸の薄さのせいで幼く見えるが、他の女性としての部分は同世代と比較してもより成熟しているというギャップに、リオンは鼻血が出そうになるほど興奮している。
ヘルトルーデの膣口に鼻がくっつきそうになるほど顔を近づけたリオンは、彼女の穢のない膣肉をひと舐めする。
〝ピチャリ〟と音をたてて、リオンはヘルトルーデの綺麗な膣肉を舌で味わう。
酸味と塩味の混ざった生々しい味わいのそれを、リオンは一心不乱に味わう。
初めは入口を濡らすように、そして入口が十分解れると舌を奥へと進めてゆく。まだ誰も受け入れたことのない狭い膣穴を、リオンの無遠慮な下が少しずつ奥へ向けて進んでゆく。
「ふっ…ぅ…んっ」
「おっと…」
敏感な部分を弄くられたヘルトルーデは、目を覚まさないをまま身悶えする。リオンはヘルトルーデの白い太腿を掴み、その付け根がよく見えるように大きく開く。
「これはなかなか…」
脚を開かれたことでピッタリと閉じた縦筋は綻び、濃い陰毛に覆われた割れ目がリオンの唾液でヌラリと光っている。そして透き通るように白い尻肉の谷間でヒクヒクと、ヘルトルーデの不浄の穴が別の生き物のようにヒクついている。
〝ゴクリ〟とリオンが喉を鳴らす。
「もう…いいよな?」

リオンが服を脱ぎ捨てる。そしてガチガチに固くなったリオンの剛直が天を突くように勃ちあがっている。
ヘルトルーデの腰の下にクッションを置き、位置を調整したリオンは己の分身の切っ先を、ヘルトルーデの未使用の膣口へ合わせる。
「頂きま～す」
ヘルトルーデの括れた腰をしっかりと掴んだリオンは、ゆっくりと腰を進め始めた。

ヘルトルーデの冒険（R―18版）後編

リオンは舌舐めずりをしながら、ヘルトルーデのスラリとした長い脚を大きく開く。そして彼女の肌を最後まで守っていたブラジャーを剥ぎ取った。
「…これはこれで」
「おや、マスターは巨乳好きだったはずては？」
「いつも大きなおっぱいばかり愛でてるからな。だが偶には、小さいおっぱいも悪くないな…」
リオンは目の前の、いまだに目を覚まさないヘルトルーデの裸体を目に焼き付ける。
艶やかな長い黒髪をツインテールに纏めた怜悧な美貌の美少女が、あどけない表情で眠っている。白く透き通るような肌に、モデルのようにスラリと長い手足。胸は、リオンの二人の恋人に比べると悲しいほどなだらかだが、その頂には綺麗なピンク色の乳首が存在を主張している。
〝ゴクリ〟と喉を鳴らしたリオンは、ヘルトルーデのなだらかな胸を舌で舐めあげる。ペロペロと、唾液で裾野を濡らしながら、徐々にその頂へと進んでゆく。
「うん…っ」
「ちゅぱ……ふぅ、なんかこれはこれで背徳的で興奮するな…」
リオンの舌が、ヘルトルーデの綺麗な乳首を突くと、その刺激でヘルトルーデは眉を寄せ、ピクんと彼女の腰が震える。
「そうだ…おいルクシオン」
「…悪趣味ですね」
リオンはふと何か思いついたのか、ルクシオンに呼びかけると、彼の忠実な相棒が主人の命令に従いヘルトルーデへ〝仕込み〟を行う。
ルクシオンが無痛針の注射器で、ヘルトルーデの首元に何かを注射する。
「準備は出来たし、そろそろ挿れるとするか」

ニヤリといやらしく笑ったリオンは、大きく開かれたヘルトルーデの美脚の根本、黒々とした陰毛で覆われた彼女の縦筋へと、己の逸物の照準を合わせる。
そしてゆっくりと、リオンはヘルトルーデの未使用の狭穴に己の逸物を埋め込んでゆく。
「うぉ……凄いな……流石処女マンコ……キツくて狭い……」
「あ……あ……う……いたい……いたいっ！……え？」
初めて男を受け入れる痛みで意識を取り戻したヘルトルーデは、眼前にいる憎い相手の姿に驚きの声を上げようとするが、すぐに襲ってきた下腹部への違和感に悲鳴を上げる。
「あぐぅ⁉いだっ！いたいっ！な、何なの!!」
「ハハッ！やっと起きたかヘルトルーデさん？」
「なっ？貴様何をしてっ!!ひぅぅっ！」
突然の出来事に混乱していたヘルトルーデだったが、自分の中に異物が侵入してくる感覚に現実に引き戻される。
「やめなさいよこの変態！死ねっ！い、今すぐ殺してやるわ！」
「酷いなヘルトルーデさん、俺はヘルトルーデさんがして欲しかった事をしてあげてるだけだぜ？」
リオンはニヤリと、怒りと羞恥で赤く染まったヘルトルーデへ向けて下卑た笑みを浮かべる。
「ふざけないでよっ！誰がアンタみたいなクズに抱かれたいなんて思うもんですかっ！」
「おいおい、じゃあなんで俺の部屋のベットで寝てたんだ？」
「そ…それは！　私は道に迷って…それで気がついたら…！」
眠っている内に部屋に運び込まれていたヘルトルーデは、自分が何故ここにいるのか分からず困惑しながらも、必死に己の膣内に侵入しようとするリオンを押しのけようとするが、冒険者として鍛えているリオンとは腕力が遥かに違うため、無駄な抵抗にしかならない。
リオンなその様子に背徳的な満足感を覚え、ニヤニヤと笑いながらヘルトルーデを追い詰める。
「どうやらお姫様は欲求不満みたいだからな。ヘルトルーデさんは一

応俺の戦利品で、いわば今の俺はヘルトルーデさんのご主人様な訳だから、折角だし一肌脱ごうと思ってさ？」
「わ、私はそんな…あんっ!?」
「へーぇ、じゃあこのビンビンに勃った乳首は何なんだろうなぁ？」
「やっ…あぁぁんっ…やめっ、ひぅぅん!!」
ヘルトルーデの薄い胸の頂点で存在を主張する、赤く充血した乳首を弾き、甘い喘ぎ声を挙げさせながらリオンが楽しそうに笑う。
「それにココも、どんどん愛液が溢れてくるぜ？　だいぶ溜め込んでたんじゃないか？」
「ひっ…嫌…や、やめてぇ…」
リオンは己の逸物の先端で、処女膜を破らないように気をつけながらヘルトルーデの膣口を掻き回す。そうすると〝クチュリ〟と卑猥な音とともに、リオンの先走り液だけでなく、ヘルトルーデの膣奥から溢れてきた温かい愛液がリオンの逸物の先端を濡らす。
「な…何で、わたしぃぃ…っ!!」
「オラオラ、さっさと認めちまえよお姫様。自分が淫乱で、欲求不満を解消して欲しくてこの部屋に来たってなぁ!!」
「いや…あ…あぁ♡ぁぁ…ぁ♡♡……♡！」
そしてリオンが、彼女の濃い陰毛をかき分けて彼女の敏感になったクリトリスを捻り上げると、ヘルトルーデは情けない声を上げて絶頂し、膣肉でリオンの亀頭を締め上げながら潮を吹いて絶頂する。

（うぉ……すげぇ締まる……）
「はぁ……はぁ……はぁ……」
「おいおい、もうイっちまったのか？　まだまだこれからだぞ？」
「う……うるさいっ！アンタなんかに犯されて感じるわけないでしょうっ！」
息を荒くしながらリオンを見返すヘルトルーデだが、その表情には隠しきれない期待の色が見え隠れしている。
少しずつ、ヘルトルーデの心が陥落に近づいている事を感じながら、リオンはいやらしく笑い、ヘルトルーデに提案をする。

「へぇそうか。だったら勝負をしようぜお姫様？」
「勝負…？」
「そう。俺は今からヘルトルーデさんの処女を奪う」
「な!?」
　ヘルトルーデが怒りと恥辱に顔を赤くしリオンを睨みつけるが、リオンはそれを無視して話を続ける。
「安心しろ、ヘルトルーデさんが最高に気持ちよくなるように抱いてやるよ。そして俺がヘルトルーデさんに中出しするまでにヘルトルーデが一回も絶頂かなかったら…」
「そうしたら…？」
「そうしたら俺はアンタの奴隷にでもなんでもなってやるよ。黒騎士の爺さんを倒した騎士が、モンスターの大軍を殲滅したロストアイテムが手に入るぞ？　……どうする？」
「……いいわ。公国の為だもの、私の処女膜なんて安いものよ。それに貴方みたいな外道に、これ以上感じさせられる事は無いわ！」
　ヘルトルーデは抵抗を辞め、体の力を抜く。そしてその怜悧に整った高貴な美貌で、挑発するようにリオンに微笑みかける。
　薄い胸の頂を勃起させ、スラリとした長い脚を開かれ、見た目に似合わない成熟した女性器とそれを覆い隠すような濃い陰毛を晒し、誰も受け入れたことの無い乙女の割れ目に男の逸物を半ばまで埋め込まれている。そんな、少女としての尊厳の大半を剥ぎ取られながらそれでも凛とした強気な態度を崩さないヘルトルーデを、これから自身の逸物で啼かせる事にリオンは暗い愉悦を覚える。
「大した自信だ。当然だけど、ヘルトルーデさんが俺に負けたら、アンタの体は一生俺のものだぞ？」
「っ…ええ、いいわよ。好きにしなさい！」
　リオンの言葉に僅かに怯えながら、それでもヘルトルーデは強気な態度を崩さない。
　媚薬を投与されたヘルトルーデが絶対に勝負に勝てないことを知っているリオンは、そんな彼女の強気な顔が快楽に歪む姿を想像しながら、彼女の細い腰を掴む。

「それじゃあ、ヘルトルーデさんの処女、頂きます」
「っ、好きにしなさ…いっ、痛いいぃ!!や…嫌ぁぁぁ!!」
そして腰に力を入れたリオンは一気にヘルトルーデの処女膜を突き破り、自身の分身を根本までヘルトルーデの未開の狭穴へ埋め込んだ。
処女を失い、大人の女性への階段を無理矢理登らされたヘルトルーデは悲痛な声をあげ、宝石のような赤い瞳から涙を流す。処女を奪われた彼女の狭い蜜壺は、リオンの太い逸物で拡張され、結合部からは乙女の証である破瓜の血が溢れ、シーツを赤く染める。
「っ…絶対に、許さない…」
「おいおい、処女膜なんて安いもんだって言ったのはヘルトルーデさんだぜ…っと、凄い締め付けだな」
「う～っ!!」
憎悪の込もった視線でリオンを睨みつけるヘルトルーデをせせら笑うように、リオンは彼女の未開拓の雌穴の締りを堪能する。
ふんわりと包み込むようなリビアの膣肉や、何度抱いても強い締め付けでリオンから精液を搾り取ろうとするアンジェの膣肉とも違う、彼の逸物全体に吸い付くようなヘルトルーデの膣肉の締め付けに、思わず射精しそうになるのを堪えながら、リオンは敢えて腰を動かさず、ピッタリと己の逞しい腰とヘルトルーデのくびれた腰を密着させる。
それは処女を失ったヘルトルーデを気遣って…ではなく、初めて男を迎え入れたヘルトルーデの未開拓の雌穴に、己の逸物の形を覚え込ませる為だった。事実、ヘルトルーデの生意気な態度とは裏腹に、媚薬で強制的に発情させられている彼女の体は、自身を満足させる雄を喜んで受け入れ、これから己を支配する雄の逸物の形を覚えようと膣肉がリオンのペニスに吸い付く。
「い、嫌っ…何で…っ?」
「どうしたヘルトルーデさん、さっきまで痛がってたのに、だんだん顔が緩んできてるぜ?」
「っ…そんな事っ…!!」

己の決意に反して、体がリオンの逸物を徐々に受け入れ始めている事に戸惑うヘルトルーデをリオンが挑発する。
緩みかけた瞳に再び憎悪を宿し、ヘルトルーデはリオンを睨みつけるが、その瞳は先程よりも弱々しい。
「まあ確かに動かないのは退屈だから…っと」
「や…な、なにを…ひぅ?!」
そしてリオンは腰をヘルトルーデに密着させたまま、彼女の無防備な脇に舌を這わせる。
レロレロと、リオンの舌がヘルトルーデの、股間と異なり毛の生えていない、媚薬のせいで発情し汗ばんだ脇を這い回る。ムッとするつい先程まで乙女だった美少女の体臭と、塩味の強い汗の味を堪能しながら、初めは戸惑い、そして徐々に与えられる刺激に反応して甘い声をあげ始めたヘルトルーデの様子に、リオンは更に逸物を興奮で膨らませる。
「ジュル…ヘルトルーデさん、まさか脇を舐められただけで感じてるのか?」
「か…感じてなんかいないわよ…この変たっ…ひゃぁぁぁん♡」
必死に否定しようとするヘルトルーデを嘲笑うかのように、リオンが舌を這わせると、ヘルトルーデは喘ぎ声をあげ、膣穴からは破瓜の血だけではなく愛液がリオンの逸物を濡らす。
「おいおいヘルトルーデさん、まだ脇を舐めただけなのにもうイきそうなのかよ」
「そんな…こと、な…やァァァん♡」
呆れたようなリオンの言葉に抗議しようとしたヘルトルーデは、不意打ちで勃起した乳首を抓られ情けない喘ぎ声をあげ、更に愛液を垂れ流す。
「う…うぅ…なんで、こんなヤツ、嫌なのに…なんで体がこんなにぃ…っぁん!」
「それだけ溜まってたんだよ、ヘルトルーデさん!」
快楽に流される己の肢体に悔し涙を浮かべるヘルトルーデに止めを刺すように、ついにリオンが腰を動かし、その刺激にヘルトルーデ

は思わず歓喜の声をあげる。
　ゆっくりとリオンは己の逸物をヘルトルーデの狭い膣肉から抜いてゆく。ヘルトルーデの膣肉は本人の意志とは裏腹に、己のご主人様となる雄の逸物を逃さないように締め付け、卑猥にその成熟した陰唇がめくれ上がる。そして大きく膨れた先端が膣肉の入口まで引き抜かれたところで、リオンは一気にペニスをヘルトルーデの最奥まで突き込んだ。
「いいい……いいっ！や…ぁあ……っ…ぁっあああっ!!」
「はは、お漏らししたみたいに潮噴いてるぜ、ヘルトルーデさん！」
　リオンの太い逸物で雌穴を拡張され、その逞しい先端で子宮口を小突かれたヘルトルーデの媚薬に侵された体は、その刺激に耐えられず絶頂し、盛大に潮を噴いた。
「あ…嫌ぁぁ…っ」
「ハハハ、これでアンタの体は俺のものだ。絶対に誰にも渡さねぇぞ！」
「っ……え？」
　ヘルトルーデは快楽に脳を焼かれながら、血走った目で己を見るリオンの興奮した顔を見つめる。
　リオンほんにんも気付いていないが、ヘルトルーデの破瓜の血に含まれていた媚薬の効果でリオン自身も彼が思っている以上に興奮していたのだ。
「ちゅ…ちゅう…。ちゅっぷ…はぁはぁ」
　リオンがヘルトルーデの唇を奪い、強引に舌を入れて彼女の口腔内を犯す。既に二度絶頂し、媚薬で思考も蕩かされたヘルトルーデは最早抵抗できずリオンの舌を受け入れ、快楽に瞳を蕩かせる。
　そしてヘルトルーデは無意識に脚をリオンの腰に絡め、自分から腰をリオンに擦り付け始める。
（嘘……私、何で……？）
　自分の行動に驚くヘルトルーデだったが、それでも彼女の体はリオンの逸物を離そうとしない。
「ぷは……どうだ？気持ち良かったか、ヘルトルーデさん？」

「っ……そ、そんな訳ないでしょう!?貴方みたいな変態の、汚い舌なんて……っああ!?」
「そうかい。なら、もっと激しくしてやるよ!!」
「っ、や……ぁ、激しっ……そんなっ……ぁんっ!!」
リオンがヘルトルーデの細い両膝を抱え上げ、上から押しつぶすようにしてピストンを開始する。
「ひゃ……ぁ、深い……いっ!!だめぇ……そんなにっ……ぁぁぁぁっ!!」
「っ、凄い締まりだぜ、ヘルトルーデさん……っ!!」
ヘルトルーデの蜜壺を掻き回すリオンの太く硬い逸物が、彼女の子宮口を突き上げる。
「ひゃうぅ……らめ、そこぉ……突かないれぇ……」
「ここが良いのか?ほら、たっぷり味わえ!」
「ひゃうぅ……ひぐぅぅぅぅっ♡」
リオンがヘルトルーデのGスポットをカリ首でゴリゴリと削るように責めると、ヘルトルーデの口から甘い悲鳴が上がる。
「駄目……これダメなのっ……おかし……くなっちゃうぅぅ……ッ♡」
「おかしくなれよヘルトルーデさん、もうお前は俺の女なんだからな!」
リオンは己の逸物を締め付けるヘルトルーデの秘肉に射精感を覚え、更に激しく腰を打ちつける。
「あ……ぁぁっ♡」
「っく!」
そしてついに限界を迎えた二人は同時に果てた。
「ふ……ぁ……♡」
「ヘルトルーデさん、大丈夫か?」
「ん……ぁ……んん……♡」
ヘルトルーデの意識は、初めて男を受け入れ、そしてその逸物で絶頂させられた事で朦朧としていた。故に己を気遣うリオンが自然と彼女の唇を奪い、彼女の甘い唾液を啜る事を容易に受け入れ、むしろ

積極的にリオンの舌を己の舌で愛撫していた。
　そしてリオンは半ば萎えた己の逸物をヘルトルーデの膣穴から引き抜く。
「ん……ぁ……♡」
「……っと」
　するとヘルトルーデは名残惜しそうに声をあげ、まるで離れたくないかのように、彼の太股にそのむっちりとした尻を押し付けてくる。
「ったく、可愛すぎんだろ……っ」
「んんっ……♡」
　リオンはもう一度ヘルトルーデの唇を奪う。
「……んっ、ちゅっ……ぁ……っ」
「ヘルトルーデさん……好きだぜ、リビアとアンジェの次だけど」
「っ……最低ね……っ！」
　リオンの言葉に、意識が覚醒したヘルトルーデは嫌悪感を浮かべるが、その表情は快楽で蕩けきっていた。
「さて、それじゃあ約束通り、アンタの体も心も全部俺のモノにしてやるよ」
「ふんっ！出来るものならやってみなさい！」
　ヘルトルーデは強気に言い放つが、その瞳の奥では期待の色が浮かんでいる事を、リオンは見逃さなかった。
「あ……っ」
　そしてリオンはヘルトルーデの体を裏返し、うつ伏せになった彼女に覆いかぶさる。
「きゃ……何をする気?!」
「決まってるだろ？　俺はまだまだ満足してないんだ。ヘルトルーデさんの体で、コレを鎮めてもらうぜ？」
「ひっ……やめっ……ぁぁぁぁぁぁっ!!!!!」
　そして今度は後ろから、ヘルトルーデの膣穴にペニスを挿入する。
「ぁぁぁぁっ！やめっ……ぁぁんっ！」
「はっ、良い声で泣くじゃないか！」
「いやっ……やめっ……ぁぁぁっ♡」

バックからのピストンに、ヘルトルーデは甘い喘ぎ声をあげる。
「ああっ……やだっ……またイっちゃ……ぁぁあああああ――――っ!!!」
再びヘルトルーデは絶頂し、その瞬間彼女の子宮が降りてきて、リオンの先端とキスをする。
「ぁ……ぁぁ……♡」
「へぇ、子宮口が俺のチンポに吸い付いてくるぜ、ヘルトルーデさん！」
「ちがっ……そんなんじゃ……ぁぁああ――――っ!!!!」
否定しようとするが、リオンの太い逸物にGスポットを刺激され、ヘルトルーデは言葉とは裏腹に媚びるような喘ぎ声を上げる。
「ぁぁ……だめ……そこばっかりぃ……ぁ……ぁぁ……っ」
「ここが良いのか？ほら、たっぷり味わえよ！」
「ひゃうぅ……らめぇ……そんなにしたら、わたし……こわれちゃうぅ……っ♡」
最奥まで突きこまれたリオンの逸物がGスポットを擦りあげる度に、ヘルトルーデは甘い声を上げながら愛液を吹き出し、ベッドシーツを濡らす。
「あ……ぁぁ……♡」
「おい、まだ終わりじゃないぞ」
「ひゃうぅっ♡」
リオンの激しいピストンに、ヘルトルーデは再び甘い悲鳴を上げる。
「やだっ……ぁぁ……もう許してぇ……っ♡」
「何言ってんだよ、こんなにマンコ締め付けておいてよぉ」
「ひゃうぅっ♡」
リオンがヘルトルーデの乳首を摘まみ上げると、彼女はそれだけで軽く達してしまった。
「ひゃうっ♡ちくびだめぇ……ぁぁぁ……っ♡」
「ほら、ここが良いんだろ？正直になれよっ！」
「ひゃうぅっ♡」
リオンは両手でヘルトルーデの薄い胸を鷲掴みにし、極僅かに存在

する柔らかな乳肉を乱暴に揉みしだく。
「ぁ……だめぇ……おっぱいぃ……らめなのぉ……っ♡」
「はは、嘘つくなよ、本当はもっとして欲しいんだろ？ほら！」
「だめっ……らめらって……いってるのにぃ……っ♡」
リオンは背後からヘルトルーデの耳元に囁くように語りかけ、そしてその手の動きを加速させる。
「ぁ……ぁ……らめ……もう……イク……イッちゃ……ぁ……ぁぁぁぁぁ―ッ♡」
そしてヘルトルーデは四度目の絶頂を迎え、その締め付けによってリオンもまた射精した。
「ぁ……ぁぁ……♡」
「っと、流石にもたないか……」
ヘルトルーデは快楽の余韻に浸り、うつ伏せのまま動けなくなる。
だがリオンの逸物は未だ硬度を保ったままであり、それを見たヘルトルーデは怯えるように後ずさる。
「ひっ……もう無理ぃ……お願いだから休ませてぇ……っ」
だがリオンはその懇願を無視し、ヘルトルーデの腕を掴むとその体を仰向けに押し倒した。
「きゃっ……やめて！これ以上されたら私壊れて！」
「大丈夫だって。ヘルトルーデさんはタフそうだし、それに俺はまだ全然満足していないんだ。付き合ってもらうぜ」
「そ、そんな……」
ヘルトルーデの顔が絶望に染まる。
「嫌ぁ……やめっ……んんっ♡」
だがリオンは構わずヘルトルーデの唇を奪い、その体を貪る。
「んんっ！んむっ！んんん～っ♡」
「はは、キスだけで感じてんのか？」
「んむっ！ふざ……け……っ！あぁっ！」
リオンはヘルトルーデの唇を解放し、その首筋に舌を這わせると、ヘルトルーデはビクンと体を震わせる。
「んっ……あぁ……っ」

「へへ、可愛い声じゃねえか。もしかして感じるのか？この変態め！」
「ちがっ……違うっ……私はそんなんじゃ……ぁぁっ！」
リオンはヘルトルーデの乳首を掴み上げ、その勃起した先端に吸い付く。
「ぁぁあっ！吸わないで……そんな所……ぁぁあっ!!」
「はは、良い反応だぜ！」
「いやっ……そんなに強く噛まないでぇ……っ！」
リオンはヘルトルーデの両胸に歯を立て、まるで果実のように甘噛みする。
「痛いはずなのにぃ……なんれぇ……っ♡」
「はは、気持ちいいみたいだなぁ、ヘルトルーデさんよぉ」
「違っ……ぁぁあ――っ!!」
否定しようとするが、リオンの指が秘裂に潜り込み、Gスポットを刺激すると、その口から甘い悲鳴が上がる。
「やだっ……そこはぁ……ぁあんっ♡」
「はは、良い声で泣くじゃないか！」
「だめっ……そこばっかりぃ……ぁぁ……っ♡」
リオンは愛液と精液を溢れさせる膣穴を掻き回すようにピストンを繰り返し、ヘルトルーデの弱点を責め立てる。
「ぁ……ぁ……だめ……またイっちゃ……ぁ……ぁぁあ――っ♡」
五度目、ヘルトルーデは再び絶頂を迎える。
「へぇ、ヘルトルーデさんのマンコ、すっかり緩くなったな」
「うぅ……ちがう……こんなの……わたしじゃない……っ」
「何が違うんだよ？ほら、お前の体は正直に反応してるぞ！」
「あぁっ♡」
リオンはヘルトルーデのクリトリスを摘まみ上げる。
「やだっ……触らないでぇ……っ」
「へぇ、こんなにビンビンにしておいてよく言うぜ」
「ひゃうぅっ♡」
リオンはヘルトルーデの陰核を擦り上げる。
「やだぁ……っ♡」

その刺激だけで愛液を垂れ流し、ヘルトルーデは瞳に涙を浮かべ絶頂する。
そんなヘルトルーデの淫らな姿に、再び股間に血が集まるのを自覚したリオンは、ヘルトルーデを組み敷き、処女を失った直後にも関わらず十二分にほぐれたその膣肉に己の肉棒を埋め込む。
「ひゃうぅっ♡だめぇ……いま入れられたらぁ……おかしくなるぅ……っ♡」
「はは、今入れたらどうなっちまうんだ!?」
「だめぇ……だめなのぉ……ぁぁ……ぁぁぁあ――っ♡」
そしてヘルトルーデは六度目の絶頂を迎え、同時にリオンもその膣内に大量の白濁を解き放った。
「ぁ……ぁ……♡」

そうして快楽に溺れた二人の交合は、夜が更けるまで続き、最後にはお互い気絶するように意識を失った。

翌日、ベットの上で裸でヘルトルーデを抱きしめて眠っている様子を二人の恋人に見られたリオンの情けない叫び声が艦内に響くのはまた別のお話。
そしてヘルトルーデ経由で陰謀が筒抜けになったフランプトン侯爵が失脚し、破れかぶれになった公国が戦争を仕掛け、何故かヘルトルーデの妹のヘルトラウダまでもが外道騎士の捕虜になるのは、更に別のお話……。

メイドのお仕事？（ユメリア編）

これは外道騎士リオンが共和国に留学していた頃のお話。
リオンが留学先で色々やらかした結果、二人の婚約者からお目付け役が派遣されることとなった。
一人は公爵家のメイドであるコーデリア、そしてもう一人は、リオンの実家バルトファルド家のメイドであるユメリアだった。
これは、リオンの浮気を防ぐために体を張った、ユメリアさんの奮闘記…かもしれない。

共和国に留学したリオンのために用意された屋敷の一室。部屋の主である外道騎士リオンは、ベットに腰掛けながら遠い目をしていた。
（どうしてこうなった…）
ベットに全裸で座っているリオンは、今自分の置かれている摩訶不思議な状況に、現実味の無さを感じながら、自らの足元に目を向ける。

そこには、リオンと同じく全裸になり、豊満過ぎる乳房と子供を一人産んだとは思えない細い腰、そしてむっちりとした尻をさらすエルフメイド、ユメリアが跪き、普段の不器用な姿からは想像できない巧みさでリオンの股間の逸物に奉仕していた。
「んちゅっ…　れろぉ…っうん…」
ユメリアはその幼く可愛らしい顔立ちには似つかわしくない卑猥な表情を浮かべながら、リオンの剛直を口に含み、舌先を使って亀頭を舐めまわしている。その光景はとても淫靡なものだった。
「くぅうっ…ゆ、ユメリアさん…！」
敏感な部分を刺激され、思わず声を上げてしまうリオン。そんな彼の反応を見て、ユメリアは普段の彼女なら絶対にしないであろう妖艶な笑みを浮かべながら口の動きをさらに激しくする。
「じゅぷっ！ぐぽっ！ずぼっ!!」
ユメリアはリオンの反応を見ながら、時折喉奥まで飲み込み、えず

きながらも決して口を離そうとしない。
「ぐうぅ!!もうダメだ!で、出る!!」
我慢の限界を迎えたリオンは、そのままユメリアの頭を抑え、彼女の口に大量の精液を放出する。
「んぶぅ?!ん～～～!!!」
突然大量に吐き出された粘つく液体を受け止めきれず、口元から精液を溢しつつ、苦しそうな表情を見せながらも、リオンの放出した濃い精液を飲み干そうとする。
〝コクコク〟と音を立てながら必死になって出されたものを嚥下していくユメリアの姿は実に健気であった。
やがて全てを胃に収めたのか、彼女はゆっくりと肉棒から口を離し、〝ふーっ〟と息をつく。そしてトロンとした瞳でリオンを見上げながら、ゴクリと喉を鳴らして全て飲んだことをアピールしてくる。

「…カイルに見られたら殺されるな」
「…？　カイルがどうかしましたか？」
「い、いや何でも無い何でも無い…」
彼女の息子が見たら無言で自分を殺しに来るだろう状況を目の当たりにしながら、リオンは可愛らしく小首を傾げるユメリアに必死に、何でも無いとアピールする。
「…というかユメリアさん、もしかしてこういうの、慣れてます？」
「はい、これでもカイルを生むまでエルフの村を出て旅をしていましたので！」
〝えっへん〟と豊か過ぎる爆乳を実らせた胸をはりながら、ユメリアは自慢気に語る。
「人間の皆さんは私がこうやって〝ご奉仕〟すると沢山お金をくれるので、お金に困ったらこうやって稼いでたんですよ？
初めては痛かったですけど…でもその時は1年くらいは遊んで暮らせるくらいのお金が貰えましたし！」
普段のポワポワした彼女からは想像できない様な過去を、普段通りポワポワした表情で語るユメリアは、妖艶に微笑むと、リオンをベッ

トへ押し倒し、リオンの冒険者としてしっかりと鍛えられた腹に跨る。
「ですから伯爵様、アンジェ様とリビア様を悲しませないためにも浮気などせず、欲求は全て、私にぶつけて下さいね？」
エルフとして、リオンと同年代の子供がいるとは思えないほど幼い顔立ちと、不釣り合いな爆乳を曝すユメリアは、括れた腰と、その間にある無毛の割れ目を見せつけるように持ち上げながら、未だに硬さを保つリオンの逸物をその白い手で掴む。
そしてそのまま自分の秘所へとあてがい……。
「それじゃあ、行きますよ……」
そう言ってユメリアは自分の中へ一気にリオンのモノを突き入れた。
「あああっ！入ってきたぁ……!!」
「くうっ!!」
ユメリアの膣内は、まるで生き物のように熱く、リオンの剛直を逃すまいと締め付けてくる。
「あんっ……すごい……大きくて、硬いのぉ……んっ……それに……んっ……熱いぃ……!!」
ユメリアは、騎乗位の体勢のまま、腰を動かし始める。最初はゆっくりだった動きは次第に激しさを増していき、結合部からは愛液が飛び散り、ユメリアのむっちりとした尻の下で水音が響く。
「あっ……んっ……んっ……」
ユメリアは、リオンの上で激しく乱れながら、自分の胸に手を伸ばす。
「んっ……おっぱいもぉ……触って下さいぃ……」
「あ、はい……」
リオンは、両手でユメリアの豊満な乳房を掴み、揉みほぐす。
「ひゃうん！いいっ!!もっと強くぅ……!!」
「こう…か…？」
「あひっ!?そ、そんなに強くしたらっ……！イっちゃいます!!」
リオンは、ユメリアの要望通りに力を込めて彼女の乳房を強く握り

しめながら、上下左右に動かす。
「やだっ……！こんなっ！おちん○んで気持ち良くなってる時に胸までなんてぇ!!もうダメ！イク！イッちゃう!!んっ!!はあああぁっ!!」
ユメリアは身体を大きく仰け反らせながら絶頂を迎える。それと同時に、彼女の膣内が激しく収縮し、リオンの剛直から精液を搾り取ろうとする。
「ぐぅ!!出る!!」
「出してぇ！いっぱい！私の中に！貴方の精液を注いでください!!」
リオンは、ユメリアの中に大量の白濁を流し込む。
「あついっ、伯爵様の精液が私の中に！きてますぅ!!」
「ぐぅ!!」
「ん～～～～～!!!」
リオンの射精を受け止めたユメリアは、ビクンと一際大きな痙攣を起こし、そのまま脱力してリオンの上に倒れ込んだ。
「はー……はー……ふふ、伯爵様、凄かったですよ…」
「ゆ…ユメリアさ…」
「っあん…！　伯爵様、まだまだお元気ですね」
ユメリアの豊満で柔らかなおっぱいが自分の胸板で潰れる感覚で、一度大量に射精した逸物が一瞬で力を取り戻し、ユメリアの柔らかな膣肉を拡張する。
「あはっ……まだ大きいまま……良いですよ、今日は私の事、好きにしてください」
ユメリアは、再び体を起し、豊かな胸を見せつけるように揺らしながら、腰を上下させ始めた。

（本当に、どうしてこうなったんだろうな…）
リオンは、心の中で遠い目をしていた。
あの後、ユメリアとリオンは毎晩のように何度も体を重ねた。
リオンは転生者だが体は１０代の男子だ。好きに抱ける（見た目）美少女な巨乳メイドエルフがいたら当然箍は外れる。むしろ同じく共和国に留学している前世の妹マリエや、彼女の専属使用人でありユ

メリアの息子のカイルにバレなかったのは奇跡に近いだろう。
だが、それも今日までだ。
「えーっと…ルクシオン、どういう事だ？」
「おや、まだ若いのにもう耳が遠くなりましたか？」
「うるせぇ!!　いいからもう一度言え!!」
彼の忠実ならざる相棒が、やれやれという雰囲気を醸し出しながらリオンに告げる。
「ですから、ユメリアが妊娠しました」
「ニンシン…ニン…シ……ン？」
「勿論お腹の中にいるのはマスターの子供です。おめでとう御座います」
「は…ハハ、は…」
リオンはこの先に待つ破滅的な未来を想像し、恐怖とストレスで意識を手放した。

この後、共和国では様々な事件が起こることとなる。ハーフエルフの少年が留学中の王国の伯爵を襲撃し街が半壊したり、襲撃された伯爵を見舞いに来た彼の婚約者達により街が壊滅し、最終的に共和国の連合艦隊も全滅し聖樹が暴走、最終的に枯れてしまう…等という大事件はまた別のお話……。

王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル）

ホルファート王国はラーシェル神聖王国に敗北した。
周囲の国々を味方につけた神聖王国は、王国の内部を切り崩し、王国の切り札〝外道騎士リオン〟の捕縛と彼の所有するロストアイテムの破壊に成功した。多大な犠牲を払いこそしたが、神聖王国はホルファート王国の全土を支配下に置き、更に王国、というよりも外道騎士に味方したアルゼル共和国及びファンオース公国も降伏させ、覇権を確立した。

敗北した王国の支配層、国王ローランドや彼に従った宮廷貴族達は捕らえられ投獄された。外道騎士リオンや彼の家族、それに彼の寄子だったこの国の王子を含む高位貴族の子弟もまた、同じ監獄に投獄され、そして半年ほどの月日が流れた。

王国の旧支配層が投獄されている監獄の広間に、そこに捉えられている者達が集められている。
全員逃亡や抵抗ができないよう、手枷を付けられ、魔法を使うと激痛が走る首輪を付けられ、大人しく広間に置かれた椅子に座っている。

「よう元王様…いい顔になったな」
「貴様こそ、貧相な顔が更に貧相になったな」
「二人とも、こんなところで嫌味合戦はやめてくれ…」

並んで座らされたリオンとローランド、そしてユリウスが会話して

いる。
三人とも囚人服を着せられ、毎日の過酷な労働によりやつれていた。
「これはこれは皆様、お元気そうで何よりですねぇ!!」
リオン達が集められた広間に、不愉快な声が響く。
「チッ…」
「クソが…」
入室してきたのはこの監獄の署長だった。神聖王国の貴族であり、王国の解体とリオン達の捕縛も担当した男だった。
「いやぁ～辛気臭い顔をしていますねぇ。今日はそんなあなた達が元気になれるプレゼントを用意しましたよぉ！」
リオン達は何も話さない。このクズ男とまともに話したところで何の意味も無いと、半年間の強制労働の日々で学んでいたからだ。
そして署長もそれをよく分かっているのでリオン達が無反応な事を気にせず話し続ける。
「さあ入ってこい、雌豚一号！」
「はい、御主人様」
「なっ…!?」
聞こえてきた声に、ユリウスだけが反応してしまう。
「おやおや王子様、どうしましたぁ？　この雌豚の事をご存知でぇ？」
「き…貴様、貴様ぁ…ぐぁ！」

署長が部屋へ呼び込んだ女性を見たユリウスは激昂し、署長へ殴りかかろうとするが、首輪の影響で激痛が走り、その場に膝をつく。
無様に頭を垂れるユリウスに、ニヤニヤと笑う署長の隣に立った女性が優しく声をかける。

「あらユリウス、だめじゃないそんなに怒ったら。無駄に痛い思いをするだけよ？」
「く…母上…ッ！」

ユリウスに声をかけた女性、ユリウスの母親であり、リオンの隣で舌打ちをしたローランドの妻である王国の元王妃ミレーヌは、困ったように頬に手を当てる。
二人の子供を生んだとは思えないほど幼気な美貌は、半年前と変わらない。だが、ユリウスが激昂したのには理由がある。

「母上…なんですか…なんなんですかその姿は!?」
「チッ…」
「クソ…」

ユリウスの悲痛な叫びに隠れて、ローランドが舌打ちし、リオンが悔しそうな声をあげる。

「姿…？　ああ、この格好かしら？　これは私達が偉大なラーシェル神聖王国の方々の忠実な雌奴隷である証よ？」
「な…、母…上…？」

元王妃ミレーヌ。王国だけでなく、彼女の祖国、そして神聖王国にもその美貌と知性を知られた才女は、その美貌はそのままに、半年前とは変わり果てていた。

美しい銀髪と年齢を感じさせない幼気な容姿に変化はない。だが、

国母に相応しい規格外の爆乳は隠すものも無く衆目に晒され、二人の子供を育てたその乳房の先端だけを、ハート型のニップレスだけが隠している。重たげに揺れる胸から視線を下げると、子供を二人生んだとは思えないくびれた腰と、シミ1つない白いお腹と可愛らしい臍が晒されている。

彼女の下半身を覆うのは、明らかにサイズのあっていないミニサイズのTバックのみで、後ろから見ると何も着ていないようにしか見えない。細長い生地の食い込んだ彼女の股間は、彼女の美しい髪と同じ白銀の陰毛が細長い生地からはみ出し、彼女のふっくらとした肉土手を卑猥に彩っている。

むっちりと脂の乗った太腿を擦り合わせ、元王妃はかつての夫や息子、そして臣下の視線を全身に浴びながら頬を染め、艶やかに微笑む。

「フフ、いやらしい視線…♡」

「クッククク、どうやら王国の皆さんは雌豚一号の姿は刺激が強すぎたようですねえ」

まるで見せつけるように、その豊満な肢体をくねらせるミレーヌと、そのミレーヌの姿をつい目で追ってしまう王国の元貴族達を嘲笑う署長の声が広間に響く。

「チッ…大方、そこの年増の姿を見せつけて俺達を惨めな気分にでもするつもりか？」

「おやおやおや、元国王陛下ぁ、随分ご機嫌斜めですねぇ。いくら冷え切っていたとはいえ、流石に王妃様のこの姿は目に毒でしたかなぁ？」

「フフ、署長様、大丈夫ですよ。そこのヘタレ男も、さっきからチラチラとわたしのおっぱいを盗み見ていますからね、リオン君みたいに」

「ふざけるな、誰が…ぐぅ!?」

言い返そうとしたローランドは、股間をミレーヌに撫でられ苦悶の

声を上げる。

「く…おいやめろミレーヌ、貴様…っぐ」

「あらあら元陛下、あれだけ私を邪険にして〝女として見れない〟とまで言っていたのに、こんなに股間を膨らませて…いやらしい」

「や、やめろ！」

いつの間にか椅子から生えた樹の枝に拘束されたローランドは、ズボンを脱がされ、隆々と勃起した男根を晒され、それを妻であるミレーヌに扱かれる。

「フフ…情けない陛下。私の初めてを奪って、この私の身体を散々開発しておいて、エリカが生まれたら他の女にうつつを抜かして、何人も何人も孕ませていたのに、今ではこうして無視していた私に手扱きされて勃起させるしかないですものね♡」

「く…っ!?　おいミレーヌ、何故私の隠し子達の事を!?」

「お馬鹿な陛下…偉大な神聖王国は全てお見通しですよ？　貴方が隠れて孕ませた沢山の隠し子達の事は」

「な…待て、あの子達は父親の事など知らん、王国とは！」

「クッククク、ざーんねんですが、貴方の隠し子達は全員捕縛済みですよぉ」

ニヤニヤとローランドの情けない姿を鑑賞していた署長が関係が冷え切っていた夫婦の会話に割り込む。

「な…貴様らあの子達な何を…っく」

「チュプ…フフ、情けない。あそこを舐められてだけで情けない声を上げるなんて」

「や、やめろミレーヌ…っうぁ…」

「ククク、安心して下さい。息子は全員奴隷として鉱山に、母親と娘は全員、この雌豚一号と同じように調教を施していますので」

「き…貴様ぁっぅ…や、やめ…ぅう」

激昂し立ち上がろうとたローランドは、敏感になった逸物をミレーヌの可憐な唇でほうばられ、情けない声を上げて抵抗を抑えられる。

「さあ入ってきなさい雌豚１１号から３０号！」

署長が指を鳴らすと、入口からゾロゾロと、ミレーヌと同じようにニップレスとミニサイズのＴバックのみを身に着けた２０人の美女と美少女達が部屋へと入ってくる。

「な…お前達…くぅ…」

「父上…まさかですが…」

「おい元王様…まかさとは思うが…」

ミレーヌに逸物を吸われながら、ローランドが絶望したような顔をする。

親子のように良く似た美女と美少女が二人一組になった神聖王国の〝牝奴隷〟の集団が、貼り付けたような笑みを浮かべながらズラリとリオン達の前へと並ぶ。

「フフフ、どうやら元陛下以外はご存知ないかもしれませんが、彼女たちはそこで元王妃にアソコを舐められて情けない顔をしている男の愛人とその娘たちです」

「き、貴様…っく、おいやめろミレー…ヌ!?」

「ウフ、陛下はここが弱いと、あの人たちが言っていましたよ?」

「な…貴様ら彼女達に何…くぅっ!?」

「フフ…あの売女達はちょっと私・と・同・じ・調教をされただけですわ」

一瞬だけ目のハイライトを無くしたミレーヌは、すぐに淫蕩な表情

に戻ると、愛液でグショグショに濡れたTバックを見せつけるように脱ぎ捨てると、身動きの取れないローランドに跨り、その熟れきった膣内にローランドの逸物を咥え込む。

「ぐぅっ…ミレーヌ…お前っ！」

「あら、情けない顔ですね元陛下…あぁ、懐かしい、私の初めてを奪って、私を女にしたおチ○ポ…この節操のないチ○ポで、沢山のほかのおんなを孕ませたんですね♡」

ミレーヌはローランドに抱きつき、貪るように腰をくねらせてローランドの逸物を味わう。

その淫蕩な姿に、ただ眺めているリオン達の逸物も固くなっていく。

そして気がつけば、リオン達の身体も椅子から生えた樹の枝に拘束されていた。

「な…これは!?」

「おやぁ外道騎士殿、この樹がどうかしましたかぁ？」

「お前ら、ノエルに何を…っ!?」

所長の揶揄するような言動にリオンが激昂し叫ぼうとするが、下半身への刺激で思わず情けない声を上げそうになる。

椅子に拘束されたリオンは、いつの間にか彼の足元に跪いていた二人の金髪の美女と美少女にズボンを脱がされ、その勃起した逸物を手で扱かれていた。

「ぐぅ…やめっ」

「あんっ…あぁんんっ…ふふ、リオン君も我慢しなくていいのよ♡その二人はね…ぁん、アンジェの親戚で…っう、ふふ、陛下ぁおチ○ポが固くなってますよぉ…、レッドグレイヴ家の縁戚っあぁ…なのよ」

「ミレーヌっやめっ！」
「母親はねっ、陛下と不倫して…っあ、その子を産んだのよ…はぁ…だからぁ、二人共おんっ、アンジェに似てるっ…でしょ？」

ミレーヌがローランドの腰の上で喘ぎながら、リオンの逸物をその豊かな胸で挟み、奉仕を始めた二人の美女と美少女の出自を暴露する。

歯を食いしばり、刺激に耐えるリオンを署長が下卑た笑みを浮かべながら煽る。

「ハハ、外道騎士殿、どうです元婚約者に似た女性に奉仕されるのは？
以前はそうやって婚約者と愉しんでいたのでしょう？」
「ぐぅてめぇ…」
「それとも雌豚四号・の事が気になりますかぁ？
「つな、それは!?」

ニヤニヤと笑いながら、手袋を外した署長の手の甲に輝く紋章に、リオンは股間の快感も忘れて驚愕する。

その手には、かつて共和国で見た聖樹の紋章が輝いていた。

「ウフフ、リオン君の顔…ぁん、可愛い♡」
「いぃ顔ですねぇ。ですがまだ、そんな顔をするのは早いですよぉ？」

顔を青ざめさせるリオンを揶揄しながら、所長はスイッチを操作して、椅子に拘束され、ローランドの愛人と娘たちに奉仕されるリオンや王国の貴族達の前にスクリーンを投影させる。

「くぅ…お前ぇ!!」
「ハハハハ、ではこれより、雌豚四号の調教観察映画の鑑賞会を始めさせて頂きましょう!!!!」

スクリーンには、学園の制服姿でどこかの部屋の椅子に座る、リオンの三人目の婚約者にして聖樹の巫女、ノエルの、姿が映し出されていた。

王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル編）②

リオン達が捕らえられた監獄の広間スクリーンに、金色の髪をサイドポニーテールに纏め、毛先に行くほどピンク色になっている美少女が映し出されている。

学園の制服を着た彼女は、不安そうに簡素な椅子に座っている。おそらく撮影されていることを自覚しているのだろう。所在無さげに膝をすり合わせている。

そしてスクリーンにテロップが映し出される。

『お名前を教えてください』

おそらく画面の外でノエルに見せられたカンペを、見ている人間達に分かりやすいように画面に映し出しているのだろう。

視聴者側、つまりノエルを映しているであろうカメラからやや視線を上に向けたノエルが、震える声でその質問に応える。

「…ノエル、ノエル・ベルトレ…です」

『本当の名前は？』

「…ノエル・シル・レスピナス、です」

スクリーンの中のノエルが、自身の本当の名前まで答えさせられる。

『聖樹の巫女だというのは本当ですか？』

「はい、私は聖樹の若木の巫女です」

『証拠を見せてください』

「これが…その証拠です」

ノエルが自身の持つ巫女の紋章を掲げる。

『その紋章はどのような意味がありますか？』

「この紋章は、聖樹の巫女の直系だけに現れます。聖樹の若木と対話できるのはこの紋章を持つ女性だけ…です」

ノエルは素直に、自身の持つ力の意味を説明する。

おそらく何かしら強迫されているのだろう。そしてこれから自身が辿るであろう運命を悲観しながら、震える声で質問に答えてゆく。
『つまり聖樹の力を管理できるのは、貴女と貴女と子孫だけですね？』
「…そう、です」
ノエルは震えながら、その質問を肯定する。
そして嗜虐と悪意に満ちた質問が、ノエルに提示される。
『それでは神聖王国の為に、貴女はより多くの優秀な子孫が必要になりますね』
「……はい」
目を伏せ、これから自身に降りかかる悲劇に震えながらノエルが頷く。
『それではＭｓ．ノエル、神聖王国への忠誠の言葉を述べて下さい』
そして遂に、ノエルの尊厳を破壊する命令が下される。
ノエルは唇を噛み、悔しさと屈辱、そして恐怖にその身を震わせながら、事前に教え込まれていた口上を述べる。
「わ…私、ノエル・ジル・レスピナスは…っ、神聖王国公認の…っ、め…雌豚四号として…っ、偉大なる神聖王国にこの身を…、そして私の、淫乱な子宮から生まれる新しい雌豚を…っ、捧げることを…誓います…ぅう…」
その大きな瞳から悔し涙を流し、自分の人生を、そして自分がこれから生む娘達を、憎い相手に捧げることを、ノエルは誓わされた。
だがその惨めな姿に欠片も同情すること無く、カメラの後ろにいるであろうノエルの調教を担当する男達は、彼女に次の命令を下す。
『それでは忠誠の証として、その身を隠すこと無く曝け出してください』
「うぅ…もう…いやぁ…」
だがとうとう、ノエルの心が保たずに泣き崩れる。だが、凌辱者達は容赦なくノエルに命令の履行を求める。
『命令に従わないのなら、外道騎士の弟は男娼として売り飛ばされますよ？』
「な…やめっ」

『それとも貴女と同じ雌豚二号と三号が、貴女の代わりに同じ目に会うほうが良いですか？』
「っ……わかり…ました…」
涙で頬を濡らしながら、ノエルは震える声で命令に従う事を受け入れた。
『では早く立ち上がりなさい』
「…はい」
ノエルが椅子から立ち上がる。
泣き腫らした目で、怯えたように自身の体を抱きしめながら。
『それではまずブレザーを脱ぎなさい』
「……はい」
ノエルがゆっくりとブレザーを脱ぐ。
ブレザーの下の白いブラウスが露わになる。そしてブラウスを盛り上げる彼女の豊かな乳房も。
『次はスカートを脱ぎなさい』
「っ…はい」

ノエルは恥辱に手を震わせながら、それでも従順に命令を実行する。
スカートのホックを外し、チェック柄の短いスカートがストンと床に落ちる。
「う…うぅ…」
白い太腿を晒して、ノエルはパンツを何とか隠そうとブラウスの裾を抑える。だが無情にも、凌辱者達の非情な命令は終わらない。
『それではそのブラウスをはだけさせなさい』
「っ……はい」
ノエルが震える手でブラウスのボタンを外してゆく。そしてゆっくりと、その大きな乳房の谷間がを露わになってゆく。
そしてブラウスのボタンは全て外れ、白いレースのブラジャーに支えられた豊満な乳房が凌辱者達に、そして画面の前のリオン達に晒される。

そしてパサリと、ブラウスもまた床へと落とされる。
「ひっ……ぅう……」
ノエルは羞恥にその身を震わせる。
豊かな双丘、そして恥丘を隠す白い下着。本来なら彼女の婚約者しか目にできない煽情的な姿に、画面の中の凌辱者だけでなく、画面の前でノエルの惨めな姿を見ていることしか出来ないリオン達も、股間を熱くさせる。
『それではその下着も脱ぎなさい』
「っ……ぅう」
ノエルが羞恥に震え、胸と股間を手で隠しながら涙を流す。だが凌辱者達は更に無情な命令を下す。
『雌豚四号、早くしなさい』
「わ、分かりました……」
ノエルは小さくそう言うと、震える手を動かし始める。フロントホックを外し、締め付けの緩んだ乳房を下側から支えように片手で隠しながら、ブラジャーを外す。
「ん……っ」
ぶるんっと、重量感たっぷりにノエルの豊満な乳房がまろび出る。先端はかろうじて彼女の腕で隠されているが、そのせいで押しつぶされたハリのある乳肉が、凌辱者達の視線に晒される。
『次はパンツです』
『……はい』
そしてノエルは羞恥に顔を赤く染めながら、胸を隠していた手を外し、その手を動かして今度はパンツへと伸ばす。
前屈みになり、胸を強調する姿勢になっているが、命令に従うことに必死のノエルはその事に気付いていない。
白く豊満な乳房と、その先端の桜色の乳首が彼女の震えに合わせて柔らかく揺れている。
「い……いや……」
震える声でそう言いながらも、手は止まらない。そしてついにその純白の下着に手が届き、そしてゆっくりと下げられていく。

「いや……いやぁ……」
そしてついに、ノエルの恥部がそのカメラの前に晒される。
ピッタリと閉じた大陰唇と、そのふっくらとした肉土手を彩るピンク色の恥毛が、スクリーンにアップで映し出される。
だが、すぐにノエルの手が晒された陰部を隠してしまった。
右腕で胸を、左手で陰部を隠し、太腿を閉じた前屈みな姿勢で、可能な限り自身の裸体を隠そうとするノエルに、凌辱者達の容赦ない命令が下される。
『両手を頭の上に置いて、真っ直ぐに立ちなさい。雌豚として身体を隠すことは許されません』
「っ…この外道」
悪態をつき、悔し涙を流しながらも、ノエルは命令に従う。
まずは胸を隠していた右腕を外す。〝タプン〟とノエルの豊かでハリのある巨乳が揺れながら、凌辱者達に晒される。
ノエルの胸は透き通るように白く、若さのお陰か垂れること無く、桜色の乳首がツンと上を向いている。
そして、ノエルの左手も外され、遂に彼女が最も隠しておきたかった、乙女にとって最も大切な場所が晒される。
ふっくらと肉付きよく成熟した大陰唇は、処女らしくピッタリと閉じている。そしてその陰唇を彩るように、ノエルの毛先と同じピンク色の陰毛が、肉土手を覆っている。
陰唇と異なり、毛が一切生えていないツルリとした脇を晒し、悔し涙を浮かべながら、全裸のノエルは画面を睨みつける。
「こ…これでいいでしょう⁉　だからもう…」
『いいえ。まだ貴女は大事な部分を晒していません。雌豚四号として、我々に貴女の全てを晒しなさい』
「っ…！」
おそらく画面外からカンペかなにかで命令を下されたであろうノエルが息を飲む。そして怒りと羞恥で、その白い肌をピンク色に染めながら、ゆっくりと床に脂ののったむっちりとした尻をつける。

そしてノエルはゆっくりと、尻と同じく脂ののった、それでいて引き締まった太腿をゆっくりと開き、自分から脚をM字に開脚する。
「くぅ…」
『いい姿ですよ、雌豚四号』
カメラがアップで、晒されたノエルの両脚の付け根を映す。
ピンク色の陰毛で飾られた大陰唇は、開脚によって少し綻び、その奥の誰にも汚されていない膣口が僅かに見える。そしてその下には、ヒクヒクと恥ずかしそうに収縮する不浄の穴まで、隠すこと無く映し出されている。
そしてノエルの白い指が、綻びかけた大陰唇へと沿えられる。
「い…偉大なる神聖王国の皆様、どうか雌豚四号の…っひ、卑猥な雌穴をご鑑賞下さい。ま…まだ処女の未熟なオマ○コですので、み…皆様の逞しいおチ○ポで…っ、雌豚四号を…早く妊娠させて下さい…」
〝クパァ〟と陰唇を開き、その奥に隠されていたサーモンピンクの、穢のない膣肉を自分の手で見せつけるノエル。その声は震え、無理やり言わされたであろう口上は途切れ途切れになっている。
羞恥によって汗ばんだノエルの白い肌が怪しくぬめり、そして開かれた陰唇の奥からは、トロリとした愛液が一雫、床へと流れ落ちた。

王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル編）③

着ていた服を全て剥ぎ取られ、恥辱の宣言をさせられたノエルは、涙を流しながら床にへたりこむ。

だが、彼女の恥辱の時間はまだ終わらない。

「な、何!?　っ嫌、やめて!!」

画面外から突然現れた覆面の男たちがノエルを両脇から拘束し、いつの間にか部屋の天井に設置されていた鎖にノエルの両腕を繋げる。

万歳の体制で鎖に拘束されたノエルは、戒めから逃れようと身体をよじるが、かろうじて足裏がつく程度の高さで拘束されたせいでまともに力も入らず、ただただ豊満な乳房をゆらし凌辱者達の目を楽しませるだけの結果に終わる。

『貴方の淫乱な子宮にはこれから、次代の巫女を孕むためにこの国の王族及び高位の貴族の精子を注ぎ込んでもらう事になります。その際に粗相が無いようにしなければなりません』

「ひっ……!」

覆面をした男がノエルへと近づいてゆく。

「い、嫌…来ないでぇ!」

己がこれから受けるであろう恥辱に怯え、何とか逃れようとするノエルだが、両腕を拘束され逃げることは出来ず、惨めに胸を揺らす事しか出来ない。

覆面の男は無造作にノエルの右足首を掴む。そして嫌がるノエルの抵抗など無いかのように軽々とノエルの脚を広げる。

「やめてっ、痛い!　やめてぇ!!」

身体の柔らかいノエルは、足先を高く持ち上げられ、強制的にぱっくりと足を開かされ、ピンク色の陰毛に覆われた陰部が露になる。

惨めに自身の最も秘すべき場所を晒されたノエルの抵抗も虚しく、彼女の右足もまた鎖に繋がれた。

両手と右足を天井から鎖で吊るされ、片足立ちで辛うじて立ってる

いノエルは、何とか陰部を隠そうと苦慮するが、鎖は緩むこと無く、ただただ惨めで卑猥な姿を凌辱者達に披露するだけに終わる。
「くっ…うぅ」
『それでは次の処置を開始します』
「ひっ…何を…？」
ノエルの脚を拘束した覆面の男が、懐から瓶を取り出す。
そして蓋を開け、中に満たされていたドロリとした液体を指で掬う。
『こちらは聖樹から抽出した、聖樹の巫女専用の媚薬です』
「なっ…!?　なんでそんなものが!!」
ノエルが驚愕の声を上げる。
彼女の怯えた声に気を良くしたのか、テロップの主は彼らがその媚薬を入手した経緯を説明する。
『ああ、共和国も我らが偉大な神聖王国の軍門に降りましたので。共和国の国民を空爆で虐殺すると脅したら、貴方の妹は簡単に共和国の全てを我々に差し出しましたよ？　財宝も土地も、そして勿論人も』
「まさか…」
『事実です。ああご安心を。この媚薬の効果はしっかりと貴方の妹で繰り返し実験しましたので』
「っ!?　なんてことを!!」
ノエルは自分の境遇も忘れて、凌辱者達に食ってかかろうと暴れるが、虚しく鎖の音が響くだけで、その惨めな姿が凌辱者の目を楽しませる事にしかならない。
『共和国の国民を守るためと、妹さんは率先して協力してくれましたよ。まあ、元々中古品のガバマンで見た目位しか楽しめませんでしたが』
「っ、お前らぁ!!」
大切な双子の妹を凌辱され、その上侮辱されたノエルが激昂する。
『全裸でオマ〇コをぱっくり広げている姿で凄まれても不様なだけですね。ではそろそろその反抗的な態度を終わらせましょう』
「な、近づかないで！」

覆面の男がノエルへと近づき、指に掬った媚薬をノエルのピンク色の乳首へと塗り込む。
「っあ…ん…やめてぇ！」
『おやおや、さっそく乳首が勃ってきましたね』
男の指で透き通るような桜色の乳首を弄られたノエルが甘い喘ぎ声を上げる。そして媚薬の効果によるものか、次第に乳首に血が集まり、勃起してゆく。
そのタイミングで、覆面の男はノエルの張りのある若々しい美巨乳を揉みしだく。男の手によってノエルの瑞瑞しい乳房が捏ねくり回され、彼女の白い肌に媚薬が刷り込まれてゆく。
「あっ、あぁん!!　イヤっ熱い、何でぇ！」
『やはり専用の媚薬は効果がありますねぇ。胸だけでここまで乱れるとは』
ノエルの肌がピンク色に染まり、パックリと開いた彼女の秘処からは愛液が溢れ、床に水たまりをつくる。
だが、聖樹の巫女専用の媚薬の効果はこんなものでは無いことを、ノエルは身を以て知ることになる。
「あぁん、胸が…胸が熱い！　でる…でちゃうのぉ!!」
覆面の男がノエルの胸を絞るように強く揉みしだくと、ノエルは甲高い喘ぎ声を上げて背中を仰け反らせ、〝プシャァ〟という音とともに股間から潮を吹き絶頂する。
その姿を他人に見られるだけでも、年頃の乙女として死にもまさる恥辱だが、ノエルにそのことを意識を割く余裕は無い。
何故なら、さらなる恥辱が己に降り掛かっていることを、彼女の本能が察したからだ。
「だ、駄目っ！でちゃうからぁ！おっぱいもんじゃだめぇ!!」
『アハハハ！　これがこの媚薬の効果です。胸が残念な妹さんでは大したことありませんでしたが、やはり豊かな胸のほうが効果は強いようですねぇ！』
「イヤァァァ!!イクッ！　胸でイッちゃうのぉ!!」
ノエルの絶叫と共に、揉みしだかれた乳房の先端から、乳白色の液

体が吹き出す。
括れた腰を仰け反らせ、愛液を滴らせながらノエルは母乳を吹き出し絶頂する。瞳は快楽と恥辱にまみれ、屈辱の涙に頬を濡らしながら、口からはだらしなく涎を垂らし、胸から吹き母乳を吹き出す出す快感にはしたない喘ぎ声をあげ続ける。
ひとしきり絶頂し、床を愛液と母乳で汚したノエルは、荒い息を吐きながら、それでも憎悪の籠もった眼で凌辱者を睨みつける。
「許さない…絶対に、絶対にいつか殺してやる…！」
『それだけ惨めな姿を晒しておいて、無様でしかないですねぇ。でも分かっていますか？』
「何…を…？」
『この媚薬の素晴らしい所は、巫女が妊娠可能かが可視化出来ることなんですよ。因みに目印は当然、母乳がでることです』
「まさか…」
『フフフ…ではそろそろ始めましょう。聖樹の巫女繁殖計画を！』
言葉を失い、青褪めた顔で絶句するノエルに、絶望の宣言が下された。

王国敗北ルート　聖樹の巫女繁殖計画（ノエル編）④

股間からは愛液を垂れ流し、張りのある乳房の先端を母乳で白く汚すノエルは、荒い息を漏らしながらも気丈に凌辱者達を睨む。
だが、そんなノエルの生意気な態度は凌辱者達にとっては自分達を愉しませる為のスパイスでしか無い。
『おやおやぁ、随分生意気な態度ですねぇ』
「絶対に許さない…もしこれ以上私を辱めるようなら、後悔させてあげるわ…！」
妊娠の恐怖に震えながらも、ノエルは自分の切り札を意識する。
『ではどうぞ？　貴方にチャンスをあげましょう』
「え…っきゃあ?!」
テロップの主が合図をしたのか、ノエルの手枷と足枷が外れ、身体に力の入らないノエルは自身の愛液と母乳で濡れた床に倒れ込む。
『不様ですねぇ』
「くっ…このぉ!!」
嘲笑われたノエルは怒りと羞恥で母乳で汚れた顔を紅潮させながら、凌辱者達に目にものを見せるために自身の切り札を行使する。
「お願い、力を貸して!!」
聖樹の紋章を輝かせ、ノエルは聖樹の巫女としての力を無理矢理行使する。
上手くゆけばこの場を逃げ出し、一緒に捕まったアンジェ達を助けに行けるかも、と淡い期待を抱きながら。

だが、彼女の願いは予想外の形で裏切られる。

「やった！　……え？」
空中にいくつもの紋章が浮かび、聖樹の枝が召喚される。そしてノ

エルはその枝達に凌辱者達を攻撃させようと命令したが、聖樹は反応しなかった。
「なん…きゃあぁぁぁ!!」
『ふふふ、どうやら聖樹にも媚薬の効果が現れたようですねぇ』
逆に、聖樹の枝はノエルの手足を拘束し、彼女の裸体を再び空中へと持ち上げる。
「は、離しなさい!! 何で、私の命令が!?」
『聖樹は貴女の命令に従っていますよ? 貴女の発情した体が男に孕ませたがっているので、その願いを叶えようとしているだけですよ』
「ふ、ふざけた事を…っいやぁぁ!!」
テロップの主に反論しようとしたノエルの言葉は、聖樹の枝によって妨害される。
聖樹の枝はノエルの両腕を頭の上で拘束し、更に閉じようとした脚を無理矢理大開にし、先程恥辱の宣言をした時と同じようにM時に開かせて、その濡れそぼった秘裂と物欲しそうに収縮する不浄の穴を凌辱者達に晒させる。
『貴女の妹でも実験しましたが、媚薬の影響を受けた巫女が聖樹の力を使用すると、聖樹は巫女を孕ませる最適の行動をとろうとするのですよ』
「い、嫌っこんな格好、やめっ」
『ああ、無理に抵抗しない方がいいですよ?』
「な…っ、待って、そこは違うぅ!!」
拘束から逃れようと抵抗するノエルを大人しくさせる為か、それとも誤って別の穴に挿れられる事を防ぐためなのか、聖樹はノエルの言動を無視して、彼女を妊娠させるための最適の行動を行う。

即ち、男根を模した形に変形した聖樹の枝を、彼女の肛門へと挿入したのだ。
「あっああ…っあ…!あぁあ゛っ!やめっ、痛いぃぃ♡」
『おや、情報ではそちらの穴も処女だったはずですが、随分と気持ちよさそうですねぇ。貴女の妹といい、そちらの穴でもそれだけよがれる

とは、聖樹の巫女というのは随分と淫乱なのですねぇ』
排泄の為の穴に、平均より太さと長さの木製の男根を埋め込まれたノエルは、その背徳的な刺激が媚薬によって増幅され、痛みを上回る快感に涎を垂らしながら善がり狂う。
まだ誰にも侵されていない乙女の縦穴は、己を孕ませる雄棒を求めて綻び、粘性の高い愛液を垂れ流し己の尻穴を犯す聖樹の枝を濡らす。全身から汗を吹き出し、ぷっくりと膨れた勃起乳首からは彼女の性感を反映して先端から甘い香りの白濁液を吹き出す。
身動きがとれないよう聖樹の枝で全身を拘束されながら、与えられる快感に手足を痙攣させ、もどかしく括れた腰を空打ちする様は、普段の快活で勝ち気なノエルからは想像できない、淫らで惨めな姿だった。
「もお…お…っうううう嫌……、あ……あ」
『おや、もう降参ですか？　本番はこれからですよ？』
「あ…えっ…？」
画面の中に、リオン達を捕えている監獄の署長が現れる。
既に全裸で、軍人としてそれなりに鍛えられて引き締まった肉体と、愛液焼けして黒光りする逸物を晒している。
「ヒッ…やだっ…こないでえぇぇんっ♡」
「どうやら聖樹はそう思っていないようですねぇ」
己の処女を奪おうとする男を遠ざけようとするノエルの必死の抵抗は、尻穴に埋め込まれた聖樹の枝によって打ち砕かれ、準備万端に蕩けた雌穴が、凌辱者へと差し出される。
「嫌っ…いやァァァ！」
「ハハハ、前戯すら必要ないとは相変わらず至れり尽くせりな薬ですねぇ。さぁて、妹と違って処女の巫女の穴を味見するとしましょうか」
署長はニヤニヤ笑いながら、ノエルの細い腰を掴み、己の逸物の先端をノエルの雌穴の入口へとあてがう。
それだけの刺激で、敏感になったノエルの体がビクリと震え、膣口から溢れた愛液が、署長の逸物を濡らしてしまう。

焦らすようにゆっくりと埋め込まれていく肉棒に、ノエルが絶望と嘆きの混在した喘ぎ声をあげる。そして、ノエルの鳴き声を楽しみながら、署長は己の逸物の先端が、壁のような膜に当たり、その侵攻が止められる。

「さて、そろそろ処女膜ともお別れですね。少女として最後の瞬間のご感想、お願いできますか？」

「嫌…こんなの嫌ぁ」

「フフ、大丈夫ですよ。直ぐに気持ちよくなれます…っよ！」

「ひぃ♡いぃ…いぃうう♡♡…うっあぁ〟」

一気に腰を進めた署長の逸物が根本までノエルの膣内に埋まり、ノエルの処女膜が引き裂かれる。愛液でドロドロに濡れそぼった結合部から、破瓜の血が零れ、彼女の尻穴を犯す聖樹の枝に赤い筋を刻んだ。

ノエルは瞳から涙を流し、手足をピンと張って体が真っ二つになりそうな激痛を、そしてそれを押し流すほどの快感を必死に耐える。

「あああぁっひん♡……♡んんっ！」

「くっ…処女だけあってすごい締付けですね。貴女の妹のガバマンとは比べ物にならないキツさですね」

ノエルが痛みと快感に耐えるために体を強張らせるほど、彼女の膣肉は己の純潔を汚した憎むべき雄の逸物を締め上げ、媚薬に蕩かされた若い肢体は彼女の意思に反して快楽を貪ろうとする。

それでもギリギリのところで理性を保つノエルに止めを刺す為、署長は舌なめずりをしながら、ノエルの母乳に濡れた２つの肉果実へ顔を近づける。

「どれどれ、折角ですから貴女のミルクを味見させて貰いましょうか」

「はうぅぅぅん!!!」

署長はノエルの勃起した乳首の片方を指でひねり上げ、もう片方の乳首を口に含み、瑞瑞しくきめ細かな肌と、コリッとした乳首を味わう。

そして絞り出すように、媚薬によって無理矢理産生させられた、本来ならノエルと彼女の愛する人の愛の結晶を育む為のミルクを吸い

出し、その暖かく甘みのある液体を堪能する。
「ふぅ…量も味の濃さも貴女の妹とは比べ物にならないほどですね。やはり貧相な胸よりも豊かな胸の方が味が良いですねぇ」
「っ…殺してやる！」
自分をだしにして妹を貶す凌辱者を、ノエルは机上にも睨みつける。
「いいですねえ、壊れて何も言えなくなった女を抱くより、生意気な態度の雌を躾けるほうが好みですよ？」
「このぉっ…あひん！」
「ハハハ、さあさあ出来れば最後まで壊れないで下さいね！」
署長は、軽く子宮口を小突かれただけで喘ぎ声を漏らすノエルを嘲笑いながら、次第に腰の動きを激しくしてゆく。
「あああぁあ♡〟！うっんん…んんん♡♡ん〟っ」
「処女なのにもうイッてしまうとは、聖樹の巫女というのは随分と淫乱ですねぇ！」
「ああぁぁ…ぁ…ぁあ〟えあぁ♡あぁぁ♡」
絶頂し、結合部から愛液を、そして乳首から母乳を吹き出すノエルの惨めな姿を、そして己の逸物を激しく締め上げ貪欲に精液を強請る膣肉を愉しみながら、署長は己に課せられた任務を果たすためにノエルの括れた腰をしっかりと掴む。
「さぁお待ちかねの精液ですよ！　偉大な神聖王国の奴隷巫女を妊む栄誉に酔いしれなさい!!」
「い…いぃ〟や♡…ああっあぁぁっ!!」
署長の腰がノエルの腰と密着し、ノエルのヴェギナが凌辱者のペニスを根本まで咥え込む。そして署長の腰が震え、汚れの無かったノエルの膣内へ、己の遺伝子のスープを流し込む。
「は…ぁぁぁ♡っあ…っ！」
ノエルは、己の胎内に熱い液体が注ぎ込まれる快感に脳を焼かれ、今日最大の絶頂で全身を震わせる。
そして凌辱者の精液はノエルの子宮口を通って、ノエルの子宮を満たしてゆく。

次代の聖樹の巫女を育む小袋を満たした凌辱者の精液は、媚薬によって強制的に排卵された卵子へと群がり、ノエルの意思も尊厳も無視して彼女の最も恐れていた結末へと結実する。
「な…何で、紋章がお腹に…」
「おぉ、喜びなさい。それは媚薬によって巫女が妊娠した証です」
「え……妊娠……ぃ、イヤァァァ!!」
絶頂による忘我から開放されたノエルは、己の下腹部に浮かぶ巫女の紋章が、己が望まぬ妊娠をさせられた動かぬ証拠だと突きつけられ、ついに心を折られ涙を流し泣き叫ぶ。
ノエルの狭隘な膣口から逸物を抜き、ぽっかり空いた穴から溢れ出す破瓜の血混じりの精液を満足気に眺めながら、署長はノエルを更に絶望させる言葉を放つ。
「因みに、この媚薬で妊娠した聖樹の巫女は、約一月で子供を出産します。また、その間隔は精液を膣内に受け入れれば受け入れる程早くなるそうですよ?」
「え…待って、まさか…」
「それでは、一日も早い次代の巫女の誕生を心から期待していますよ、雌豚3号」
「イヤァァァ!!!」
画面の中にゾロゾロと、署長と同じく裸で己の逸物を勃起させた男達が現れる。
そして次々と、絶望の喘ぎ声をあげるノエルの膣穴を犯し抜いていった。

「あっ…ぁん、いかがでした陛下? リオン君? あなた達が惨めに働かされてる間に、私達はこうやって…ぁん、偉大な神聖王国の方々に調教して…ぁん、貰ったのよ?」
「ぐぅぅ!」
ローランドの腰に跨り、淫らに腰を上下させながら、ノエルの凌辱映像を実況解説したミレーヌは、淫蕩に笑いながら元夫とノエルの元

婚約者に感想を求める。
だが、ローランドは与えられる快感に必死に抗い、リオンは絶望すら感じる暇も無いほど、ローランドの元愛人とその娘のにペニスを責められ、ミレーヌの言葉に応える余裕は無かった。
そして程なく、情けなく絶頂しその精液を吐き出した敗北者達は、〝これから定期的にこのような催物を行う〟という署長の言葉を背に、独房へと追い立てられて行った。

王国敗北ルート　ヘルトルーデの恥辱①

リオンが婚約者であった少女が無惨に孕まされる様子を強制的に鑑賞させられた悪夢の1日から一月が経った。

収容所の独房で、1日の強制労働を終えたリオンは簡素なベットに座り込む。その目は淀み、生気は感じられない。

ただぼんやりと床を見つめるリオンの耳に、独房の扉が開く音が届く。だが、リオンは顔を上げることなく床を見つめ続ける。

「ひどい顔ね。ま、貴方にはそんな負け犬みたいな顔がお似合いかもね」

扉から独房へと足を踏み入れた人物は、そんなリオンへ冷たい声をかける。だがその声にはどこか哀れみと諦念、そして自嘲がこもっていた。

「ヘルトルーデ…さん？」

声を聞いたリオンが初めて反応する。その声の主が、かつて敵対し、対神聖王国戦では味方になってくれた少女のものだったから。

そして希望を抱いて顔を上げたリオンの目に写ったのは、かつては公国の姫として己と相対した女傑の…無惨な姿だった。

「な…あ…」

「あんまり…見ないで」

リオンが彼女と対面したのは半年前、神聖王国に敗北し捕虜になった時だった。その時虜囚になったヘルトルーデは、リオンの婚約者達と共に連れてゆかれた。

ヘルトルーデの冷たくも美しい容姿は変わっていなかった。

腰まで届く長い黒髪もまた、かつてと変わらない艶を守っている。

だが、公国の女侯爵としてドレスを纏っていた彼女の肢体はそうではなくなっていた。

なだらかな、リオンの婚約者達の豊満な胸とは比べることすらおこがましい胸は隠すことなくさらされている。その先端、僅かな膨らみ

のようなものの頂点は、ハート型のニップレスで一応隠されている。
処女雪のように白くくすみのない肌は隠すことなく曝されている。括れた腰も、胸と比べるとしっかりと発育した肉付きの良い尻も、スラリとした長い手足も。
彼女の肌を隠すのは、紐同然の細いTバックのみ。だが、彼女の最も秘すべき花園を覆う黒い布地は、辛うじてその縦筋を覆うのみで、ふっくらと肉の盛り上がった肉土手も、その艶やかな花園を覆う黒くもっさりと生い茂った陰毛も、呆然と彼女を見つめるリオンの視線から隠されていない。

「すまない…」
「いいわ…もう数え切れないくらいの人に見られたもの」
リオンの謝罪に、ヘルトルーデは自嘲するように笑う。
「それは…」
「何も言わないで…これは私の選択の結果。貴方に賭けて負けた私の」
惨めな顔でヘルトルーデを見たリオンから、無様な姿で諦念の溜息をついたヘルトルーデは背を向ける。
「ついてきなさい。署長が呼んでいるわ」
「…ああ」
全てを諦めて、今の支配者に唯々諾々と従うヘルトルーデに促され、彼女の白い尻を追うようにリオンもまた独房を後にした。

裸よりも屈辱的な姿のヘルトルーデと、粗末な囚人服のリオンが署長の部屋を目指して収容所の寒々しい廊下を歩く。
歩くたびにヘルトルーデの長い髪が揺れ、その下に隠された彼女の白く肉付きの良い尻が見え隠れし、禁欲状態のリオンの劣情を煽る。紐状のTバックは尻肉の谷間に食い込み、一見すると何も履いていないようにしか見えないのが、更にその卑猥さを強調している。
「言ったでしょ…あんまり見ないでって」

「っ、悪い」
リオンの視線を感じたヘルトルーデが、白魚の様な手で尻を隠す。そしてリオンを咎める声には羞恥と、リオンへの哀れみがあった。
沈黙のまま歩く二人だったが、我慢できなくなったリオンが口を開く。
「ヘルトルーデさん…」
「何かしら？」
声を掛けるリオンを振り向くことなく、ヘルトルーデが答える。
「何が…あったんだ？」
「……」
リオンの問に、ヘルトルーデは無言で振り返ることで答える。その顔には深い諦念と、自嘲の笑みが浮かんでいた。
「あら、本当に知りたいの？」
「……俺のせいで皆がどうなったのか、教えてくれ」
それがヘルトルーデにとって辛いことだと、リオンは理解している。それでも、自分の婚約者達が、そして自分と親しかった女性たちがどうなったのか知らなければならないと、リオンの中に残る僅かな責任感が彼の背中を押した。
「……そう。良いわよ」
「ありがとう…」
「ただ、貴方には辛い話になるかもしれないわよ？」
「今更だ…頼む」
リオンが頭を下げる。
その哀れな姿を、荒みきった紅い瞳で見下ろしたヘルトルーデは、歩みを再開しながら語り始めた。
「…敗戦して捕らえられた私達は、まずは神聖王国の貴族や兵達に慰み者にされたわ」
「っ…」
ヘルトルーデが淡々と語った内容は、敗戦国の末路としてはありきたりな物だったが。
捕らえられた王国の若い女性たちは、その身分や容姿、そして〝処

女〝であるかどうかでグループに分けられた。
そして身分と容姿、更に〝処女〝であったヘルトルーデを含む女子たちは神聖王国の王族や高官達によって処女を奪われた。
例外は特殊な立場のノエルくらいで、アンジェやリビア、ディアドリー等は神聖王国の男達の手によってその純潔を散らされ、約一週間にわたって凌辱された。
「あいつ等…っ！」
「…まあ、負けた時点でそうなることは覚悟していたわ。フフ…皆お尻の穴まで犯されて、最初は痛かったはずなのに最後は泣きながら喜んでたわ」
辛い過去を思い出しながら、ヘルトルーデは自嘲気味に笑う。
「もうここで死ぬかと…いいえ、いっそ死にたいとすら思ったわ」
「っ…すまない、辛い話を」
「いいのよ。だってまだ、序の口だから」
「え…？」
ヘルトルーデの言葉に、リオンは身構える。
「凌辱されきって壊れかけた私達は治療され体を綺麗に洗われた後、私達には特殊な奴隷紋が刻まれた」
「奴隷紋？」
「ええ。これよ」
ヘルトルーデが長い髪をたくし上げ、白いうなじをリオンへ曝す。そこには、リオンも見覚えのある紋章が浮かんでいた。
「これ…聖樹の!?」
「ええ。敗戦した共和国は国民の命と引き換えに聖樹の巫女と聖樹に関するすべての技術を差し出した。これはその時に手に入れた、聖樹の紋章を応用した奴隷紋だそうよ。本来なら巫女かその守護者だけが施せる強力かつ特別な」
「特別？」
ヘルトルーデの言葉に違和感を覚えたリオンが聞き返す。〝特別〝と言ったヘルトルーデの口調に、苦渋と自嘲が滲んでいたから。
「ええ。この奴隷紋は奴隷となった相手の絶対服従は当然として、奴

隷にした女を永く楽しむ為の機能があるわ」
「それって…」
「一つは奴隷の不老化。この紋を刻まれた年齢から私達は歳をとれなくなった。ついでに、専用の薬を飲まない限り妊娠もしないわ」
　吐き捨てるようにヘルトルーデが語り続ける。
「そして2つ目、この奴隷紋は刻まれた奴隷の体調を健全に保つの。余程の怪我をしない限り、一晩で回復するわ」
「…良いことじゃないのか？」
「…一晩中乱暴に抱かれたのに、眠って起きたら肌も髪も綺麗になってる。そしてまた、男達に抱かれるの…これが、良いこと？」
「…ごめん」
　無知を嘲笑うヘルトルーデに、リオンは弱々しく頭を下げる。
「そして3つ目の最も忌々しい効果は、この奴隷紋がある限り、私達の精神もまた健全な状態に保たれるの」
「精神…が？」
「ええ、そうよ。例え完全に心が折れて、廃人になったとしても、奴隷紋の効果のせいで精神が健常に保たれてしまう。それだけじゃないわ。私みたいな人間には、偽りの反抗心を持たせることで、壊れて人形みたいにならないようにするのよ」
　ヘルトルーデが眉間にしわを寄せ、拳を握る。
「もう嫌だ。もう逃げたい。そのはずなのにこの奴隷紋は私に、私をこんな目に合わせた奴らへの怒りと復讐心を無理矢理植え付けるの。ふふ、なのに逆らおうとするとこの紋のせいで体が動かせなくなるのよ。嗤えるわよね」
　ヘルトルーデがリオンニ向き直り、紅い瞳から涙を流しながら己の境遇を嘲笑う。
「あはは…ねえどうだった。参考になったかしら？」
「…ああ」
「因みに貴方の婚約者達も同じよ。二人共、紋を刻まれる前は目も虚ろだったのに、紋を刻まれたせいで無理矢理正気に戻されて、今では立派な雌豚として、毎日色んな男に抱かれてるわ」

「っ……！」
リオンが拳を固く握る。不甲斐なく負けた過去の己へを怒りを抑えながら。
「…私が話せることは以上よ」
「……ありがとう、ヘルトルーデさん」
リオンが頭を下げる。
「いいわ。こんなの単なる時間つぶ…し」
「ヘルトルーデ…さん？」

立ち止まったヘルトルーデにぶつかりそうになったリオンは、彼女に触れる直前で立ち止まる。鼻先にあるヘルトルーデの艶のある黒髪からは、ヘルトルーデの？爽やかな体臭が漂いリオンの獣欲を刺激する。

「よう雌豚五号、ここは通行止めだぜぇ？」
「そうそう。お前ら雌豚は通る時は通行料を払わねぇとなあ」
ヘルトルーデとリオンの行く手を遮るように、曲がり角から現れた監獄の看守が二人、廊下に並び立っていた。

王国敗北ルート　ヘルトルーデの恥辱②

廊下に跪いたヘルトルーデが、白魚の様な手と可憐な唇で二人の看守達の醜悪な逸物に奉仕している。
右手と左手でそれぞれの看守のペニスを扱き、交互に先走り液を漏らす2つの肉棒を、赤く瑞々しい唇でほうばり、舌で苦みと塩味の強く生臭い先走り液を舐め取りながら、根本まで咥え込む。
唇と舌、そして頬裏までを駆使し、更に手で睾丸をマッサージするヘルトルーデの熟練した手管は、凌辱者達を十二分に満足させる物だったが。
「うおっ、たまんねぇな」
「おお、はじめの頃に比べると随分と上手くなったじゃねえか。やっぱり毎日男のペニスしゃぶってたらすぐに上達したな！」
「うるさい…チュプ、わね…さっさと射精しなさい…ハプっ…よ」
生意気な赤い瞳で睨むヘルトルーデを、凌辱者達はあざ笑う。
「ククク、アソコ濡らしといてよく言うぜ」
「しゃぶるだけじゃなくてこのチ○ポを突っ込んでほしいんだろ、淫乱女公爵様？」
「っ…、これは奴隷紋のっ、ひゃん!?」
屈辱にその白皙の美貌を歪ませたヘルトルーデは、指摘された通り愛液で濡れそぼり、もっさりと生い茂った陰毛が貼り付いた股間を、凌辱者達の爪先で小突かれ情けなく甘い悲鳴をあげる。
凌辱者達は、高貴なお姫様が情けなく喘ぐ様子に下卑た笑い声を上げながら、恥辱に身を震わせるヘルトルーデに新たな命令を下す。
「やっぱり手と口だけじゃダメダな」
「そうだなぁ、やっぱりそのトロトロになったオマ○コも使わせてもらわないとなぁ」
「くっ…調子に」
「おいおい、お前ら雌豚は俺達の要求には何があっても応えるのが義務だろ？」

「そうだぜぇ。俺達を満足させねぇと、ここは通せねえな」
収容所の所長命令でリオンを所長の部屋まで案内していたヘルトルーデは、看守たちに見咎められ、『自分達を満足させなければここは通さない』と、行く手を遮られた。
そして仕方なく、手コキとフェラで二人の看守を満足させようとしたが、この一月無理やり覚え込まされた手管だけでは、凌辱者達の欲望は止められなかった。
「んじゃあ早速その邪魔なパンツを…ああ、そうだ折角だ。おい囚人一号、お前がぬがせろ」
「なっ!?」
囚人一号とはリオンの事だ。そして、抵抗しようとしたリオンに、彼を拘束する首輪から電流が流れる。
「ぐぅッ」
「おいさっさとしろ。萎えちまうだろうが」
電流を流すボタンを押した看守はニヤニヤと、無様に膝をつくリオンに命令する。
「いいわ…さっさと脱がせなさい」
「ヘルトルーデさん…ごめん」
リオンを向き直り、羞恥にその白い肌をピンク色に染めながらも、ヘルトルーデは堂々と腕を組む。残念ながら組んだ腕の上には乗っかる乳房(もの)ら存在しなかったが。
リオンはヘルトルーデの前に膝をつき、彼女の肌を守る唯一の布に手をかける。
サイズがあっておらず、更に布地も最低限以下の黒いTバックは、彼女の最も秘すべき縦筋をかろうじて覆うのみで、そのふっくらとした肉土手も、そこを彩るもっさり生い茂った黒い陰毛も全く隠せていない。
口淫の影響で彼女の縦筋から溢れ出した愛液が陰毛を濡らし、ベッタリと肌に貼り付いた卑猥な姿を眼の前にしたリオンは、生唾を飲み込み、勃起した己の逸物から意識をそらしながら無心で、ヘルトルーデの細い腰に引っかかった布地に手をかける。

「っん！」
「すまん…」
「いいわ…はやく、して…」
肌に触れられただけで、敏感になったヘルトルーデが甘い声をあげる。
凌辱者達はニヤニヤとその惨めな姿を眺めながら嘲笑う。
リオンはそれを無視しながら、ヘルトルーデをこれ以上刺激しない様にゆっくりと、Ｔバックをおろしてゆく。
「っ…（ゴクリ）」
「あんまり…見ないでぇ」
リオンの手が腰からヘルトルーデの白く脂の乗った太腿へと降りてゆくのに合わせて、濡れそぼった彼女の花園が眼の前にさらされてゆく。
そしてリオンが手を離すと、ベチャリと湿った音を立てて、ヘルトルーデの愛液でびしょ濡れになったＴバックが床に落ちる。
生唾を飲み込み、血走った目でリオンはヘルトルーデの股間を凝視する。
数え切れない程の男達に蹂躙されたその縦筋は、まるで乙女のように綺麗な形を守っている。本来ならピッタリと閉じているはずの彼女の秘裂は、口淫を強制された事で濡れそぼり、ドロリとした愛液を垂れ流しながら綻んでいる。
熟れすぎた果実のように甘く生臭い芳香がリオンの嗅覚を刺激し、リオンの股間が雄の本能に従って勃起する。
「おい囚人１号、お前そのまま跪いてろ」
「なっ」
「きゃあ！」
看守の一人が、無防備になったヘルトルーデの白い尻を鷲掴みにする。胸と違いむっちりとした肉好きの良い尻肉に指が食い込み、隠すものの無くなったその谷間を割り開く。
「相変わらずエロい生え方してんなぁ。ケツの穴の周りまでびっしりだぜ」

「っあぁぁん♡」
「しかもコッチはもう準備万端でドロッドロだもんなぁ」
転ばないようにリオンの肩にヘルトルーデが手を置いたせいで鼻先まで近づいたヘルトルーデの濡れそぼった女陰に、看守の醜悪な肉棒が埋め込まれてゆく。
数え切れないほどの男を迎え入れた肉穴は、愛液を滴らせながら肉棒を迎え入れる。そして敏感になったヘルトルーデの肉体は、根本まで突きこまれ己の子宮口を叩かれた衝撃とその熱さに陥落し、白く滑らかな肌に汗を浮かべて絶頂する。
「あ…〝あっぁ♡ああっっひ♡ぃ…♡ん〟！」
「ギャハハハハ、挿れただけでもうイキやがった！」
「相変わらず淫乱な女公爵様だぜ」
リオンに縋り付くようにして体を支えているヘルトルーデは、地上に唇を噛んで耐える。だが、凌辱者達の責め苦は終わらない。
「あっ♡ぁぁぁん♡」
「うぉっやっぱ締まりがいいな！　巨乳のメス奴隷2号と3号の良いが、後ろから犯るならコッチの方が良いぜ」
「胸が見えないからな！」
「尻は最高だぜ!?　見ろよ、奥をつくたんびにヒクヒクしてるぞ！」
看守が腰を振る度にヘルトルーデはよだれを垂らしながら甘い漏らし、本来誰も見ることのないはずの不浄の穴を視姦され、屈辱の涙を流す。
「おい囚人一号、折角だからこいつの乳首を舐めてやれ」
「!?」
「こいつ、胸がないくせに乳首の感度は抜群だからなぁ。どんなに生意気な態度してても乳首を抓ってやったらすぐにアヘ顔でまた開くんだぜ」
看守の言葉を聞いて、屈辱を耐えるようにヘルトルーデはリオンの肩に置いた手に力を込める。
それを感じて躊躇うリオンに、ヘルトルーデに挿入していない方の看守が手のスイッチを見せつける。

再び電撃を受ける恐怖に、リオンは怯えて肩を震わせる。
その震えを感じ取ったヘルトルーデは、羞恥と快楽に身を灼かれながらも、リオンの耳元に口を近づける。
「はぁ…っいいわ、よ…舐めてもっあん！」
「ヘルトルーデさん!?」
「や、そこはだめぇ！」
ヘルトルーデの尻穴に看守が指を挿れ、太い指が緩んだヘルトルーデの不浄の穴を蹂躙し、ヘルトルーデに余裕の無い悲鳴を奏でさせる。
「ギャハハハハ、そういやこっちも弱いんだったなぁ公爵様？」
「おい囚人一号、早く舐めろよ！じゃねえと…」
「クソッ…」
リオンは脅迫に負け、全身から汗を吹き出しむせ返るほどの牝臭を放つヘルトルーデの、剥がれかけたニップレスをめくる。
彼女の興奮を反映して充血した乳首が、薄くなだらかな胸の頂で自己主張している。色は薄く、快楽で滝のように流れた彼女の汗がその先端から滴り、リオンの顔を濡らした。
リオンは唾を飲み込み、本当に導かれるままヘルトルーデの薄くそれでいて背徳的な色香を放つ胸の先端に吸い付いた。
「あっぅあぁん！　や、そこだめぇっ!!」
「ヒャハハ！　おい見ろよこいつ、赤ん坊みてえに吸い付いてやがる！」
「まあこいつはまだ母乳はでねぇけどな！」
「どうだろうな、妊娠してもこの薄さでるのかね？」
「「ギャハハハハ!!」」
ヘルトルーデは凌辱者達の嘲りに唇を噛み締めようとするが、敏感になった乳首をリオンの舌でねぶられ情けない喘ぎ声をあげてしまう。それが更に凌辱者達の嘲りを誘う。
この施設に捕らえられてから禁欲状態だったリオンは、夢中でヘルトルーデの乳首を嬲り、己の獣欲を満たす。愛する婚約者達を奪われ、尊厳を凌辱された男は、婚約者たちと同じ立場の美少女を嬲り、無

様に己の欲望を発散しようとしている。
調教され尽くされたヘルトルーデの肉体は、恥辱すら快楽へと変換し、蕩けた蜜壺から愛液を垂れ流し、その穴を蹂躙する肉棒を喜ばせる。
そして白い指がリオンの肩に食い込み、ヘルトルーデは括れた腰を反らせて絶頂する。
「は〝！うう…ぅっうっうぅぅ…うん……んんんん……っ!!」
「うぉっ、搾り取られるっ!!」
強烈な締付けに、ヘルトルーデを貫いていた看守の肉棒が精液を弾けさせ、その火傷しそうな程に熱い奔流がヘルトルーデの子宮を満たす。
「あっあぁぁぁぁっん♡」
満足した看守が萎えかけた己の肉棒を抜き取ると、ヘルトルーデの膣穴からは愛液と精液の混合液がコポコポと溢れだし、ヘルトルーデの眩しいほど白い内腿を汚す。
力尽き、膝をつきそうになるヘルトルーデの腰を、もう一人の看守が支える。
「あぅっ」
「おっと、俺はまだ満足してねぇぞ？」
だがそれは彼女への気遣いなどではない。単に次に順番が回ってきただけのことだ。
「や…っ、そこ、いやぁ、ぁあん」
「ヒャヒヒ、こっちの穴はそう言ってねぇけどなぁ！」
看守のいきり立った肉棒がヘルトルーデの肛門に当てられる。指で解された本来ならば性交に使われないはずの穴は、彼女の興奮を反映して物欲しそうに収縮する。
そしてほとんど抵抗なく根本まで肉棒を受け入れたヘルトルーデの尻穴は、その背徳的な刺激でさらに彼女の脳を蕩けさせる。
「あぁぁひ…いいいいっ！あ…あぁあぁ」
「ギャハハハ、なんだよオマ〇コにぶち込まれてる時よりいい声で啼

くじゃねぇか！」
甲高い喘ぎ声を上げて、ヘルトルーデの全身から汗が吹き出し、涎を垂らしながら情けなく絶頂する。
精液を注ぎ込まれた牝穴からも愛液が吹き出し、己の膣内を汚す白濁液を洗い流すように床へと滴り落ちる。
「あーあー勿体ねぇなあ」
「いいじゃねえかどうせ孕まねえんだしよ。代わりにケツ穴にたっぷりぶち込んでやるぜ！」
「やぁっ、わたひっおかしくなっちゃうぅぅ!!」
白い尻肉が赤くなるほどはげしく腰を叩きつけられ、敏感になった乳首をリオンに吸われ続けたヘルトルーデはついに涙を零しながら懇願する。
「だしてっ、私のお尻にいぃ！　濃いのいっぱいいいぃ!!」
リオンの頭を抱え、積極的に薄い胸を擦り付けながら、ヘルトルーデは貪欲に腰を振り己の不浄の穴に精液を強請る。
「うおおっ、射精るっっ!!」
「はああ…♡ぁあ♡っ！ひいい…♡♡…いっあぁぁあ♡♡♡！」
己の体内を満たす熱い奔流に、ヘルトルーデは発狂する寸前だった。白目をむき、腰をのけぞらせた彼女は、力尽きてリオンへと倒れ込む。
「へ、ヘルトルーデさん!?」
「ふぅ、満足したぜ。ご苦労さん、雌豚五号」
「今度は生意気な事言わずにすぐ使わせろよ」
リオンに抱きとめられ、放心して荒い息をもらすヘルトルーデに蔑みの目を向けながら、看守達が嗤う。そして彼女の長く艶やかな黒髪で、精液と愛液で汚れた自分達の肉棒を清めると、機嫌良さそうに去っていった。
「ヘルトルーデさん、立てるか？」
「はぁ…っはぁ、大丈夫、よ」
よろよろと、全裸のヘルトルーデはリオンの肩を借りて起き上がる。

その際にヘルトルーデの瞳に、リオンのズボンにできた染みが映る。
「あっ…」
「っ、ごめん」
「いいわ、仕方ないもの…」
ヘルトルーデは目を逸らし、床に落ちていたTバックを履き直すと、再びリオンを先導して歩き始める。
彼女が歩く度に、股間から零れる愛液と精液が床に染みを作り、リオンの暴発して萎えた股間が再び盛り上がる。
ヘルトルーデはそれに気付きながらも、無言で歩き続け、リオンもまた何も言わずに彼女に続いた。

それから3度、同様に呼び止められ凌辱されたヘルトルーデに肩を貸しながら、リオンはようやく呼び出された署長室へとたどり着く。
「……後悔しないでね」
「ああ」
壁の向こうから漏れ聞こえる、聞き覚えのある少女たちの喘ぎ声に、リオンは奥歯を噛み締め、気遣うように声をかけたヘルトルーデの言葉に頷く。
そしてリオンは署長室(地獄)へと足を踏み入れた。

性欲旺盛カンピオーネ！
もしも草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）

ガルダ湖畔の別荘で、エリカから『剣』を研ぎ澄ます為の知識を〝口移し〟で与えられた俺は、知識を授けるための儀式が終了した後もエリカと抱き合っていた。

〝神殺し〟となった俺は、外部からの魔術をすべて無効化してしまうらしい。それは害のある魔術だけでなく、傷を癒やしたり知識を授けるようなこちらの助けになる魔術も含まれる。

だが俺には敵を倒すための武器として、『剣』の権能を発動させる鍵として敵となる神の知識が必要になる。そこでエリカは口移しで『教授』の術をかけることで無効化されることを防ぎ、俺にサルバトーレ・ドニの権能の基となった〝まつろわぬ神〟の知識を与えた。

以前、メルカルトと戦う直前も同じように、彼女から口移しで知識を伝授された。あの時もお互いの唇を合わせ求め合った。お互い初めての口づけで戸惑いもあったが、同時に興奮もあった。そして事後、お互い気不味くなってしまった…。

だが、今回は前回と大きな違いがある。

あの頃の俺は確かにエリカに惹かれていた。だがあの頃のエリカの態度は俺を嫌っているように見えたし、『教授』の術の時も、苦渋の決断だと語っていた。だからと言うわけではないが、自分が惹かれている魅力的な美少女と口づけを交わした後でも、興奮よりも気不味さや申し訳無さが勝った。

しかし今回、エリカは『教授』の術をかける前に、俺に情熱的に愛を告白した。今までのツンケンした態度から一変して、ストレートな好意を伝えてきたエリカと口づけを交わしたのだ。しかもお互い舌を絡め合い唾液を交換するほどの激しい口づけを。

エリカのしなやかで鍛えられた、それでいて女性としての柔らかさを十二分に備えた肢体が俺にしなだれかかる。エリカの胸がおれの

胸筋で潰れ、服越しでもわかるその柔らかな膨らみが俺の理性を削ってゆく。更に、エリカの香水と彼女の甘やかな体臭が嗅覚を刺激する。
「ねえ護堂？なんだか私のお腹に硬いものが押し付けられているのだけれど、どういうことかしら？」
「……黙秘権を行使出来るか？」
「だめよ？今答えないとあなたのことだから他の女にどう答えればいいかレクチャーされそうだもの。」
「私は〝今〟のあなたの反応が気になるの。」
よく見ればエリカも恥ずかしそうにしている。あれだけ熱烈に愛をささやかれ面食らったが、よくよく考えればこいつも俺と同じ１５歳だ。いくら大人びているとはいえこういう経験は初めてなのだろう。
そんな彼女の強がるような態度から見え隠れする初心な反応が、彼女への愛おしさを増幅させる。
サルディーニャ島で初めて会ったときから惹かれていた美少女。あれはきっと一目惚れだったのだろう。
理性では、ここで自らの衝動的に従ったら人生の墓場へ直行してしまうとわかっている。だが一目惚れした美少女が、こちらの一方的な片想いだと思っていた相手から直球の好意を示されて、その相手の唇を貪って我慢できるほど、俺は大人ではなかった。
「エリカ、俺はお前を抱きたい」
ついに、言ってしまった。もう後戻りは出来ない。
「お前が好きだ。初めて会った時から、お前に惹かれてたんだ。惚れた女にこんな態度を取られてるんだ。悪いが正直もう我慢の限界だ。」
そう言ってエリカを乱暴にソファに押し倒す。
エリカは顔を真っ赤にしている。あれだけ熱烈に愛を囁いてきた癖に、どうやら自分が言われたらかなり恥ずかしがっているようだ。
「どうした？顔が赤くなってるぞ。」
「し、仕方ないじゃない。まさか鈍感な貴方からそんな熱烈な言葉が

聞けるなんて思わなかったもの」
「お前な…。」
酷い言われようだ。悔しいからもう一度、エリカの瑞々しい唇を喋む。それを合図にエリカは体の力を抜き、覆いかぶさってくる俺に身を委ねようとするが…。
「ま、待って！」
「何だよ、今更無しだと言われてももう遅いぞ。」
「違うわよ。そ、その…」
エリカが恥ずかしそうにモジモジとしながら、か細い声で囁く。
「初めては、ちゃんとしたベットで奪ってほしいの…」
普段強気で凛々しく、女王のような威風すら漂わせる彼女が今だけは、年相応な可愛らしく乙女らしい願望を上目遣いで語る。
そんなエリカの態度に、俺の最後の理性は突き崩された。
即座にエリカをお姫様抱っこで抱え上げた俺は、そのまま寝室へと直行する。

激しい夜になりそうだ。

もしも草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）②

寝室のベットの上で、俺とエリカは裸で向き合っていた。
寝室についてすぐ、お互いに服を脱ぎ捨てた俺とエリカはベットに腰掛け、お互いの裸を見て固まってしまった。
エリカの裸は、以前もシチリアのザンパリーニの爺さんの屋敷で見たことがある。美しく金髪と象牙のような白い肌、年齢に不釣り合いな豊かな胸と先端の桜色の乳首。
日本に戻ってからも思い出すたびに悶々とし、何度も思い出して自分を慰めたものだ。神殺しになってから性欲も増強されたせいなのか、一度抜いたくらいでは治まらず苦労した。
今、俺の目の前に何度も想像した憧れの美少女の裸がある。
恥ずかしいのか両腕で胸と股間を覆っているが、それがかえって興奮を誘う。普段強気で、かつてシチリアでは演技とはいえ堂々と俺に裸を見せたエリカが、初心な乙女のような反応を見せることに言いようのない興奮を覚え、ただでさえ硬かった俺の股間の分身がさらにガチガチに硬くなる。
「す、凄い…。これが護堂の…？」
俺がエリカの裸に目を奪われているように、エリカもまた俺の身体から眼が離せないようだ。羞恥で赤く染まった彼女の顔は、好奇心と期待の籠もった表情で俺の身体を見ている。
そして視線が下がり、股間の分身に彼女の視線が刺さる。
「大きいわね。それに太くて、硬そう。」
熱い吐息を漏らしながら、おそらく生まれてはじめて見る同世代の男のペニスに熱い視線を寄せる。
「なあエリカ、腕を下ろして全部見せてくれないか？
俺だけジロジロみられるのもちょっと恥ずかしいんだけど。」
「し、仕方ないじゃない。乙女にそんなこと言うなんてデリカシーがないわよ！」

そう言いながらも胸と股間を隠していた腕をゆっくりと下ろしてゆく。
エリカの豊かで張りのある胸は、若さゆえかそれとも鍛えているお陰か一切垂れることなく突き出している。その先端に息づく桜色の乳首は、興奮の為か固くなっている。
そしてエリカの、女性として最も隠すべき三角地帯があらわになる。
彼女の髪と同じ黄金色の恥毛が、彼女の恥丘を飾っている。毛が薄いせいか、見た目にはほとんど無毛にさせ見える彼女の女陰。
だが女性器は年相応に発達している。自ら以外誰にも触られたことのない女裂はぴっちりと閉じているが、よくよく見ると薄っすらと湿っているように見えた。
「綺麗だ…」
夢にまで見たエリカの裸を目の当たりにした俺は、そんな当たり前のことしか口に出せなかった。
「も、もう。お世辞の一つも言えないなんて私の伴侶になるのならもっと精進しなさい。」
そう言いながらも満更ではないのか、耳まで赤くなりながら誤魔化すように髪をかきあげる。その仕草一つでも、エリカの豊かな胸がタプンと揺れて、俺の目を楽しませる。
「エリカ！」
「キャっ、アムッ…！」
我慢が効かなくなり、エリカをベットに押し倒し唇を奪う。
クチュリ、クチュリと身体を密着させたままお互いの唇を息を吸う間も惜しんで求め合う。存在感を主張する俺の分身が、エリカのすべすべで余分な贅肉のない腹に擦り付けられる。
「ぷは。ハァハァ。もう、がっつき過ぎよ。」
「悪いエリカ。だけどお前の裸を見て、あんなかわいい顔されたら、男なら我慢なんてできるかよ。」
「ッ……、もう。そんなこと言われたら、私も我慢できなくなるじゃない。」

恥じらう顔を見られたくないのか、俺から顔を逸らすエリカ。
そんな彼女が愛おしくて、その綺麗な髪に隠れ赤くなった耳を甘噛する。
「ひぅんんっ、や、やめて護堂！」
「なんだ、耳が弱いのか？」
「うぅぅん、息かけないで。へ、変になっちゃうから！」
耳を責められたエリカの肢体がビクンと跳ねる。その可愛らしい反応に気を良くして息を吹きかけたのだが、予想以上に効果があったようだ。いつもはキリリとしているエリカの眼つきが徐々にトロンと蕩けてくる。なんとか逃れようとしているようだが、押し倒され、互いにぴっちりと身体を寄せ合っている今の体勢では、逃れようが無い。
「わ、私だけ責められるのは不公平じゃないかしら。」
「な!?エリカ！」
俺に主導権を握られている事にプライドを刺激されたのか、エリカのしなやかな指が、俺の分身を捉えた。
エリカのひんやりした指が、俺の暴発寸前の分身を包み込む。
「凄く熱い。それに太くて硬くて。これ、本当に私の中に入るのかしら。」
男のプライドを刺激する台詞を言いながら、俺の分身を両手で擦るエリカ。先走り液でだんだん、先端だけでなく幹やエリカの白くしなやかな手までベトベトになる。
「ふふ、護堂のアソコ、凄く苦しそう。」
「エ、エリカ!?」
今までのは俺の身体の下にエリカがいた。だが今は逆にエリカに押し倒される格好になっている。
「ねぇ護堂。聞きたいことがあるの」
片手で俺の分身をしごきながら、イタズラっぽい笑顔を俺に向ける。
「貴方、私のことをす、好きだって言ってくれたわよね。
その、もしかして私と再会するまでの間、私を想って慰めていたの

かしら?」
「そ、そうだよ。あー、その。前に見たお前の裸とか…、キスしたときの感触を思い出すたびに我慢できなくなりそうでさ。毎日、抜いてた」
「うふふ、良かった。やっぱり私達お似合いね。だって離れてる間に考えてることまで、同じだったんだもの。」
嬉しそうに、艶やかな笑みを浮かべたエリカは頭を俺の股間へ移動させる。
「護堂、私もなのよ?シチリアの戦いのあとあなたと離れ離れになってから、毎晩あなたのことを想って慰めてたの。」
「あのときは恥ずかしくてしっかり見えなかったけど、私の身体を見て大きくしていたあなたのアソコを思い出して、それで私のナカを掻き回してくれたらなって。私乙女なのに、そんなはしたない妄想をしてたのよ。」
エリカの恥ずかしく、そして雄としては自尊心をくすぐられる台詞に興奮していると、亀頭に息が吹きかけられる。
「う、うわ!?」
「かわいい反応ね護堂。わたし、こんなことも思ってたのよ。あなたになら、こうやってご奉仕してあげてもいいなって。」
そう言ってエリカは、その瑞々しい唇で俺の分身の先端にキスをする。そしてその赤い舌で、亀頭の先端から出る我慢汁をチロチロと舐め取ってゆく。
「んん、しょっぱくて苦くて変な味。でも、何だか癖になりそうね。」
そう言いながらも彼女の手は、片手が俺の分身の幹を擦り、もう片方の手で俺の睾丸を優しくマッサージしている。
そしてその可憐な美唇が俺の分身の亀頭を咥え込む。
エリカの口の中に包まれ、エリカの舌で鈴口を責められた俺の分身が暴発しそうになる。だが、ここで暴発するのは男として負けた気分になるのでなけなしの理性で耐える。
「あら、イッてもいいのよ?全部、受け止めてあげるもの。」
艶然と微笑みながら、今度は亀頭だけでなく幹の半ばまでをその可

憐な口の中に飲み込む。
口の中で丹念によだれをまぶされた俺の分身がエリカの可憐な口から姿を現す。ゆっくりとエリカの頭が上下に動き、その度に俺の分身はエリカの口の中に飲み込まれる。エリカの口の中で、俺の分身はエリカの舌と喉に丁寧に愛撫される。エリカには大きすぎるのか、俺の分身が出入りするたびに彼女の頬が歪に膨らむ。
ペニスから腰にかけてに甘いしびれが走る。
俺は本能のまま、エリカの頭を抑えていた。
「出るぞ！エリカ…！」
「ん〝ンンン〜！」
エリカとキスをして、裸の彼女と触れ合って我慢に我慢を重ねた俺の分身は、エリカの口の中にその溜まりに溜まった欲望をぶちまける。
エリカは目を白黒させながらも、俺の欲望を愛おしそうに口で受け止める。
コクコクと、エリカは喉を鳴らし俺の吐き出した精液を飲み下していく。
「ふう、ごちそうさま。苦くて青臭くて変な味だったけど、貴方のだと思うと不思議と美味しく感じるわね」
口から飲み干しきれなかった精液を垂らしながら妖艶に笑うエリカの姿を見て、一度大量に射精したはずの俺の分身は、一瞬で硬さを取り戻した。

続く

もし草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）③

俺の精液を残さず飲み込んだエリカは、一度口を洗ぐためにベットから降りようとした。
そのエリカの腕を掴む。
「ちょっと、護堂…っ!?」
その唇を強引に奪う。
俺の精液を飲んでくれたエリカの唇。エリカの甘い唾液と俺の青臭く苦い精液の混ざりあった味がする。
「き、汚いわよ…?」
「俺の出したものを飲んでくれたんだ。俺がきれいにしてやるよ。」
再び口づけし、今度は口の中に舌を入れる。俺の分身を舐めてくれたエリカの口腔内を丁寧に俺の舌で舐めあげていく。
次第に俺もエリカも鼻息が荒くなる。
「ハァハァ、もういきなりこんなこと…。」
「悪い、さっきのエリカがあんまりにもその、魅力的過ぎてな。我慢が効かなくなってた」
口の中に俺の精液の匂いを残したエリカを抱きしめる。きっとこれは雄として、自分の物になった雌に自分の証を刻み込もうとする本能なのかもしれない。
「エリカ、脚を開け」
「護堂、だんだんと口調が荒くなってるわよ?
でも、そっちのほうが王様らしいわね。」

そう言ってベットに仰向けに横になったエリカは軽く膝を立て、その細くしなやかな両脚を開く。
黄金の恥毛で彩られたエリカの秘唇は、乙女らしくぴっちりと閉じていたがその隙間から、トロリとした愛液が零れていた。
エリカの細いが脂ののった太腿をさわさわと触る。

「うん…、触り方がちょっといやらしいわよ?」
「悪い、正直興奮しすぎて自制が効きそうにない」
エリカの揶揄するような言葉に答えながらも、視線がエリカの脚の間に息づく秘唇に釘付けになっている。
エリカの艶めかしい内ももを撫でながら、顔をだんだんと彼女の濡れた秘唇へと近づけていく。

「ご、護堂!そんなところ汚いわよ!?」
「お前も舐めてくれただろう。お返しだ」
閉じようとする脚を掴んで、エリカの脚を開いてゆく。エリカが顔を赤く染めながら、観念したように力を緩めた。
目の前にエリカの女性器が、愛液を垂らしながら物欲しそうにヒクヒクしている。
そしてまだ誰も触れたことのない乙女の花園を、彼女の魅惑的なクレヴァスを指でなぞる。
クチュリ、と濡れた音がしてエリカの愛液を掬い、口へ含む。ちょっと酸味と塩味のある独特の味がした。もっと味わいたくて、顔をエリカの股間にうずめる。
「いや、やめて護堂。は、恥ずかしいんからあァぁンん!」
抗議したエリカの口から嬌声があがる。俺の舌がエリカのクリトリスを舐め上げたからだろう。さっきよりも粘ついた愛液が彼女のピッタリと閉じた秘唇から溢れてくる。
蜜に誘われる虫のように、俺もまた彼女の膣口に吸い寄せられる。そしてジュルジュルと、エリカのいやらしい花弁から溢れた蜜を啜る。
ただ舐めるだけでは飽き足らず、舌先を彼女の秘唇の入口から中へと伸ばす。膣口を、俺のモノをこれから受け入れる孔を舌で丁寧に解してゆく。舐めれば舐めるほど蜜が溢れてくる。
「ご、護堂…、わたしもう…!」
「エリカ、我慢しなくていいぞ。」
切なそうな声で呼びかけるエリカの言葉に応えて、俺はエリカの女

陰を両手で広げ、クパァと開いたエリカの花弁に舌を突き入れた。
「ンんっっ、イクぅぅ!!」
エリカの膣壁が俺の舌を締め上げる。そして潮を吹いたエリカの股間がビクビクと痙攣した。
「……ごめんなさい」
俺の顔を自分の出した汁で汚してしまったからだろう。両手で顔を覆い、耳まで赤くしながらエリカがか細い声で謝罪した。
俺は無言でエリカの腕をとり、その羞恥と快楽に彩られたエリカの顔を暴く。そして咄嗟に顔を背けようとしたエリカの顎を掴み強引にキスをする。
エリカの愛液を啜り、ベトベトに汚れた唇で俺の精液を啜った唇を犯すことに倒錯した興奮を覚える。エリカも興奮しているのか、目を蕩けさせながら俺の舌を受け入れている。
「ぷは、ハァ…ハァ…。ねえ、もういいでしょう?」
「なにがいいんだ?エリカ?」
媚びた目をして俺に問いかけるエリカに、敢えて聞き返す。
エリカは脚をモジモジと擦り合わせながら、切羽詰まった声で俺に媚びる。
「早く挿れてほしいの、私もう我慢ができないの!ねえ、はやくぅ!」
初めて会ったとき、キリリとした強気な目で俺を睨んできた目を潤ませて。俺を厳しく叱責したのと同じ声を甘く蕩けさせて俺に媚びるエリカ。
あのエリカにここまで雌の顔をさせていることに言いしれない充足感を覚えながら、俺は正常位の体勢で腰をエリカの艶めかしい脚の間に挟む。
痛いほどに勃起した俺の分身の先端が、エリカの膣口に口づけする。まだ男を受け入れたことのない未使用の孔に、俺の欲望の証が少しずつ埋め込まれていく。
あれだけ前戯で濡らしていたにも関わらず、エリカの入口は狭く、俺の分身の先端を締付けてくる。エリカの狭い膣内を掻き分けながら進んできた亀頭が、エリカの処女膜にぶつかる。

俺の分身が自分の中に挿ってくる痛みに耐えていたエリカの顔に、少しだけ怯えが混じった。
そのエリカを安心させるように、緊張で汗の浮いたエリカの額に口づけする。驚いて目を見開いたエリカに笑いかけ、エリカのくびれた腰を掴む。
「エリカ、お前の〝初めて〟をもらうぞ。」
「ええ、いいわ。それに護堂、貴方の〝始めて〟も、私の物よ?」
少し余裕を取り戻したのか、エリカがいつも通りの強気な態度で俺に笑いかける。そのエリカの表情を見てより一層固くなった俺の分身を、一気にエリカの奥まで突き込んだ。
プチッと、俺の先端がエリカの処女膜を突き破り、一気に先端がエリカの最奥まで到達する。先端がコリッとしたエリカの子宮口にぶつかり、俺とエリカの腰が密着する。そしてエリカの膣口と俺のペニスの結合部から、エリカが純潔を失った証の赤い血が零れ、ベットのシーツを汚した。
「痛っ!嗚呼ぁんンっっ!」
「エリカ…!」
破瓜の痛みに、エリカが縋るように俺に抱きつき、痛みに耐えるように俺の背中に爪をたてる。その痛みに、そして痛みに耐えるエリカの様子に雄としての充実感を覚える。さらに体が密着し、エリカの瑞々しく張りのある巨乳が俺の胸板で潰れ、興奮で固くなった乳首がコリコリと当たる感触が、俺をさらに興奮させる。
つい先程まで処女だったエリカの狭い膣壁が、俺のペニスを食い千切らんばかりに締め付ける。それはまるで、処女を奪った雄のペニスの形を忘れないよう記憶しているかのようだった。
「エリカの膣内(なか)、凄い締め付けだな。」
「ひィインっ、み、耳を舐めちゃダメぇ。息も吹き掛けないで!お、おかしくなっちゃうぅンっ!」
エリカの耳の裏を舐めながらエリカの膣内の様子を伝えると、痛みに耐えていたエリカが可愛らしい声で啼く。耳を責められたエリカの中がより一層締まる。

エリカの膣に俺のカタチを覚え込ませるためにあえてそのまま動かないよう、腰と腰を密着させたまま、今度はエリカの歳に見合わず豊かに実った胸を責める。初めはやわやわと、優しく触りながら、少しずつ強く揉みしだいてゆく。そして固く凝った乳首を甘噛する。
「ダメ、わ、わたしまた…。またイクゥゥんっ!!」
膣内を俺の分身で占拠されたまま、しつこく胸を責められたエリカは再び絶頂した。エリカの膣壁が痛いほどに俺のペニスを締付けて、結合部から破瓜の血を洗い流す程のドロリとした愛液が溢れてくる。
「エリカ、そろそろ動くぞ?」
一度絶頂して、俺の分身に慣れてきたエリカの膣内から俺の分身を先端ぎりぎりまで引き行く。エリカの破瓜の血と愛液にまみれた幹が露わになる。
「ま、待って護堂!わたし今イッたばっかりで、敏感にィィンっ!!」
懇願するエリカの声を無視して、再び先端がエリカの子宮口を叩く。それだけで軽くイッたのか、エリカが嬌声をあげる。
それに気を良くした俺は再びペニスを先端まで引き抜き、エラの張った亀頭でエリカの膣内の愛液と破瓜の血を掻き出す。そして今度はゆっくりと、エリカの濡れた膣壁の複雑に折り重なった襞を楽しみながら挿入してゆく。途中でビクン、とエリカの腰が跳ねる。そこがエリカの弱点なのだろう。そうやってゆっくりとピストンを繰り返し、時にエリカの弱い部分を重点的に責めながら、エリカの狭い膣内を堪能する。
「ご、護堂…、わたしおかしくなりそう…。」
「だけどもう、痛みはないだろ?エリカ?」
「そ、そうだけれど!ぅんんン!!」
初体験で何度も絶頂させされだらしなく蕩けたエリカの唇を奪い、ラストスパートをかける。
「エリカ!そろそろ俺も限界だ!もう射精すぞ!!」
「⊠っあァぁン!来て!護堂!中に出して!」
普段のエリカなら絶対にしないだろうはしたない表情で、涎を垂らしながら俺に懇願するエリカ。その細いを掴み、俺はピストンを繰り

返す。
ジュプっ、ジュプっと湿った音を鳴らしながら俺のペニスがエリカの膣内を穿つ。そして腰に甘いしびれが走り、俺はペニスをエリカの最奥まで突き込んだ！
エリカの長い脚が俺の腰に絡みつく。
そしてピッチリと密着した俺とエリカの腰が同時に震える。
ドピュっ！ビュルルル！
今までで一番強く締め付けられた俺のモノの先端から放たれた精液が、エリカのまだ誰にも汚されていなかった膣内、そして子宮の中までを満たしてゆく。そして二人の結合部から、白濁液が、溢れてくる。
同時に絶頂した俺とエリカは、お互い荒い息を漏らしながら見つめ合う。
「エリカ、すまない。あんまり気持ちよくて全部お前の中に出しちまった。」
「ふふ、いいわよ。貴方との子供なら、何人でも欲しいもの。むしろ、ここで外に出される方が女として屈辱よ？」
エリカの言葉に、まだ半勃でエリカの中に入っているペニスが力を取り戻す。
「ぁン。もう、まだまだ満足してないのかしら？」
エリカが妖艶に微笑みながら、今度は自分から腰を動かす。どうやら先程から主導権を奪われ続けていたのが起きに召さないらしい。
そんなエリカに軽く口づけし、再びエリカの腰を掴む。
「エリカ。第二ラウンドだ！簡単に降参するなよ？」
「あら、それはこっちの台詞よ？わたしを散々虐めたこと、後悔させてあげる。」
こうして若きカンピオーネと、彼の愛する伴侶の夜がふけてゆく。

もし草薙護堂の性欲がもう少し強かったら（エリカ編）④

第４ラウンドまで愉しんだ俺とエリカは、シャワーを浴びたあと、シーツを取り替えたベットの上で休んでいた。
シーツの破瓜の血と俺の精液が染み込んだ部分をエリカが切り抜いて回収していたが、何やら魔術的にかなり貴重な触媒になるから保存しておくらしい。
「うぅん…」
「どうした？」
俺の腕を枕にしていたエリカが身動ぎをして艶めかしい声をあげる。
「ちょっと、あなたに注いでもらったモノがたれてきたの。
ふふ、本当に凄い量ね。」
「……すまん」
責任はとるつもりだが、流石に初めてのエリカ相手に抜かずに４回も中出ししたのはやり過ぎたと今になって反省する。
「大丈夫よ。それに、カンピオーネと普通の人間は子供が出来にくいそうなの。だから子供が欲しかったらこれくらい注いで貰わないとね。」
そう言ってエリカは俺に甘えるように体を擦り寄せてくる。
シャワーの後にエリカがかけ直した香水と彼女の甘い体臭が鼻孔をくすぐり、あれだけ出した俺の分身に血が集まりそうになる。
「あら、あれだけわたしを貪ったのにまだ元気なのかしら？」
「流石にこれ以上やると明日に響きそうだ。」
敗因がヤリ過ぎが原因の寝不足とか、いくらなんでも恥ずかしすぎる。
「そうね。明日は大事な大一番だもの。これ以上疲れちゃ駄目よね…。」
「ああ。それに俺はともかく、エリカの方が辛いだろ？」

「初めての時は痛かったけど、貴方がその…、いろいろしてくれたお陰で途中からは気持ちよかったのよ？
それに、貴方のを注がれてからなんだか調子がいいのよ。なんだか魔術師として一回りくらい成長したみたいに感じるわ。」
確かに、あれだけ乱れていたエリカの肌は、もともと瑞々しかったが今では更に艶が増しているように見える。
「ちょっとした発見かもしれないわね。カンピオーネに抱かれると実力が底上げされるなんて。世の女魔術師や魔女が知ったらどう思うのかしら？」
「…ルクレチアさん辺りなら次に会ったら夜這をかけられそうだな」
サルディーニャ島で出会った、俺が神殺しになるきっかけでもある魔女を思い出す。ただ、あの人は若く妖艶な見た目だが祖父と同年代のはずだよな…？
そう思っていると頬を抓られた。
「あら、私が隣にいるのに他の女のことを考えていたのかしら？」
「すまん…」
「ルクレチアはともかく、私だけであなたを独占できる期間は少なそうね。あなたなら、気が付いたら少なくともあと2、3人は私くらい有能な女の子を引っ掛けそうだもの。いえ、むしろどんどん護堂に抱いてもらうべきかしら？」
エリカが俺の頬を抓りながらとんでもないことを言い始める。
「いや待てエリカ。俺はお前が好きだしそんな節操のない人間じゃ…」
「……っ！いきなりそんなこと！
うーん、でも信用出来るかというと。」
一瞬嬉しそうに頬を染めたエリカだったが、すぐに疑念の籠もった目で俺を見つめた後、考え込み始める。
「やっぱりリリアナは確実に巻き込むとして、他に誰がいいかしら？ルクレチアは自由人過ぎるし、護堂の拠点を日本にするなら日本の組織からも選んで…。やっぱり上手く手綱を握るためにもはやく子供が欲しいところね。」

どんどん発言が不穏になってきて流石に焦る。
「おいエリカ!?いくらなんでも気が早すぎないか!?
それに流石に好きでもない女の子を抱けるほどの甲斐性はないぞ!?」
「わたしはそんなことは無いと思うのだけど…?それに、今回でわかったけど私だけであなたの性欲を受け止めるのは、ちょっと大変そうだもの。信頼できる仲間が必要になるわ！」

そろそろ話が収集がつかなくなりそうだし、このままだと気がついたら勝手にハーレムが完成していそうだ。
「エリカ、そろそろ寝よう。明日に響くぞ?」
「そうね、そもそも明日サルバトーレ卿に勝たない限り、どんな予定も無意味だわ。
…護堂、必ず勝ってね。」
「ああ、任せろ」

翌日、サルバトーレ・ドニとの決闘で案の定死にかけたが、エリカに渡された謎の護符で致命傷を一度回避出来たお陰で、何とかドニを湖に沈めることが出来たのは、また別のお話。

更に決闘の後、盛り上がってまたエリカを一晩中抱いてしまったのも、別のお話である。

黒王子アレクがもう少し押しに弱かったら①

ーイギリスの首都ロンドンー

謎めいた軍神〝ランスロット・ドゥラック〟の正体を探るためイギリスを訪れた草薙護堂一行。

しかし万里谷祐里がサマセット州でかの軍神の正体に迫る霊視を行った直後に現れたサー・アイスマン、カンピオーネの一人〝黒王子〟アレクサンドル・ガスコインの側近からの手渡された手紙と、日本から甘粕冬馬からの連絡を受け、軍神の調査を万里谷祐里に任せ、彼らは日本へ戻ることになった。

残された万里谷祐里は、プリンセス・アリスと共に引き続き軍神の正体を探るためイギリスの各地に赴く予定だったのだが…。

「その、アリス様？この車は一体何処へ向かっているのでしょうか？」

「それは着いてからのお楽しみ！と、言いたいところだけど、流石に何も知らないままで行くのも申し訳ないから教えてあげるわね。今から行くのは私の家よ！」

「…？　確かアリス様の屋敷はロンドン市内のはずですよね？

むしろ郊外に向かっている気がするのですが…？」

万里谷祐里の質問にプリンセス・アリスは意味深に微笑み、「先に屋敷で待っています」という言葉を残して忽然と姿を消した。

そもそも幽体離脱と念動力を駆使して仮初めの肉体を遠隔操作しているのがプリンセス・アリスなのだ。おそらく屋敷の自分の肉体へ戻ったのだろう。

だがそもそも彼女の肉体はロンドン市内の屋敷にいるはずでは、と万里谷祐里は首をかしげた。

今リムジンに乗っているのは万里谷祐里とアリスの秘書だという柔らかい印象の３０代程の秘書、後は運転手のみだ。

アリスの屋敷の女官長だというミセス・エリクソンはここにいない。

そしてリムジンは霧の立ち込める森を通り抜け、その先に現れた、公爵家の姫君でもあるアリスの屋敷としてはややこじんまりとした

屋敷へとたどり着いた。
　そして万里谷祐里は、イギリスを訪れてから最大の驚愕を経験することになる…。

「ごきげんよう、ユリ。こうして生身で会うのは初めてね！」
「アリス様…、です…か？」
　屋敷の応接間で、館の女主人の歓待を受けた万里谷祐里は、一瞬その女性が先程まで共にリムジンに乗っていた貴婦人だと気が付かなかった。
　プリンセス・アリスは明るく溌剌としながらも、霊体の彼女の肌は生気が薄く、どこが儚げだった。
　だが今、万里谷祐里の目の前にいる女性は、容姿こそ先程まで彼女と共にリムジンに乗っていた儚げな貴婦人と同じだか、生身であることを差し引いてもその肌は艶やかで生気に満ちている。
　美しいストベリーブロンドも、霊体のときは物語に出てくるお姫様のように腰まで届く長さだったが、今は肩までの長さだ。
　そして最大の違いは、ゆったりしたドレスを着た彼女の少し膨れたお腹だろう。
「あ、アリス様…？そのぅ…」
「あら、この髪かしら？あの姿だとお姫様っぽくしないといけないけど、生身だとお手入れも大変だし子供が生まれてから短くしたの！」
　若干、万里谷祐里が求めている回答からズレた答えを語りながら、更に爆弾発言を追加する。
「お、お子様が、いらっしゃるのですか…？」
「ええ、そ…」
「お母様ー!!」
　アリスが肯定しようとしたタイミングで、小さな子供が部屋へと飛び込んできた。
「お母様！お客様ですか!?」
「こらリチャード、はしたないわよ。きちんとご挨拶しなさい？」
「はい、お母様。」

そう言って、礼儀正しく万里谷祐里に自己紹介するリチャードと名乗る5歳程度の男の子。
顔立ちはどことなくアリスの面影がある黒髪の可愛らしい子供だった。

「アリス様の…、お子様ですか……？」
「はい！」
男の子が元気に答えて、アリスの隣に行儀よく座る。
「リチャード、もう少しお客様とお話するから待っててね。
お土産に美味しいお菓子を買ってきたから、後で一緒に食べましょ？」
「はーい、お母様！」
リチャード少年はそう言うと、乳母だという女性と共に部屋から去っていった。
祐里は落ち着くために、既に冷めてしまった紅茶を一口飲む。
「その…、ご結婚、なされていなたですか…？」
「う～んと、結婚式は挙げてないし、向こうもそういうことにはこだわらない人だから、いわば未婚の母というところかしら？」
勇気を出して聞いてみた質問には、なんとも曖昧な答えしか返ってこない。というよりも明らかに祐里の反応を楽しんでいる。
「そ、そもそも！今日は私の力を鍛えるための講義をすると仰っていたはずですよね？」
今の状況でそのようなことが可能なのか、とうとう我慢できず祐里が声をあげる。
「うふふ、ちょっとからかいすぎたかしら？
大丈夫よ、ユリ。今貴方が見たことと、貴方の力を鍛えることは関係のあることだから」
「…？」
そしてアリスは楽しげに祐里に告げる。
「貴方も私もカンピオーネの、神を殺した王様の伴侶だもの。

大地母神の末裔が神殺しの妻として子供を産む、それこそが私達にとって、この人の身には大き過ぎる力を制する最大にして唯一の術なのよ？」

欧州最高の貴婦人から告げられた爆弾発言に、草薙護堂の〝正妻〟と呼ばれ何度もかの神殺しの王と肌を重ねた伴侶の一人でもある万里谷祐里は、石化の呪いにかかったかのように、その場で硬直した。

黒王子アレクがもう少し押しに弱かったら②

ーーー6年前　ロンドンーーー

ロンドン市内に佇む豪華な屋敷。国内でも有数な富豪でもある公爵家の有する屋敷の一つであるが、現在その屋敷に居住しているのはその公爵家の姫君とその使用人のみ。

そして屋敷の主人の寝室は当然のことだが物理的にも、そして魔術的にも厳重な警備が敷かれ、不埒な侵入者を許すことなどありえない…はずだった。

「…随分と消耗しているようだな」

天蓋付きの豪華なベットに、重病人のように白い顔をして臥せっている屋敷の主人に不躾に声をかける侵入者。

「レディに向かって随分とデリカシーの無いことを言いますね。　王子の名が泣きますよ？」

「フン、そもそも自分で名乗ったわけじゃ無い。

…どうやら憎まれ口を叩ける程度には元気があるようだな」

厳重な警備を無いもののように余裕で突破し、屋敷の女主人の私室へ侵入した不埒者、神殺しの魔王にして屋敷の女主人と敵対する魔術結社〝王立工廠〟の総帥である黒王子アレクサンドル・ガスコインは弱々しく返事をする屋敷の女主人プリンセス・アリスに素っ気なく答える。

「それにあなたこそ、まつろわぬアーサー王と戦った傷は完全には癒えていないのでしょう？

わざわざこんなところまで、何をしにきたのです？」

「……これを届けに来た」

コツンとベットサイドのテーブルの上に、アレクは懐から取り出した小瓶を置いた。透明なガラスの小瓶の中に満たされた薬品は、まるで液体になった黄金のような不思議な質感をしていた。

公爵家の姫君であり、同時に卓越した霊視力を持つ彼女はその薬品にとてつもない神気が込められている事を即座に見抜いた。そして

ヨーロッパを本拠地とする彼女達には馴染みが薄いが、余りにも有名なその霊薬に心当たりがあった。
「まさか、これは金丹ですか？　中華における不死の霊薬ですよね？」
「所詮はまがい物だがな。　常人が飲めば神気に耐えられず死ぬし、俺達神殺しにとってはただの飲みにくい液体だ。
…だが、お前たちのような零落した地母神の末裔にとっては違う。」
アレクは淡々と、テーブルに置いた霊薬について説明する。
「そもそもお前がそうやって体を壊したのは、先祖返りで身の丈に合わない程の霊力をその身に宿しているからだ。
この薬は、お前と同じように先祖返りで大きすぎる力を得た地母神の末裔、東洋では巫女等と呼ばれている者を生かすために、かつてのカンピオーネが配下に作らせたものだそうだ。」
「…成り立ちは分かりましたが、そもそも何故貴方が？
いや、愚問ですね。どこから盗んできたんですか？」
「おい、人聞きが悪いぞ。今回もきちんと筋は通したし、所有者も納得させた。」
アリスはジト目で、見栄っ張りで基本的に自分の都合しか考えない魔王を見つめる。聞くに堪えない言い訳をしているが、どうせ勝手に宝物庫辺りに忍び込んで、霊薬の代わりに〝借用書〟でも置いてきたのだろう。
「はぁ…でも珍しいですね。貴方がそんな戦利品を他人に無償で渡すなんて。　明日ロンドンに月でも落ちてくるんですか？」
「……単に借りを返しに来ただけだ。　腹立たしいが、お前が命を削ってまつろわぬアーサーを封じる準備を整えなければ、俺はアーサーごとあの忌々しいギネヴィアとランスロットを巻き込んで妖しの森を灼き尽くすしかなかったからな」
「それは…」
「とにかくとっとと飲め。これで貸し借りは無しだ」
霊薬をアリスに押し付け、アレクはさっさとこの場を去ろうとする。
「……嫌です」

「何…？」
「嫌だと言ったんです！」
　アリスが初めはか細く、だがアレクに聞き返された後ははっきりと、霊薬を飲むことを拒絶した。
「何を馬鹿な事を言っている！　これを飲めばお前は…お前の体は治るんだぞ！」
「余計なお世話です！　そもそも盗品じゃないですか！」
「だから人聞きの悪いことを言うな！　代金は払ったし、そもそも盗みには行ったが持ち主も納得している！」
「どうせ盗みに入ったはいいけど、持ち主にバレて仕方なく交渉したのでしょう!?　」
「……」
　図星だったのか無言で目を逸らすアレクを見て、アリスは彼をやり込めた優越感で意地悪く唇を歪める。
「ほらやっぱり。そもそも誰から盗んできたんですか？　わたしが飲んでしまったら返せないでしょう？」
「……」
　アレクは不機嫌そうに黙り込む。
　アリスは自分にやり込められてヘソを曲げたかと思い、少し言い過ぎたかと後悔したが、普段の彼ならもっと言い返してくるはずだと思い直す。
　彼の顔をよく見ようと体を起こそうとするが…。
「わっ……！」
「おい！」
　起き上がり、ベットから身を乗りだそうとしたアリスはバランスを崩しベットから転がり落ちそうになった。そんな彼女を素早く受け止め、体を起こせるよう背中にクッションを置いてから優しく横たえた。
「ほら見ろ、もうまともに体を動かすことすらままならないだろうが！」
「ち、ちょっとバランスを崩しただけです！　大袈裟な…っ」

慌てた様子で叱りつけるアレクに言い返そうとしたアリスは苦しそうに胸を抑える。
「っ…はぁ…はぁ…」
「……済まない、出直そう」
アリスが落ち着くまで優しく背中を擦っていたアレクは、彼女の息が整うのと、霊薬を懐にしまい立ち去ろうとする。その後ろ姿からは普段の彼ならば決して表に出さないだろう、僅かな悔しさが滲んでいた。
それを感じたアリスは無意識に、弱々しく彼の袖口を掴んでいた。
「あ…」
「…どうした？」
「い…いえ、その…」
アリス自身も、なぜ自分がそんな行動をしたのか上手く言語化できず困惑してしまう。
そんな彼女を訝しげに見つめたアレクは彼女に背を向け、まるでアリスに顔を見られる事を厭うかのようにしながら言葉を紡ぐ。
「…可能かはわからんが、薬は持ち主からお前に届くよう手配する。俺が命を懸ければ何とかなるか」
「…アレク、今何か物騒なことを言いませんでしたか？」
「気にするな。…兎に角、俺が渡すのが気に入らないなら何とかする。だからお前はもう休め。」
「ま…待ってください！」
普段の身勝手な彼からすると信じられない程、自分を気遣った発言と態度に、アリスは思わず声を上げアレクに問いかける。
「なんでそこまで、私なんかの為に…？」
「言った筈だ。　借りを返す為だと」
「わたしは、わたしがそうするべきだと思ったからやっただけです！　恩を売るためじゃありません！」
「結果論だとしても俺はお前に助けられた。だから借りを返す。…それだけだ。」

アレクは平坦な態度でアリスの疑念に淡々と答える。
そんな彼の態度に、徐々にアリスは感情を昂ぶらせてゆく。
「いらないと言ったはずです！　そ、そもそもわたしは貴方にとって敵ですよ！　それにわたしがこのままいなくなった方が、貴方にとっては都合がいいはずでしょう!?」
「馬鹿なことを言うな！」
アリスの言葉に、今まで素っ気ない態度をとっていたアレクが激昂する。
普段の彼からは想像出来ない、声を荒げるその態度に驚いたアリスが怯え、身を固くする。
そんなアリスの怯えを感じ取ったアレクは、辛そうに彼女に謝罪する。
「…悪かった」
「わたしも言い過ぎました…。すみません、やり方はともかく、わたしの為に苦労をかけたのに…」
アレクが本心から謝罪していることを察したアリスも、自らの態度を少し反省する。
そんな彼女を真っ直ぐに見つめたアレクは、彼女に頭を下げる。
「頼む、この薬を飲んでくれ。」
「な…！　アレク!?」
普段の傲岸不遜な彼なら絶対にしない行動に、流石のアリスも面食らう。
だが、彼は決して頭を上げず、ひたすら彼女の次の言葉を待つ。
「……それでも、飲みたくありません」
「……」
長い沈黙の末、彼女は改めて自らの治療を拒絶した。
アレクの心情は理解した。彼が自分を救うために、まつろまぬアーサーとの戦いで消耗した体でこの薬を手に入れてきてくれたことを嬉しいとも思っている。
だがそれでも、彼女は最早そこまでして体を癒やしたいと、生きたいと思えなくなっていたのだ。

「アレク…もしよければ少しだけ、わたしの愚痴を聞いてくれませんか？」
「…いいだろう。丁度喉も乾いてきたところだ。
紅茶でいいな？」
「はい……え？」
アリスが困惑している間に、どこから取り出したのか茶葉とティーセットを取り出し、これもどこからか取り出したポットを魔術で最適な温度に温めてお湯をティーポットに注いでゆく。
「え…あ、あの…」
「少し待て、まだ蒸らしが足りん」
懐中時計（これは普通に懐から取り出した）で時間を測り、最適なタイミングで紅茶をカップへと注ぐ。
アリスの鼻を、紅茶の芳醇な香りがくすぐる。
「できたぞ」
「…ありがとうございます……美味しい」
アレクの淹れた紅茶は、イギリスの上流階級の人間としてそれなり以上に紅茶にはうるさいアリスをして文句のつけようのないほど美味だった。
「悪いが茶菓子までは用意していないぞ？」
「…そうですか」
アリスの不本意そうな顔を勘違いしたアレクがやや的はずれな事を言っているが、アリスはツッコミを入れる気をなくしそのまま受け流す。
そして紅茶を半分ほど飲んで人心地ついたアリスは、ポツポツと自らの宿敵であり、そして数少ない自らにとって対等な相手であるアレクに、自らの鬱屈とした想いを語り始めた。

黒王子アレクがもう少し押しに弱かったら③

グリニッジ賢人会議長、欧州最高の貴婦人、白き媛巫女。
生まれつき神祖の先祖返りとして類稀な霊力とそれを扱う才能を持っていた彼女は、１０代前半にはその才覚に相応しい地位を獲得し、数多の称賛と、押しつぶされそうなほどの責務を背負わされていた。
高貴なる者の義務（ノブレス・オブリージュ）の名の下に、彼女は英国の、そして欧州の魔術師達の代表として、まつろわぬ神の災禍や神殺しの魔王達のもたらす騒動に立ち向かった。たとえそこに、彼女の自由意志が無かったとしても。
「はじめの頃は、何の疑問も抱いていませんでした。私には特別な力があって、その力があれば周りの皆が褒めてくれましたから」
アリスは淡々と、まるで他人事のように自らの人生を振り返る。
「ある時、気付いてしまったんです。私を見ている人達…賢人議会のおじいさん達も、家族も、使用人や議会のスタッフ達も、私を同じ目で見ていると」
自嘲するような、影のある表情を浮かべながらアリスは嗤う。
「私が特別だから、みんな私に期待する。私のことを崇めて、奉って、讃える。でもそれは全部、上っ面だけのことなんです」
そう言って、彼女は俯く。その声音からは、深い悲しみが感じられた。
「だって彼らは私を、まつろわぬ神や神殺しの魔王を見るのと同じ目で見ていましたから」
「……」
「当時の私は子供でしたけど、それが普通の人と違うことは分かっていました。それに気づいた時、とても悲しかったです。私はただ、周りにそう望まれたから、そうやって生きてきただけなのに。どうしてこんな風に扱われないといけないのか…」
「……」
「アレク…私は貴方が、あなた達が羨ましかったんです」

「…そうか」
「あなた達カンピオーネは誰からどんな目で見られようと、自分を曲げることはない。だってあなた達はそれぞれが最強の〝魔王〟ですから」
「そうだな…」
「でも…私は、私は違う！私は貴方達の様に強くない！なのに、なのになんで私は!!」
アリスは涙を流しながら、アレクの服を強く掴む。
「もう、嫌なんです。私は弱いのに、そんな私を皆が頼るんです…私は弱いのに、人間を代表して貴方達に、魔王に対抗しろって。なのにあの人達は、弱い私を〝怪物〟みたいに見てくるのに…」
「……」
アレクに縋りつき、彼の胸に顔を埋めてアリスは泣きじゃくる。
「私だって、普通の女の子みたいに学校に通いたい。オシャレをして、街でショッピングをして、素敵な男の人と…恋をしたかった」
そこには、悪戯っぽく笑いながらアレクをからかう少女も、賢人議会の議長として神殺しの魔王達と渡り合う凛々しい貴婦人の姿も無く、ただただ重圧に押しつぶされ、疲れ果てた哀れな少女しかいなかった。
アレクは何も言わず、不器用にアリスを抱きしめる。
アリスは一瞬驚いたように身を固くしたが、すぐにアレクに身を預けるように力を抜いた。
そのまましばらく、二人は無言で抱き合っていた。
「アレク……」
どれくらい時間が経っただろうか。
ようやく落ち着いたらしいアリスが、ゆっくりと身を起こす。
「ありがとうございます……。お陰で少し楽になりました」
「ああ……」
涙の跡が残る頬を拭いながら、アリスはアレクに微笑んだ。
アレクは彼女に再び紅茶を差し出す。アリスはアレクの淹れた紅茶をゆっくりと飲み干す。

「美味しい…です」
「…そうか」
「……」
再び、二人の間に沈黙が満ちる。
沈黙に耐えかねたのか、ぼつが悪そうにアリスが口を開く。
「正直、呆れるなりからかわれるなりすると思ったのですが…」
「…そうだな。少なくとも、お前がなんで頑なに薬を嫌がるのかは理解できた」
アレクはため息をつき、一つ頷くと、真っ直ぐにアリスの目を見つめながらぶっきらぼうに、アリスへ爆弾発言を投げつけた。
「アリス…結婚するぞ」
一瞬ポカンと呆けた顔をしたアリスは、その言葉の意味を理解すると、満面の笑みで右手を振り上げ…

バシーン
繰り出された平手打ちは、神速の権能を有するアレクをして、何故か躱せない一撃だった。

ホグワーツ異聞録
ハリー・ポッターとブラックサンタ　前編（ハーマイオニー　ｎｔｒ？）

クリスマス、その日はマグルだけでなく魔法族の子どもたちにとっても家族や知人からプレゼントを受け取りご馳走を食べられる特別な日だ。

小さい頃なら無邪気にサンタクロースを信じていた子供たちも、寄宿舎校に入学する頃にはサンタではなく親がプレゼントを用意してくれることに気がつく。だがそれならそれでプレゼントを贈ってくれる家族に感謝の気持ちを伝えるだろう。

だが、この世界には魔法が存在する。魔法族の中でもサンタクロース等という年に一度、いい子にしていた子供の部屋に勝手に押し入ってプレゼントを置いてゆく不審な老人はいないと基本的には認知されている。

確かに、〝サンタクロース〟は存在しないだろう。だがホグワーツにはそれと似て非なる存在がいる。正式な名前は無い。だが、それを知る者たちからはこう呼ばれている。

〝ブラックサンタ〟…と。

クリスマスパーティーから少し経ったある日の朝、ハリーは自分のベットの上で腕を組み、目の前に置かれた箱、正確にはその中に入っていたお盆と銀色の液体を見つめていた。

今日の朝、気づいたら枕元に置かれていたプレゼント。初めは遅れて届いたクリスマスプレゼントだと思い開封したのだが、中に入っていたのはこの不可思議なお盆と液体だった。

「憂いの篩…？」

箱の中に一緒に入っていたカードに、この不思議な容器と液体〝憂いの篩〟の説明が書かれていた。

この気体とも液体ともつかない不思議な銀色の物体には誰かの記

憶が封じられている。そして盆に顔を近づけて覗き込むと、封じられた「記憶」の中に入り込んだように追体験できる…らしい。
何故自分の所にこんなものが送られてきたのか、そもそもこれが誰の記憶なのか、そもそも梟を使わずどうやって枕元までこんなものを届けたのか、そういったことは何も書かれていない。
だが送り主の名前だけはカードの裏に書いてあった。
〝ブラックサンタ〟…と。

「ブラックサンタ…ねぇ。確か前にフレッドとジョージが言ってたな。これと見込んだイタズラ好きの生徒で、プレゼントを贈ってくれる学園の妖精……だったかな？」
「じゃあ、この〝憂いの篩〟に危険は無いってこと…？」
「うん。二人に送られたのは違う品物だったらしいけど、少なくとも呪いの品じゃなかったみたいだよ」
悩んだハリーは親友のロンに相談した。
どうやらロンは〝憂いの篩〟については知らなかったが、〝ブラックサンタ〟については心当たりがあったらようで、ハリーにその説明をしてくれた。
どうやらハリーはその妖精に見込まれたらしい。それにここはホグワーツ魔法魔術学校。この魔法界でも最も安全な場所の一つだ。そこへ気づかれることなく危険な品を運び込むことなど、それこそかのヴォルデモート卿でも不可能だろう。
「うーん…でもこれ、誰の記憶か分からないしなぁ」
「折角だし覗いてみようぜ？　ほら、もしかしたら第二の課題のヒントがあるかもしれないぜ!?」
警戒しているハリーに対して、ロンは能天気に送られてきたこの〝憂いの篩〟を試してみたそうにウズウズしていた。
そしてハリーはそんな親友の様子に押し切られ、ロンと共に二人で〝憂いの篩〟を試すこととなる。
それがどのような結末を示すのか…占い学を極めていないハリー達は知る由も無かった…。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ホグワーツ魔法魔術学校の使われていない何処かの部屋。

ベットと小さなテーブルに置かれたランプ以外、余計な調度の無い
その部屋に、ハリーとロンは佇んでいた。

「ここは…？」

「ホグワーツの何処か…だと思うけど」

窓の外には月明かりに浮かぶ禁じられた森が見える。少なくとも
この場所がホグワーツ魔法魔術学校の中だということは分かる。だ
がそれ以外の情報は分からない。

ハリーとロンは部屋の中を見回すが、部屋の中には二人以外の誰も
いない。

「誰もいないけど、じゃあこの記憶は誰の…？」

ハリーが呟いた直後、変化が起こる。

カチャリと、閉じていたドアを開いて一人の少女が部屋へと入って
きたのだ。その人物は、ハリーとロンにとって馴染み深く、それ故に
以外な人物だった。

「え…ハーマイオニー!!?」

「しかもその服装、クリスマスパーティーの!!?」

二人の親友であり、先日のクリスマスパーティーでは普段の彼女か
らは想像できないほど美しく着飾り、なんとあのビクトール　クラム
のパートナーとしてパーティーに参加した少女が、パーティーに参加
した時と同じ美しいドレス姿で部屋に入ってきた。

二人の声に反応しないことから、彼女が記憶の中の存在なのだろう
と二人は察した。だがまだ、この記憶が彼女のものなのかまでは分か
らない。

部屋に入ってきた彼女は、誰かを待っているのかソワソワと部屋の
中をぐるぐると回ったり、かつてはボサボサの癖っ毛だったが、パー
ティーの為にサラサラのストレートに整えた亜麻色の髪を整えたり
している。

「なあ、どう思う…？」

「多分あのダンスパーティーの後の記憶…だよね」
「まあそうだろうけど…ハーマイオニー、一体誰を待って…」
ハリー達が今まで見たことのない親友の姿に困惑している間に次の変化が起こる。
再び開いた扉からもう一人の人物が入って来たからだ。
「え…？」
「お…おいおいおい、まさか…」
そこに入ってきたのは、クリスマスパーティーでハーマイオニーのパートナーを努めた男、そして三大魔法学校対抗試合におけるダームストラング校の代表選手にしてクィディッチワールドカップのブルガリア代表でもあるビクトール・クラムだった。
「よかった…手紙の暗号に気づいて貰えないかと思って心配してたの」
「うン、ちょっと迷ったけド、なんとかこの部屋を見つけられたよ」
ハーマイオニーが嬉しそうにビクトールに微笑みかける。どうやら彼女の待ち人はビクトールだったようだ。
しばらく見つめ合っていた二人は、どちらからともなく歩み寄りそして抱き合った。長身のビクトールの腕の中に小柄なハーマイオニーの体が包み込まれるように収まる。
ハーマイオニーは嬉しそうにビクトールの逞しい体に顔を埋め、ビクトールもまた嬉しそうにハーマイオニーのスレンダーな、それでいて以外と女性らしい柔らかな体を優しく抱きしめる。
そして頬を赤く染めたハーマイオニーが顔を上に向け、ビクトールは彼女の形の良い顎を掴み、自らの唇と彼女の唇を重ねた。
ハーマイオニーは嫌がる様子も無くそれを受け入れる。それどころか、背伸びをして積極的に何度も彼と唇を重ねてゆく。
そして初めは唇を重ねるだけだったが、次第に唇だけでは満足できなくなったのか、ビクトールがハーマイオニーの口の中に自らの舌を潜り込ませた。
「?!…チュ…はぁ、ぅん…」
はじめこそ驚いた風だったハーマイオニーだが、すぐにそれを受け

入れ、むしろ自分から舌を絡め始めた。
部屋の中に、二人の男女の唇の奏でる卑猥で湿った音が響く。
「ハー…マイオ……ニー？」
「な…なあハリー、これって記憶…なんだよ…な？」
「……うん」
ハリーは親友の、今まで想像すらしなかった姿に絶句し、ロンはこの世の終わりのような絶望した顔でただ、目の前で繰り広げられる過去の出来事を眺め続ける。
「ぷはぁ……はぁ、はぁ…。ねえビクトール、もう…いい、わよね？」
「うン…」
名残惜しそうに唇を離したハーマイオニーがビクトールの腕の中からも離れる。そしてゆっくりと、まとっていたパーティー用のドレスを脱ぎ始めた。
「……!!」
「ワォ……」
記憶の中でビクトールがゴクリと喉を鳴らし、ハリーとロンもまた言葉を失う。
ドレスを脱いだハーマイオニーの体を包むのは、上下でお揃いの黒い下着のみ。しかもレースで編まれたその下着は、よく見るとその下にある本来なら隠すべき頂きの頂点や、女性の最も秘された部分、そしてその場所を飾る彼女の髪と比べると色の濃い陰毛が透けて見えていた。
ある意味単に裸になるよりもなお卑猥なその姿に興奮したビクトールは、自らも服を脱ぎ捨てる。こちらははじめから下着も脱ぎさり、その股間の男の象徴をさらけ出していた。
クディッチの選手として鍛えられ無駄な贅肉のない引き締まった肉体、そしてその股間には逞しく長いペニスが、先走り汁で先端を濡らしながら屹立していた。
「ふふ、ビクトールったらもうそんなに大きくしちゃったのね」
「お願いだ…いつも通り…」
「うん…始めは口で、ね♡」

ハーマイオニーがまるでビクトールの前で跪くかのように床に膝を付け、その白魚のような手でビクトールの長いペニスを掴む。そして先走り液で汚れた先端を、ペロペロと舌で舐め始めた。
ピクン…とビクトールが腰を震わせる。その様子にハーマイオニーは妖しく微笑み、今度はパクリと彼のペニスの先端を咥え込む。
チュウチュウとまるでストローを吸うかのように、ビクトールの亀頭の先端から溢れる我慢汁を吸い取り、コクリと喉を鳴らして飲み込む。そして一度口からペニスを抜いたハーマイオニーは、両手でビクトールの長いペニスの幹を扱きながら、唇から溢れた涎をペロリと舐めとる。
「あらビクトール、凄く苦しそうよ？」
「……お、お願いダ、早く…続きを」
「うん、いいわよ。沢山だしてね？」
ビクトールの苦しそうな様子に優越感を覚えたのか、ハーマイオニーは嬉しそうに彼への責を再開した。
片手はビクトールの幹を扱きながら、もう片方の手でビクトールの睾丸をさわさわと刺激する。そしてその瑞々しい唇が、ビクトールの長く逞しいペニスを飲み込んでゆく。小柄な彼女では全て飲み込めなかったのだろう。ハーマイオニーの唇は幹の中ほどで止まる。そしてチラリと上目遣いでビクトールを見たハーマイオニーは、その整った顔を卑猥に歪めながらゆっくりとペニスを口から引き抜く。
「お…おオおおぁ…こレは…」
ビクトールか余裕のない声をあげる。
ハーマイオニーは口の中で彼のペニスの弱い部分を舌で刺激し、陰圧をかけその頬裏でペニスを挟みながら何度も出し入れを繰り返す。
ビクトールのペニスは彼の先走り液とハーマイオニーの唾液でベトベトになり、ハーマイオニーの唇の周りも同様にベトベトになってゆく。
そしてビクトールが、徐にハーマイオニーの頭を掴むみ、その長いペニスをハーマイオニーの口の奥までつき込んだ。
「で…出ル!!」

ビクビクッとビクトールの腰が震える。そして目を見開いたハーマイオニーの頬がまるでリスのように膨らむ。頭を掴まれ、ペニスに口の中を占拠されたまま、ハーマイオニーは口の中に溜まったビクトールの欲望の証をコクリコクリと飲み込んでゆく。

パンパンに膨らんでいた頬は次第に小さくなり、ビクトールの半ば萎えたペニスが引き抜かれた時、その口の中に、ビクトールの精液は残っていなかった。

「ふぅ…美味しかった。沢山出してくれてありがとう、ビクトール」

「ハーム・オウン・ニニー…そろそろ…」

「もう…がっつき過ぎよ？　続きはベットで…ね？」

ビクトールが血走った目でハーマイオニーを見つめると、ハーマイオニーは恥ずかしそうにしながらもベットに腰掛ける。そして微笑みながら両手を広げ、ビクトールに呼びかける。

「いいわよ、来て…ビクトー…っキャ!?」

ビクトールは無言で、そんな彼女をベットの上に押し倒した。

ーーー後編へ続く

ハリー・ポッターとブラックサンタ　後編（ハーマイオニーｎｔｒ）

ハーマイオニーをベットに押し倒したビクトールは、彼女の年相応に膨らんだ柔らかな2つの膨らみをその大きな手で揉みしだく。
「キャ…っうぅん…」
「ハーム・オウン・ニニー…ここがもウ、硬くなっテる…」
「ぁンっ…ハァハァ…わ、わざわざ言わない…でぇ」
ビクトールに揉みしだかれ形を変えるハーマイオニーの乳房の先端は、ビクトールへの口腔奉仕と彼の愛撫によって硬くなり、レースの下着と擦れる刺激で更なる快感を彼女に与える。
そんな彼女の興奮を反映して、彼女の秘処からは愛液が溢れ出しシーツに水溜りを作る。黒いレースの下着はピッタリと股間に張り付き彼女のふっくらと盛り上がった肉土手と、そこに生えた黒い陰毛が透けて見えている。
そして最早獣欲が理性を上回ったビクトールが、ハーマイオニーのブラジャーとパンティを、手で引きちぎる。
「キャア!?…もう、折角のお気に入りだったのに…」
「ごめんハーム・オウン・ニニー…でももう…!」
ハーマイオニーは少し怒ったようにその形の良い眉根を寄せるが、ビクトールの様子を見て嬉しそうに微笑む。
「仕方ないわね…はい、ビクトール。あ、貴方専用のこのはしたないメス猫おマン〇を…メチャクチャに…して」
「っ…ハーム・ウオン・ニニー!!」
ハーマイオニーがそのスラリとした脚を広げ、更に両手で自らの秘孔を広げ、彼女の処女を奪い、彼女に牝の幸せを教え込んだ牡によく見えるようにさらけ出す。
まるで汚れを知らない乙女のようにピッタリと閉じていた彼女の股間の秘裂は、彼女自身によって広げられ、その奥で物欲しそうに愛液を垂れ流す孔も、更にその舌でヒクヒクと収縮する不浄の孔も、余

すところなくビクトールの視界に収まっている。
先程ハーマイオニーの口で奉仕されたペニスがその時よりも更に膨張する。そしてその長く太いペニスが、ハーマイオニーの膣口へとあてがわれる。
「い…いクよ…？」
「うん…いいわよ…ビクトーっひやぁぉぁん♡」
ビクトールがペニスを一気に彼女の膣内へ叩き込んだ。彼の長いペニスが根本までハーマイオニーの膣内に収まり、ビクトールとハーマイオニーの腰が密着する。

いきなり膣腔の最奥、子宮口を硬いペニスの先端で叩かれ、既に潤っていた膣腔内を長く太い幹で占拠されたハーマイオニーは、普段の彼女なら絶対にあげないような、甲高い喘ぎ声をあげて、口元から涎を垂らしながら絶頂した。
プシュっと潮を吹き、腰をのけぞらせて痙攣するハーマイオニーを抱きしめたビクトールは、自らの逸物を引きちぎらんばかりに締付け、艶やかな喘ぎ声をあげる恋人の唇を奪う。
「ふ♡っ……うっ♡うっうううんん♡っ…っ♡…」
上の口はビクトールの唇で、そして下の口をビクトールのペニスで繋がったハーマイオニーはくぐもった喘ぎ声を漏らす。少し苦しそうに眉を寄せているが、彼女が決して嫌がっていない証拠に、彼女の手はビクトールの背中に回され、彼女の白くスラリとした脚はビクトールの腰に絡まり、自らを貫いた雄を決して逃さないように体を密着させている。
口の中をビクトールの舌で舐め回され、凝りきった乳首は彼の逞しい胸板に潰されている。そして彼女の膣腔は自らの中をかき回し、その最奥を小突く雄の象徴の刺激に歓喜し、愛液のシャワーを浴びせその膣壁で逸物を締付け歓待する。
ビクトールが逸物を引き抜こうとすると、結合部からはドロリとした粘性の高い愛液がかき出され、膣肉が愛する雄のペニスを逃さないように吸いつき卑猥にめくれ上がる。

「……」
「……あ、あぁぁ」
　ハリーはただ無言で、親友が今まで見せたことのない顔で喘ぐ様子を見つめ続け、ロンはハーマイオニーがビクトールのペニスの出し入れに合わせてそのくびれた腰をくねらせる様子に白い顔で最早声にならないうめき声をあげる。
「だ…っ…!めえ♡っえっっ♡えっ…え゛っえ♡っ……え……え……゛っ」
　パァンと音が響くほど力強く腰を叩きつけられたハーマイオニーが再び絶頂する。つい先程まで、妖艶な様子でビクトールをリードしていた彼女は、最早普段の知性をかなぐり捨て、一匹の淫らな雌として力強い雄のペニスに屈服していた。
「び、ビクトール…私、もう…ひうぅぅんっ!!」
「やっぱり、ここが弱いんだネ」
　絶頂したばかりで敏感になり、硬く凝りきったハーマイオニーの充血した乳首をビクトールの太く硬い指が摘む。クリクリと弄くり回され、更に口づけされ甘噛みまでされたハーマイオニーは、情けなく涎を垂らしながら髪を振り乱して再び絶頂してしまった。
「ハァ…ハァ…っあん、ビクトール!?」
「いクよハーム・ウオン・ニニー!!」
「い…♡っいっっ♡♡♡い゛っ?い♡…♡いい……♡!」
　連続で絶頂させられ息も絶え絶えなハーマイオニーの細い腰をビクトールが掴み、荒々しくその逞しい腰を前後させる。ペニスが出し入れされるたびに湿った音が響き、泡だった愛液が結合部からかき出される。
　結合部から溢れ出した愛液でシーツはバケツをひっくり返したようにびっしょりと濡れ、ビクトールがハーマイオニーの奥を小突くたびにベットがギシギシと音をたててきしむ。
「射精(だ)すよ、ハーム・ウオン・ニニー!」
「うん♡…だし…てぇ、沢山…膣内(ナカ)に…ひいっ♡い゛!う…う…っ!!」

一際強くビクトールが腰を強く叩きつけ、ハーマイオニーもまた蕩けた顔で膣内射精をねだる。しかも言葉だけでなく、彼女の脚がビクトールの腰に絡まり、自分から腰を擦り付けて彼の子種を全身を使っておねだりしている。

そしてハーマイオニーの膣内で一回り大きく膨らんだビクトールのペニスが、彼の欲望を開放する。

「あ……あああっ♡っあつぃ♡熱いのぉぉ♡っぉぉぉぉぉ!!!」

どくん、どくんと脈打ちながら大量の精液がハーマイオニーの子宮へと流し込まれていく。子宮口をこじ開けられ、そこに直接注がれているような錯覚さえ覚えるほど大量に、濃厚に吐き出されたビクトールの精子が、ハーマイオニーの子宮を満たし、それでも収まらず逆流したそれが結合部からごぷっと音を立ててあふれ出す。

「ああ、ビクトール……私の中……ビクトールので一杯……」

ビクトールのペニスはまだ硬さを失っておらず、それどころかより一層固くなったそれは、未だにハーマイオニーの最奥を小突き、彼女の身体に悦楽を流し込み続けている。

脂肪の薄いハーマイオニーのお腹がぽっこりと膨らみ、外からでも彼女の胎内にそれだけ大量の雄の欲望の証が注ぎ込まれたことがわかる。

長い射精の末、ようやく精子の奔流が止まったペニスをビクトールがゆっくりと引き抜いた。

あれだけ射精しながら、まだ硬さを残したペニスをビクトールはハーマイオニーの目の前に突きつける。

ハーマイオニーは熱い吐息を漏らしながら口を広げ、彼の精液と自らの愛液でコーティングされた逸物を再び咥え込んだ。

「……ん、んん……じゅぶ……んふぅ……んん」

先程よりもずっと深く喉の奥まで飲み込み、舌先で鈴口からカリ首までを丹念に舐め回し、尿道に残った僅かな残滓すら吸い出して味わい尽くす。

「んん……ちゅ……んん……んぐ……」

ハーマイオニーがペニスの先端を口に含み、亀頭全体を舐め回してから、喉を鳴らしてそれを嚥下していく。
最後の一滴までを飲み干したハーマイオニーが、名残り惜しそうにペニスから離れ、唇の端についた粘液を指で拭い取り、チュパっと音をたててしゃぶりつく。
そのあまりにも淫らな光景にハリー達は目を奪われてしまう。
そしてビクトールもまた、恋人のその淫らな様に再び雄の象徴を硬くする。
「ボクまだ足りないヨ…」
「うん……来てビクトール、もっと……貴方の好きなようにして」
そう言うとハーマイオニーはベットへ四つん這いになり、その若々しくそれでいてむっちりと肉のついた白い尻をビクトールに向ける。上に向けられた尻の谷間には、ポッカリとビクトールのペニスの形に広がった彼女の膣穴がポタポタと愛液と精液の混合液を溢れさせ、色素の沈着した尻穴が物欲しそうにひくひくと収縮している。
「ビクトール……きて」
ハーマイオニーが誘うように腰を振ると、ビクトールが後ろから覆い被さるようにしてハーマイオニーの腰を掴む。そしてそのまま、ビクトールのペニスがハーマイオニーの蜜壺を一気に貫いた。
「あ……あぁ♡……来たわ……ビクトールの……♡」
ハーマイオニーが喜悦の声を上げ、ビクトールの動きに合わせて腰を振り始める。
二人の結合部からは白濁とした液体が掻き出され、ベットの上に飛び散っていく。
「ハーム・ウオン・ニニー！ハーム・ウオン・ニニー！」
「ビクトール♡ビクトール♡ビクトールぅ♡！」
二人がお互いの名前を呼び合い、その度にハーマイオニーの胸が揺れ、汗が飛ぶ。
パン、パン、という乾いた音と共に激しく腰を打ち付ける音が響く。ビクトールがハーマイオニーの腰を強く掴み、ハーマイオニーも彼の動きに合わせ腰を動かす。

一際強く腰を叩きつけたビクトールがハーマイオニーの最奥で精を解き放った。

「ひあっ！出てるっ！ビクトールのっ……ひうううううううっっっ♡♡♡！！」

子宮口に叩きつけられた熱い精液にハーマイオニーが絶頂し、背中を反らしガクンガクンと痙攣する。

ビクトールのペニスが引き抜かれると、栓を失ったハーマイオニーの穴からゴプッと精液が流れ出し、シーツに染みを作る。

しかしそれでも、ハーマイオニーの秘所からは大量の愛液が吹き出している。

「ハァ……ハーム・ウオン・ニニー……」

「ビクトール……好きよ……大好き」

二人は再び抱きしめ合い、キスを交わす。ビクトールは嬉しそうに、そしてハーマイオニーもまた幸せそうに。

――――――――――――――――――――――――――

気がつくとハリーとロンは、寮の部屋に戻っていた。目の前には〝憂いの篩〟がある。つまり、先程の光景は…。

「なあハリー…」

「うん…」

二人は取り敢えずトイレに行くことにした。できるだけ他の寮生に…特にハーマイオニーに出会わないことを願いながら。

――――――――――――

後日、再びハリーのもとに別の憂いの篩が届くことをこの二人はまだ知らない。

ＰＣ版鵺の陰陽師　敗北シーン集
特訓敗北①　メスガキＪＣ触手責め　序

周防先輩の誘いで、夏のビーチの警護の仕事を引き受けた俺、夜島学郎は、一緒に警備の仕事をすることになった陰陽師の古賀さん、そして彼女が助っ人に読んだ古賀さんと辻田さん達と、幻妖討伐の対抗戦を行うことになった。
対抗戦前に色々あって落ち込んでいた俺だけど、チームメイトの藤乃さんのお陰でトラウマも少しだけマシになり、二人で勝つために頑張った。

だけど予想外だった…。まさかこの場に集まった幻妖が急に一箇所に集まって強力な幻妖に進化して、しかもそいつは俺たちの令力を吸収する力を有していた。
駆けつけた周防先輩や、式神を使った藤乃さん、それに古賀さん達が力を合わせても叶わず、全員が幻妖の触手に捕まってしまった…。
『Ｍｅｅｅｅｅｅｅｅｅ』
「う…くそ、体が…！」
「ごめん夜島…藤乃さん…私が誘ったばっかりに…」
「この触手、私達の令力を継続的に吸ってる…？」
俺達はタコと貝を合わせたような幻妖の触手に手足を縛られ、空中に釣り上げられている。
『Ｓｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ』
「ちょっ…これは、不味いわね」
「なんやこいつ…力が出えへん…」
「……」
周防先輩の同僚の古賀さんや、僕をイジってからかっていた辻田さん、それに無口な町田さんも同様に触手に捕まっている。
「っ…不味い、霊衣が」

「くぅ…！」
そして令力を吸われた俺達は、元の水着姿に戻されてしまった。
「お、おいあれは!?」
「お、女の子達が捕まって!?」
「化け物だ!!」
霊衣が解けたことで俺達の姿が一般人にも見えるようになる。
それはつまり、触手に吊り下げられた水着姿を人々に晒すということで…。
「い、嫌ぁぁ!! み、見んといてぇ!!!」
「つ、辻田さん!!」
俺以外の陰陽師達、それも高校生や中学生の女子である皆は周知で顔を赤く染め、特に一番歳が低く経験も少ない辻田さんは必死に体を隠そうと暴れるが、触手に捉えられた手足はびくともしない。
それどころか、俺より一つ下の中学生なのに、年に見合わない成熟した胸囲を誇る辻田は、暴れれば暴れるほどその豊かな胸が弾み、水着のトップスがズレてゆく。
「ひっ…な、やめてぇ!!」
そんな辻田さんに興味が湧いたのか、辻田さんは触手に吊り下げられまま幻妖の正面に移動させられる。
そして手足をX字に固定された辻田さんのズレかけたトップスに、幻妖の触手が伸びる。
「嫌っ、この…これ以上手ぇ出したら覚えとれ…キャァァ!!」
『Ｇａａａａａａａ』
幻妖の触手が、辻田さんの豊かな胸を水着のトップス越しに玩び始める。ふにふにと、はじめはその柔らかさと弾力を確かめるように、そして次第に激しく、彼女の瑞々しくまだ硬さの残る乳房を捏ねくり回す。
「っ…この変態幻妖…ぁん！」
『Ｋｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉ』
始めこそ嫌がり抵抗していた辻田さんだが、次第にその声に艶が混じり始める。真夏の日差しのもと、彼女の白い肌に汗が浮き、彼女の

未だ発展途上の肢体を妖しく彩る。
そして彼女の声色の変化を感じたのか、触手がとうとう、辻田さんの胸を守る布を掴む。
「やっ…やめ…だめぇ!!」
『Ｗａａａａａａａａ』
〝ビリィ〟という音とともに、辻田さんの胸を守っていたトップスは引きちぎられ、彼女の白い、歳不相応に発育した豊満な肉果実が太陽の下に晒される。
「「オオオオオオォ!!!!」」
周囲で、この様子を遠巻きに見ていた男たちから歓声が上がる。
「やぁぁ、見んといてぇ…っ！」
眼に涙を浮べ、必死に体を丸めて胸を隠そうとするが、触手はそれを許さない。むしろその胸を強調するように辻田さんの体を反らし、その無防備に揺れる２つの肉果実に触手を伸ばした。
「あ、あんっ！　は、離してぇ……」
『Ｋｈａａａａａａａ』
触手の先端が、彼女の乳首を捉えるとそのままコリコリと弄ぶ。辻田さんの乳首は綺麗な桜色だったが、次第に充血し赤く染まってゆく。
「ひぃんっ！　あっ……ああ…っ！」
触手の刺激に、最初は耐えていた辻田さんだったが、執拗な乳首責めに遂に絶えられず、喘ぎ声が漏れ始める。
「ひぃいぃ♡いい……いっ！ぅ♡ぅ…ぅ〟っんんんん…ん…ん♡」
『Ｌａａａａａａａａ』
〝ビクン〟と手足を痙攣させ、辻田さんが必死に閉じようとした口から甲高い喘ぎ声と唾液を零す。よく見れば、彼女の股間からは汗以外の液体が太腿を伝い、地面に落ちて砂浜を湿らせている。
触手もそれに気付いたのだろうか、辻田さんの胸を弄る触手とは別の触手が、彼女の股間へと伸びてゆく。
「あ、アカンて…っ、そこは、そこだけはやめ…だめぇぇ!!」
『Ｚｅｅｅｅｅｅｅｅ』

触手は必死に懇願する辻田さんの願いを無視し、遂に彼女を守る最後の布を剥ぎ取る。
「「オオオオオォォ!!!!」」
再び男達の大歓声が響く。先程よりも人数が増えている気がするが、気の所為だろう。
「あぁ…嫌っ見んなぁ…見んといてぇ…っ！」
『Ｎｕｕｕｕｕ』
手足を固定されて、女として最も隠すべき場所を太陽の下に晒された辻田さんは、涙を流しながら必死に懇願する。だが触手は、さらなる恥辱を彼女に与えるため彼女を移動させ始める。
「な…へ…!?」
「キャァァァァ!!!」
空中で触手に腕を頭の上で縛られ、脚をＭ字に開脚した体制にされた辻田さんが、俺の眼の前に移動させられる。
ちょうど俺の眼の前に、辻田さんの股間が来る位置で、俺達の体は再び固定された。
「こ…これが、女の子の」
「やだぁ…見んといてぇ!!　」
「ご…ごめんなっ…な、目と首が!!」
辻田さんの懇願に目を逸らそうとした俺の頭を触手が固定し、更に閉じようとした目を細い触手が無理矢理開く。
そして俺の眼の前に、歳下生意気美少女の股間が晒される。
『Ｙｅｅｅｅｅｅ』
「な…な……」
まだ誰にも汚されていないだろう乙女の縦筋はピッタリと閉じている。だがその縦筋を形作る肉土手は相応に発達し、ふっくらと柔そうに盛り上がっている。毛はまだ生え揃っていないのか、薄く縮れの少ない陰毛が汗と、そして股間から溢れた液体でピッタリと張り付いている。
「ゴクリ…」
俺は生唾を飲み込む。なんとか手足を自由にしようと抵抗するが

それは出来ない。首も固定されて目も無理矢理開かれ、この天国とも地獄とも言える状況から目を逸らすことも出来ない。
　そして嗅覚を、ムワッとする生臭いようなそれでいて香しい匂いが刺激し、俺の股間が水着の中で痛いほど勃起している。
「夜島…」
「エッチ…」
　そして先輩と藤乃さんが、心配2割、侮蔑8割の冷ややかな視線を俺に送っている。
　なんとか状況を覆そうと、血走った眼で辻田さんの股間を凝視しながら考えを巡らせ…
『学郎…聞こえるかい、学郎?』
「…!?　鵺さん!!」
　俺の頭に、一番頼りになる人の声が響いた。

特訓敗北②　メスガキＪＣ触手責め　破

触手に捕まり、身動きが取れない俺の頭に、鵺さんの声が響く。
『どうやらピンチのようだね学郎』
「す…スイマセン」
『フムフム…私は助けに行けないがアドバイスはあげられる。よく聞くように』
「は…はい！」
俺は頭に響く鵺さんの声に耳を傾ける。
その間も俺の視覚は辻田さんの股間に固定され、嗅覚は彼女の股間から香るなんとも言えない淫らな匂いに刺激され続けている。
『結論から言うと、今君に出来ることは無い！』
「えぇ!?」
鵺さんの言葉に思わず叫ぶ。
『まあ落ち着き給え。君達を捕まえているその幻妖、どうやら君達に害意は無い』
「いやでもこうやって皆捕まって…」
『どうやらこの幻妖は、このビーチだけでなく、どこか別の場所からも大量の負の感情が集まっているようでね』
「それって危険なんじゃ…？」
『いやいや、むしろその負の感情はちょっと特殊みたいでね。君達を含む他者への悪意は無いんだ』
「じゃあ一体どんな負の感情が…？」
『ああ簡単だよ。この幻妖を形作る感情はね、〝君達の淫らな姿が見たい!!〟というものだからね』
「はぁ!?」
鵺さんからの衝撃の情報提供に、俺は最早隠す事も出来ず大声で叫ぶ。
『まあつまりだ。学郎、今一緒に捕まっている女の子達の淫らな姿を晒し尽くせば、その幻妖は満足して力を失う』

「いやそれかなりヤバイのでは？」
『大丈夫、学郎が頑張ればそれだけ幻妖が満足する時間が早くなって、皆が淫らな目に遭う時間も短くなる…多分』
「鵺さん!!?」
『まあつまりだ、幻妖が君達にしようとすること、させようとすることに逆らわない事だ。そうすれば君達は早く開放される。まあ、周りで騒いでいる人達は後で事後処理の陰陽師達が記憶を消すさ』
「いやそういう問題では…」
『では学郎、頑張り給え！　まあ、丸投げは可哀想だから助言位はあげよう』
「それは…ってうわっぷ!?」
鵺さんと更新していた俺に業を煮やしたのか、触手が再び動き出す。具体的に言うと、俺の顔に辻田さんの股間を押し付けてきた。
「い…嫌ァっ、お嫁行けんくなるぅ!!」
「ごっごめん…っ」
『いや学郎、チャンスだ！　君の舌で彼女を気持ちよくさせてあげろ！』
「えぇ!?」
鵺さんがとんでもない事を言いだした。
『今この幻妖は彼女、確か辻田さんだったかな？　彼女が乱れる姿を特に見たがっているようだ。君が手助けしないと、業を煮やした幻妖がもっと彼女を傷つけるような事をするかもしれないよ？』
「それは……っわかりました！」
鵺さんの言葉を信じれば、彼女たちに命の危険は無いかもしれない。でもこのままだと、命は助かっても大きな怪我をするかもしれない。そうさせないためには、俺が頑張らないと。
「辻田さん…ゴメン！」
「ひぅ…一体何するつもり…あぁぁん!!」
俺は唯一自由になる舌を、鼻が付きそうな位に近くに寄せられた辻田さんの股間へ、ムワッとする甘酸っぱい匂いを漂わせる乙女の縦筋へと伸ばし、そこから垂れてくる液体を舐め取る。

「なっ…ななな何しとるん!?」
「大丈夫、任せて！」
「いや任せてってどういっぁぁあああん!!」
俺はピチャピチャと音をたてながら、辻田さんのまだ誰にも汚されていなかったであろう割れ目に舌を這わせ、彼女の割れ目の奥でパクパクと可愛らしく収縮する膣口から溢れる愛液と啜る。
汗の味と、酸味と苦味の混ざった不思議な、だが不快ではない味が舌を刺激し、鼻腔を先程まで嗅いでいた匂いより何倍も濃厚な辻田さんの発情臭が駆け抜けていく。
「や…駄目、おかしくなるぅ…」
「チュ…ジュル…ジュルル…」
敢えて音をたてて辻田さんの愛液を啜り、舌で彼女の膣口を解し、その奥のサーモンピンクの膣壁を舐めあげる。
俺が舌で辻田さんの膣肉を刺激する度に、彼女の口から艶のある喘ぎ声が溢れ、膣口から溢れてくる愛液の粘度が増してくる。
「はぁ…はぁ、辻田さん…もっと気持ち良くなって…」
「な、なれるわけないや…っぁぁん、な…なんでこんな、気持ち悪いはずなんにぃ…っ!!」
つい先程まで、自分をイジリ倒していた歳下生意気美少女が自分の舌で喘ぐ様子に、ついつい暗い高揚感を覚えてしまう。いや、違う、これは彼女を助けるためで決して嫌らしいことでは！
『学郎、それだけじゃ駄目だ。もっと彼女がして欲しい事をしないと』
「ぬ…鵺さん!? して欲しいことって…？」
『学郎よく見るんだ。彼女が物欲しそうにしているのは膣口(そこ)だけじゃないだろう？』
すると鵺さんの言葉に反応した訳でも無いだろうに、触手が辻田さんが必死で閉じようとしている脚を更に広げ、彼女の股間をより俺の眼の前に強調するように押し付ける。
俺の眼の前に、歳下生意気美少女の、愛液を溢れさせ綻ぶ処女穴と、その上で存在を主張するクリトリス、そして下でヒクヒクと収縮する少し色素の沈着した肛門が晒される。

「ゴクリ…」
『さあ学郎、彼女のためにも腹を括るんだ』
「はい！」
そして俺は意を決して、辻田さんの充血したクリトリスを甘噛する。
「ひぃぃ…っぃぃ…♡♡」
〝ビクン〟と辻田さんの手足が、さっきよりも激しく痙攣し、彼女の雌穴から生暖かい液体が吹き出し俺の顔をビショビショに濡らす。
「あ…アァ…アカン、もうダメや、ウチもうお嫁に行けんて…」
「つ…辻田さん」
脱力し、虚ろな目で涙を流す彼女を見て、俺の股間が痛いくらいに勃起する。
「って、や…やめろ!?」
「夜島!?」
「よ、夜島君!?」
俺の叫び声に、辻田さんのあまりにも哀れな姿を見ないよう目を閉じていた周防先輩や藤乃さんが目を開き、そして絶句する。
俺は下半身の水着を触手に脱がされ、痛い程に勃起したペニスを夏の日差しの下に晒してしまっていたのだ。
「うわ…でっか…私の彼氏よりおっきい」
「……（ゴクリ）」
古賀さんと町田さんも目を開けて、俺の股間を凝視している。
『うーん、どうやら幻妖はまだ満足してないようだね』
「いやこれどうするんですか!?」
『どうするも何も、男と女が裸になってるんだ。やることは一つだろう?』
「え…?」
鵺さんの言葉に俺が固まると、触手が再び動き出し…
「まさか…」
「い…嫌…もう嫌やぁ…ウチ初めてなのにぃ…」
空中で触手に拘束され、股間のペニスだけが天を突くように勃起し

ている俺に、股を大きく開かされた辻田さんが迫って来ていた。

特訓敗北③　メスガキＪＣ触手責め　Ｑ

触手で拘束された上に水着を脱がされ、勃起したペニスを晒す俺に、同じく触手で拘束され、脚を無理矢理開かされた辻田さんが迫ってくる。
「い…嫌や、待って待って、ウチ初めてだからそれだけはやめて!!」
「くっ…辻田さん」
このままだと辻田さんの心を深く傷つけてしまう。俺は何とか触手に抵抗しようとするけど、逆にガッチリと体を抑え込まれ身動きが取れなくされてしまった。
「うっうわ…やめろぉ!!」
「や、夜島君!!」
しかもこの触手、俺のペニスにまで巻き付いて、まるで狙いを定めるかのようにペニスの角度を調整してきやがった。
そして先程からの刺激的過ぎる体験で、いつ暴発してもおかしくないくらい痛い程に勃起した俺のペニスの先端に、辻田さんの濡れそぼった膣口が迫ってくる。
「や…嫌やぁ…こんなロマンもない初めては嫌ぁ…!」
「ゴメン…辻田さん…」
辻田さんの涙でぐしょぐしょになった顔が俺の眼の前まで迫る。俺にはもう謝ることしか出来ない。
「うぅ…こうなったらガク、責任…取ってもらうからな?」
「え…それどういう…っ!」

俺がその言葉の意味を確認する前に、とうとう決定的な変化が訪れる。
俺のペニスの先端がとうとう辻田さんの膣口に触れる。触手に胸を弄られ絶頂し、俺にクリトリスを噛まれてイかされたことで愛液でドロドロになったソコは、辻田さんの言動とは裏腹に、貪欲にその穴を満たすモノを求めていた。
そして、触手によって肌と肌が触れ合う距離まで接近した辻田さん

は、俺の耳元に顔を近づけ、俺の耳に熱い吐息を吹きかけながらこう囁いた。
「ウチの初めてあげるんやから、絶対に責任取ってもらうで、ガク」
「あ…それって…」
「っ…痛っ～っう…っ!!」
そして辻田さんは、自分から腰を突き出し、まだ誰も迎え入れたことのない、彼女の最も大切な部分に、俺のペニスを迎え入れた。
「うっ…うぅっ…!」
「っ～～…痛ったいけど、ガクの太くて硬いおチン○ンがウチのナカでビクンビクンってなっとる…っん」
「っ…辻田さ…」
俺のペニスが、辻田さんの処女膜を貫き、一気に彼女の一番奥まで到達する。ペニスが押しつぶされそうな程の圧力と、ペニスが溶けてしまいそうな程のその熱さに意識が飛びそうになるのを、歯を食いしばって耐える。
触手から手足を開放された辻田さんは、俺に抱きつき、中学生とは思えないほど豊かに発育したその胸が潰れるくらい強く俺に押し付け、俺の耳元で囁く。
「はぁ…っん…ねぇガクわかる？　ウチのおマ○コな、あんたのたくましいモノの形ピッタリに広げられてもうたんよ？　あぁん、ガクのこれホントにおっきいから、ウチもうこれやないと満足できんくなりそう」
「ぅ…うあ…」
「それにガク、私のおっぱい押し付けられてから、おチン○ンが一回り大きくなっとるよ。　エッチ～」
「あぁ…辻田さん!!」
辻田さんが腰を軽く揺すり、ただでさえ暴発寸前の俺のペニスを刺激する。
俺の眼前で、辻田さんは荒い息を漏らしながら妖しく微笑む。
「ねぇガク、今のこの体勢やったらもう外には射精(だ)せんやろ？　ガクのたくましいおチンチ○でたーっぷり中出しされたら、ウチ孕んでま

うかもしれんよ？　っん」
「う…あ…」
「アハ、ガクのがウチのナカでビクンってはねたで？　そんなにウチのこと孕ませたいん？」
「な、違っ…うぁ！」
　辻田さんは俺の耳を甘噛し、時折艶っぽい吐息を漏らしながら俺のペニスの状況を実況する。
　今の彼女は、先程の羞恥で泣き喚いていた少女ではなく、大人の階段を上がり、貪欲に雄を求める一匹の雌だ。幻妖の触手によって性感を開花させられた彼女のその姿は、俺より歳下とは思えないほど妖しく、そして淫らだった。
　だが、彼女に余裕があったのもここまでだった。
「っ…！　ま、待って⁉　そこ違うて!!」
「うぁ…辻田さん⁉」
　急に余裕のない様子で〝ビクン〟と体を震わせた辻田さんの、より強くなった膣内の締め付けに、俺は思わずうめき声を上げてしまう。
「や、やめて！　そ、そんなとこ弄らんでぇ…」
「う…急に締め付けが強く…」
　そして俺は、俺に縋り付くように強く抱きついた辻田さんの頭越しに見た。彼女のむっちりとしたお尻を、幻妖の触手が割り開き、その開かれたお尻の奥にある窄まりを、別の触手が責め立てている様子を。
「やぁぁぁんっ!!　な、なんでそんなとこぉ…お尻弄られてこんな…ぁん」
「っ…辻田さん…これ以上締め付けられると…っ」
　触手に肛門を弄られた辻田さんは、先程とは打って変わって余裕のない様子で俺に強く抱きつく。豊かな胸が俺の胸板で潰れ、硬く勃起した乳首の感触が、俺の理性を溶かしてゆく。
　肛門を弄られ、締付けの強さとぬめりを増した辻田さんの膣内が複雑に収縮し俺のペニスに熱い愛液を振りかける。しかも辻田さんの腰が小刻みに動き、その刺激が最早もういつ暴発してもおかしくない

俺のペニスを刺激し続ける。
「ぁ…もうダメやぁ、イク、初めてなんにガクのおチン○ンとお尻いじってくる触手でイかされちゃうぅぅ～!!!」
「っ～～！　ゴメン、辻田さんっ!!」
ペニスが千切られてしまいそうなほどの締め付けに、俺のペニスの先端から精液が迸り、辻田さんの膣内を、そしてその先の子宮内を満たしてゆく。
絶頂した辻田さんは腰を反らせ、手足で俺の体を強く抱きしめる。そのせいで膣内に入ったペニスを抜く余裕が無く、俺の射精した精液は全て彼女のナカに納まってしまった。
「あぁ熱い…熱いぃ…」
「辻田さん…」
「ガクぅ…絶対に責任、とってもらう…で…」
辻田さんはそう言うと意識を手放した。
辻田さんの手足から力が抜け、触手が再び彼女を拘束し俺から引き離す。
萎えたペニスが辻田さんの膣内から抜かれ、ポッカリと空いたその穴からは俺の精液と、彼女の破瓜の証である血の混ざったピンク色の粘液がポタポタと垂れていた。
「ハァ…ハァ…」
『お見事だったよ学郎。これで少し幻妖の力が削げた。さあ、次も頑張って！』
「え…？」
鵺さんの言葉で顔を上げた俺の前には、今度は赤い、そして期待と羞恥が綯い交ぜになった顔で熱い吐息をもらす古賀さんの、触手で拘束された裸体が迫っていた。

――――――続…かない